

齋院の遺跡Ⅱ

— 鳥越 —

— 津田中学校構内 —

— 北齋院地内 —

2001

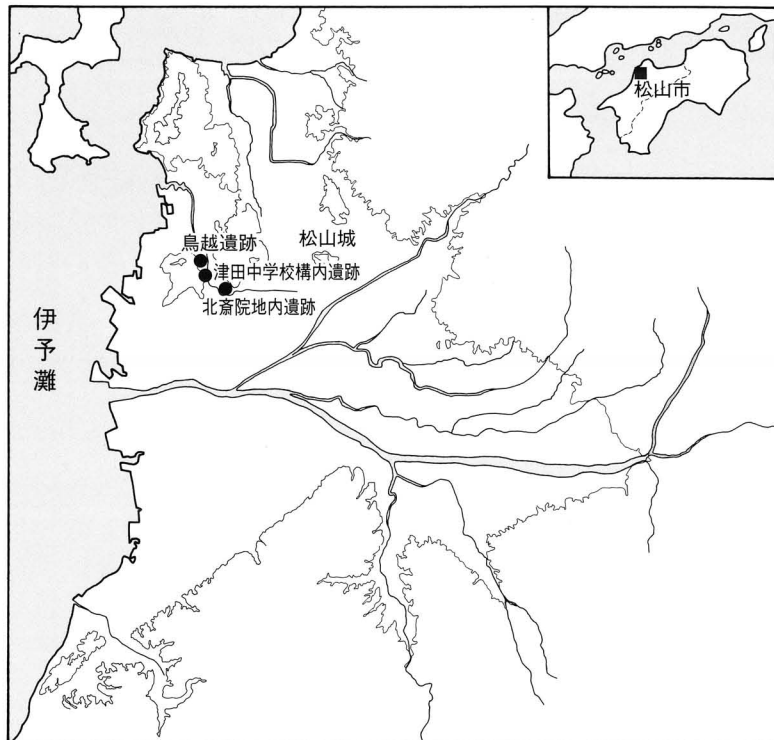
松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

齋院の遺跡Ⅱ

— とり 越 —
— つだちゅうがっこうこうない —
— 津田中学校構内 —
— きた さ や じ ない —
— 北齋院地内 —



2001

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター



巻頭図版 1 調査地遠景（南東より）

◀ 津田中学校



卷頭図版 2 鳥越遺跡SB3出土の土錘



卷頭図版 3 津田中学校構内遺跡 1 次調査地出土の土錘・石錘



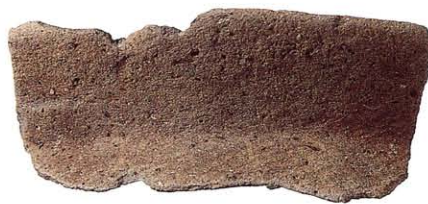
卷頭図版 4 津田中学校構内遺跡出土の石器



卷頭図版 5 津田中学校構内遺跡 1 次調査地の出土遺物



9



374



9



374

卷頭図版6 搬入品土器

序

本書は、昭和51年度から平成10年度までに、松山平野西部の斎院地区で実施した3遺跡の埋蔵文化財の発掘調査報告書です。

斎院地区を流れる宮前川流域には、日本で初めて発見された大規模水利施設「堰」をもつ古照遺跡、水辺の祭祀巨木と多量の外来系土器を出土した宮前川遺跡など、川や海に関係する遺跡が多くみられます。また、宮前川の河口には、三津港があり、瀬戸内海の各地を結んでいます。

このように、当地区は、古代より松山平野の海の玄関口として役割を果たしてきています。

今回報告します鳥越遺跡からは、弥生時代の竪穴式住居址や貯蔵穴が発見され、津田中学校構内では二度調査を行ない、古墳時代の竪穴式住居址と多量の弥生土器が出土しました。これらの調査成果のなかで注目されるのは、多くの漁網錘と大阪・香川から運ばれてきた土器が出土していることです。当地区の海浜性を具体的に立証する貴重な資料といえます。

また、北斎院地内遺跡からは建物址や集落区画の溝を検出し、中世集落の構造が明らかになってきました。

こうした成果をあげられましたのは、関係各位の埋蔵文化財行政に対する深いご理解とご協力のたまものであり、厚く感謝申し上げますとともに、本書が、埋蔵文化財の調査研究の一助となり、ひいては文化財保護、生涯教育の向上に寄与できることを願っております。

平成13年3月31日

財団法人 松山市生涯学習振興財団
理事長 中村時広

例 言

1. 本書は、松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが、昭和51年、昭和52年、昭和60年、平成10年に松山市北斎院町で調査した埋蔵文化財の調査報告書である。
2. 本文中では、遺構の呼称を記号化して記述した。竪穴式住居址：S B、土坑：S K、溝：S D、井戸：S E、柱穴：S P、性格不明遺構：S Xである。
3. 遺構と遺物の実測・製図等は、梅木謙一と水本完児の指示のもと、水口あをい、山下満佐子、平岡直美、大西陽子、日之西美春、西本三枝、田崎真理が行なった。
4. 挿図の縮尺は、縮尺値をスケール下に記した。遺物図は、弥生土器・土師器が1／4、須恵器・石器は1／3を原則とした。ただし、第5章北斎院地内遺跡の遺物実測図は1／3を基本としている。
5. 石器の石材記述は、片岩では緑色片岩・紅簾片岩の名称を用いた。緑色片岩のうち結晶が著しく見られるものについては特に結晶片岩として記述した（巻頭図版4参照）。これは、多田 仁氏（財愛媛県埋蔵文化財調査センター）、加島次郎氏、梅木謙一で検討した結果である。
6. 測量図等の方位は、真北の場合は記載し、磁北の場合は方位記号だけである。
7. 写真は、野外写真は調査担当者が、遺物写真は大西朋子が担当した。
8. 本書にかかわる資料は、松山市埋蔵文化財センターで収納・保管している。
9. 本書の執筆は、梅木謙一が主に行ない、第5章は水本完児が担当した。執筆に際しては、森 光晴氏と西尾幸則氏に鳥越遺跡、津田中学校構内遺跡1次調査について多くの指導をうけた。
また、奥田 尚氏には庄内式甕形土器の胎土観察と、その結果を原稿にいただいた（p.96）。紙上にて、感謝申し上げます。
10. 編集は、梅木謙一が行ない、水口あをいの協力をえた。
11. 報告書作成データーは下記である。
製版 写真図版－175線
印刷 オフセット印刷
用紙 カラー写真・本文 マットカラー 110kg
写真図版 マットカラー 135kg
製本 アジロ綴じ

本文目次

第1章	はじめに	1
	1. 調査・刊行に至る経緯	
	2. 刊行組織	
	3. 環境	
第2章	鳥越遺跡	5
	1. 調査の経過	
	2. 層位	
	3. 遺構と遺物	
	4. 小結	
第3章	津田中学校構内遺跡1次調査地	25
	1. 調査の経過	
	2. 層位	
	3. 遺構と遺物	
	4. 庄内甕の表面にみられる砂礫	
	5. 小結	
第4章	津田中学校構内遺跡2次調査地	99
	1. 調査の経過	
	2. 層位	
	3. 遺構と遺物	
	4. 小結	
第5章	北斎院地内遺跡4次調査地	117
	1. 調査の経過	
	2. 層位	
	3. 遺構と遺物	
	4. 小結	
第6章	調査の成果と課題	159
附章1	片山・太郎丸遺跡出土資料	161
附章2	政枝遺跡出土資料	167

挿 図 目 次

第1章	はじめに	
第1図	調査地周辺の遺跡分布図（縮尺1/50,000）	3
第2章	鳥越遺跡	
第2図	調査地位置図（縮尺1/2,000）	7
第3図	遺構配置図（縮尺1/200）	8
第4図	S B 1 測量図・出土遺物実測図（縮尺1/60・1/4・1/3）	10
第5図	S B 2 測量図・出土遺物実測図（1）（縮尺1/60・1/4）	12
第6図	S B 2 出土遺物実測図（2）（縮尺1/4・1/3）	13
第7図	S B 3 測量図・遺物出土状況（縮尺1/60・1/50・1/8）	15
第8図	S B 3 出土遺物実測図（1）（縮尺1/4）	16
第9図	S B 3 出土遺物実測図（2）（縮尺1/4）	17
第10図	S B 3 出土遺物実測図（3）（縮尺1/4・1/3）	18
第11図	S K 測量図・出土遺物実測図（縮尺1/40・1/4・1/3）	20
第12図	S K 2 測量図（縮尺1/20）	22
第13図	出土地点不明遺物実測図（縮尺1/4・1/3）	23
第3章	津田中学校構内遺跡1次調査地	
第14図	調査地位置図（縮尺1/1,500）	28
第15図	遺構配置図（縮尺1/200）	29
第16図	S B 1・2・3 出土遺物実測図（縮尺1/4・1/3）	32
第17図	S B 4 測量図（縮尺1/60）	33
第18図	S B 4 出土遺物実測図（縮尺1/4・1/3）	34
第19図	S B 5 測量図（縮尺1/60）	35
第20図	S B 5 出土遺物実測図（縮尺1/4）	36
第21図	S B 6・7 出土遺物実測図（縮尺1/4）	37
第22図	S B 8 出土遺物実測図（縮尺1/4・1/3）	38
第23図	S B 9 測量図（縮尺1/60）	39
第24図	S B 9 出土遺物実測図（縮尺1/3）	40
第25図	S D 1 出土遺物実測図（1）（縮尺1/4）	41
第26図	S D 1 出土遺物実測図（2）（縮尺1/4）	42
第27図	S D 1 出土遺物実測図（3）（縮尺1/4）	43
第28図	S D 1 出土遺物実測図（4）（縮尺1/4）	44
第29図	S D 1 出土遺物実測図（5）（縮尺1/3）	45
第30図	S D 2（X 4 Y 2）出土遺物実測図（1）（縮尺1/4）	47
第31図	S D 2（X 4 Y 2）出土遺物実測図（2）（縮尺1/3）	48
第32図	S D 2（X 3 Y 2・X 3 Y 3）出土遺物実測図（3）（縮尺1/4・1/3）	49
第33図	S D 2（X 4 Y 3）出土遺物実測図（4）（縮尺1/4）	50

第34図	S D 2 (X 4 Y 3) 出土遺物実測図 (5) (縮尺 1 / 4 · 1 / 3) ……	51
第35図	S D 2 (X 4 Y 4) 出土遺物実測図 (6) (縮尺 1 / 4) ……	52
第36図	S D 2 (X 4 Y 4 · X 4 Y 5 · X 4 Y 6) 出土遺物実測図 (7) (縮尺 1 / 4 · 1 / 3) ……	53
第37図	S D 2 (グリッド不明) 出土遺物実測図 (8) (縮尺 1 / 4) ……	54
第38図	S D 3 出土遺物実測図 (縮尺 1 / 4) ……	54
第39図	1号土器棺 (北より) ……	55
第40図	1号土器群出土遺物実測図 (縮尺 1 / 4) ……	57
第41図	2号土器群出土遺物実測図 (縮尺 1 / 4) ……	58
第42図	3号土器群出土遺物実測図 (縮尺 1 / 4) ……	59
第43図	4号土器群出土遺物実測図 (縮尺 1 / 4) ……	60
第44図	5号土器群出土遺物実測図 (縮尺 1 / 4) ……	61
第45図	X 2 Y 3 · 4 · 5 · 6 出土遺物実測図 (縮尺 1 / 4 · 1 / 3) ……	63
第46図	X 1 Y 3 · X 2 Y 4 · X 3 Y 1 出土遺物実測図 (縮尺 1 / 3) ……	64
第47図	X 3 Y 2 出土遺物実測図 (1) (縮尺 1 / 4) ……	65
第48図	X 3 Y 2 出土遺物実測図 (2) (縮尺 1 / 4) ……	66
第49図	X 3 Y 2 出土遺物実測図 (3) (縮尺 1 / 4 · 1 / 3) ……	67
第50図	X 3 Y 3 出土遺物実測図 (1) (縮尺 1 / 4) ……	69
第51図	X 3 Y 3 出土遺物実測図 (2) (縮尺 1 / 4) ……	70
第52図	X 3 Y 3 出土遺物実測図 (3) (縮尺 1 / 4) ……	71
第53図	X 3 Y 3 出土遺物実測図 (4) (縮尺 1 / 4) ……	72
第54図	X 3 Y 3 出土遺物実測図 (5) (縮尺 1 / 4) ……	73
第55図	X 3 Y 3 出土遺物実測図 (6) (縮尺 1 / 4 · 1 / 3) ……	74
第56図	X 3 Y 4 出土遺物実測図 (縮尺 1 / 4 · 1 / 3) ……	75
第57図	X 3 Y 5 · X 3 Y 6 出土遺物実測図 (縮尺 1 / 4 · 1 / 3) ……	76
第58図	X 4 Y 2 出土遺物実測図 (1) (縮尺 1 / 4) ……	78
第59図	X 4 Y 2 出土遺物実測図 (2) (縮尺 1 / 3) ……	79
第60図	X 4 Y 3 出土遺物実測図 (1) (縮尺 1 / 4) ……	80
第61図	X 4 Y 3 出土遺物実測図 (2) (縮尺 1 / 4) ……	81
第62図	X 4 Y 3 出土遺物実測図 (3) (縮尺 1 / 4) ……	82
第63図	X 4 Y 3 出土遺物実測図 (4) (縮尺 1 / 4) ……	83
第64図	X 4 Y 3 出土遺物実測図 (5) (縮尺 1 / 4) ……	84
第65図	X 4 Y 3 出土遺物実測図 (6) (縮尺 1 / 4 · 1 / 3) ……	85
第66図	X 4 Y 3 出土遺物実測図 (7) (縮尺 1 / 4) ……	86
第67図	X 4 Y 4 出土遺物実測図 (1) (縮尺 1 / 4) ……	87
第68図	X 4 Y 4 出土遺物実測図 (2) (縮尺 1 / 4 · 1 / 3) ……	88
第69図	X 4 Y 5 出土遺物実測図 (縮尺 1 / 4 · 1 / 3) ……	89
第70図	X 4 Y 6 出土遺物実測図 (縮尺 1 / 4 · 1 / 3) ……	90
第71図	X 5 Y 4 · 5 出土遺物実測図 (縮尺 1 / 3) ……	91

第72図	地点不明遺物実測図（1）（縮尺1／4）	92
第73図	地点不明遺物実測図（2）（縮尺1／3）	93
第74図	地点不明遺物実測図（3）（縮尺1／3）	94
第75図	1次か2次か出土地点不明遺物実測図（縮尺1／4・1／3）	95
第4章 津田中学校構内遺跡2次調査地		
第76図	調査地位置図（縮尺1／2,000）	101
第77図	土層図（縮尺1／40）	103
第78図	遺構配置図（縮尺1／80）	104
第79図	S K 1・2 測量図（縮尺1／20）	106
第80図	第VI層出土遺物実測図（1）（縮尺1／4）	108
第81図	第VI層出土遺物実測図（2）（縮尺1／4）	109
第82図	第VI層出土遺物実測図（3）（縮尺1／4）	110
第83図	第VI層出土遺物実測図（4）（縮尺1／4）	111
第84図	第VI層出土遺物実測図（5）（縮尺1／4・1／3）	112
第85図	グリッド出土遺物実測図（縮尺1／4・1／3・1／2）	113
第86図	地点不明遺物実測図（縮尺1／4）	114
第5章 北斎院地内遺跡4次調査地		
第87図	北斎院地内遺跡分布図（縮尺1／800）	120
第88図	東壁・南壁土層図（縮尺1／60）	123
第89図	遺構配置図（縮尺1／200）	125
第90図	埋土別柱穴配置図（縮尺1／200）	125
第91図	掘立1 測量図・出土遺物実測図（縮尺1／60・1／3）	127
第92図	掘立2 測量図・出土遺物実測図（縮尺1／60・1／3）	128
第93図	掘立3 測量図・出土遺物実測図（縮尺1／60・1／3）	129
第94図	S D 1 - 1 出土遺物実測図（縮尺1／3）	130
第95図	S D 2 出土遺物実測図（1）（縮尺1／3）	131
第96図	S D 2 出土遺物実測図（2）（縮尺1／3）	132
第97図	S D 2 出土遺物実測図（3）（縮尺1／4・1／3）	133
第98図	S D 2 出土遺物実測図（4）（縮尺1／3）	134
第99図	S D 5・6 出土遺物実測図（縮尺1／3）	136
第100図	S D 7 出土遺物実測図（1）（縮尺1／3）	137
第101図	S D 7 出土遺物実測図（2）（縮尺1／3）	138
第102図	S E 1 測量図（縮尺1／20）	139
第103図	S E 1 出土遺物実測図（縮尺1／3）	140
第104図	S E 2 測量図・出土遺物実測図（縮尺1／20・1／3）	141
第105図	墓1・2 測量図・出土遺物実測図（縮尺1／20・1／3）	142
第106図	S K 1・3・4・5・7 出土遺物実測図（縮尺1／3）	144
第107図	S K 8 測量図（縮尺1／20）	146

第108図	S K 8 出土遺物実測図 (縮尺 1 / 3)	147
第109図	S K 9・10・11・13 出土遺物実測図 (縮尺 1 / 3)	148
第110図	S X 1 出土遺物実測図 (縮尺 1 / 3)	150
第111図	S P 出土遺物実測図 (縮尺 1 / 6・1 / 3)	152
第112図	第V層出土遺物実測図 (1) (縮尺 1 / 3)	153
第113図	第V層出土遺物実測図 (2) (縮尺 1 / 3)	154
第114図	第VI層出土遺物実測図 (縮尺 1 / 3)	155
第115図	出土地点不明遺物実測図 (縮尺 1 / 3)	156
附章 1 片山・太郎丸遺跡出土資料		
第116図	片山遺跡 I 地区 S B 02 出土遺物実測図 (1) (縮尺 1 / 4)	162
第117図	片山遺跡 I 地区 S B 02 出土遺物実測図 (2) (縮尺 1 / 4)	163
第118図	片山遺跡 H 地区 1 号溝出土遺物実測図 (縮尺 1 / 4)	164
第119図	太郎丸遺跡 S B 01・S B 02 出土遺物実測図 (縮尺 1 / 4)	165
第120図	出土地点不明遺物実測図 (縮尺 1 / 4)	166
附章 2 政枝遺跡出土資料		
第121図	政枝遺跡位置図 (縮尺 1 / 50,000)	167
第122図	政枝遺跡出土遺物実測図 (1) (縮尺 1 / 4)	169
第123図	政枝遺跡出土遺物実測図 (2) (縮尺 1 / 4)	170
第124図	政枝遺跡出土遺物実測図 (3) (縮尺 1 / 4)	171

写真図版目次

巻頭図版 1. 調査地遠景 (南東より)	
2. 鳥越遺跡 S B 3 出土の土錘	
3. 津田中学校構内遺跡 1 次調査地出土の土錘・石錘	
4. 津田中学校構内遺跡出土の石器	
5. 津田中学校構内遺跡 1 次調査地の出土遺物	
6. 搬入品土器	
第 2 章 鳥越遺跡	
図版 1. 1	遺構検出状況 (北西より) 2 北半部完掘状況 (南東より)
3	S B 1・S B 3 完掘状況 (南より)
図版 2. 1	S B 1 完掘状況 (1) (南より) 2 S B 1 完掘状況 (2) (東より)
3	S B 2 完掘状況 (東より)
図版 3. 1	S B 3 遺物出土状況 (1) (南より) 2 S B 3 遺物出土状況 (2) (南西より)
3	S K 完掘状況 (東より)
図版 4. 1	S B 1・S B 3 出土遺物

第3章 津田中学校構内遺跡1次調査地

- 図版5. 1 調査地遠景（東より） 2 調査地近景（南より）
3 遺構検出作業風景（南西より）
- 図版6. 1 S B 4完掘状況（北北東より） 2 S B 5・S B 6完掘状況（北東より）
3 S B 5完掘状況（南より）
- 図版7. 1 S B 2・S B 6完掘状況（北北東より） 2 S B 9完掘状況（南東より）
3 S D 1・S D 2完掘状況（西より）
- 図版8. 1 3号土器群遺物出土状況（南より） 2 4号土器群遺物出土状況（北東より）
3 調査地周辺の現況（東より）
- 図版9. 1 土錘・石錘
2 S D 1出土遺物・S D 2出土遺物（1）
- 図版10. 1 S D 2出土遺物（2）・1号土器群出土遺物・2号土器群出土遺物
- 図版11. 1 3号土器群出土遺物・X 1 Y 3出土遺物
- 図版12. 1 4号土器群出土遺物・X 3 Y 2出土遺物・X 3 Y 3出土遺物（1）
- 図版13. 1 X 3 Y 3出土遺物（2）・X 3 Y 5出土遺物・X 4 Y 2出土遺物・X 4 Y 3出土遺物

第4章 津田中学校構内遺跡2次調査地

- 図版14. 1 調査地全景（南東より） 2 作業風景（北西より）
3 遺物出土状況（1）（東より）
- 図版15. 1 遺物出土状況（2）（西より） 2 木製品出土状況（南東より）
3 畦畔1下遺物出土状況（南より）
- 図版16. 1 第VI層出土遺物

第5章 北斎院地内遺跡4次調査地

- 図版17. 1 調査前全景（南より） 2 南壁土層（北東より）
- 図版18. 1 完掘状況（1）（北より） 2 完掘状況（2）（北より）
- 図版19. 1 墓1・2検出状況（北東より） 2 墓1検出状況（1）（南より）
- 図版20. 1 墓1検出状況（2）（北東より） 2 墓2検出状況（北より）
- 図版21. 1 S E 1遺物出土状況（南より） 2 S E 2遺物出土状況（北より）
- 図版22. 1 S K 8遺物出土状況（東より） 2 S K 7完掘状況（北西より）
- 図版23. 1 出土遺物（1）
- 図版24. 1 出土遺物（2）

附章1 片山・太郎丸遺跡出土資料

- 図版25. 1 出土遺物

附章2 政枝遺跡出土資料

- 図版26. 1 出土遺物

第1章 はじめに

1. 調査・刊行に至る経緯

昭和51年、昭和52年、昭和60年、平成10年に、松山市教育委員会と(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターは、北斎院町内で発掘調査を実施した。

昭和51年と平成10年の調査は宅地開発、昭和52年と昭和60年の調査は中学校の校舎およびグラウンド建設に伴う事前の緊急調査である。

整理作業は、野外調査終了時に洗浄や注記をし、復元や実測等の作業は平成10年～平成12年におこなった。この間、平成11年には、出土品の検討や分析のために調査指導をうけた。

報告書の作成は、平成12年に行なった。整理作業から報告書作成までの間では、当時の調査者や関係者には多くの助言と指導をうけ、できるだけ資料化につとめた。

その結果、すでに公表されている遺跡の調査概要と異なる内容が一部に認められてきた。特に、鳥越遺跡または津田鳥越遺跡出土品として取り扱われている石錘・土錘は、ふたつの遺跡からの出土品であることが判明した。また、このことは、遺跡名の混乱を生じさせている。したがって、本報告となる本書では、遺跡名を新たに付加したものがあつた。遺跡名は、当時の調査者にも相談のうえ、(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター内で検討した。

2. 刊行組織 (平成13年3月31日現在)

松山市教育委員会

教 育 長	中矢 陽三
事 務 局 局 長	團上 和敬
局長付参事	森脇 将
次 長	赤星 忠男
文化教育課 課 長	馬場 洋

財団法人松山市生涯学習振興財団

理 事 長	中村 時広
事 務 局 長	二宮 正昌
事務局次長	江戸 孝
事務局次長	森 和朋

埋蔵文化財センター

所 長	中川 隆
専 門 監	野本 力
調 査 係 長	田城 武志
調 査 主 任	栗田 正芳 (文化教育課職員)
調 査 員	梅木 謙一
	水本 完児
	大西 朋子

3. 環 境

(1) 立 地 (第1図)

松山市は、四国北西部、愛媛県の中央に位置し、西は瀬戸内海の斎灘・伊予灘、北は高縄山塊（高縄半島）、南東部は四国山地に囲まれている。松山平野は、東西約20km、南北約17kmの広さをもつ三角状の沖積地帯である。平野中央には重信川・小野川、北には石手川・久万川・宮前川等が流れ、その流域には侵食と堆積による肥沃な土地が形成されている。また、平野には北から中央部に弁天山・岩子山・大峰ヶ台・土亀山・天山・星ヶ岡山などの独立丘陵がある。地質は、平野の南部に中央構造線がはしり、領家花崗岩類・変成岩類と和泉層群等が分布する（松山市 1992）。

松山平野内には、数多くの遺跡が展開し、それ等は幾つかの遺跡群にまとめられる。そのうち、平野の北西部、伊予灘に面するのが三津遺跡群である。三津遺跡群には、東に岩子山、西に弁天山の低丘陵部があり、中央部には宮前川氾濫源の低地部がある。

斎院地区は、三津遺跡群のなかでは南半部に位置している。

(2) 歴史的環境

斎院地区が含まれる三津遺跡群内には、低地部に集落、丘陵部に古墳が展開している。ここでは、報告に関連する斎院地区の遺跡の分布状況を、時代をおって略述する。

先土器時代～縄文時代

これまでに、先土器時代の遺構・遺物は発見されていない。縄文時代資料は、遺構は未だ検出がなく、遺物も管見のかぎりでは出土がない。

弥生時代

前期：前期末～中期初頭には、西側の弁天山丘陵上に環壕集落を形成する斎院烏山遺跡（梅木 1994・作田 1998）がある。遺跡が立地する丘陵部分は、昭和の前半期に大きく削り取られ、遺構の一部を検出したにとどまる。

中期：斎院烏山遺跡の直後、中期初頭～前葉には、斎院烏山遺跡北東450mの宮前川遺跡別府地区（大滝雅嗣 1987）に集落が形成される。遺構は稀薄だが、出土品には分銅形土製品1点がみられる。同時期の集落資料は、松山平野でも数が少ない。三津遺跡群内の後半の資料は、はっきりとしない。

後期：終末期までの資料は、明確でない。終末期になると、低地部の宮前川遺跡と今回報告する弁天山丘陵上の津田中学校一帯に集落が形成され、古墳時代初頭および前期まで継続する。宮前川遺跡の集落は北斎院地区と西山地区（西尾・栗田 1986）、および斎院烏山遺跡（作田一耕 1998）からなり、これまでに住居址・溝・土器棺が検出されている。出土品は膨大で、多量の土器、骨角器、獣魚骨等があり、土器には近畿からの搬入品や近畿・山陰地方の土器を真似たものが数多くある。

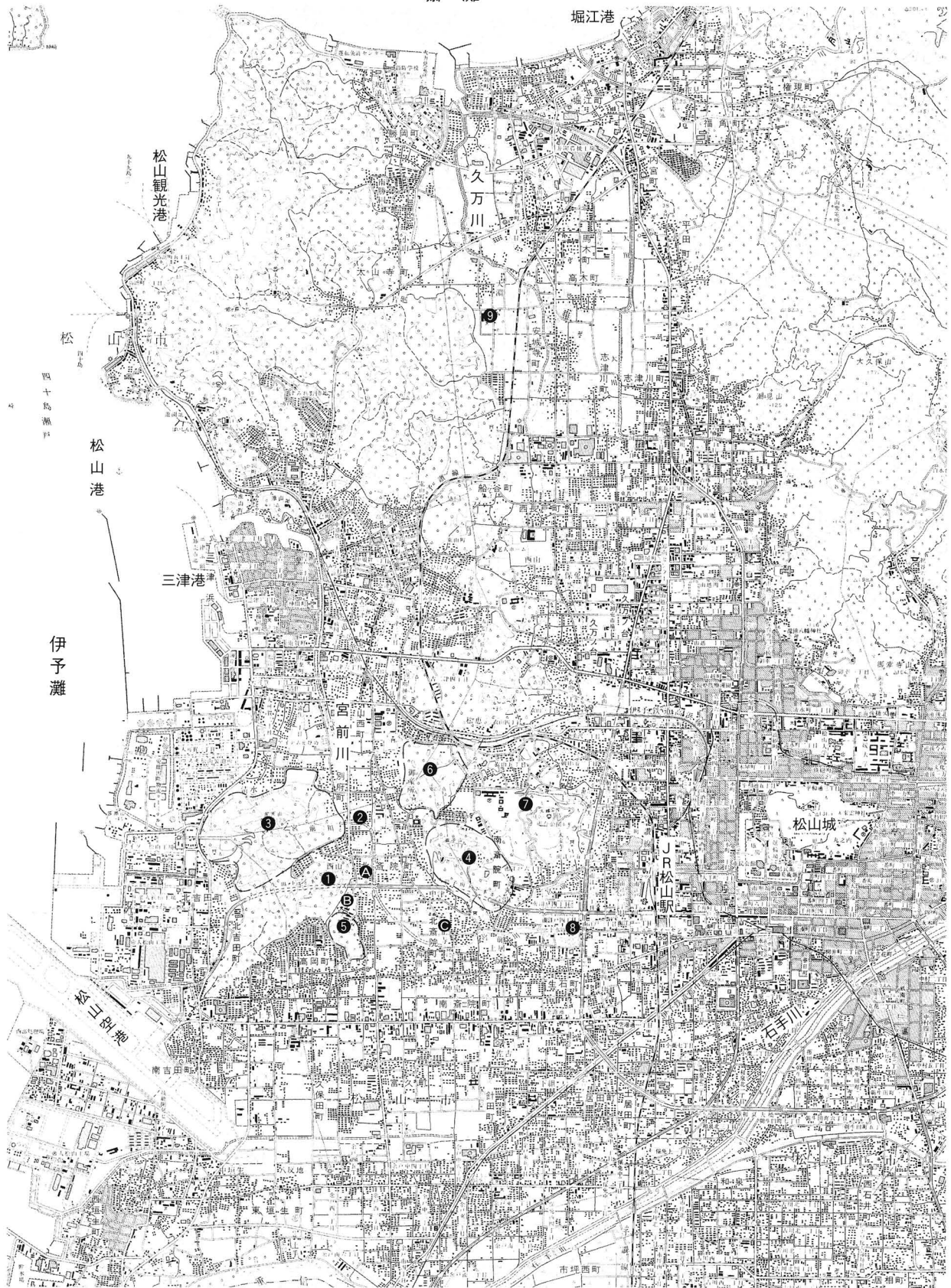
古墳時代

集落：6世紀代には、弁天山丘陵裾部上と岩子山丘陵裾部上とに住居址があり、集落の形成が認められる。前者は今回報告の津田中学校構内にあたり、後者は岩子山遺跡内（作田一耕 1998）にある。

墳墓：前半期では、弁天山丘陵上に古墳が築造されているようである。弁天山古墳は、工事中に調査

環 境

斎 灘



- | | | | |
|------------|------------|---------|---------|
| ①鳥越遺跡 | ①斎院烏山遺跡 | ④岩子山古墳群 | ⑦朝日谷2号墳 |
| ②津田中学校構内遺跡 | ②宮前川遺跡別府地区 | ⑤津田山古墳群 | ⑧古照遺跡 |
| ③北斎院地内遺跡4次 | ③弁天山古墳群 | ⑥御産所古墳群 | ⑨大洲遺跡 |

第1図 調査地周辺の遺跡分布図 (S = 1 : 50,000)

はじめに

したもので、箱式石棺を主体部にもつ。墳形は不明で、石棺からは青銅鏡が2面出土している。

また、津田山古墳（西田栄 1986）からも箱式石棺と青銅鏡1面が検出されている。なお、この時期の古墳と目されているものに弁天山0号墳があるが、調査は踏査にとどまっている。

後半期は、斎院地区の東側丘陵には御産所古墳群（森 光晴ほか 1976）と岩子山古墳群（名本二六雄 1975）とが、西側丘陵には弁天山古墳群が形成される。このうち岩子山古墳からは、人物埴輪や馬形埴輪等が出土している。

古代～中世

古代の資料は分かっていない。中世には、北斎院地内遺跡（武正良浩 1994）で15～16世紀の集落が展開している。同遺跡では、継続的に調査が進み、集落の構造が明らかになってきた。

以上、斎院地区の遺跡について簡単に触れた。この地域は、調査が少ないこともあり、各時代で判明しないことが多くある。

【文 献】

- 松山市 1992 『松山市史 第一巻』松山市史編集委員会
梅木謙一 1994 「斎院鳥山遺跡」『斎院の遺跡』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
作田一耕 1998 『斎院・古照』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
大滝雅嗣 1987 『宮前川遺跡』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
西尾幸則・栗田茂敏 1986 『宮前川遺跡』松山市教育委員会
西田 栄 1986 「津田山古墳」『愛媛県史資料編考古』愛媛県史編さん委員会
森 光晴・西尾幸則・沖野新一 1976 「御産所11号古墳」『埋蔵文化財発掘調査報告』松山市教育委員会
名本二六雄 1975 『岩子山古墳』松山市教育委員会
武正良浩 1994 「北斎院地内遺跡」『斎院の遺跡』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

第2章

とり鳥 ごえ越 遺 跡



第2章 鳥越遺跡

1. 調査の経過

(1) 調査・報告の経緯

調査は、昭和51年5月に森 光晴氏が市内を巡視中に、松山市北斎院町914番地の造成工事を視察し、遺構と遺物を確認したことに始まる。これによって、開発者と松山市教育委員会は協議を行ない、開発地における埋蔵文化財の発掘調査を実施することにした。

整理作業と報告書の作成は、平成10～12年度に森 光晴氏の助言を得て行なった。

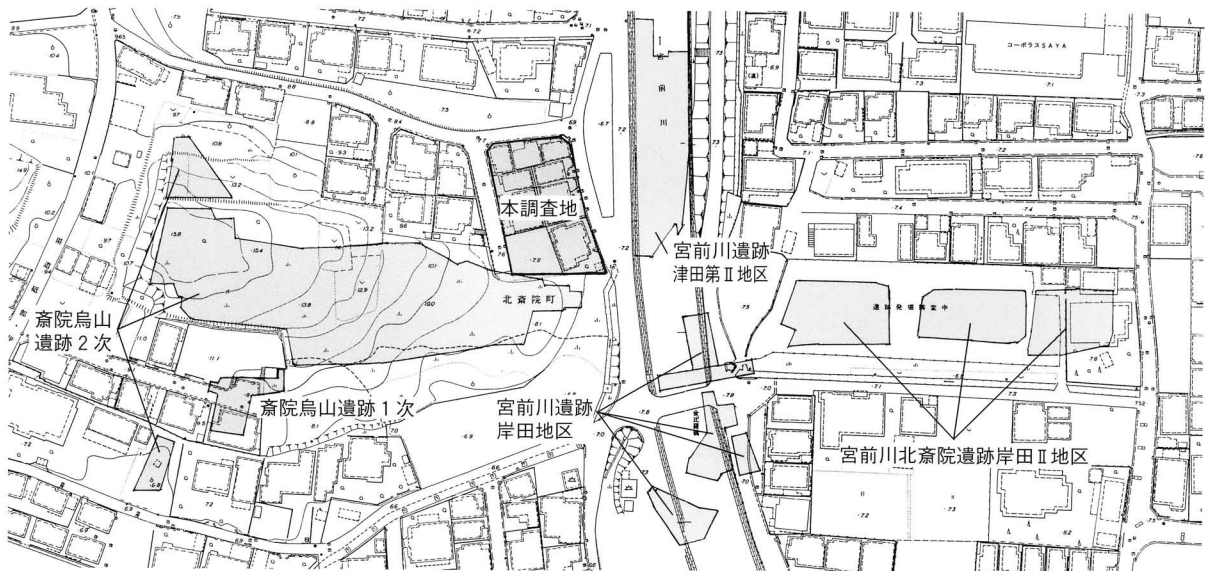
(2) 調査組織

調査地	松山市北斎院町914番地他5筆
遺跡名	鳥越遺跡
調査期間	昭和51年6月2日～同年6月18日
調査面積	983.88m ²
調査担当	森 光晴（当時、文化財専門委員）

2. 層位

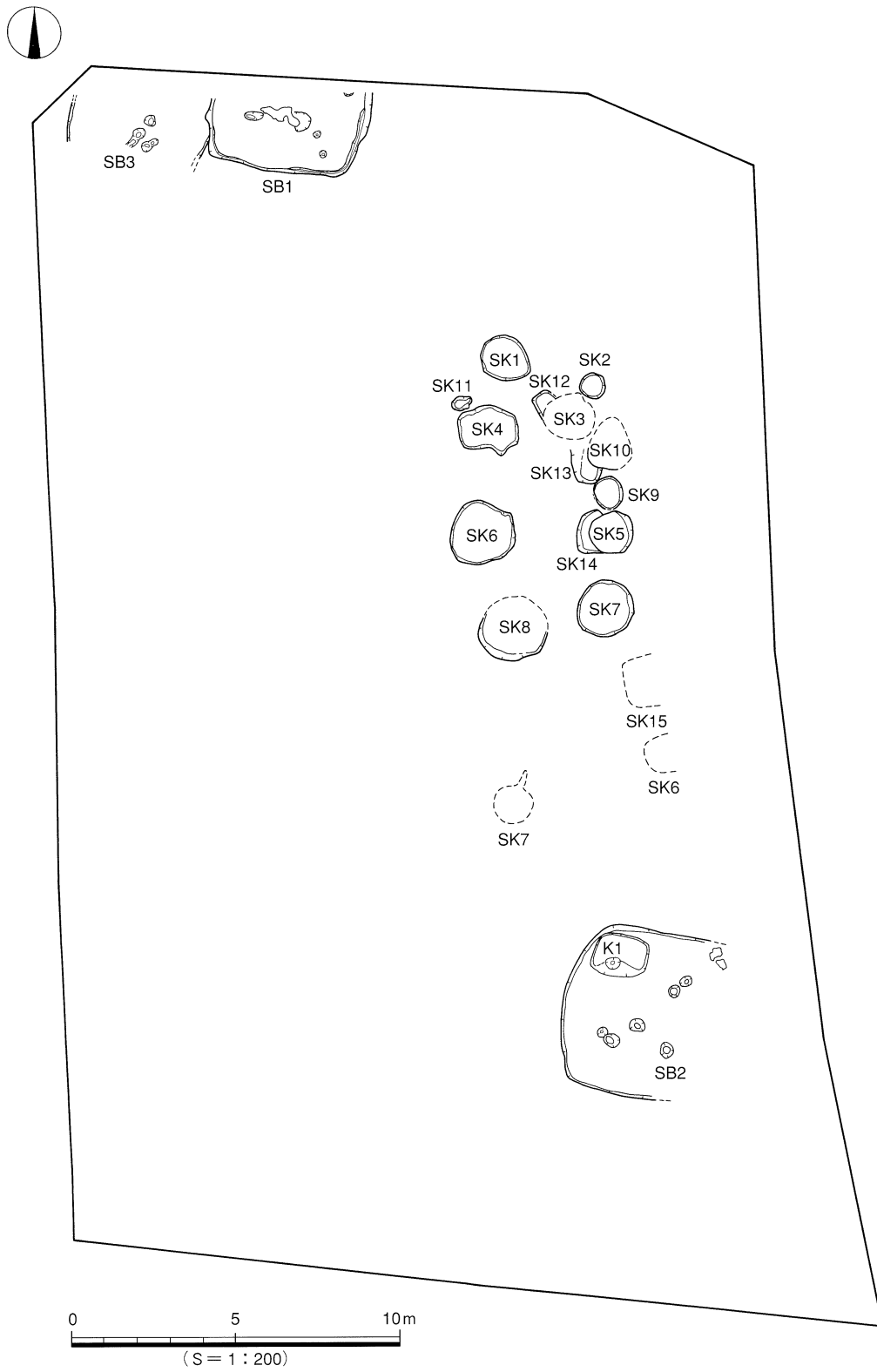
調査地は、東西に延びた丘陵の端部にある。ただし、丘陵は昭和初期に地表から1～2mを削平し、さらに調査地部分は畑地にするために大きく掘削している。したがって、耕作土の直下は、遺構検出面になっている。耕作土の標高は7.7mで、調査地は現在の宮前川から12mの位置にある。

検出遺構は弥生時代、古代末、近世に比定されるものがあり、竪穴式住居址3棟と土坑17基である。



第2図 調査地位置図 (S = 1 : 2,000)

鳥越遺跡



第3図 遺構配置図

3. 遺構と遺物

(1) 竪穴式住居址

竪穴式住居址は、3棟を検出した。

S B 1 (第3・4図、図版2)

調査地北端にあり、住居址北半は調査区外となり、S B 3との切りあい関係は判断されていない。また、炭化材直下の床面は未調査である。平面形態は方形で、四隅は丸みをもつ。規模は東西4.80m、南北検出長2.65m、深さ50cmを測り、検出面積は12.72m²である。

屋内施設には炉、主柱穴、壁体溝、小穴をもつ。炉は住居の中央にあり、西側は未調査である。平面形態は隅丸方形になるものと推定され、規模は東西検出長54cm、南北56cm、深さ13cmを測る。炉の直上には細長く焼土を検出している。主柱穴は、P 1・P 2の2基を検出したが、炭化材直下の未調査部分と調査区外(北西部)にも主柱穴があると推定される。主柱穴の規模は、P 1が直径26cm、P 2が直径20~21cm、深さ37cmとなる。壁体溝は部分的に南東部で検出され、幅は10cm、深さは2cmである。小穴は炉の東西にあり、P 3が直径20~21cm、深さ38cm、P 4が長軸55cm、短軸26cm、深さ15cmとなる。P 3とP 4は、位置・規模から支柱と考えられる。

出土遺物には、炭化材と土器がある。炭化材は床面直上で検出され、上下・左右に組み合って出土している。土器は少量で、図化できるものは9点である。第4図のうち、1~6は埋土の下部から、7~9は埋土上部の遺構検出面から出土している。7~9は、出土状況と遺存状況が1~3とは異なるので、住居址の廃棄時に伴うものではないとみられる。

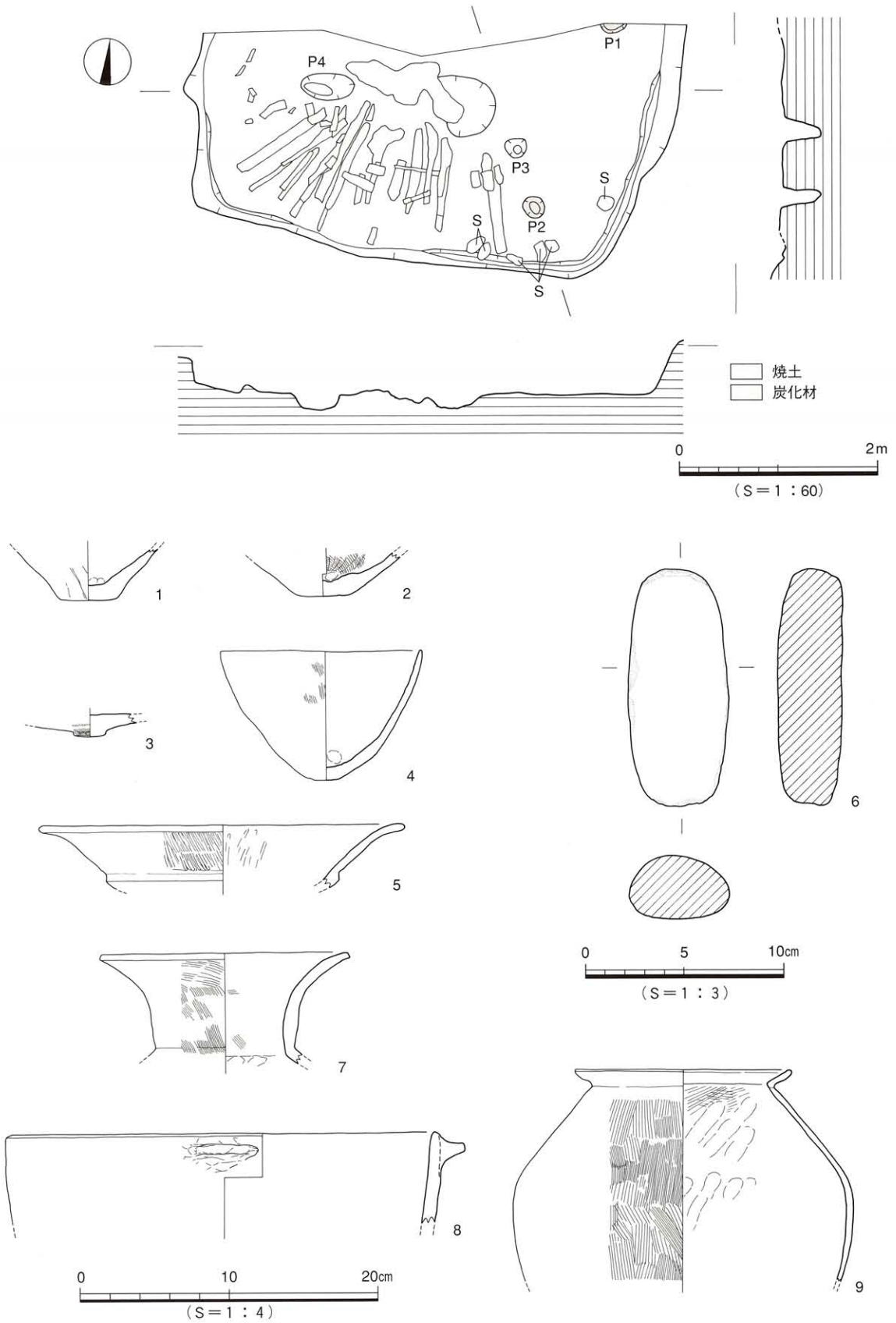
出土遺物(第4図、図版4)

1~6は埋土の下部から出土したものである。1・2は壺形土器の底部、3・4は鉢形土器、5は高坏形土器の坏部である。6は石製品で、敲打具になる。

7~9は埋土上部の遺構検出面から出土したものである。7は壺形土器で、8は鉢形土器で耳状の把手がつく。9は甕形土器で、胴部上半が強く張り、口縁部は短く屈折し、胎土には角閃石を含む。これらの特徴は、在地にはなく、讃岐からの搬入品とみられる(巻頭図版6)。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代終末期とする。

鳥越遺跡



第4図 SB1測量図・出土遺物実測図

S B 2 (第5図、図版2)

調査地南東部にあり、住居址北側部分は廃土置場のため未調査である。平面形態は方形で、四隅は丸みをもつ。規模は東西検出長4.65m、南北5.15m、深さ16cmを測り、検出面積は23.94m²である。

屋内施設には主柱穴、土坑、小穴をもつ。主柱穴はP 1～4の4基を検出した。規模は、直径が29～48cm、深さが34～50cmである。土坑は1基で、K 1は住居址の北西隅にあり、主柱穴P 4を囲むようにある。規模は東西検出長1.65m、南北1.42m、深さ12cmを測り、面積は2.3m²である。小穴はP 5～7の3基を検出した。P 5・6は、主柱穴P 1・3接するようであり、直径が30～45cmである。P 7は住居址の中央やや南にあり、長軸55cm、短軸26cm、深さ15cmとなる。P 5とP 6は、その位置関係から支柱と考えられる。

出土遺物には、焼土と埋土中から出土した土器・石器がある。焼土は、住居址の北東部分にあり、0.6×1.2mの範囲に分布する。詳細は不明。土器は破片資料で、ここでは32点を掲載した。第5・6図のうち、10～34は弥生時代終末期、35は弥生時代前期末～中期初頭、36～41は中世に比定される。36～41は時期が異なり、極少量であるため、住居址の廃棄時に伴うものではないとみられる。一方、42は石製品の完形品であり、本住居址の廃棄時に伴うものであろう。

出土遺物 (第5・6図)

10～34は弥生時代終末期に比定される土器である。10～14は甕形土器で、11にはタタキ跡がみられ、12には厚い平底がつく。15～23は壺形土器で、15～20は複合口縁壺になる。17の口縁部には櫛描き波状文、18～20の頸部には刻目入りの突帯がつく。21は直口口縁の長頸壺である。22・23は底部で、器壁がやや厚い。24～26は鉢形土器で、口縁部を折り曲げる24と、直口口縁の25がある。26は脚台が付くものになる。27～31は高坏形土器で、27～29は坏部、30・31は脚部である。32は器台形土器の小型品で、受部が直線的に開く。33は支脚形土器で、「ハ」の字に開く裾部をもつ。34はミニチュア品で、体部は長胴になる。

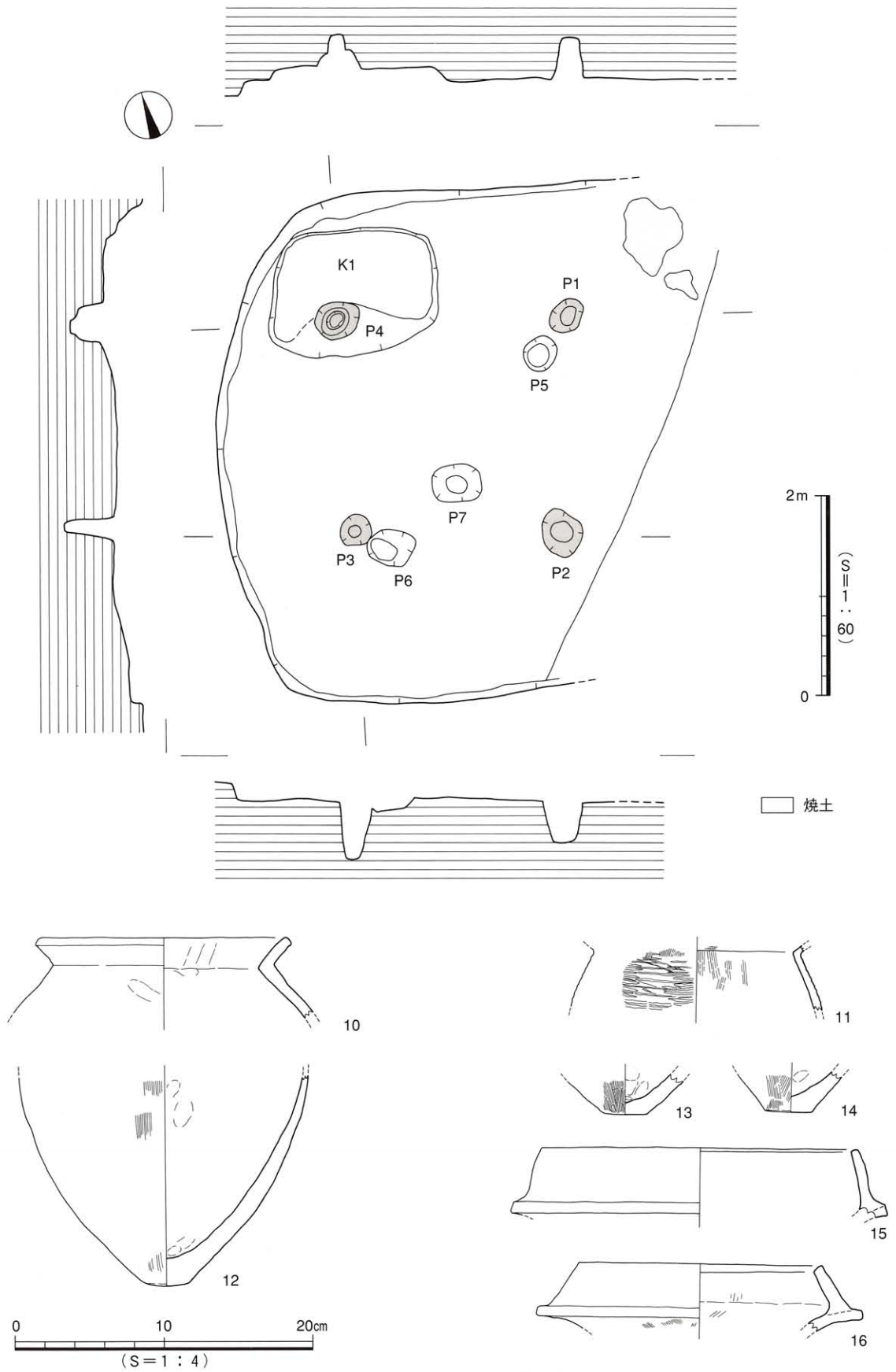
35は弥生時代前期末～中期初頭の甕形土器である。口縁端部には刻目、胴上半部にはヘラ描き沈線文と刺突文を施す。

36～40は土師器の坏である。37・38は平底、39は高台をもつ。40は緑釉の小坏である。

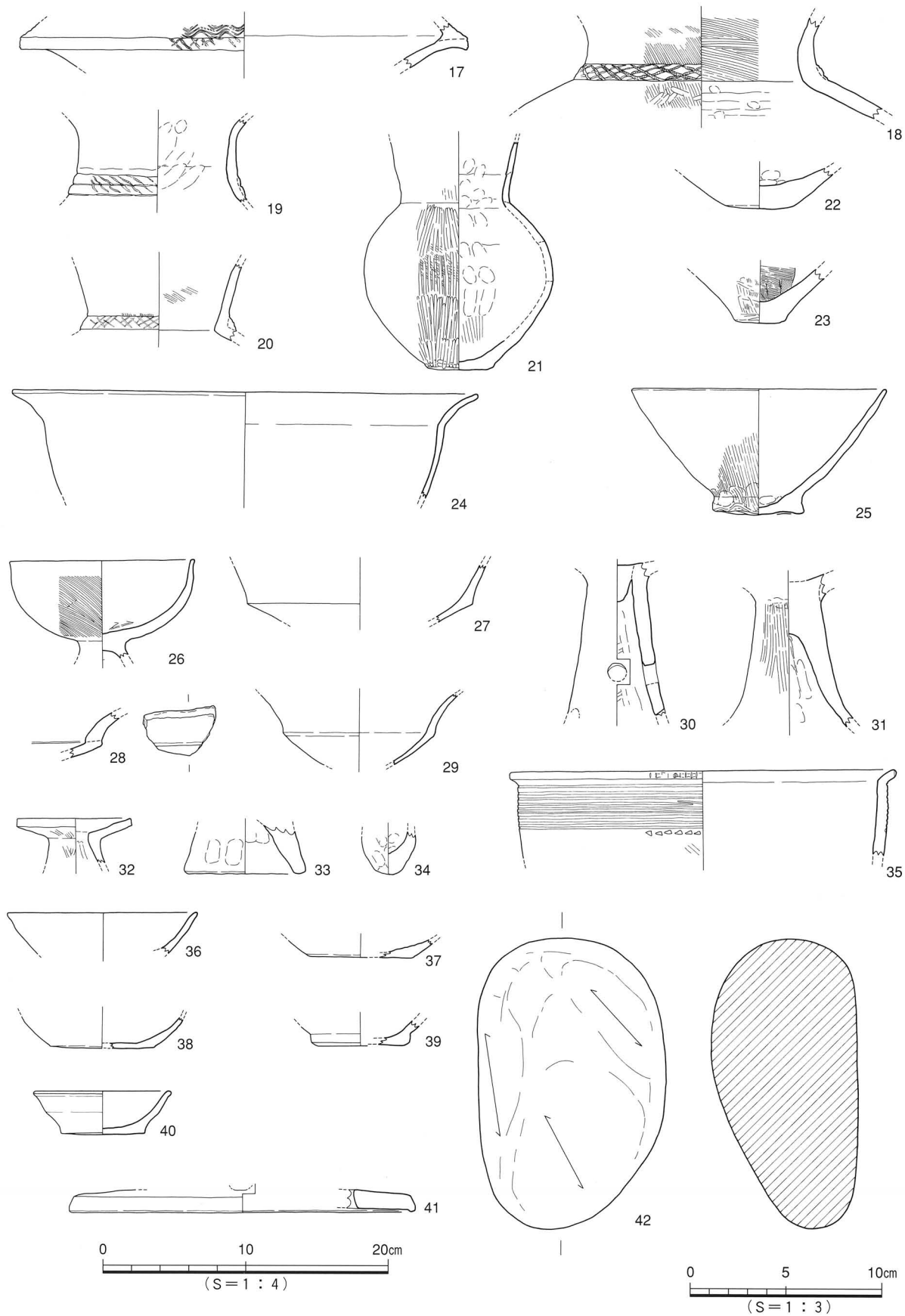
42は石製品で、磨石になる。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代終末期に比定する。

鳥越遺跡



第5図 SB2測量図・出土遺物実測図(1)



第6図 SB2出土遺物実測図(2)

SB3 (第7図、図版3)

調査地北西隅にあり、住居址の南半は工事で削平され、北半は調査区外となる。住居跡の東部はSB1と重複するが、切り合い関係は判断されていない。なお、SB3の床面は、SB1の床面より33cm高い。住居址の平面形態は方形になるものと推定され、規模は東西4.25m、南北検出長2.40m、深さ34cmを測り、検出面積は10.2m²になる。

屋内施設には、小穴を3基検出している。小穴は住居の中央付近にあり、機能は特定できない。P1は直径34~35cm、深さ15cm、P3は長軸50cm、短軸32cmを測る。P2は細長く浅い部分を持ち、長軸71cm、短軸35cmを測る。

遺物は住居址の東半部に集中し、土器・土製品および石製品が出土している。特に、土製品は注目され、土錘が輪をなすように出土している。ここでは、土器41点・土製品10点と石製品1点を掲載した。

出土遺物 (第7~10図、図版4)

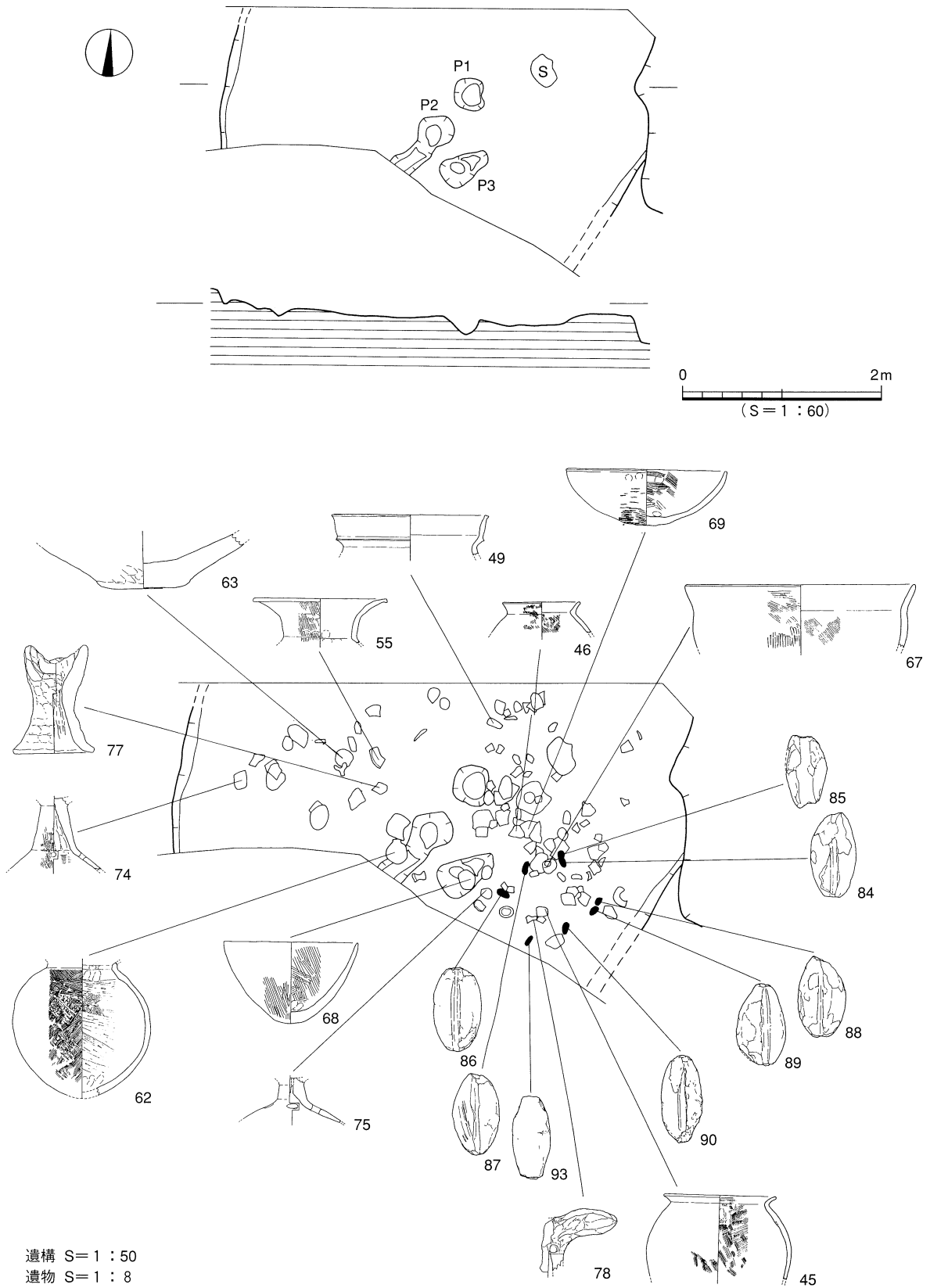
43~83は土器で、弥生時代終末期~古墳時代初頭期に比定される。43~54は甕形土器である。43・44は胴部の張りが弱く、45~47は胴部の張りが強い。48~50は外来系土器である。48は胴部が強く張り、内面にはケズリ跡がみられ、色調は白味が強い。49・50は口縁部が上外方に拡張される。51~54は底部で、平底をなす。55~66は壺形土器である。55・56は広口壺で、57・58は複合口縁壺の頸部である。59は短く外反する口縁部をもつものとみられ、頸部下位に曖昧な沈線がみとめられる。60は胴部上半に突帯を2条もつ。61~66は胴底部片で、61・62は球形の胴部になる。63~65は胴部下半が膨らみ、平底の底部をもつ。66は胴部が扁平球をなすもので、底部は突出した平底をもつ。67~69は鉢形土器である。67は口縁部が折り曲がり、68・69は直口口縁になる。70~76は高坏形土器で、70は坏部片、71~76は脚部片である。72・73は柱上部が中空になり、74~76は裾部に円孔をもつ。77~82は支脚形土器である。77~81の受部は突起からなり、82の受部は凹んで傾斜をなす。83は小型品で、器種が特定できない。

84~93は土製品で、土錘になる。平面形態は楕円形で、断面形態は円形を呈する。構造は円筒状で、溝を1条もつ84~92と溝をもたない93がある。長さは7.4~9.2cm、径は3.6~4.8cm、厚さは1.4~2.3cmを測り、重さは99~197gである。また、孔径は0.6~0.9cmで、溝幅は0.5~1.5cmになる。

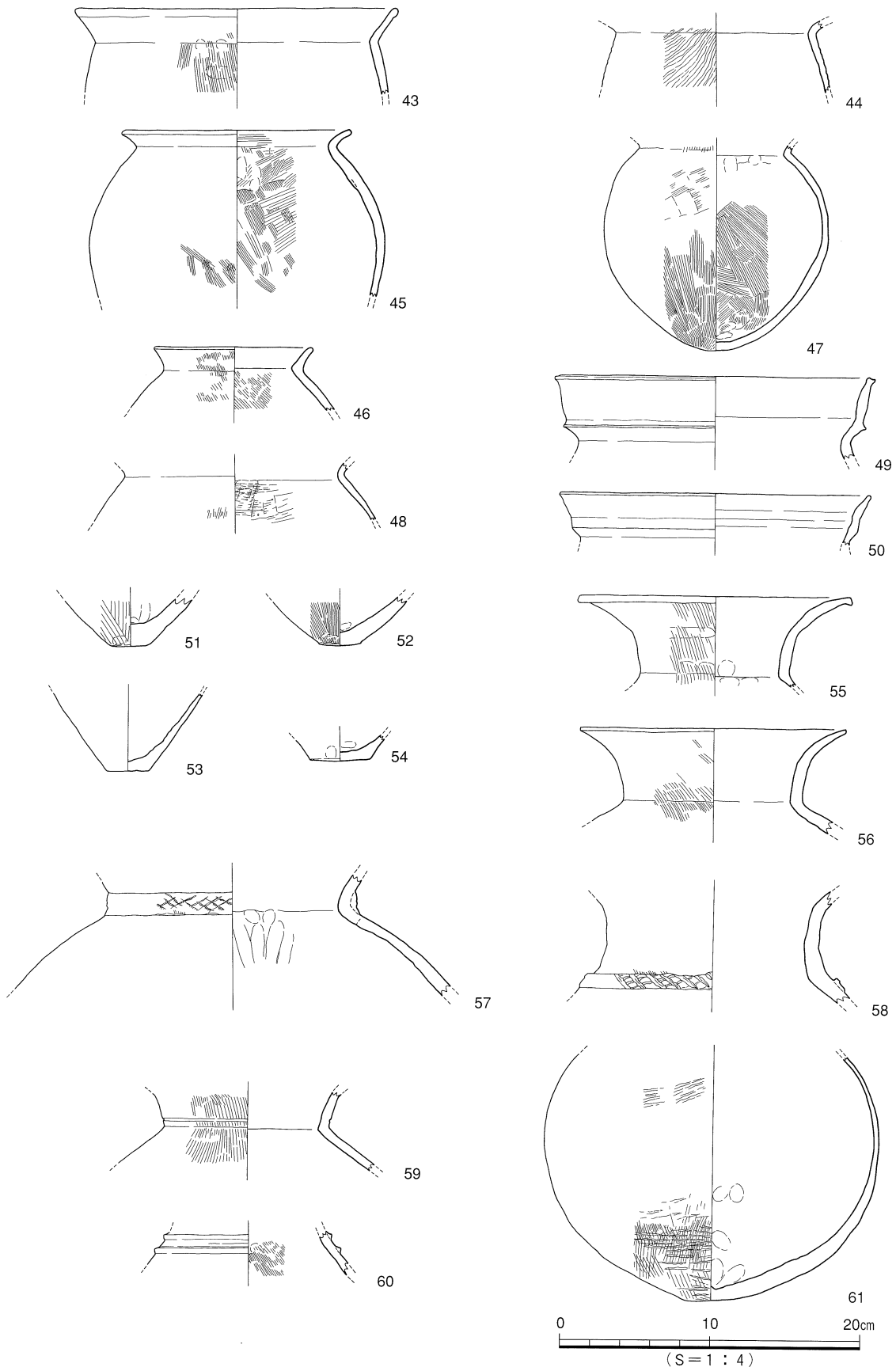
86は石製品で、磨石である。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代終末期~古墳時代初頭期に比定する。

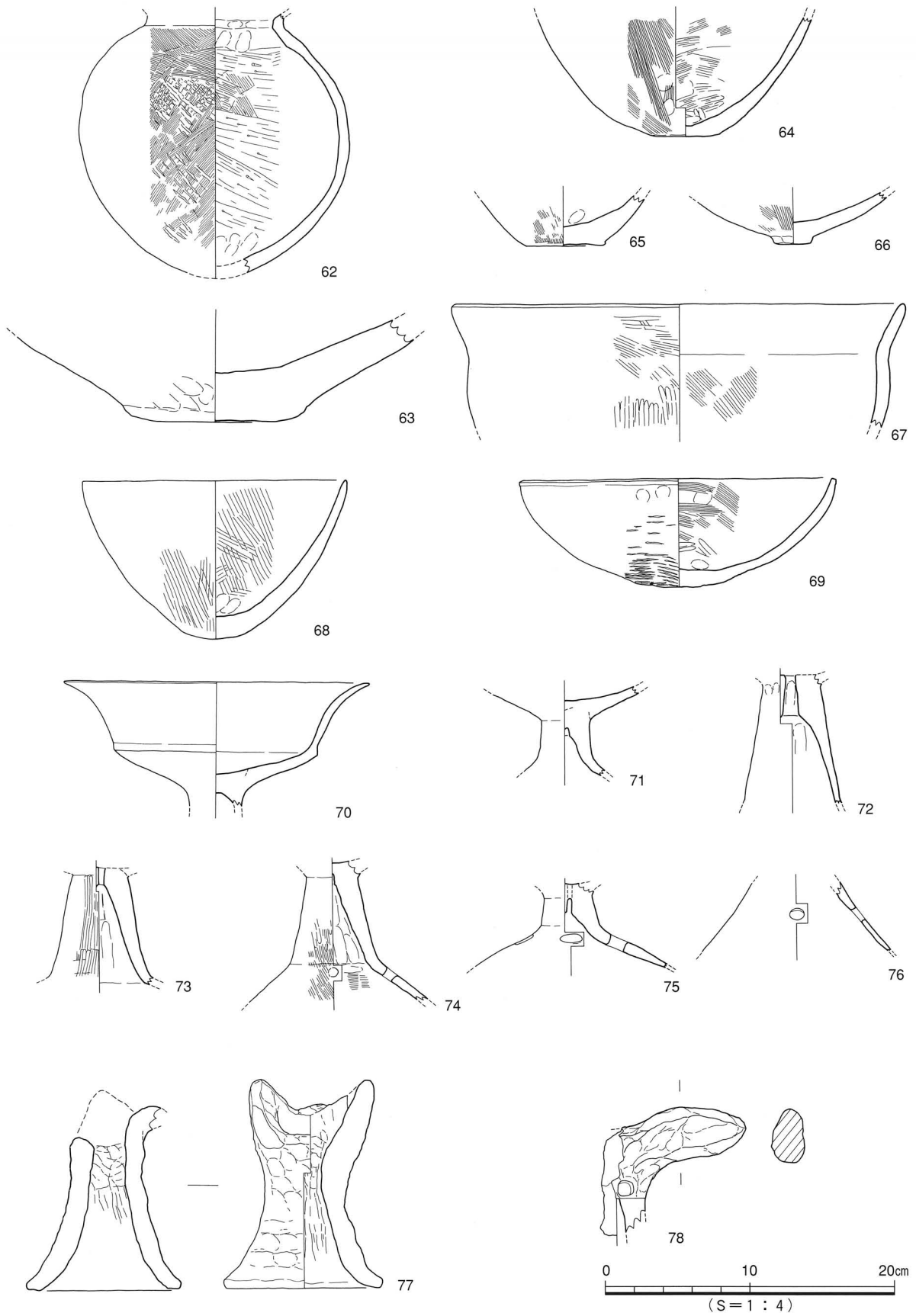
遺構と遺物



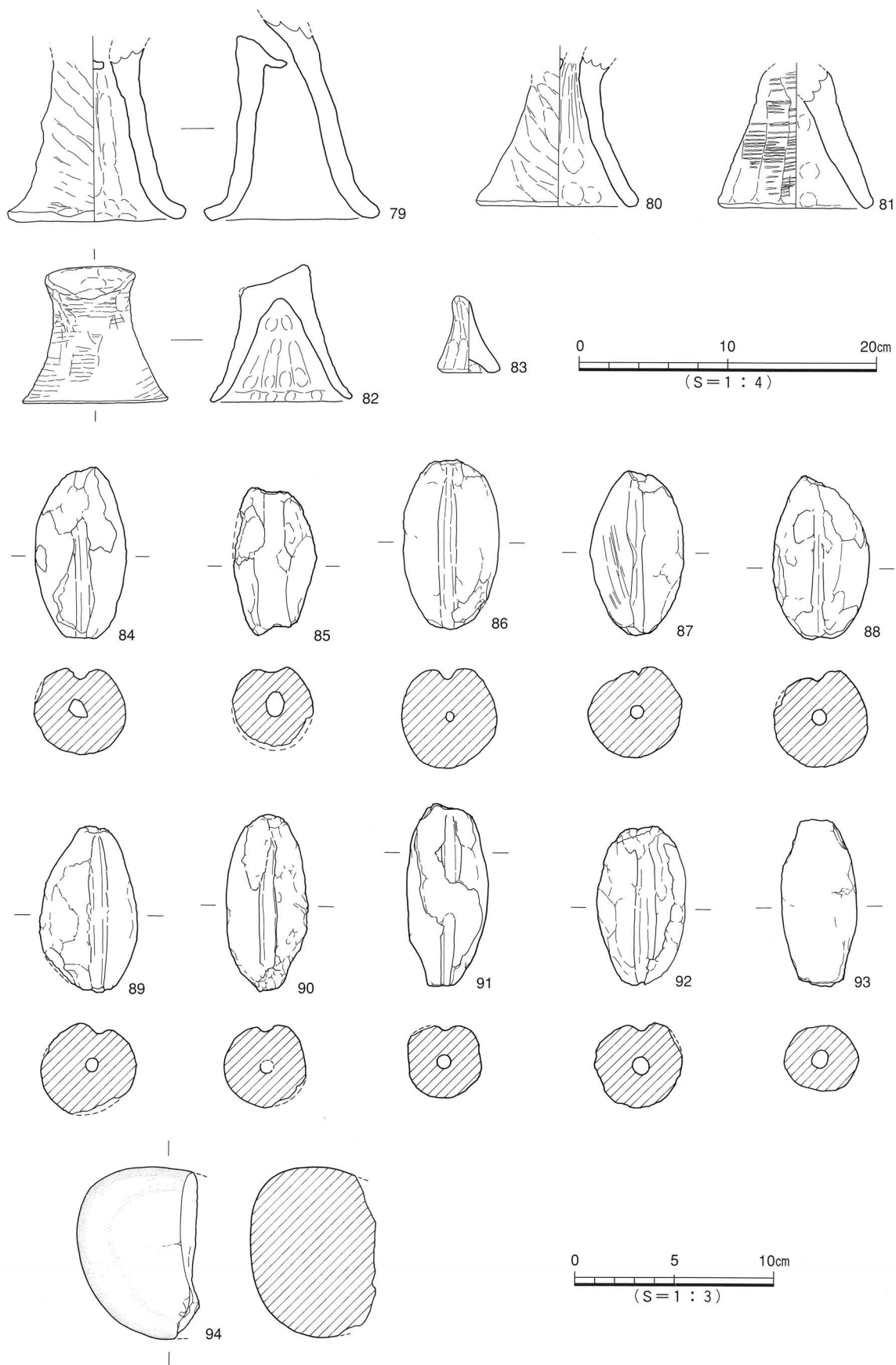
第7図 SB3測量図・遺物出土状況



第8図 SB3出土遺物実測図(1)



第9図 SB3出土遺物実測図(2)



第10図 SB3出土遺物実測図(3)

(2) 土 坑

土坑は、調査区の東半部に集中し、17基を検出した。このうち、16基は弥生時代、1基は近世墓である。なお、近世墓は事項で記述する。

S K 1 (第11図)

土坑群中の北端にある。平面形態は円形で、断面形態は逆台形状を呈する。規模は直径1.36～1.65m、深さ16cmを測り、床面積は2.19m²である。遺物は、土器片が少量出土している。第11図95は図化できる唯一のもので、弥生時代前期末～中期初頭の壺形土器の口縁部である。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代前期末～中期初頭に比定する。

S K 3 (第11図)

土坑群中の北部にあり、S K 12を切る。平面形態は円形を呈し、規模は直径1.40～1.60mを測り、床面積は2.0m²である。遺物は、土器片が少量出土している。第11図96は図化できる唯一のもので、弥生時代前期末～中期初頭の甕形土器の口縁部である。口縁端部には刻目、胴上半部にはヘラ描き沈線文と刺突文を施す。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代前期末～中期初頭に比定する。

S K 4 (第3図)

土坑群中の北部にある。平面形態は長方形をなすが、長辺側が少し張り出す。断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸1.82m、短軸1.27m、深さ10cmを測り、床面積は2.3m²である。遺物は、図化できるものがない。

時期：時期を特定する資料がない。

S K 5 (第11図)

土坑群中の中央部にある。S K 9に接するが、切り合い関係は判断されていない。平面形態は円形で、断面形態はフラスコ状を呈する。規模は、上場が直径1.25～1.32m、下場が直径1.25～1.45m、深さは115cmを測り、床面積は2.28m²である。壁に添って粘土が検出され、暗褐色土と黄褐色土で埋まっている。遺物は弥生時代前期末～中期初頭の土器片が少量出土している。図化できるものはない。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代前期末～中期初頭に比定する。

S K 6 (第3図)

土坑群中の中央部にある。平面形態は円形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は直径1.80～1.93m、深さ6cmを測り、床面積は2.9m²である。遺物は、図化できるものはない。

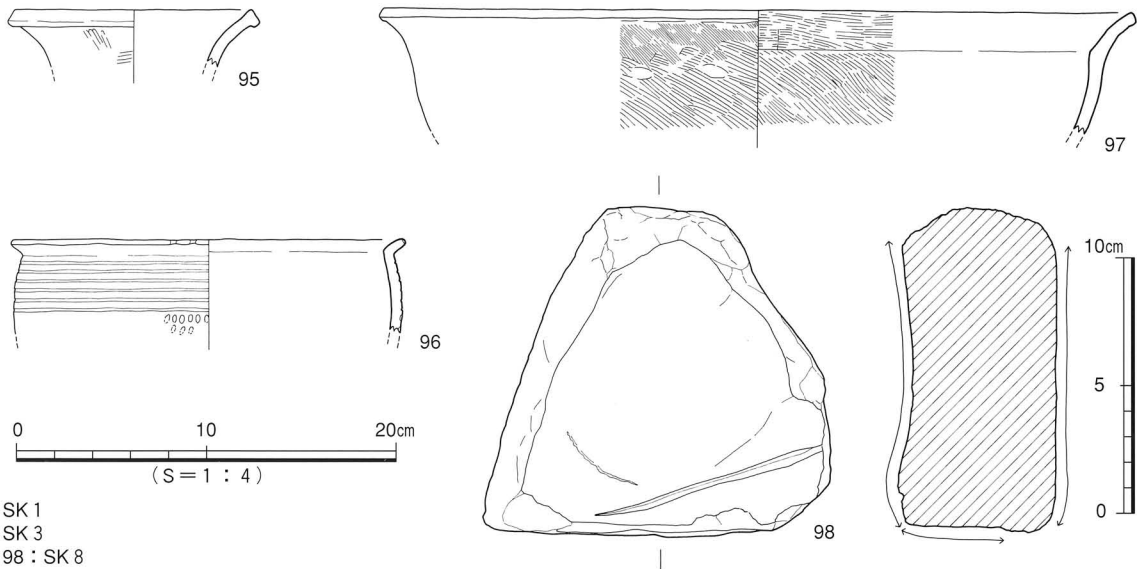
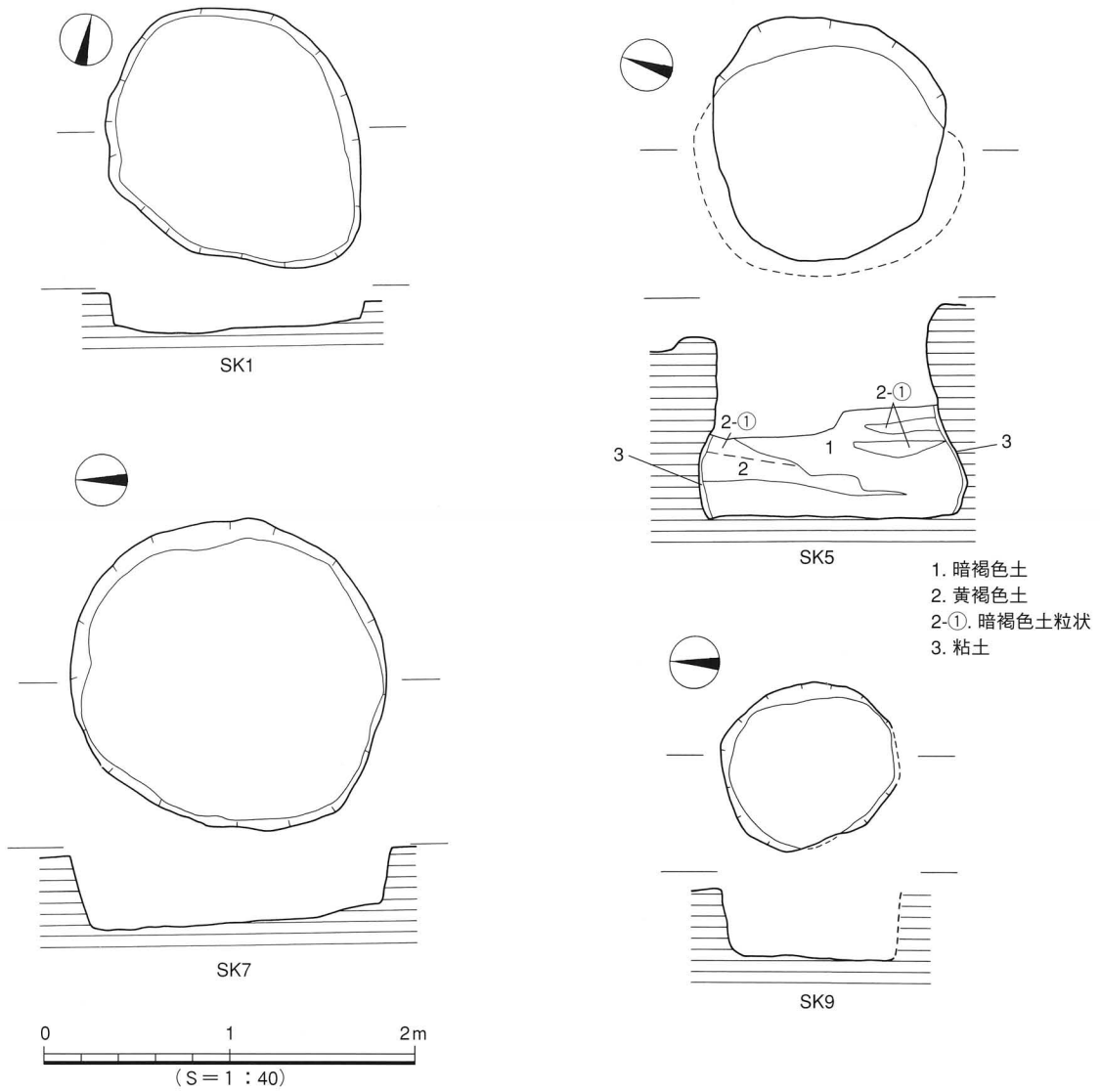
時期：時期を特定する資料がない。

S K 7 (第11図)

土坑群中の中央部にある。平面形態は円形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は直径1.66～1.72m、深さ41cmを測り、床面積は2.3m²である。遺物は、図化できるものがない。

時期：時期を特定する資料がない。

鳥越遺跡



95 : SK 1
96 : SK 3
97・98 : SK 8

第11図 SK測量図・出土遺物実測図

S K 8 (第11図)

土坑群中の中央部にある。平面形態は円形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は直径1.90～2.00mを測り、床面積は3.1m²である。遺物は検出面付近で、土器片と拳大の石20個程度が出土している。第11図97・98が出土品中の図化できるもので、97は弥生時代前期末～中期初頭の鉢形土器である。98は砥石である。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代前期末～中期初頭に比定する。

S K 9 (第11図)

土坑群中の中央部にある。S K 5 に接し、S K 13 を切る。平面形態は円形で、断面形態は逆台形状を呈する。規模は直径0.87～0.94m、深さ36cmを測り、床面積は0.69m²である。遺物は、図化できるものがない。

時期：時期を特定する資料がない。

S K 10 (第3図)

土坑群中の北部にあり、S K 13 を切る。平面形態は円形で、規模は直径1.43～1.57m、深さ57cmを測り、床面積は1.93m²である。遺物は、弥生時代前期末～中期初頭の土器片と拳大の石とが少量出土している。図化できるものはない。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代前期末～中期初頭に比定する。

S K 11 (第3図)

土坑群中の北部にある。平面形態は楕円形で、規模は長軸0.62m、短軸0.45m、深さ2cmを測り、床面積は0.3m²である。遺物は、図化できるものがない。

時期：時期を特定する資料がない。

S K 12 (第3図)

土坑群中の北部にあり、S K 3 に切られる。平面形態は長方形で、規模は長軸0.64m、短軸0.44mを測り、検出床面積は0.32m²である。遺物は、図化できるものがない。

時期：時期を特定する資料がない。

S K 13 (第3図)

土坑群中の北部にあり、S K 9・10に切れる。平面形態は長方形で、規模は長軸1.02m、短軸0.87mを測り、検出床面積は0.88m²である。遺物は、図化できるものがない。

時期：時期を特定する資料がない。

S K 14 (第3図)

土坑群中の中央部にあり、S K 5 に切られる。平面形態は円形で、規模は検出長0.4～1.3mを測り、検出床面積は0.52m²である。遺物は、図化できるものがない。

時期：時期を特定する資料がない。

S K 15・16・17 (第3図)

S K 15・16・17は、遺構を検出したにとどまる。平面形態は、S K 16・17が円形、S K 15が四角形になると推定される。

時期：時期を特定する資料がない。

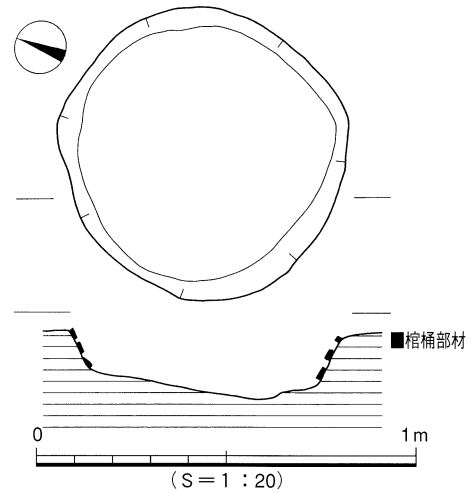
(3) 墓

中近世墓は、1基を検出した。

S K 2 (第12図)

土坑群中の北部にある。平面形態は円形で、断面形態は逆台形状を呈する。規模は直径0.75～0.77m、深さ17cmを測り、検出床面積は0.46m²である。遺物は、壁体に沿って3段に木片を検出した。これは、棺桶の部材である。

時期：棺桶の形態から、中近世墓に時期比定しておく。



第12図 SK2測量図

(4) 出土地点不明遺物 (第13図)

ここでは、表採品や出土地点が特定できない資料を取り上げる。

99～110は、弥生時代終末期～古墳時代初頭期に比定されるものである。99～105は甕形土器で、105は小さい底部に長い胴部をもつ。106は壺形土器で、複合口縁壺になる。107・108は鉢形土器で、上げ底になる。109・110は支脚形土器で、110は受部が「U」字状に切り込まれている。

111は、弥生時代前期末～中期初頭に比定される甕形土器である。胴上半部には、多重のヘラ描き沈線文をもつ。112と113は須恵器で、112は坏身、113は甕になる。114は、中世の羽釜である。115は石製品で、石器素材になる。

4. 小 結

本調査では、弥生時代と中近世の遺構・遺物を検出し、さらには古墳時代の遺物が出土している。

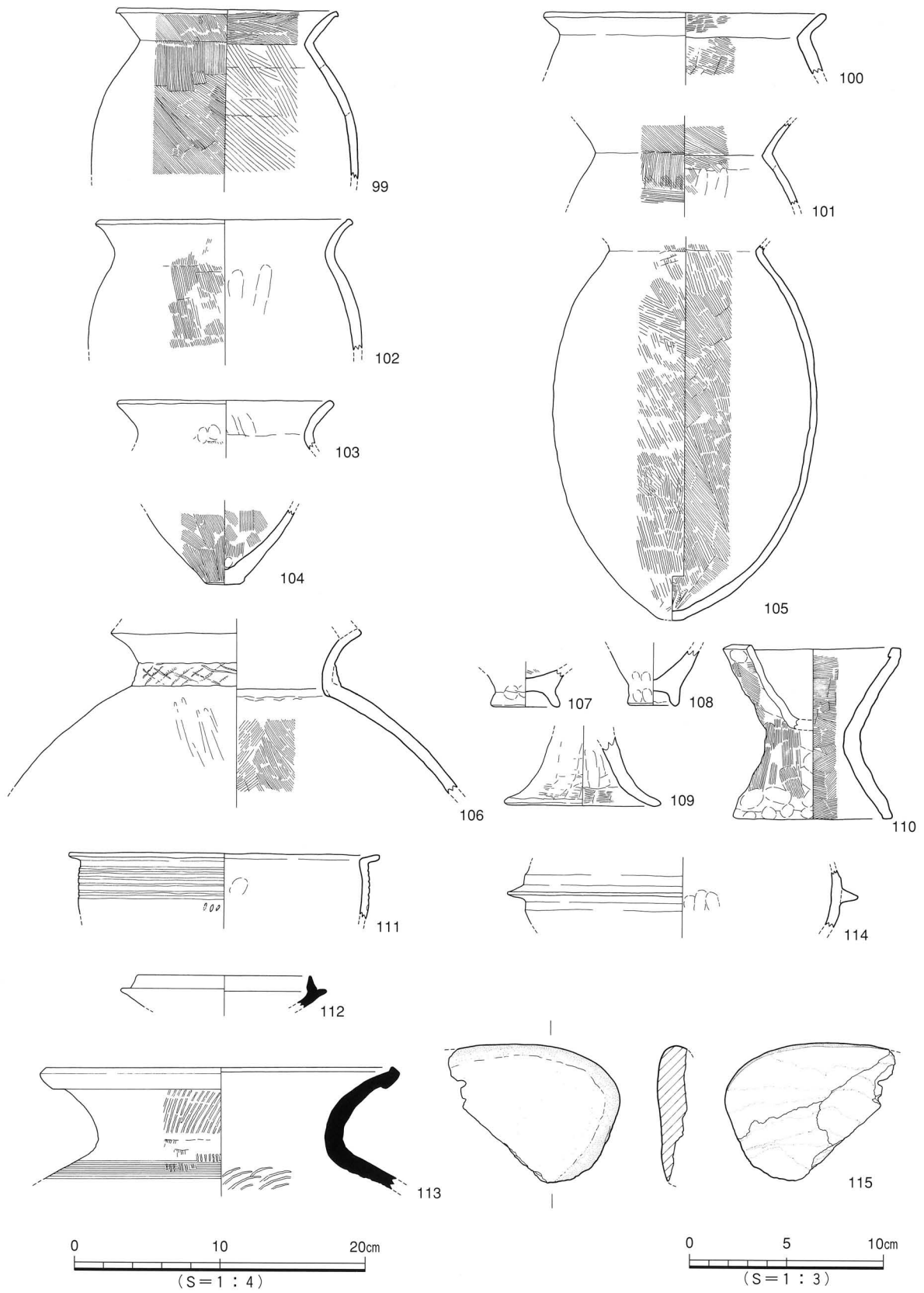
(1) 弥生時代前期末～中期初頭

土坑は集合状態で検出され、遺存の良好なものでは、平面形態が円形で、断面形状がフラスコ状ないし逆台形状を呈する。この状況から、土坑は貯蔵穴群とみられ、この場合の貯蔵穴群の構成はS K 1・3・5・8・10になる。さらに、時期の特定がなされていない土坑で、平面形態と規模とが先のものに類似するS K 4・6・7・15・16・17も貯蔵穴群に含まれると考えられる。

一方、S K 12・13・14は切り合い関係から貯蔵穴群よりも古い遺構になり、S K 9・11は時間的關係が明確にできない。

したがって、土坑は弥生時代前期末～中期初頭、もしくはその前後の時期に存在したと推定される。

(2) 弥生時代終末期～古墳時代初頭期



第13図 出土地点不明遺物実測図

竪穴式住居址は、3棟を検出した。

まずは、SB1とSB3との切り合い関係を整理する。

SB1出土品は、出土地点が埋土中と検出面付近に分かれる。前者は破片が小さく、後者は破片が大きい。また、後者はSB3の遺物の出土位置と大きさ・形状が同じである。これらの事は、SB1の出土品のうち検出面付近にある土器は、SB3の遺物であることを示しており、SB3はSB1を切っていたことになる。

つぎに、SB1・3とSB2の関係を整理する。

各々の住居址は出土土器をもつが、著しい形態差は求められない。ただし、位置関係からは、SB2がSB1・3のいずれかと組することは間違いない。

さて、出土品では、SB3出土の土錘と外来系土器が注目される。

SB3出土の土錘は、出土状況が直径1m程の円形状を呈しており、土錘の使用形態が推察される。また、共伴する土器はいずれも破損品であり、土錘10個は網に装着した状態で廃棄されたものとみられる。土錘の形態は紡錘形で、紐通しの穴と1例を除き紐掛けの溝を1条もつ。本資料は、谷若倫郎氏（愛媛県教育委員会）によれば、「この形状では最古のものである」とのことである。

外来系土器は、SB3とSB1として取り上げられている土器のなかに4点ある。SB3の第8図48はいわゆる布留系土器に、49・50は山陰系土器に類するものである。SB1の検出面出土の第4図9は讃岐系土器で、胎土が在地の土器とは異なるため搬入品としてよい。これら4点は、結果的にはSB3に廃棄された共伴品である。広域な土器編年の資料といえる。

(3) 古代末期～中近世

当該期の資料には、墓1基と土器片がある。

墓SK2は、桶棺の一部が遺存していた。墓壙は、桶棺の大きさに合わせて掘削されていた。桶棺内からの遺物はなく、遺体に関する資料は得られていない。

遺物では、SB2から土師器の坏、緑釉陶器の坏が出土している。調査地内外からの流入品であるが、9世紀後半～10世紀に比定され、集落の存在を示唆している。なお、緑釉陶器の坏は、平野では稀少例である。

以上、調査結果をまとめた。今回の調査では、調査地の土地利用が特定の限られた時代と時期に行なわれていることが判明し、宮前川遺跡の集落研究の資料になった。また、外来系土器の出土で、地域間交流の資料を得ることにもなっている。

表1 竪穴式住居址一覧

竪穴 (SB)	時 期	平面形	規 模 (m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積 (m ²)	主柱穴 (本)	内部施設				周壁溝	備 考
						高床	土坑	炉	カマド		
1	弥生終末	方 形	4.80×2.65×0.50	12.72	2			○		○	焼失家屋
2	弥生終末	方 形	5.15×4.65×0.16	23.94	4		○				
3	弥生終末～ 古墳初頭	方 形	4.25×2.4×0.34	10.2							土錘

第3章

津田つだ中ちゅう学が校っこう構こう内くない遺跡

— 1次調査地 —



第3章 津田中学校構内遺跡1次調査地

1. 調査の経過

(1) 調査・報告の経緯

調査は、津田中学校構内（松山市北斎院町乙326）のテニスコート建設に伴う緊急調査で、期間は昭和52年1月16日から同年2月8日までである。調査終了後は、配置図の作成と土器の洗浄・注記などの整理作業をした。

報告書の作成は、平成10～12年度に資料整理と出土遺物の実測・トレースをし、調査担当者の協力と助言を得て平成12年度に編集を行なった。なお、作業の結果、既に公表された資料には、一部に訂正の必要な事項があることを確認するにいたった。

ところで、調査の内容は、『松山市史料集 第一巻』（昭和55年4月発行）、『古代の松山平野』（昭和57年3月発行）、『愛媛県史 資料編 考古』（昭和61年1月発行）、『松山市文化財調査年報Ⅰ』（昭和62年3月発行）、『松山市史 第1巻』（平成4年10月発行）に、その概要が掲載されている。このなかで本調査地の遺跡名は、「鳥越二遺跡」、「津田鳥越」、「鳥越遺跡第二次調査・鳥越Ⅱ」、「鳥越遺跡・津田中学校構内1次調査」、「鳥越遺跡」等が使用され、概要が報告されている。

今回、本報告に際しては、第2章の鳥越遺跡と遺跡名を区別するために『津田中学校構内遺跡1次調査地』を正式名称として報告する。

(2) 調査組織

調査地	松山市北斎院町乙326（松山市立津田中学校構内）
遺跡名	津田中学校構内遺跡1次調査地
調査期間	昭和52年1月16日～同年2月8日
調査面積	3004m ²
調査担当	森 光晴（当時、文化財専門員）

2. 層位

調査地は、東西に延びた丘陵の斜面部と谷部からなる。地表面の標高は、高所部で12.0m、低地部で9.5mであり、現在の宮前川からは290mの位置にある。

層位は、5層の基本層序を設定した。なお、第Ⅰ層の耕作土は、調査を開始するまでに剥ぎとられていたために、記録がない。

第Ⅰ層は耕作土である。

第Ⅱ層は黄褐色土で、粘性があり、最大35cm堆積する。

第Ⅲ層は褐色土で、粘性があり、最大60cm堆積する。

第Ⅳ層は暗灰褐色土で、粘性があり、最大25cm堆積し、遺物を包含する。

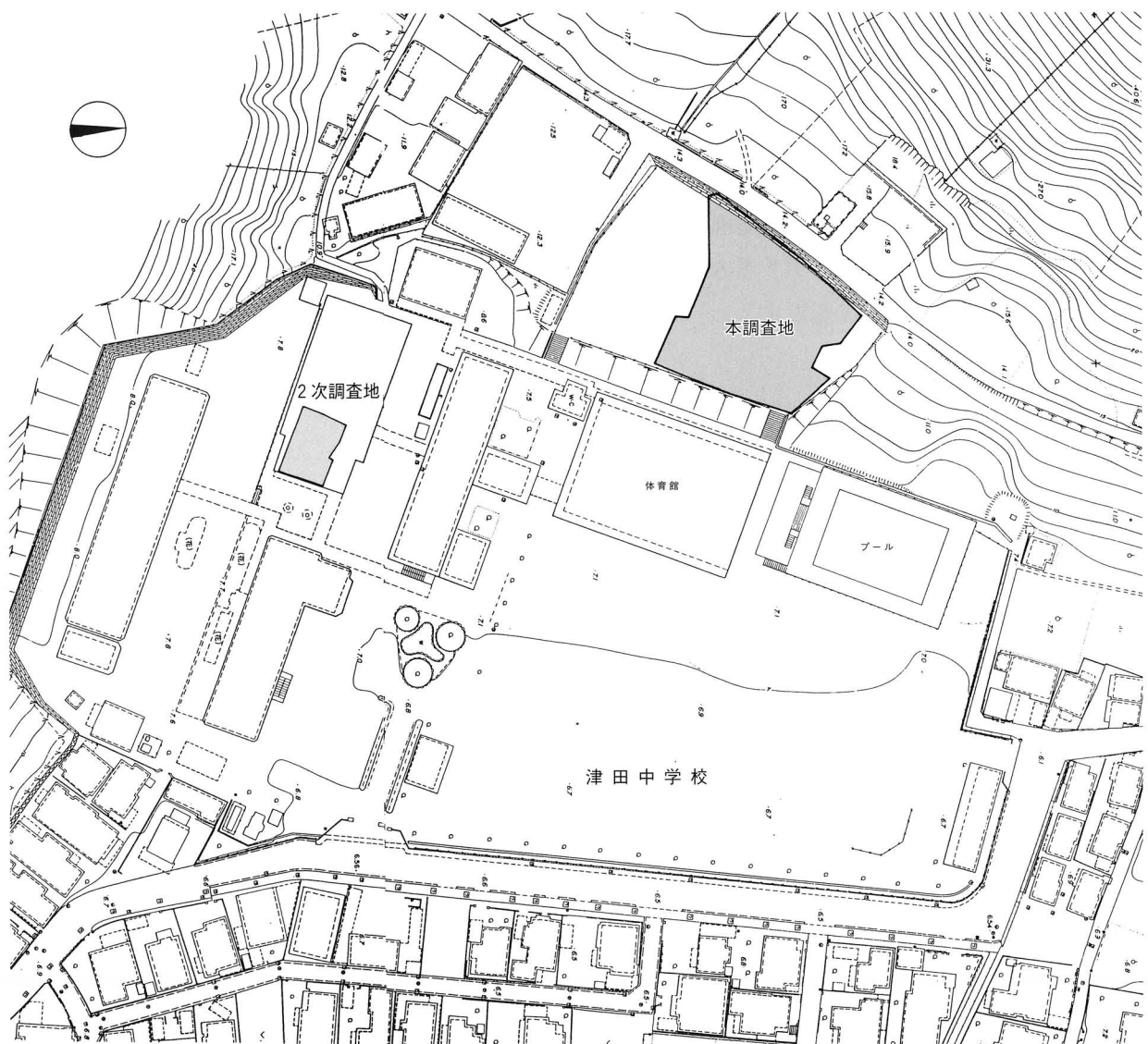
第Ⅴ層は基盤層になる。

地形は、北端部が最も高く、南西部に向けて急激に低くなる。その高低差は、3 mになる。

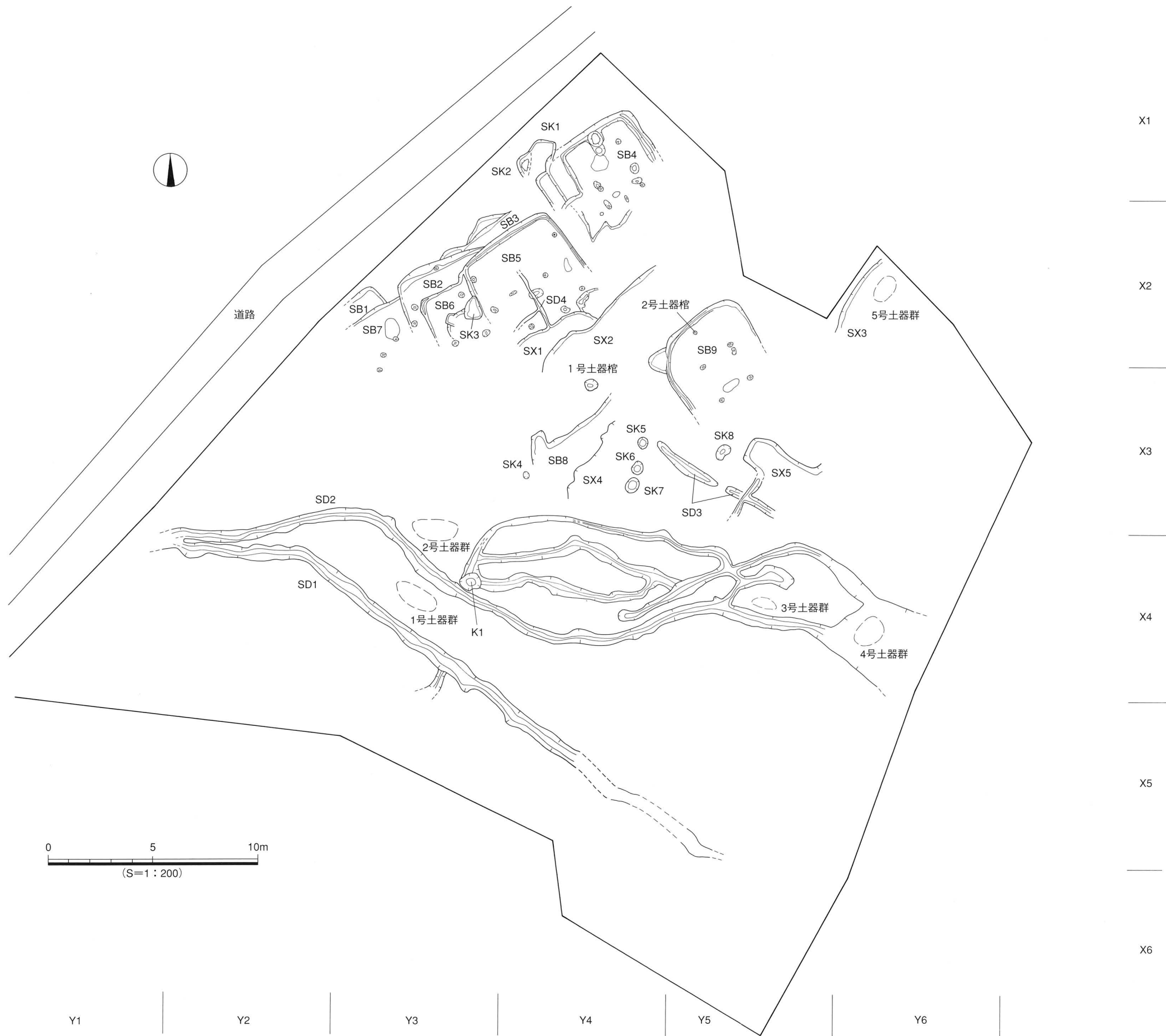
遺構は第V層上面で検出し、遺物は第IV層の出土量が多数を占める。ただし、遺構と遺物は、検出および出土の層位が記録として残っていないものがほとんどである。

各層の時期は、古墳時代須恵器や中近世土器が第IV層に数点あるが、大多数は弥生時代終末～古墳時代初頭の土器である。調査の経緯を考慮すれば、第IV層の堆積時期は、弥生時代終末～古墳時代初頭に判断するべきであろう。また、第III層は古墳時代6世紀以降の堆積といえる。

なお、調査では調査地内を8 m四方のグリッドに区分した。グリッドは、北から南へX 1～X 6、西から東へY 1～Y 7とし、X軸とY軸を組合せX 1 Y 1で表記した。



第14図 調査地位置図 (S = 1 : 1,500)



第15図 遺構配置図

3. 遺構と遺物

検出遺構は、弥生時代後期以降の竪穴式住居址9棟、溝4基、土坑7基、墓2基、土器集中地点5ヶ所、落ち込み5ヶ所である（第15図）。

(1) 竪穴式住居址

竪穴式住居址は9基を検出した。

S B 1（第15図）

調査地の北西部、X 2 Y 3にあり、S B 7に切られ、遺存が悪い。平面形態は四角形で、規模は東西1.31m、南北検出長1.04m、深さ9～25cmを測る。屋内施設は未検出である。

遺物には、弥生土器が少量ある。

出土遺物（第16図1～3）

1は甕形土器の底部、2は壺形土器の口縁部、3は鉢形土器の口縁部である。2の口縁端部には斜格子目の刻目が施されている。

時期：出土遺物から、弥生時代後葉～終末とする。

S B 2（第15図、図版7）

調査地の北西部、X 2 Y 3にあり、S B 5・6に切られ、S B 3・7を切る。平面形態は四角形で、規模は東西4.7m、南北検出長1.5m、深さ38～44cmを測る。床面では、径10～20cmの小穴が3基ある。

遺物には、弥生土器と石器が少量ある。

出土遺物（第16図4～7）

4・5は壺形土器の口縁部、6は高坏形土器の脚部である。7は用途不明の石器で、完形品、112g。

時期：出土遺物から、弥生時代終末期とする。

S B 3（第15図）

調査地の北西部、X 2 Y 3にあり、S B 2・5に切られる。平面形態は四角形で、規模は東西4.0m、南北検出長0.8m、深さ6～14cmを測る。屋外施設には、三角形の突出部が検出されている。

遺物には、弥生土器と石器が少量ある。

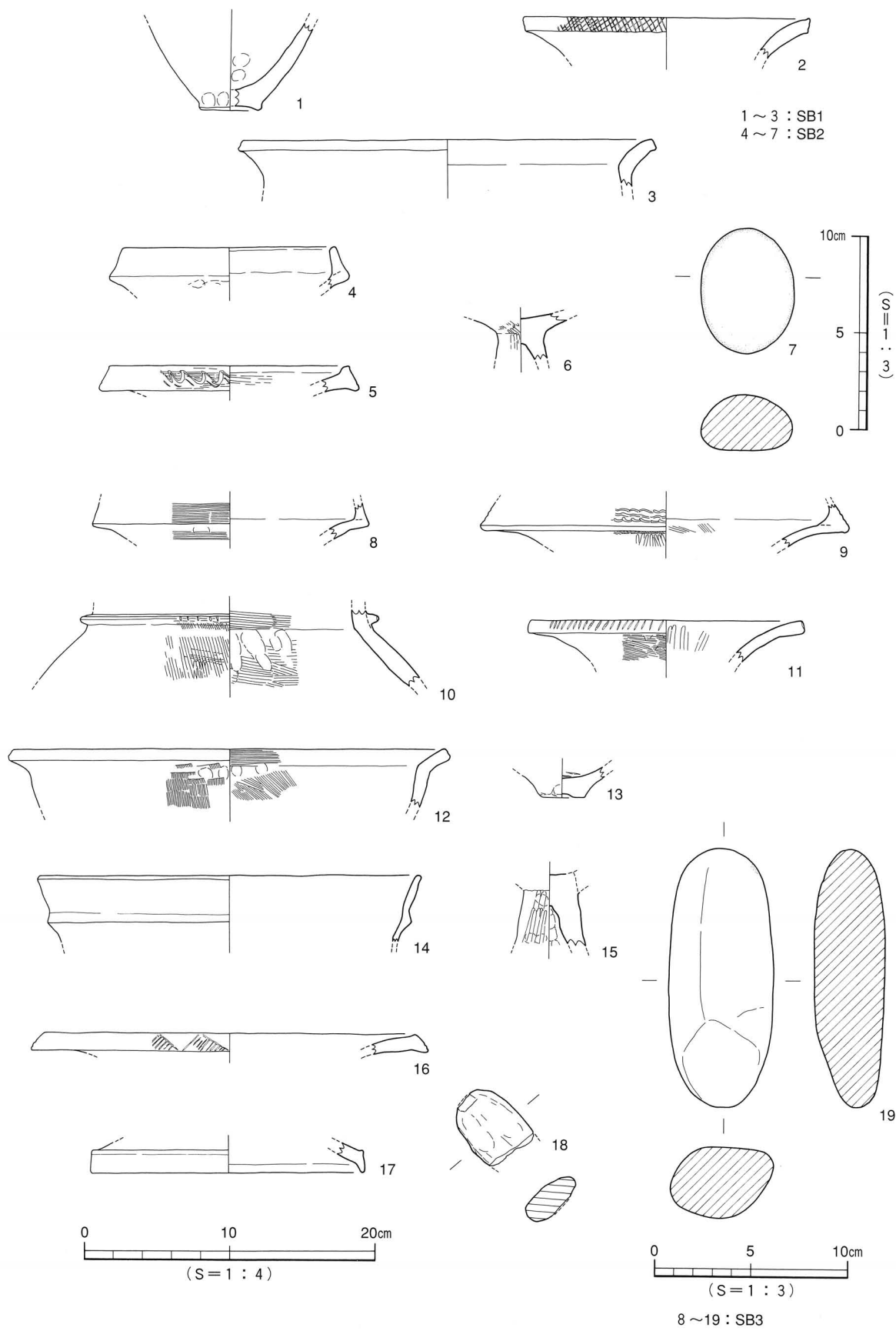
出土遺物（第16図8～19）

8～11は壺形土器で、8・9は複合口縁壺、11は広口壺になる。12～14は鉢形土器で、14は二重口縁になる。16・17は器台形土器で、16は口縁部に斜線充填の三角文をもつ。18は支脚形土器で、受部片になる。19は磨石あるいは手持ち用の砥石である。402g。

時期：出土遺物から、弥生時代終末期とする。

S B 4（第17図、図版6）

調査地の北部、X 1 Y 4にあり、S K 1に切られ、住居址南側は未検出である。平面形態は四角形で、規模は東西4.9m、南北検出長4.5m、深さ30cmを測る。西側には、長方形の張り出し部があり、



第16図 SB1・2・3出土遺物実測図

東西0.6m、南北検出長1.9m、深さ10cmを測る。屋内施設にはカマドと柱穴があり、床面からは焼土、炭、小穴が検出されている。カマドは、基底部が残るにすぎなく、前庭部は直径45～50cm、深さ16cmの穴が掘られている。前庭部と住居中央部との間では、直径70～90cmの範囲で焼土と炭がある。支柱穴はP1～4の4本で、直径18～30cm、深さ22～26cmを測る。床面検出の小穴は、直径17～45cm、深さ5～19cmを測り、性格は特定できない。

遺物には須恵器、弥生土器、石器が少量ある。

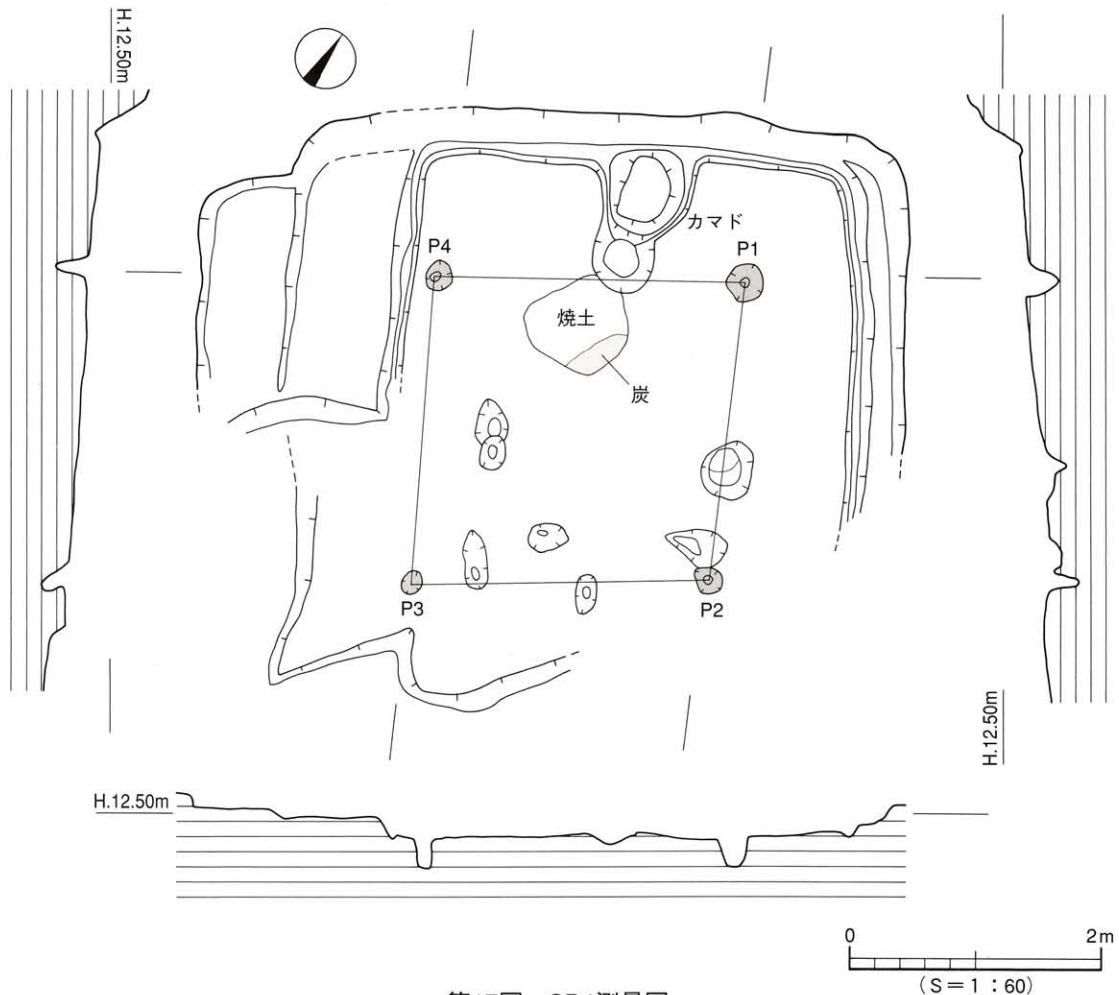
出土遺物（第18図20～30、図版9）

20・21は須恵器で、20は高坏の坏部、21は長頸壺の頸部になる。22～28は弥生終末～古墳初頭の土器で、22～26は甕形土器、27は二重口縁壺、28は支脚形土器である。このうち26は讃岐地方の形態と調整に似る。29・30は石器である。29は3箇所溝をもつ石錘で、結晶片岩、33g。30は扁平な用途不明石器で、69g。

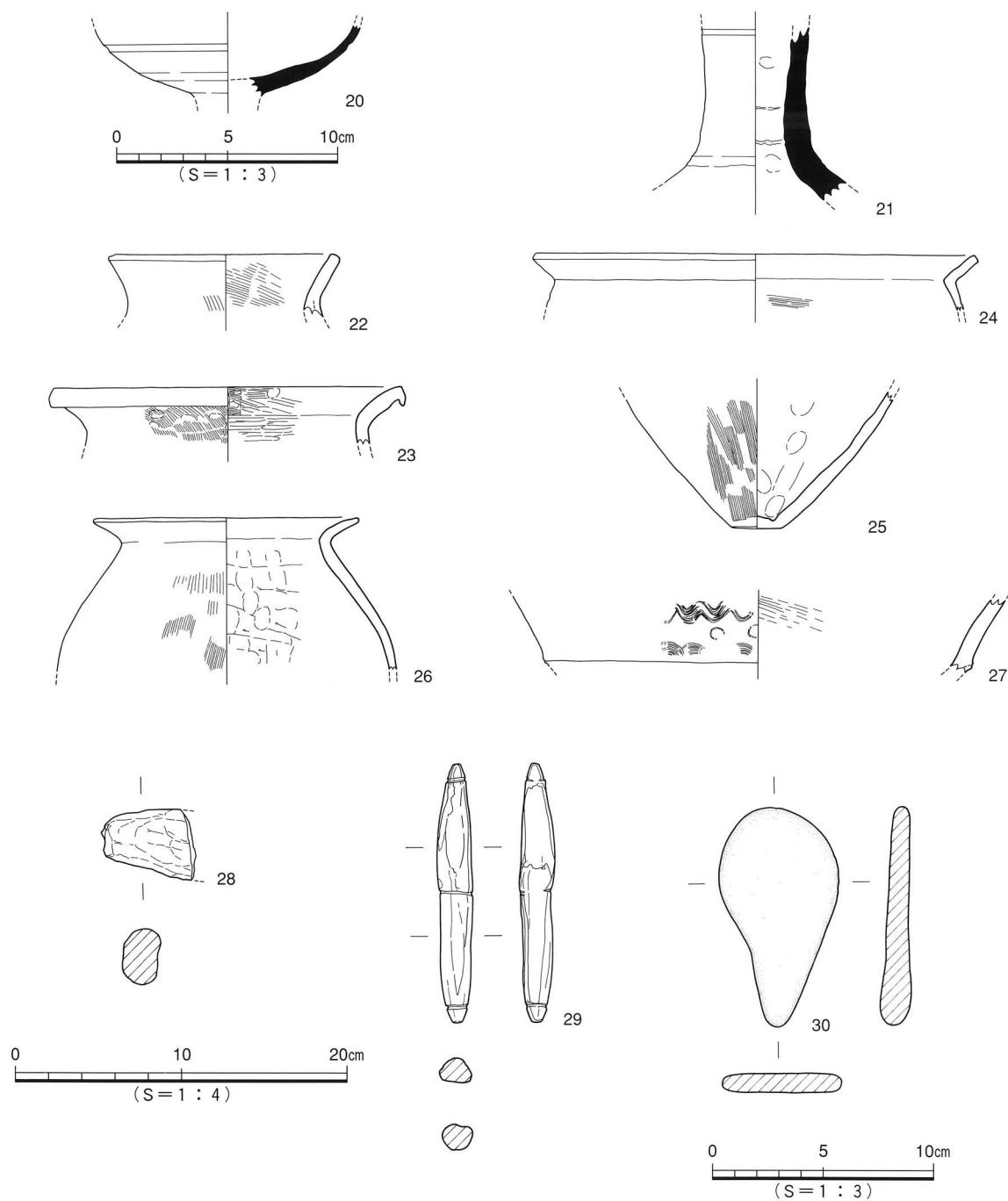
時期：出土須恵器から、古墳時代後期6世紀後半とする。

SB5（第19図、図版6）

調査地の北西部、X2Y3～4にあり、SB2・3・6を切り、SD4・SK3に切られる。住居址の南側は未検出である。平面形態は四角形で、規模は東西5.2m、南北検出長4.9m、深さ15～48cm



第17図 SB4測量図



第18図 SB4出土遺物実測図

を測る。屋内施設には、炉址と柱穴がある。炉址は住居の中央にあり、平面形態は丸みをもった長方形を呈し、規模は長軸73cm、短軸40cm、深さ16cmを測る。柱穴はP 1・2、P 3～6が各々組になり、P 7・8は組み合うものがない。規模は、直径20～32cm、深さ8～26cmを測る。なお、床面からは土坑1基（K 1）を検出しているが、住居址に伴うものかは分からない。K 1は長軸80cm、短軸39cm、深さ23cmを測る。

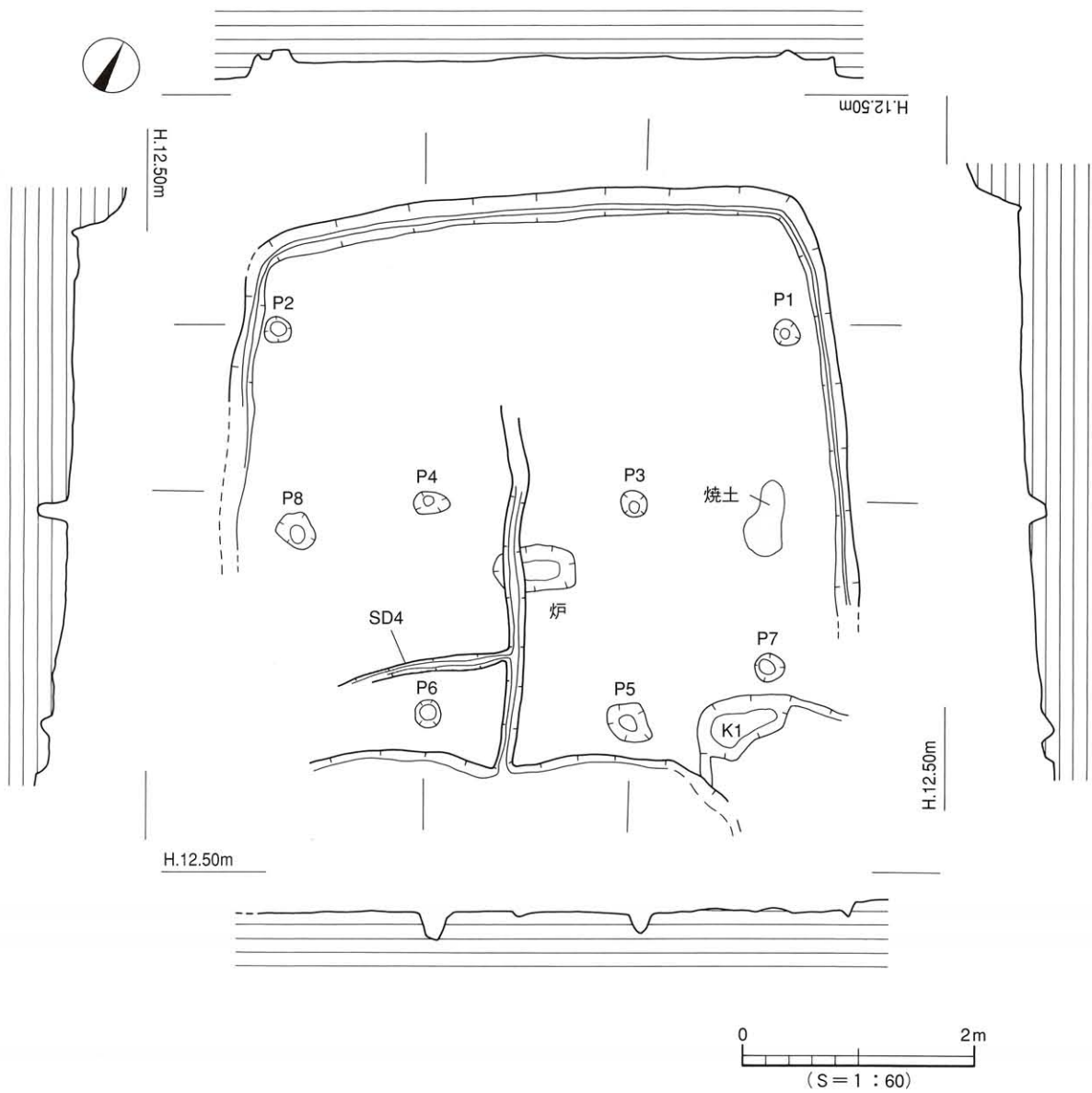
遺物は少量の土師器と弥生土器がある。

出土遺物（第20図31～54）

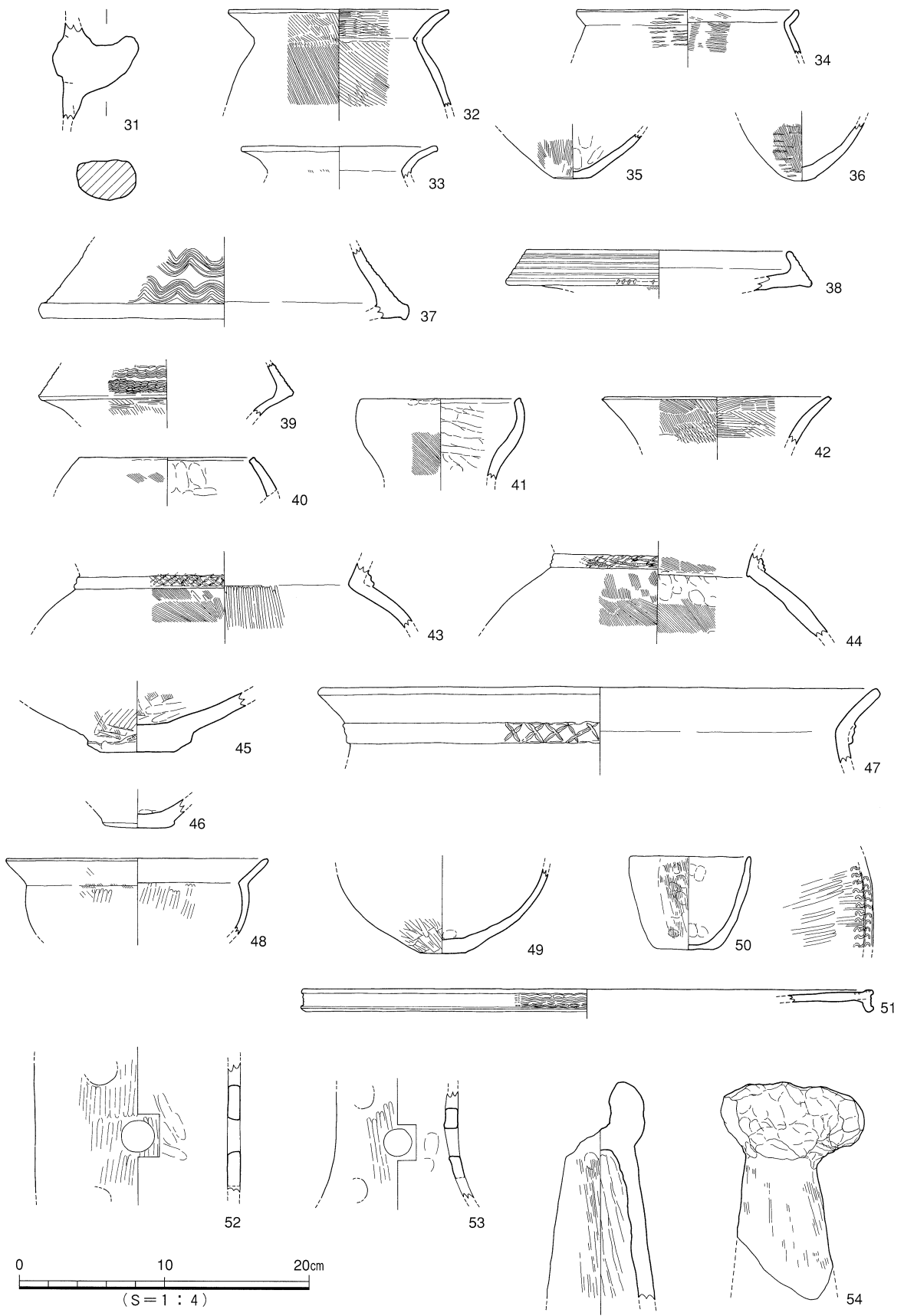
31は土師器の甑で、把手部になる。32～54は弥生土器である。32～36は甕形土器で、34・36はタタキ痕がみられる。なお、36は鉢形土器ともみられる。37～46は壺形土器で、37～41は複合口縁壺になる。47～50は鉢形土器である。51～53は器台形土器で、51は受部端面には波状文、受部上面には半截竹管文をもつ。54は支脚形土器で、受部が翼状になる。

時期：切り合い関係と土師器甑の出土から、古墳時代後期6世紀とする。

SB6（第15図、図版6・7）



第19図 SB5測量図



第20図 SB5出土遺物実測図

調査地の北西部、X 2 Y 3 にあり、SB 5・SK 3 に切られ、SB 2・7 を切り、住居址の南側は未検出である。平面形態は四角形で、規模は東西検出長2.4m、南北検出長2.0m、深さ7～9 cmを測る。床面では、土坑1基と小穴3基を検出している（詳細不明）が、本住居に伴うものかは分からない。

遺物には、弥生土器が少量あり、うち1点は完形にちかい遺存状況である。

出土遺物（第21図55～60）

55・56は壺形土器、57・58は鉢形土器、59は高坏形土器、60はミニチュア品になる。

時期：出土遺物から、弥生時代終末期とする。

SB 7（第15図）

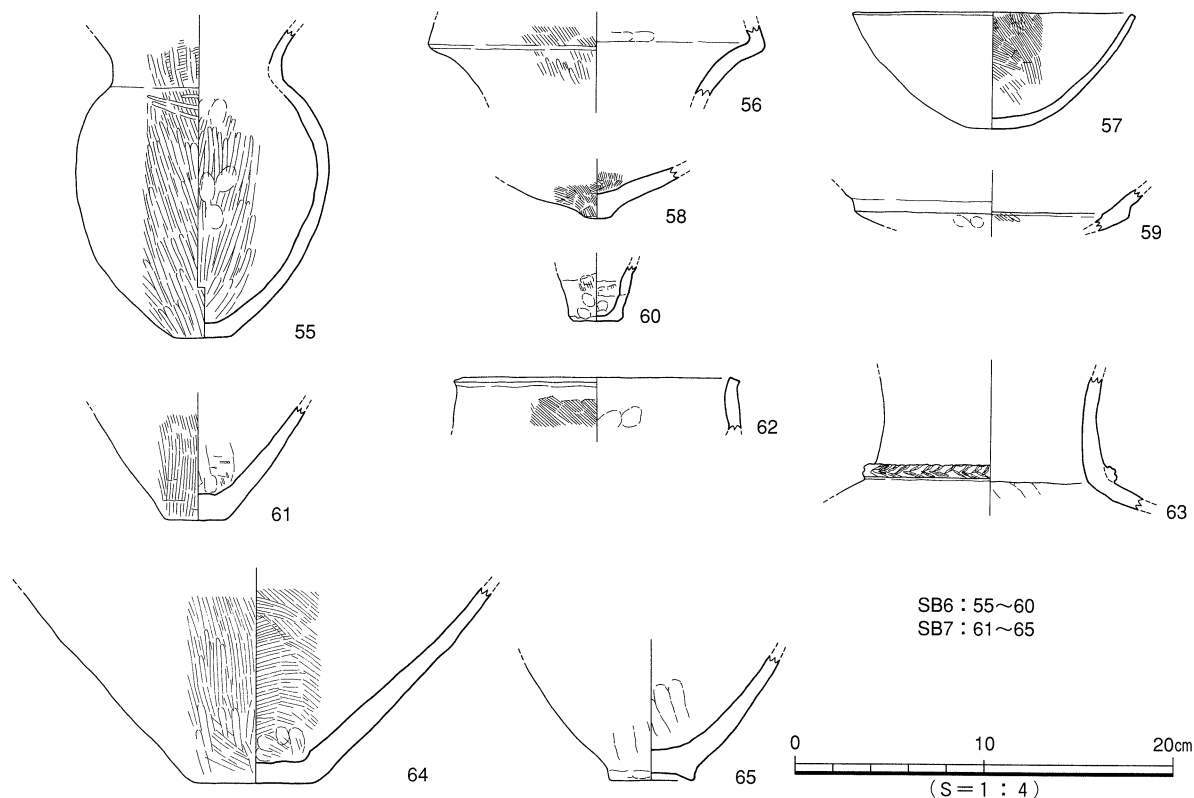
調査地の北西部、X 2 Y 3 にあり、SB 2 に切られ、SB 1 を切り、住居址の南側と西側は未検出である。平面形態は四角形で、規模は東西検出長2.6m、南北検出長1.7m、深さ19～25cmを測る。床面では、焼土と小穴3基を検出した。焼土は58cm×99cmの範囲で、小穴3基は直径20cm代のものである。

遺物には、弥生土器が少量ある。

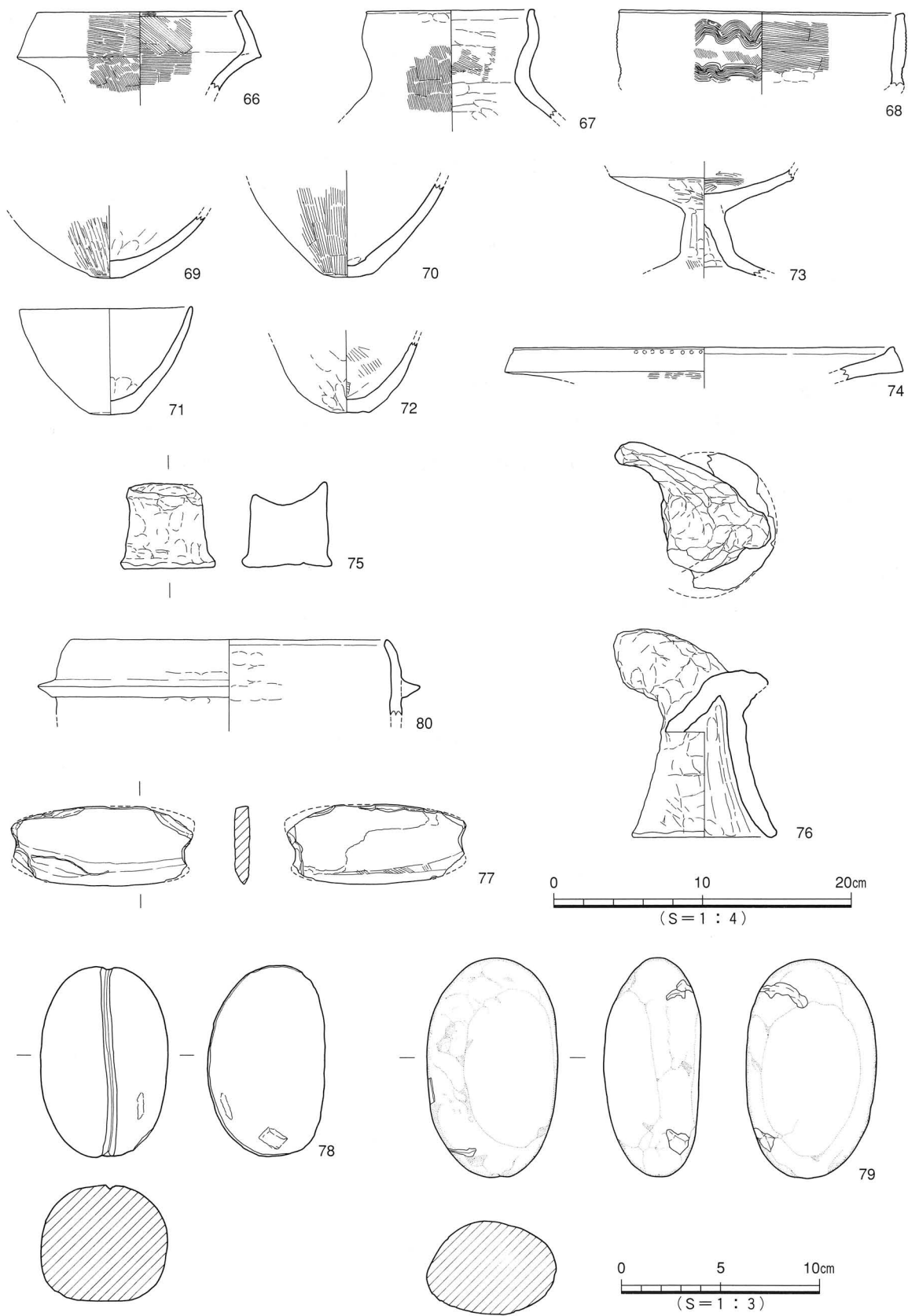
出土遺物（第21図61～65）

61は甕形土器、62～64は壺形土器、65は甕ないし鉢形土器になる。

時期：出土遺物から、弥生時代終末期とする。



第21図 SB6・7出土遺物実測図



第22図 SB8出土遺物実測図

SB 8 (第15図)

調査地の中央やや北、X 3 Y 4 にあり、北側の壁体を検出したにとどまる。平面形態は四角形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長4.0m、深さ11~16cmを測る。北西部に小さく突出する部分があるが、本住居に伴うものかは分からない。

遺物には、弥生土器、石器、中世土師器が少量ある。

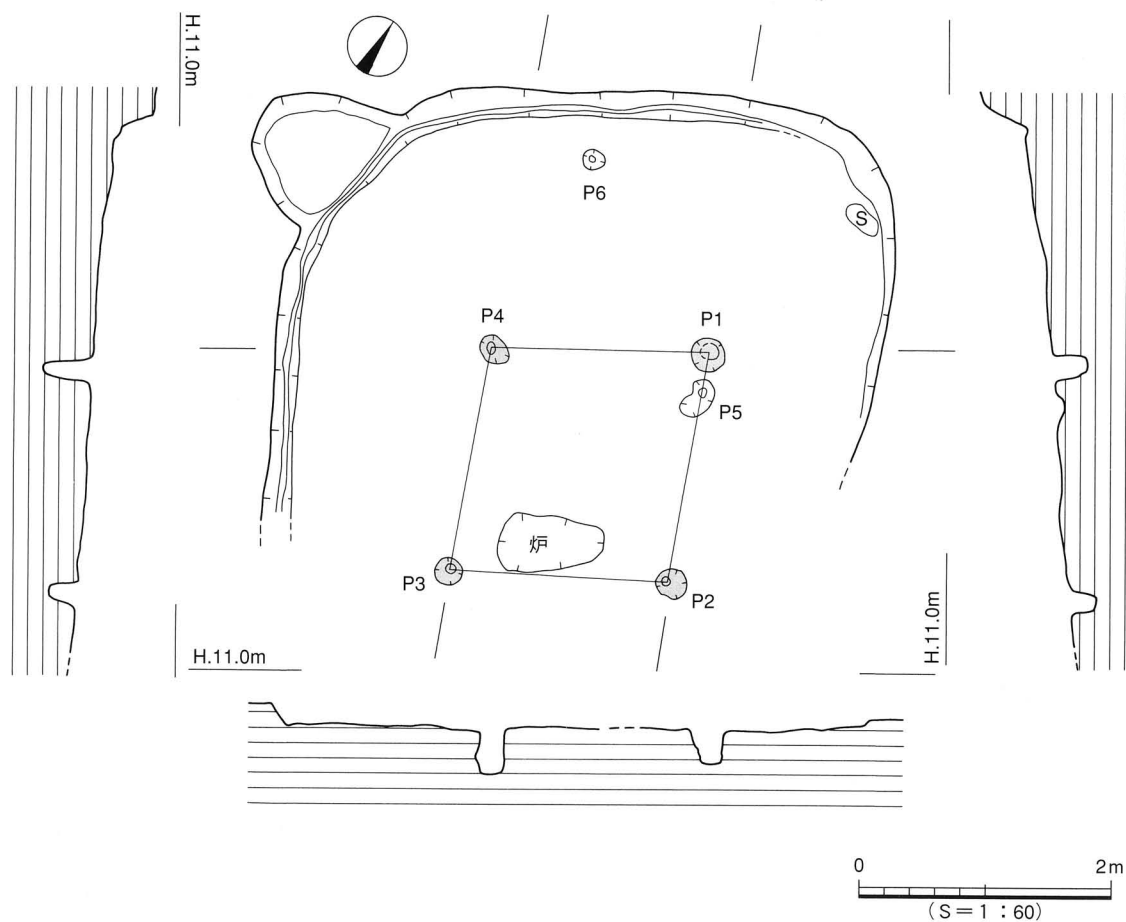
出土遺物 (第22図66~80、図版 9)

66~70は壺形土器、71・72は鉢形土器、73は高坏形土器、74は器台形土器、75・76は支脚形土器である。77~79は石器である。77は石庖丁で、結晶片岩、55g。78は石錘で、497g。79は磨石で、500g。80は中世土師器で、羽釜になる。

時期：中世土師器は後世の混入品で、他の出土品から、弥生時代終末期とする。

SB 9 (第23図、図版 7)

調査地の中央やや北、X 2 ~ 3 Y 5 にあり、住居址の南側は未検出である。平面形態は四角形で、規模は東西4.7m、南北検出長3.8m、深さ15cmを測る。住居の西隅には、東西1.0m、南北1.08mの三角形の張り出し部をもつ。屋内施設には、炉址と柱穴 5 基がある。炉址は、平面形態が概ね長方形



第23図 SB9測量図

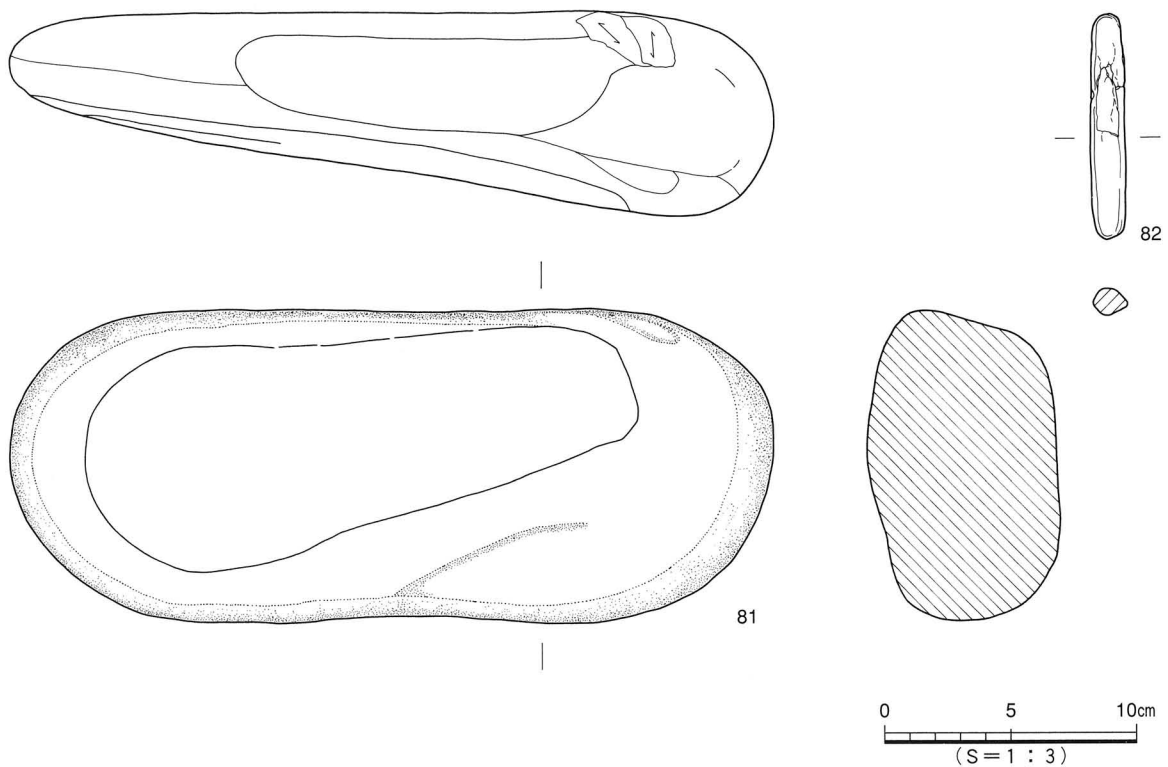
を呈し、長軸82cm、短軸46cmを測る。主柱穴はP 1～4で、P 5は支柱になる。規模は直径20～28cm、深さ20～35cmを測る。床面からは、小溝1条(D 1)と小穴1基(P 6)を検出したが、性格は分からない。なお、P 6付近からは、小型の土器棺(2号土器棺)が出土しているが、本住居との切り合い関係は分からない。

遺物は、図化できるものは石器2点である。

出土遺物(第24図81・82)

81は砥石で、4,350g。82は用途不明石器で、紅簾片岩、18g。

時期：土師器と須恵器の出土がないことと、他の遺構との関係から、弥生時代終末期としておく。



第24図 SB9出土遺物実測図

(2) 溝

溝は、4条を検出した。

S D 1(第15図、図版7)

調査地の南部にあり、西(X 4 Y 2)から南東(X 5 Y 5)に向けて走る。後述するS D 2とは、調査区の西端で合流する。また、溝の東西中央付近では南に分岐する溝をもつ。S D 1の検出長は36m、深さは8～30cmを測る。断面形態は逆台形状である。遺物には、弥生土器と石器が多く出土しているが、破片資料で占められている。

出土遺物

土器(第25～28図83～146、図版9)

甕形土器 (83~93) 83は大型品、84~88は中型品で、口縁部は「く」字状を呈し、87・88は折り曲がり強い。89は畿内地方の甕形土器に形態と調整が似る。90~93は胴・底部片で、底部は平底になる。

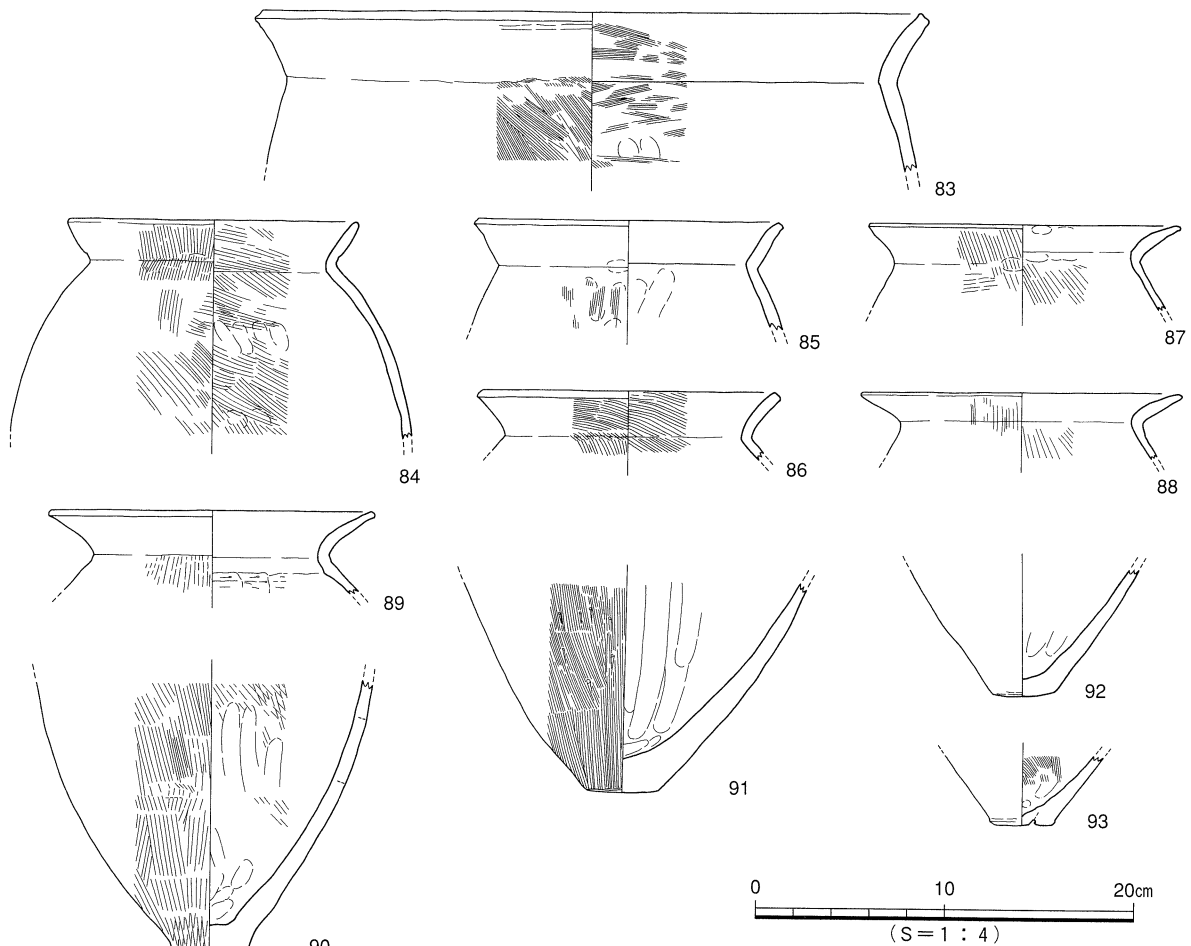
壺形土器 (94~112) 94~104は複合口縁壺で、一・二次口縁の接合部が94~99は面をなし、100~104は稜をなす。105は広口壺で、口縁端面に斜格子目文をもつ。106・107は頸部片。108は口縁端部が下垂する。109~112は底部で、109は大型品、110~112は中型品で、広い平底をもつ。

鉢形土器 (113~124) 113~115は大型品で、115は口縁端部が上方に立ち上がる。116・117は口縁部が折り曲がり、118は直口口縁になる。119は二重口縁になり、器壁は薄く、色調は白く、山陰地方の特徴をもつ。120は直口口縁になるものの底部。121・122は台付鉢になる。123は低脚に、椀がつく。近畿地方の形態に似る。124は脚部片で、円孔をもつ。

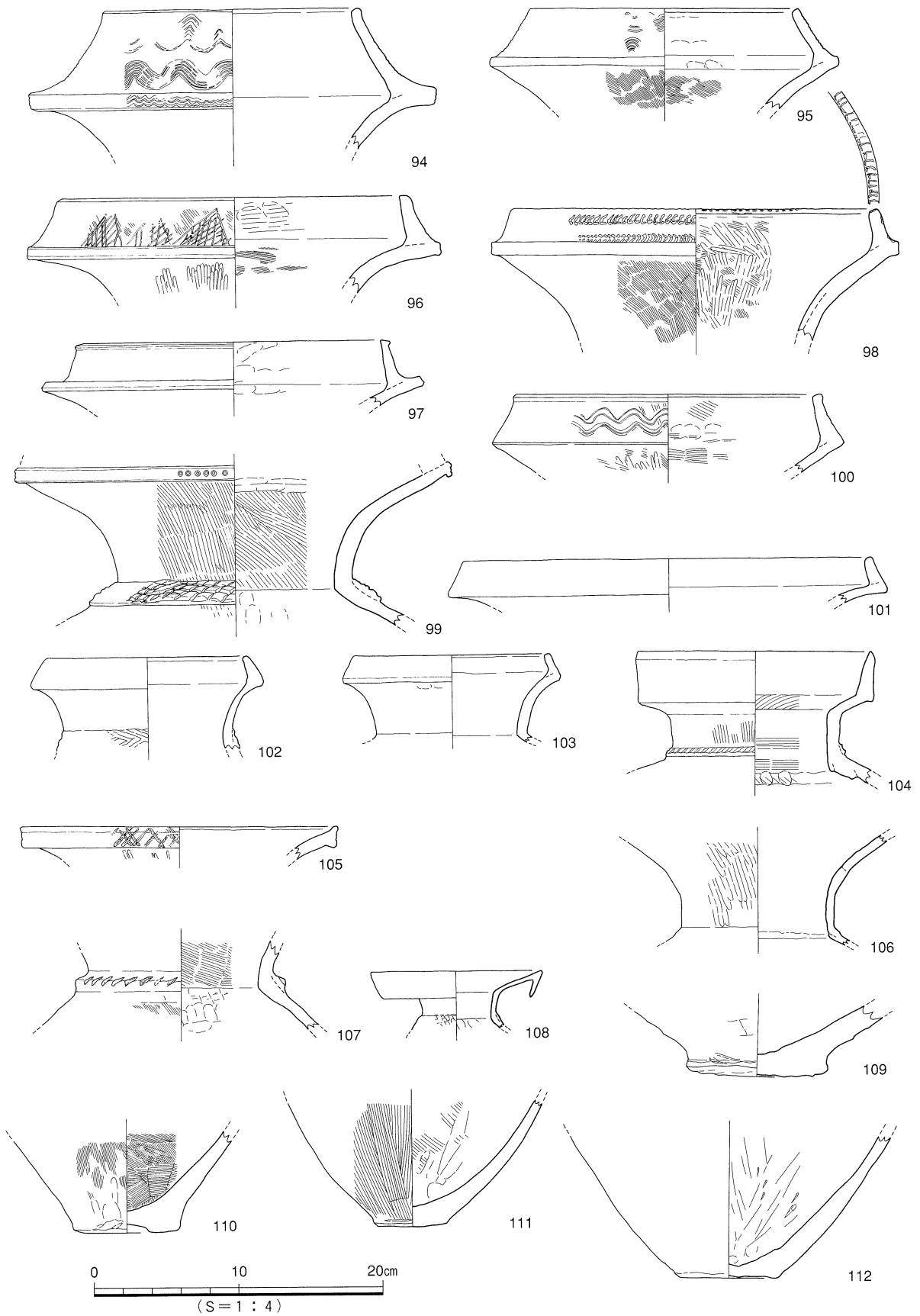
高坏形土器 (125~137) 125は坏部、126~128は脚部になる。127・128は円孔をもつ。129~137は小型品で、129~132は低脚で、柱部から裾部へと緩やかに開く。133・134は柱部が細いもので、135~137は低脚で、柱部と裾部との境が明瞭なものである。

器台形土器 (138~141) 138~140は受部、141は柱部になる。

支脚形土器 (142~146) 142・143は台形状で、受部が傾斜する。144~146は受部に角状の突起をもつものである。

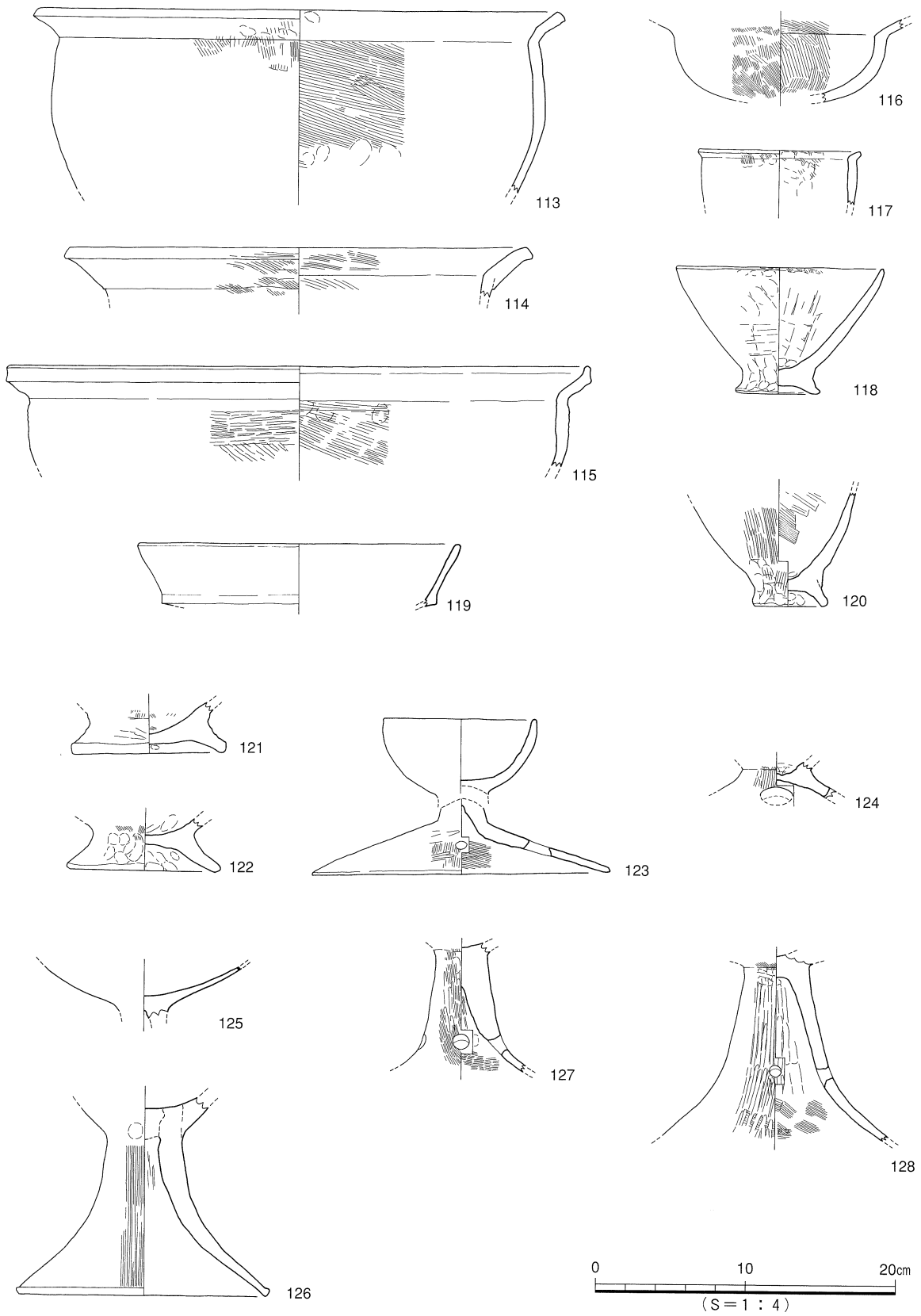


第25図 SD1出土遺物実測図(1)

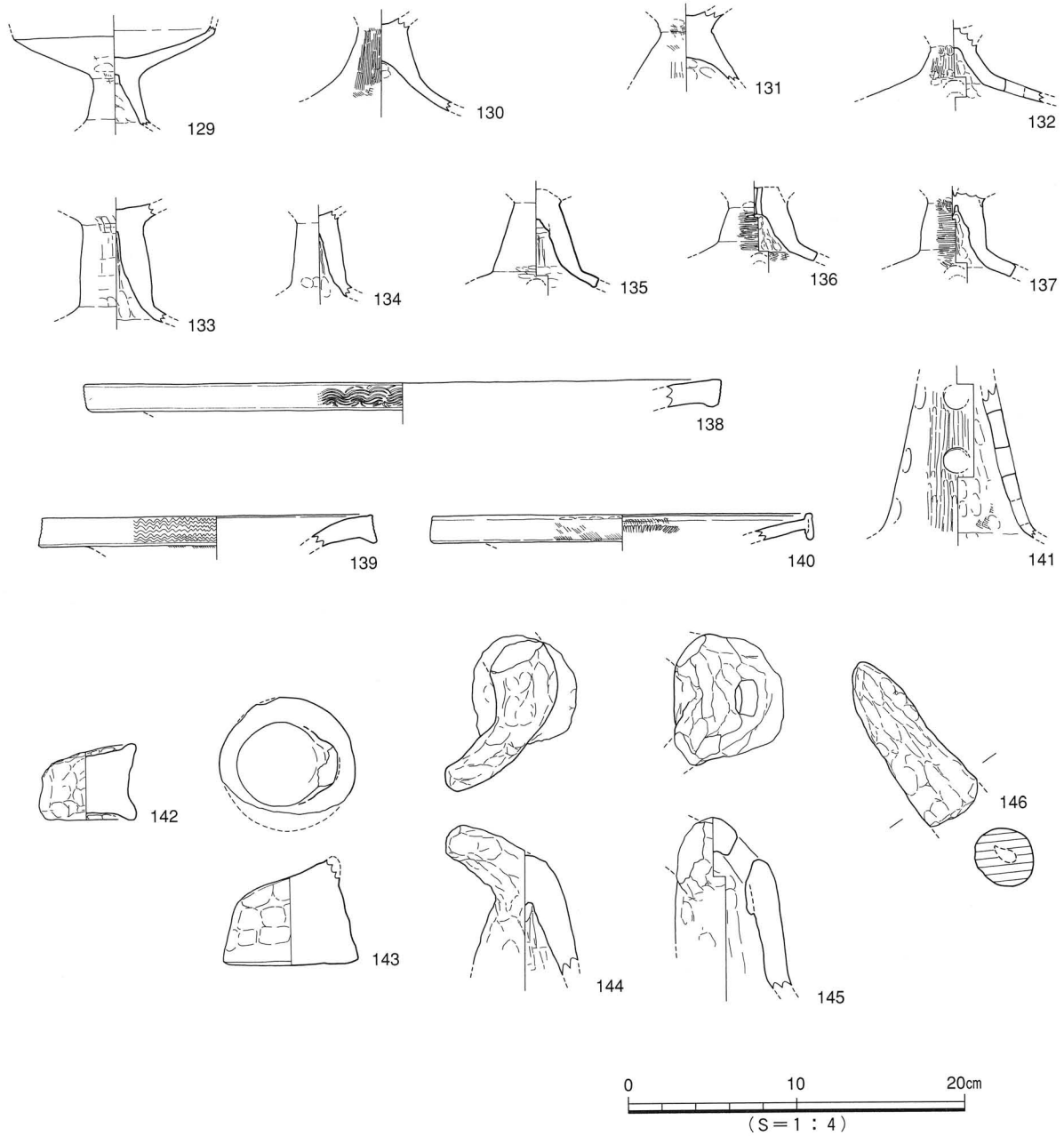


第26図 SD1出土遺物実測図(2)

遺構と遺物



第27図 SD1出土遺物実測図(3)



第28図 SD1出土遺物実測図(4)

石器 (第29図147~152、図版9)

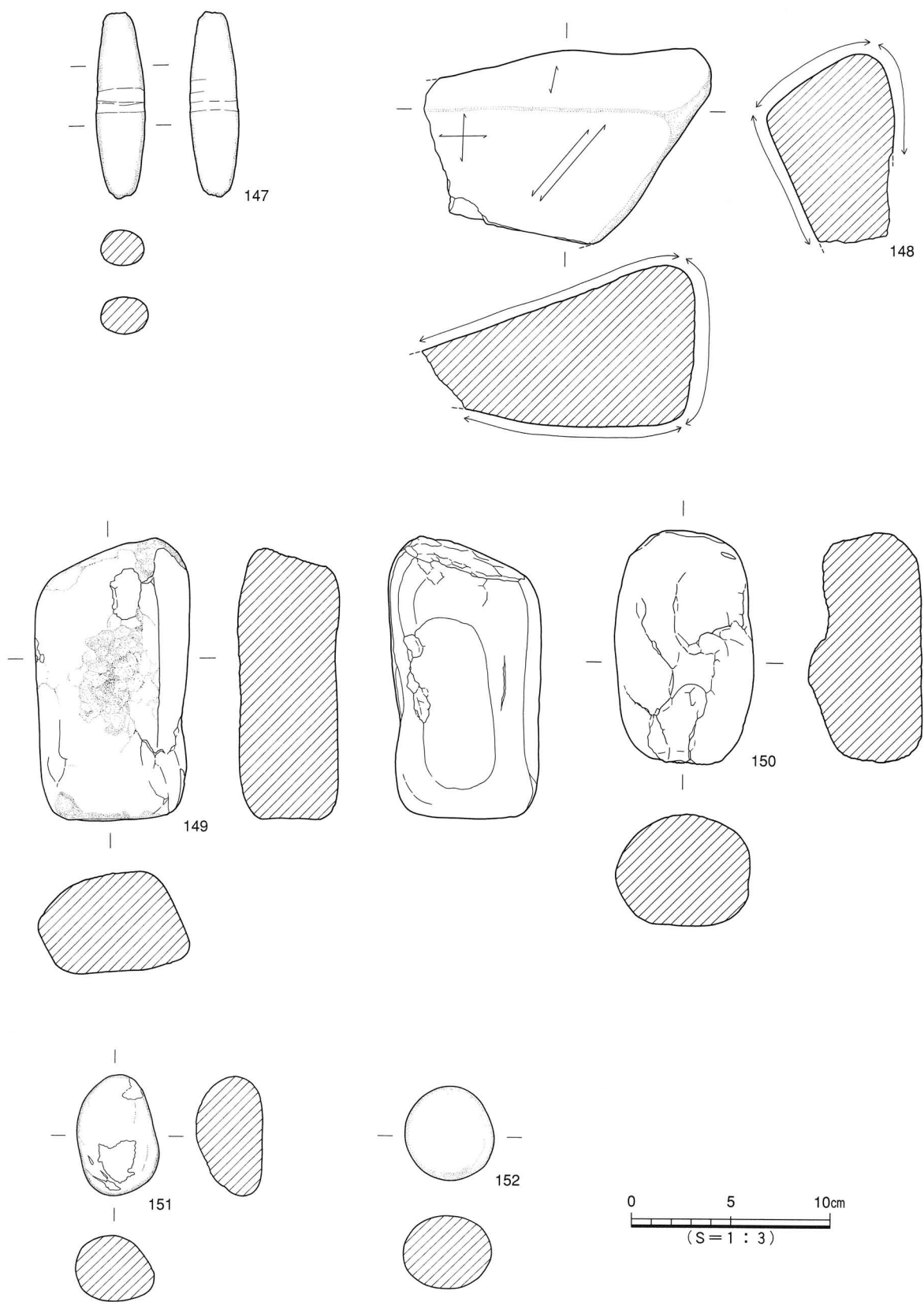
石錘 (147) 棒状で、長軸の中程に浅い溝をもつ、57.2g。

砥石 (148) 台形状を呈し、3面に砥面をもつ。砂岩。

敲打石 (149・150) 149・150は掌大で、149は1,000g、150は花崗岩、685g。

磨石 (151・152) 151は112g、152は丸味をもち、107g。

時期：出土遺物から、弥生時代終末期とする。



第29図 SD1出土遺物実測図(5)

S D 2 (第15図、図版7)

調査地の中央部を西(X4 Y2)から東(X4 Y6)に向けて走る。溝の東西中央付近にある土坑(K1)からは、3条に分岐し、調査区の東端で合流する。規模は、南を走るもので検出長31m、深さ9~21cmを測る。断面形態は逆台形状である。遺物は、弥生土器と石器が出土している。溝は広範囲に広がっているため、出土遺物の掲載は、溝の西側からグリッドごとに行なう。

出土遺物

X4 Y2 出土品 (第30・31図153~172、図版9)

土器：153~157は甕形土器で、157の底部にはタタキ痕がみられる。158~163は壺形土器で、163は二重口縁壺で山陰地方に形態が似る。164は鉢形土器、165~167は支脚形土器である。168は土錘で、管状になる。重さ117g。

石器：169・170は石錘で、長軸に幅広い溝がめぐる。169は373g、170は483.3g。171は砥石で、石英粗面岩。172は扁平な柱状の用途不明品である。

X3 Y2~X3 Y3 出土品 (第32図173~181、図版10)

土器：173・174は壺形土器で、複合口縁壺になる。175~177は鉢形土器で、178・179は支脚形土器である。

石器：180・181は石庖丁で、刃部は直線、背部は弧をえがき、両側部は抉られる。ほぼ完形品で、緑色片岩、180は61.3g、181は54.4g。

X4 Y3 出土品 (第33・34図182~220、図版9)

土器：182~189は甕形土器で、182~184は在地の形状をもち、185~187は外来の要素をもつ。185~187は胴部内面にケズリ痕をもち、185は胎土が異なり、186は白く器壁が薄い。187は口縁部が上方にたちあがる。188・189は底部で、189は曖昧な平底で、タタキ痕をもつ。190~199は壺形土器で、190~194は複合口縁になる。200~208は鉢形土器、209~212は高坏形土器、213・214は支脚形土器である。

219・220は須恵器で、219は高台をもつ坏、220は壺になる。

石器：215・216は石庖丁の未製品片で、緑色片岩。217は石錘で、2分の1遺存品、石英粗面岩、196.5g。218は用途不明品で、緑色片岩、88.3g。

X4 Y4 出土品 (第35・36図221~239、図版10)

土器：221・222は甕形土器で、222は胴部上半にタタキ痕をもつ。223・224は壺形土器で、223は口縁端部が下垂する。225~228は高坏形土器で、225・226は坏部、227・228は脚部になる。229は器台形土器の口縁部片である。230は有孔土器で、底部に焼成前の穿孔をもつ。231~235は支脚形土器で、231は受部の2分の1ほどが「U」字状に傾斜し、232~235は受部が角状になる。236は袋状の土製品で、上部と側面の一方に空き口をもつ。

石器：237は石庖丁の未製品片で、緑色片岩。238は石器素材で、緑色片岩。239は砥石で、砂岩。

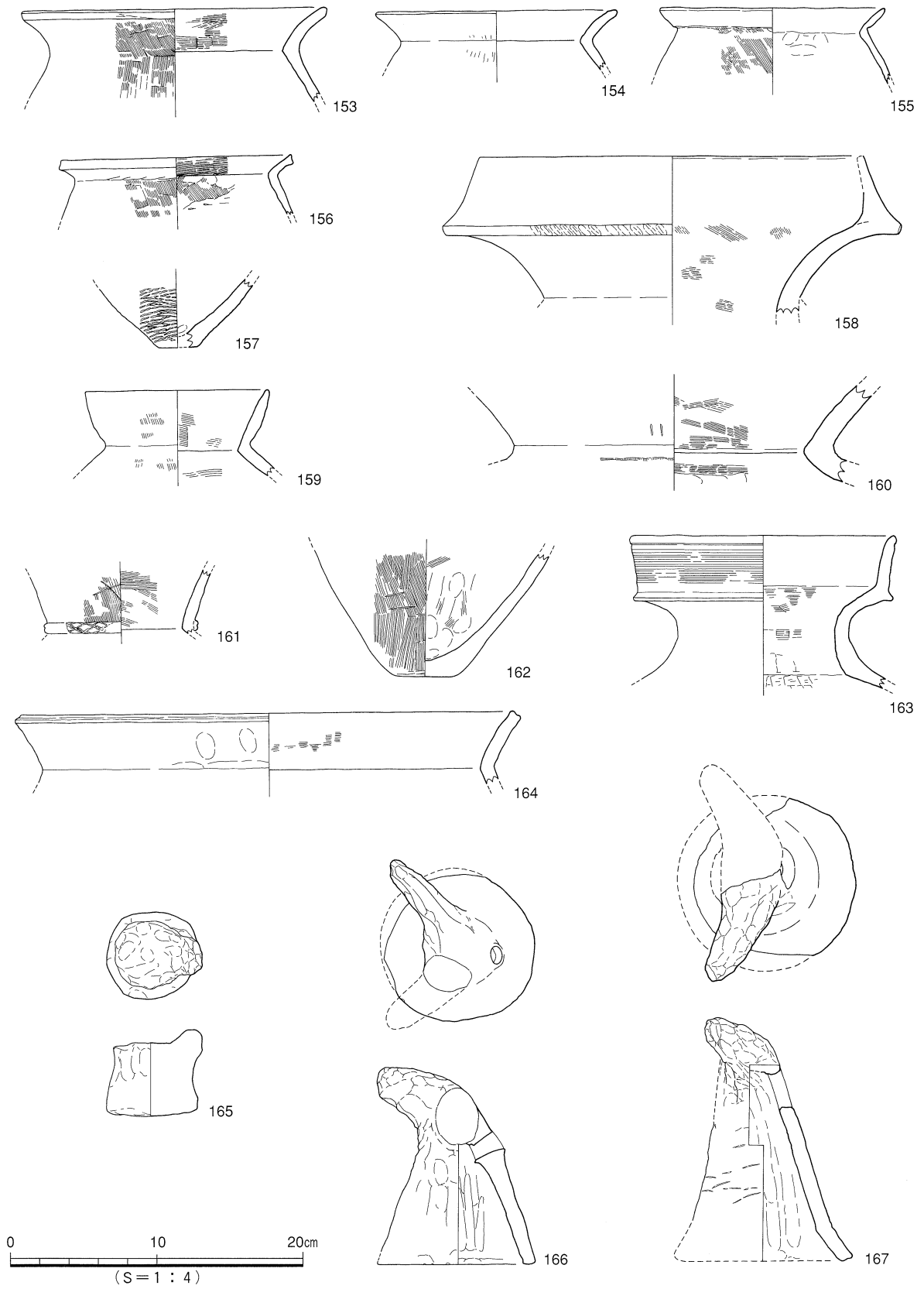
X4 Y5 出土品 (第36図240~244)

土器：240は鉢形土器、241・242は壺形土器である。241は一次口縁端部が下垂している。

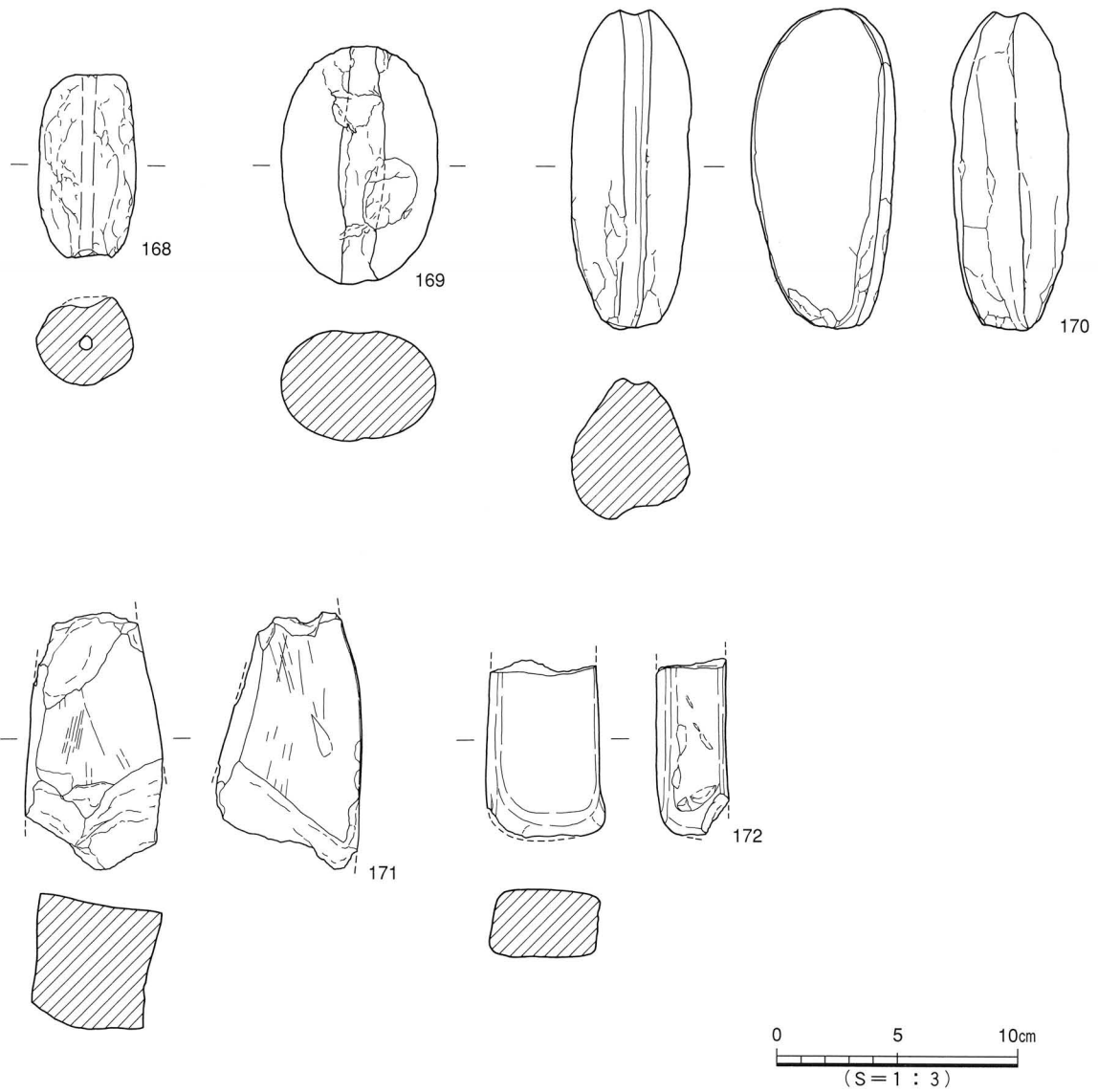
石器：243・244は石庖丁で、緑色片岩。243は製品、58g、244は欠損品で、両側部は抉られる。

X4 Y6 出土品 (第36図245・246)

土器：245は器台形土器で、脚端部片。246は器種・器形が不明な土製品で、図の上・下部は平らな



第30図 SD2(X4Y2)出土遺物実測図(1)



第31図 SD2(X4Y2)出土遺物実測図(2)

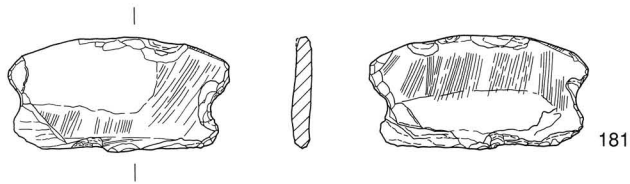
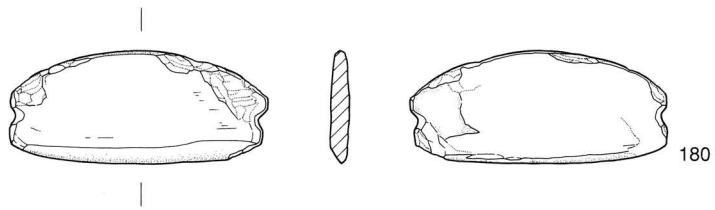
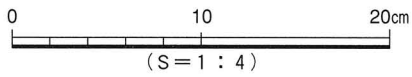
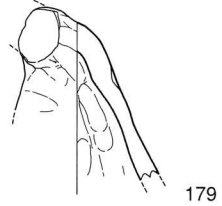
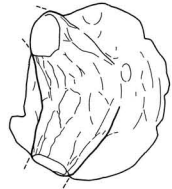
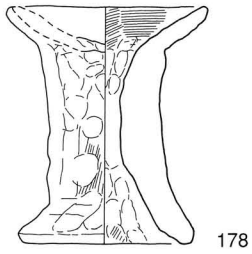
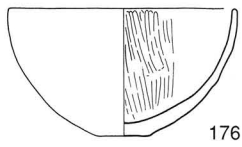
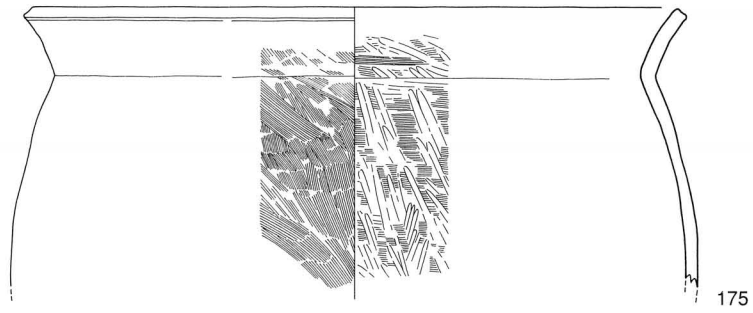
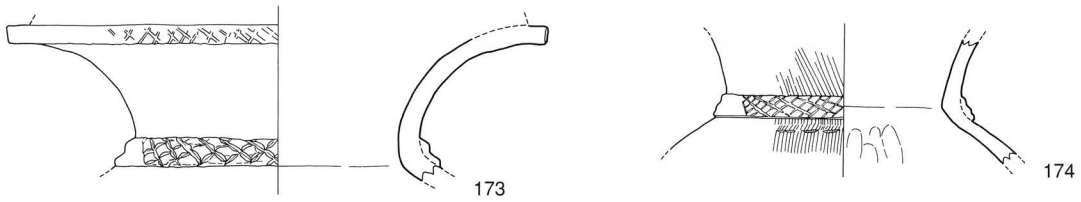
面をもつ。

出土地点不明の出土品 (第37図247~255)

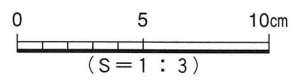
土器：247~249は甕形土器で、249は曖昧な平底をもつ。250・251は壺形土器、252・253は鉢形土器である。252は二重口縁で、山陰地方の形状に似る。254は器台形土器、255は支脚形土器である。255は図の下部分が擬口縁になっており、受部の成形手法が看取できる。

時期：出土遺物から、弥生時代終末~古墳時代初頭とする。

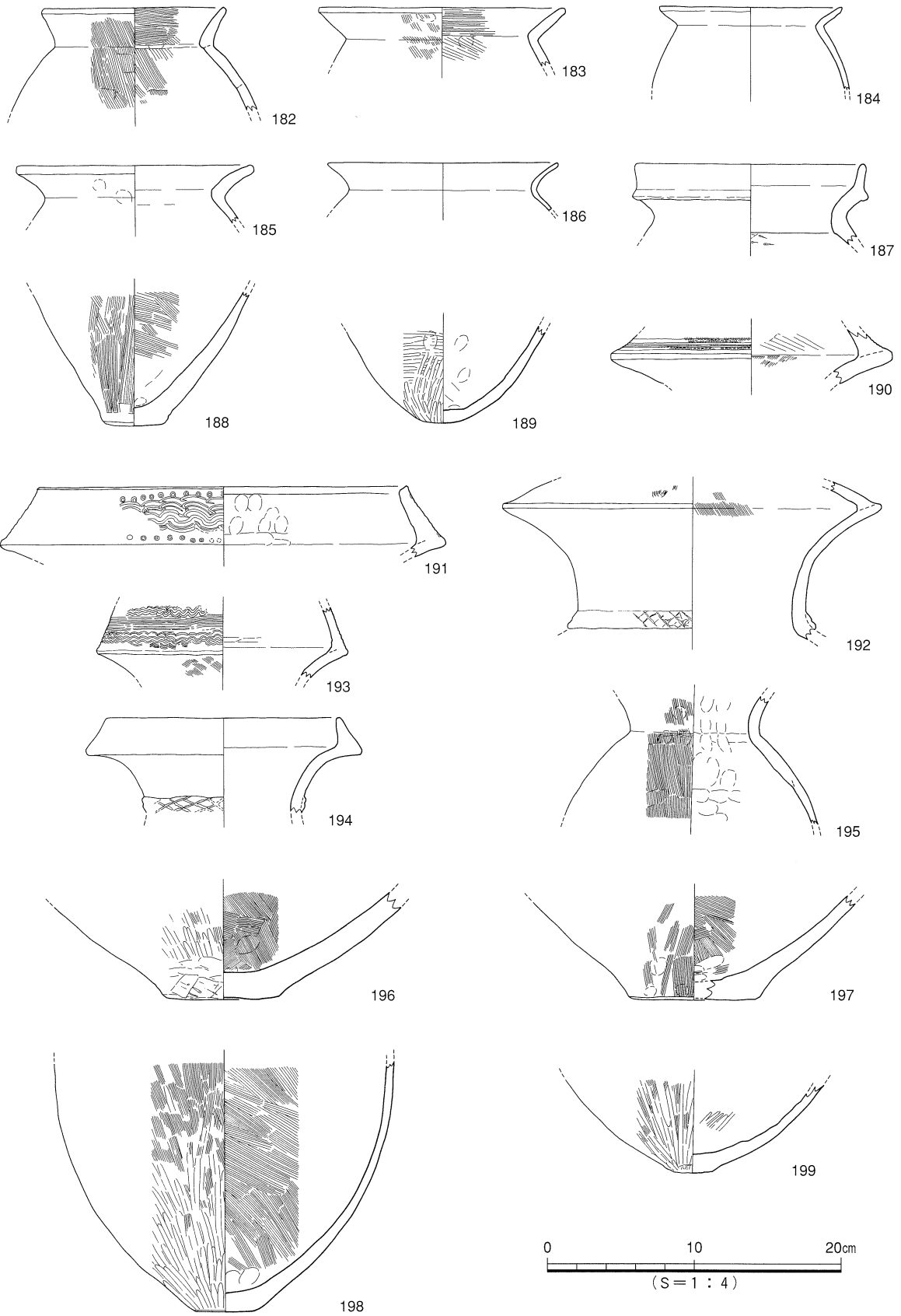
遺構と遺物



X3Y2 : 173 · 174 · 178
 X3Y3 : 175 · 176 · 177
 179~181

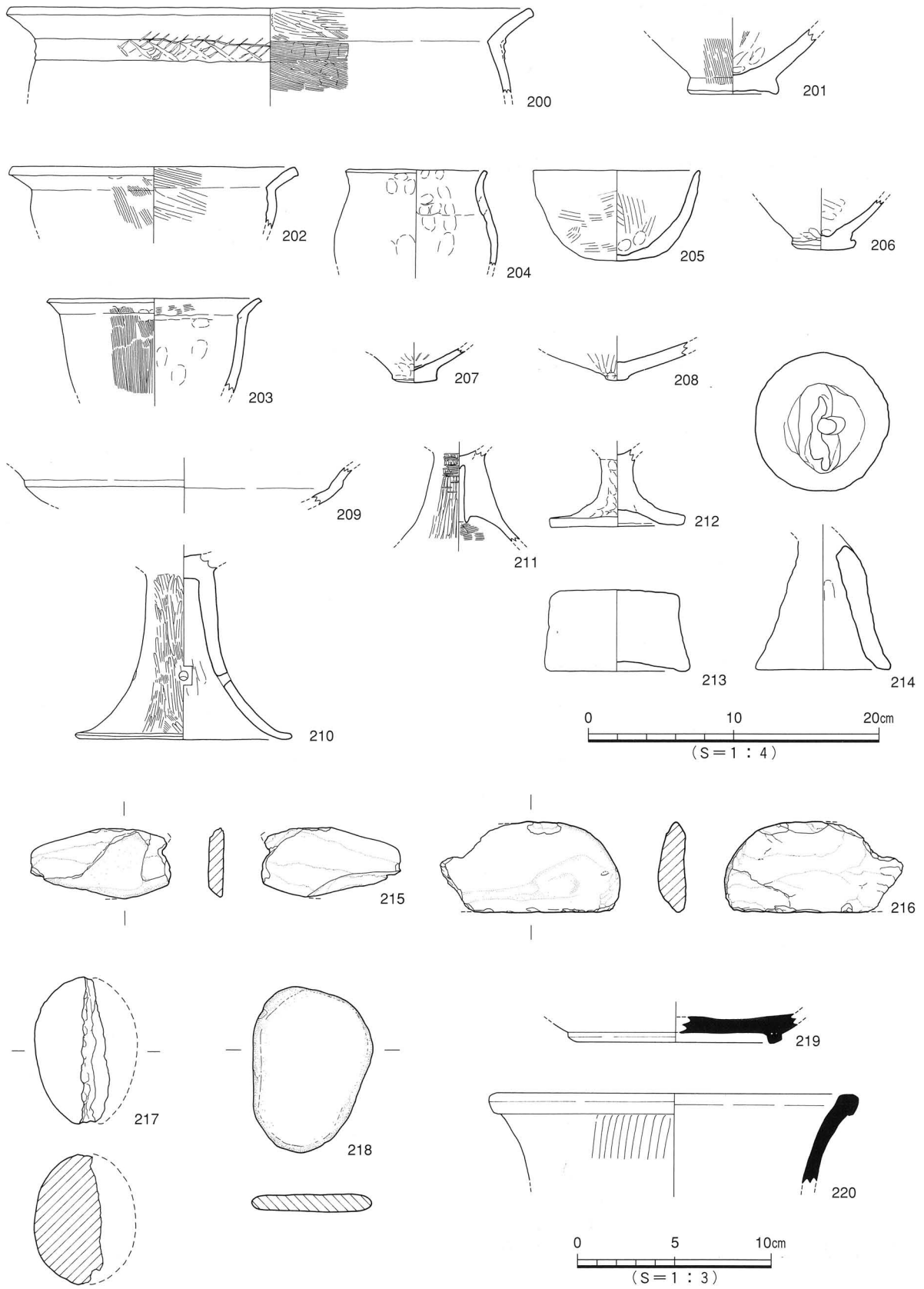


第32図 SD2(X3Y2・X3Y3)出土遺物実測図(3)

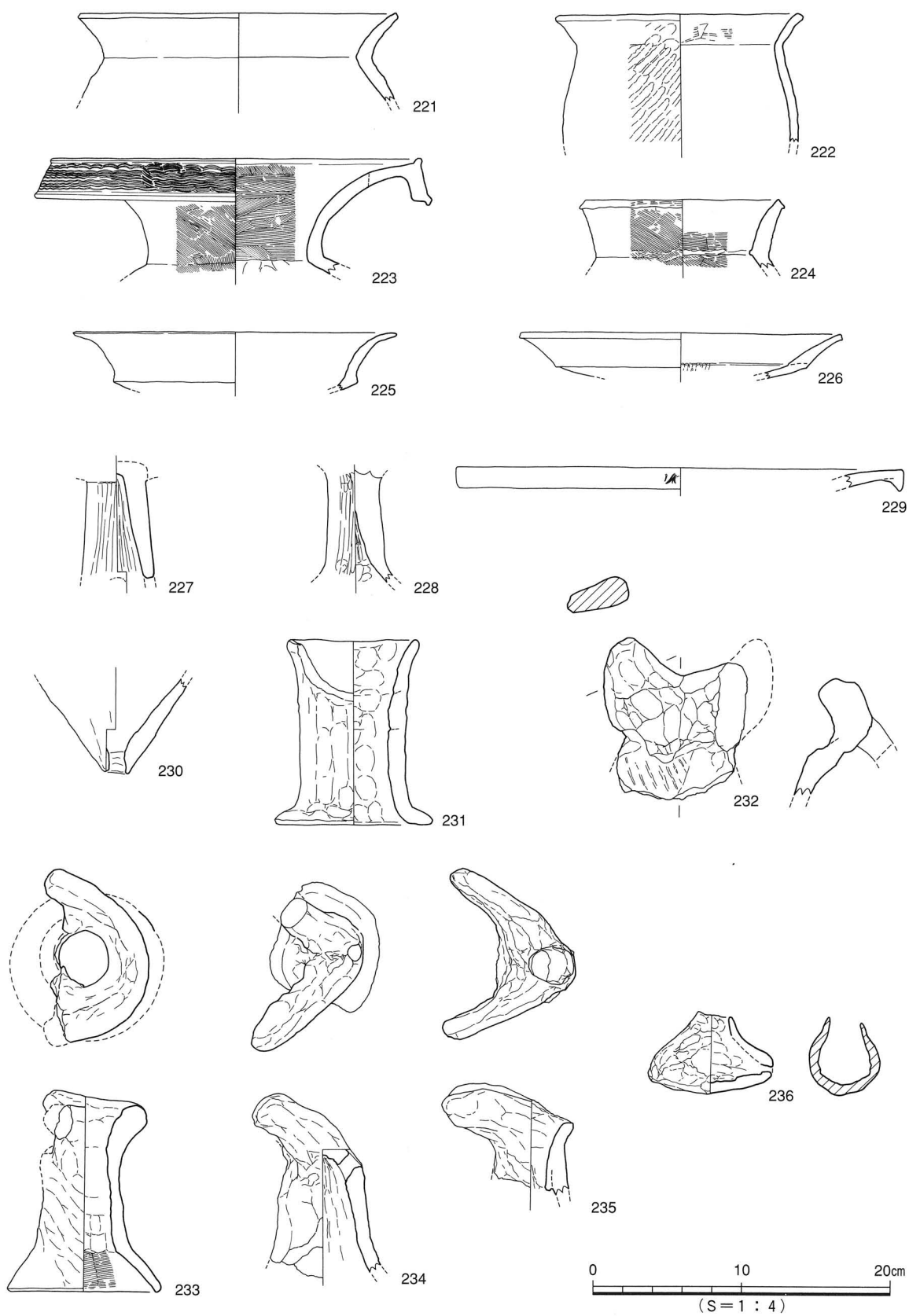


第33図 SD2(X4Y3)出土遺物実測図(4)

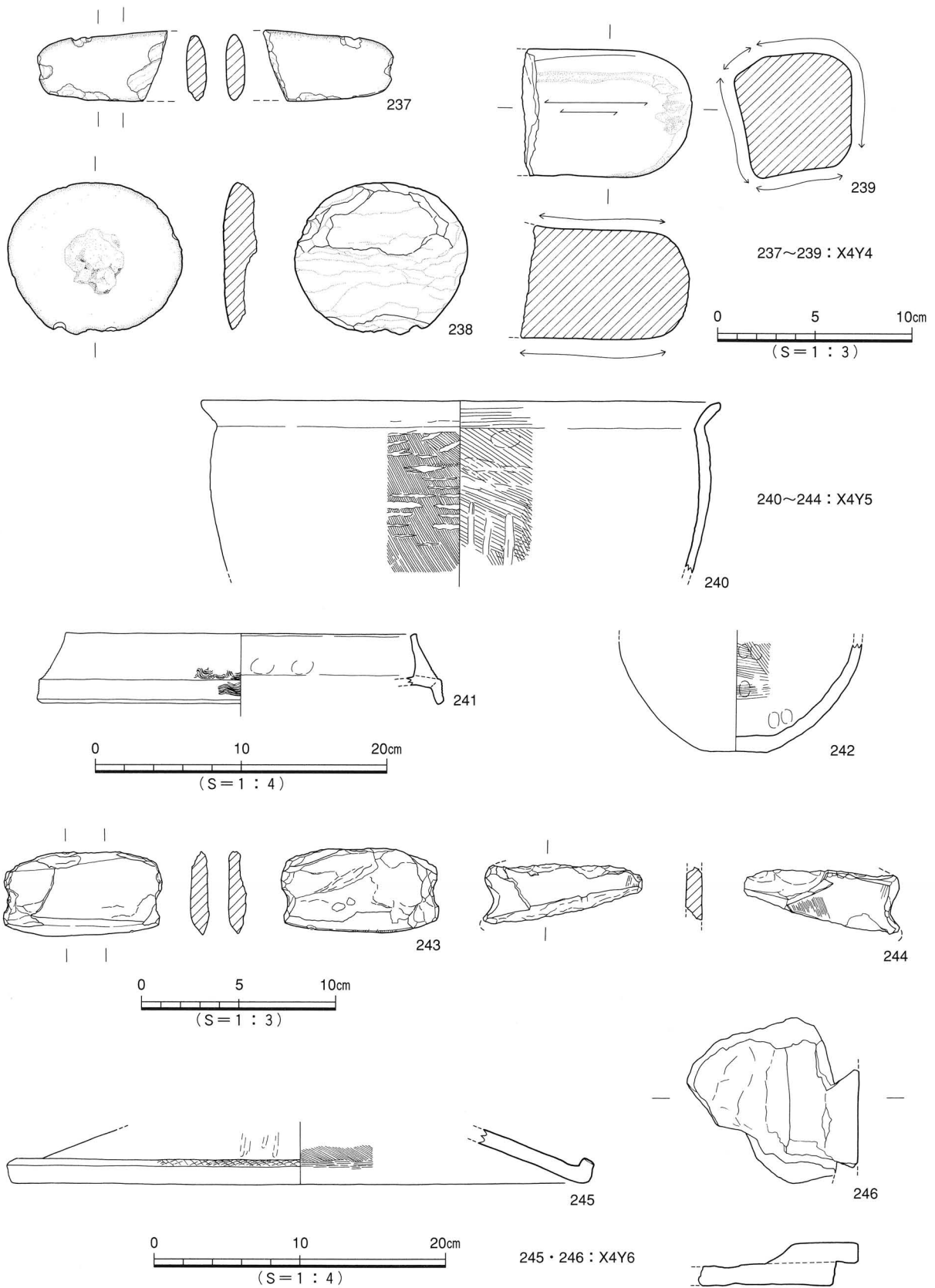
遺構と遺物



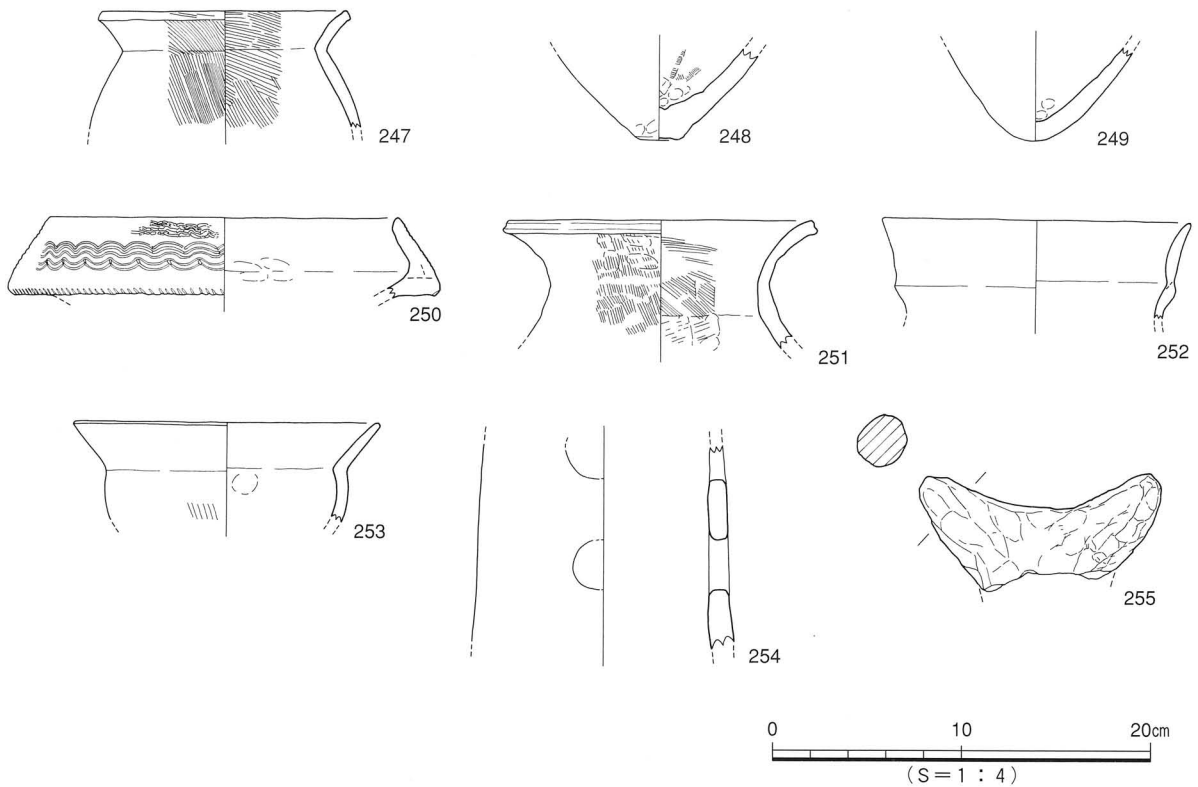
第34図 SD2(X4Y3)出土遺物実測図(5)



第35図 SD2(X4Y4)出土遺物実測図(6)



第36図 SD2(X4Y4・X4Y5・X4Y6)出土遺物実測図(7)



第37図 SD2(グリッド不明)出土遺物実測図(8)

SD3 (第15図)

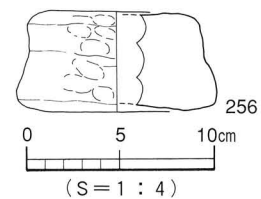
調査地の中央やや東、SD2の北(X3Y5)にある。SD2に合流する溝の可能性をもつ。北西から南東に向けて走るが、溝の東側では南北に分岐する溝をもつ。規模は、検出長7m、深さ4~15cmを測る。

遺物は、弥生土器が少量あり、図化できるものは1点である。

出土遺物 (第38図256)

256は支脚形土器で、台形状を呈している。

時期：出土遺物から、弥生時代終末期とする。



第38図 SD3出土遺物実測図

SD4 (第15図)

調査地の北西部、X2Y4にあり、SB5を切る。北西から南東に向けて走るが、溝の東側では南西に分岐する溝をもつ。規模は、南北方位のもので検出長3m、深さ3~8cmを測る。

遺物は出土していない。

時期：SB5を切ることから、古墳時代後期以降になる。

(3) 墓

墓は、土器棺2を検出した。

1号土器棺 (第15・39図)

調査地の中央北、X3Y4にある。合わせ口の土器棺で、大部分は後世に削り取られている。墓坑は、棺よりひとまわり大きいもので、平面形態は楕円形、規模は長軸65cm、短軸45cm、深さ19cmである。土器棺は、棺身が大型壺（器高60cm程）で口頸部を打ち欠いたもの、棺蓋が器種は不明で胴下半部からなるものである（現存しない）。棺身の大型壺は、複合口縁壺とみられ、胴部にタタキ痕をもつものである。西石井荒神堂遺跡TP2出土の大型壺に形態が似ているものであった。

時期：棺身の大型壺の特徴から、弥生時代終末期とする。

2号土器棺 (第15図)

調査地の中央北、SB9（X2～3Y5）の北壁側のP6付近にある。合わせ口の土器棺で、棺身が中型甕（器高30cm程）で、棺蓋が器種は不明で胴下半部からなるものである（現存しない）。土器棺は、立っている状況で出土した。棺身の中型甕は、3号土器群の甕形土器第42図280に器形と調整が似ているものであった。

時期：棺身の中型甕の特徴から、弥生時代終末期とする。

(4) 土坑 (第15図)

土坑は、8基を検出した。

SK1

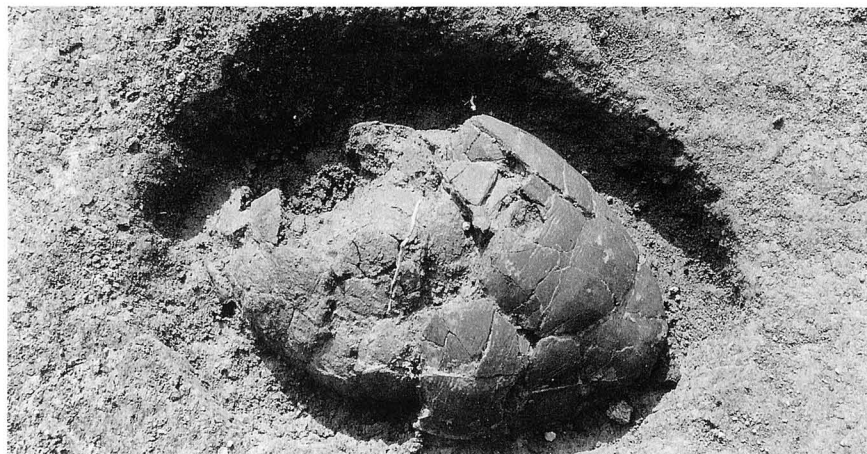
調査地の北部、X1Y4にあり、SK2に切られ、SB4を切る。平面形態は台形状を呈し、規模は長軸2m、短軸1m、深さ22cmを測る。床面積は2m²である。遺物の出土はない。

時期：SB4を切ることから、古墳時代後期以降になる。

SK2

調査地の北部、X1Y4にあり、SK1を切る。平面形態は三角形を呈し、規模は長軸0.85m、短軸0.42m、深さ17cmを測る。床面積は0.3m²である。遺物の出土はない。

時期：SK1を切ることから、古墳時代後期以降になる。



第39図 1号土器棺 (北より)

S K 3

調査地の北西部、X 2 Y 3 にあり、S B 5・6 を切る。平面形態は三角形を呈し、規模は長軸1.1m、短軸0.78m、深さ27cmを測る。床面積は0.4m²である。遺物の出土はない。

時期：S B 5 を切ることから、古墳時代後期以降になる。

S K 4

調査地の中央部、X 3 Y 4 にある。平面形態は円形で、規模は直径0.36m、深さ12cmを測る。床面積は0.1m²である。遺物の出土はない。

時期：時期を判断する資料がなく、時期は特定できない。

S K 5

調査地の中央部、X 3 Y 4 にある。平面形態は円形で、規模は直径0.50m、深さ7cmを測る。床面積は0.19m²である。遺物の出土はない。

時期：時期を判断する資料がなく、時期は特定できない。

S K 6

調査地の中央部、S K 5 (X 3 Y 4) の南50cmにある。平面形態は円形で、規模は直径0.6m、深さ15cmを測る。床面積は0.28m²である。遺物の出土はない。

時期：時期を判断する資料がなく、時期は特定できない。

S K 7

調査地の中央部、S K 6 (X 3 Y 4) の南5mにある。平面形態は円形で、規模は直径0.7m、深さ21cmを測る。床面積は0.38m²である。遺物の出土はない。

時期：時期を判断する資料がなく、時期は特定できない。

S K 8

調査地の中央やや北東、X 3 Y 5 にある。平面形態は円形で、規模は直径0.55mを測る（深さ記録なし）。床面積0.23m²である。遺物の出土はない。

時期：時期を判断する資料がなく、時期は特定できない。

(5) 土器群 (第15図)

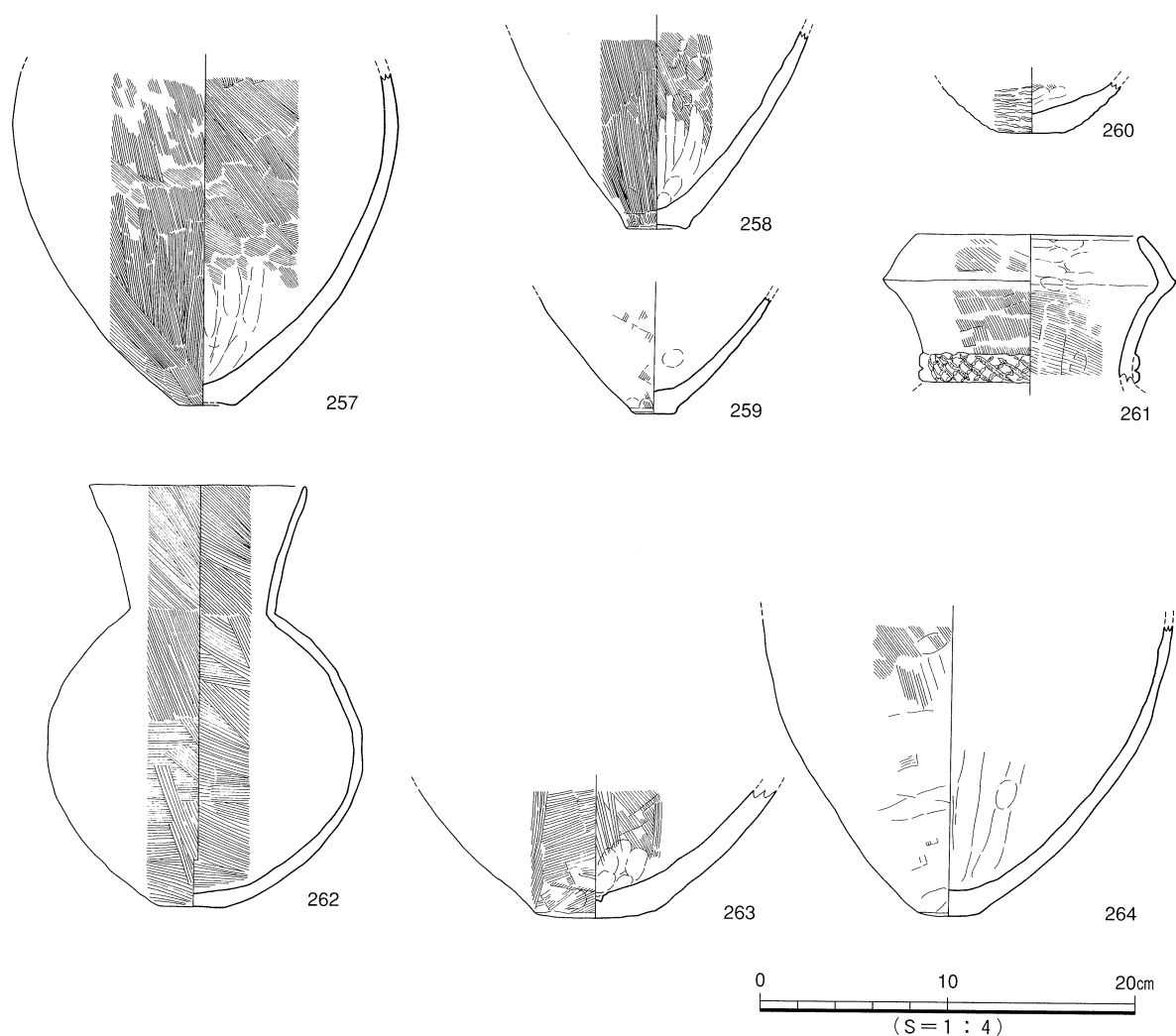
集中して土器が出土した地点が5箇所あり、これらを土器群として記載した。

1号土器群

調査地の中央西、X 4 Y 3 にある。検出範囲は、長軸2.0m、短軸1.1mで、完形品を含む土器片の分布を見た。器種には甕形土器と壺形土器がある。

出土遺物 (第40図257~264、図版10)

257~260は甕形土器の底部片で、260はタタキ痕がみられる。261~264は壺形土器である。262はほ



第40図 1号土器群出土遺物実測図

ほぼ完形品で、球形の胴部に、直線的に長く伸びる頸部をもつ。

時期：出土遺物から、弥生時代終末期とする。

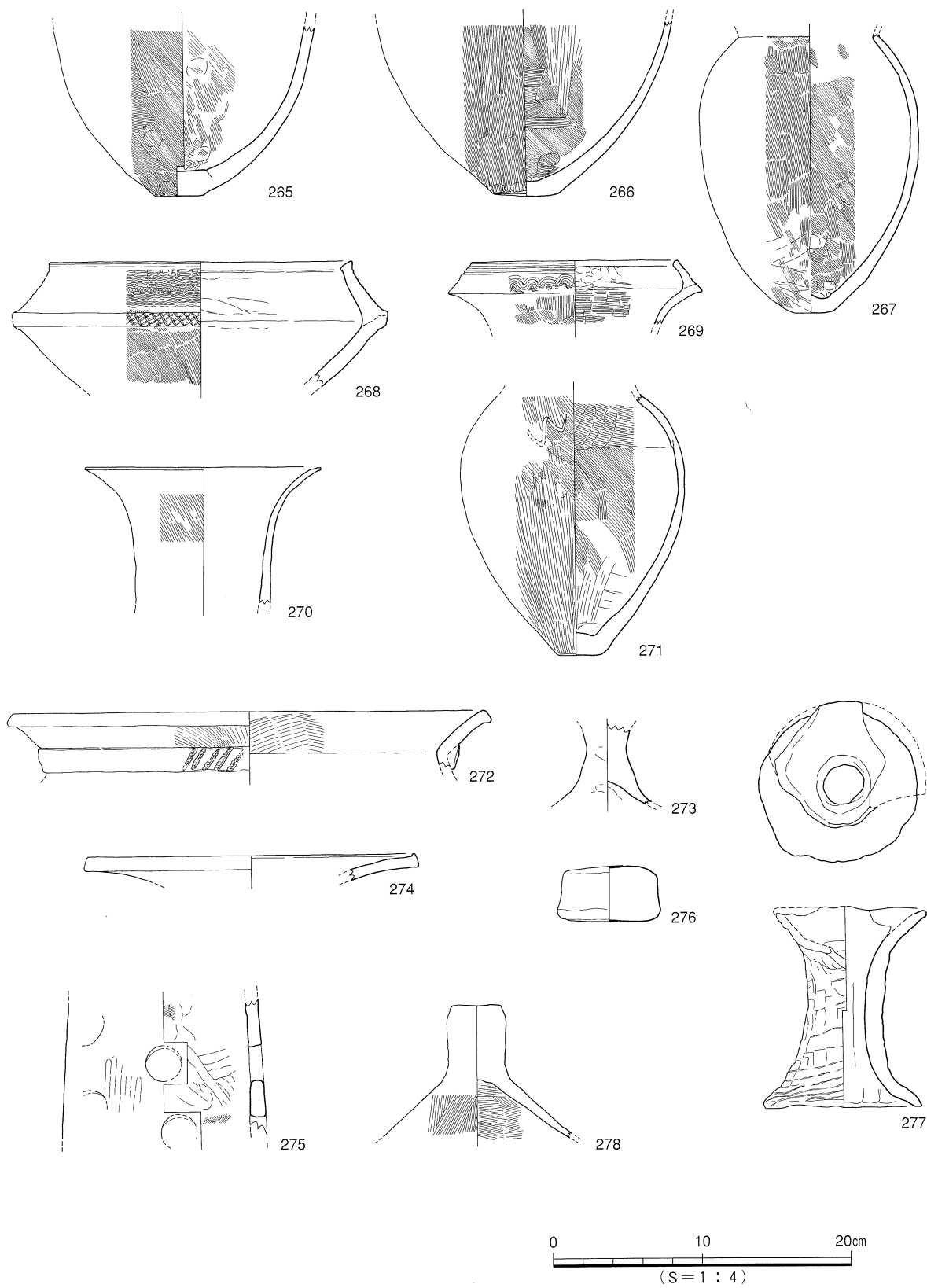
2号土器群

調査地の中央、X 4 Y 3にある。検出範囲は、長軸2.3m、短軸1.1mで、大型破片を含む多くの土器が出土した。

出土遺物（第41図265～278、図版10）

265～267は甕形土器で、長胴で、平底の底部をもつ。268～271は壺形土器で、268・269は複合口縁壺になる。271にはヘラ描きの線刻をもつ。272は鉢形土器、273は高坏形土器、274・275器台形土器、276・277は支脚形土器である。278は蓋形土器になるものか。

時期：出土遺物から、弥生時代終末期とする。



第41図 2号土器群出土遺物実測図

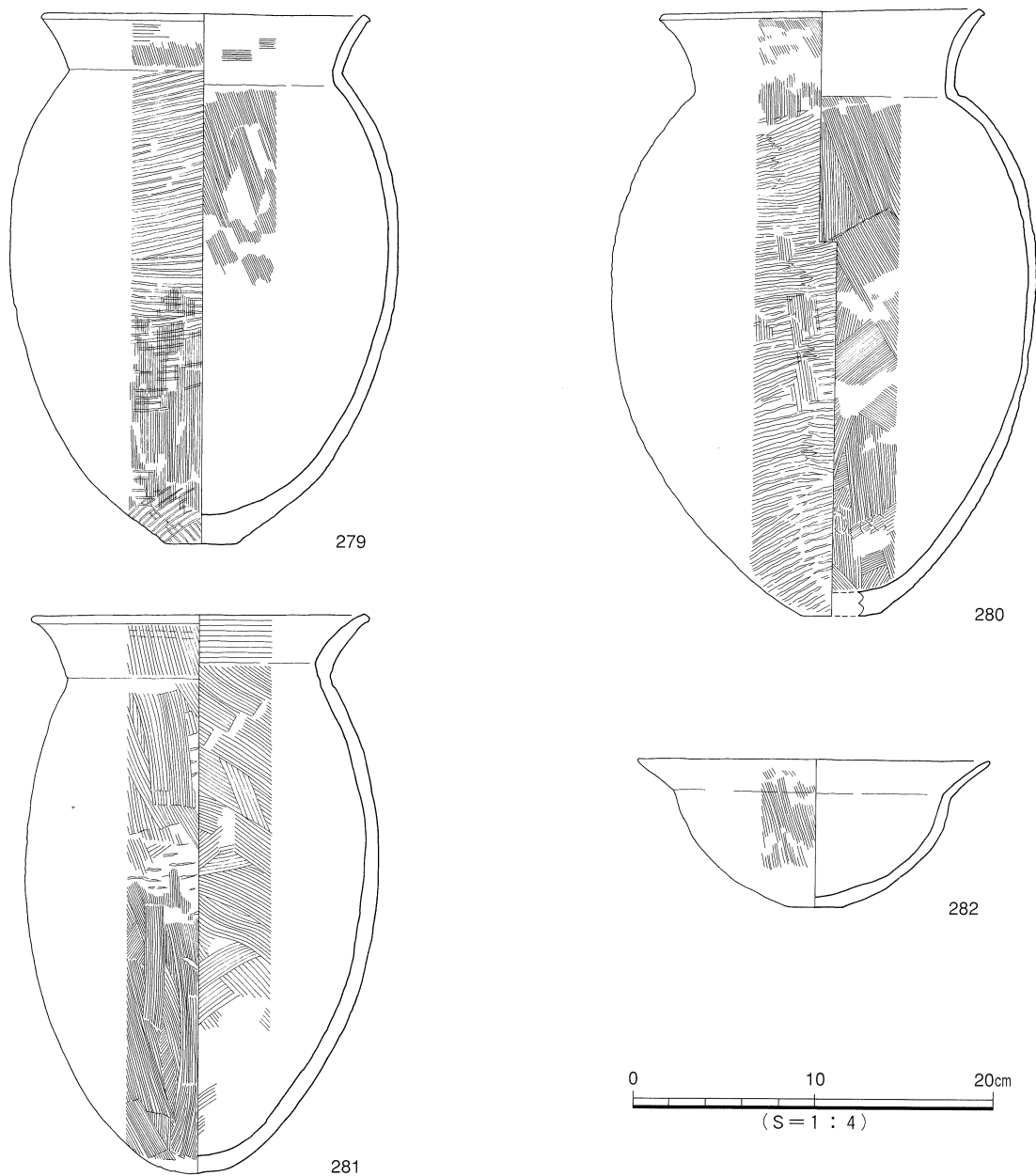
3号土器群 (図版8)

調査地の中央東、X4 Y5にある。検出範囲は、長軸1.1m、短軸0.6mで、完形品の甕形土器3点と鉢形土器1点が並んで出土している。

出土遺物 (第42図279~282、図版11)

279~281は甕形土器で、上外方に長く伸びる口縁部、少しの膨らみをもつ長い胴部、平底の底部をもつ。外面にはタタキ痕を残す。282は鉢形土器で、上外方に長く伸びる口縁部に、平底の底部をもつ。

時期：出土遺物から、弥生時代終末期とする。



第42図 3号土器群出土遺物実測図

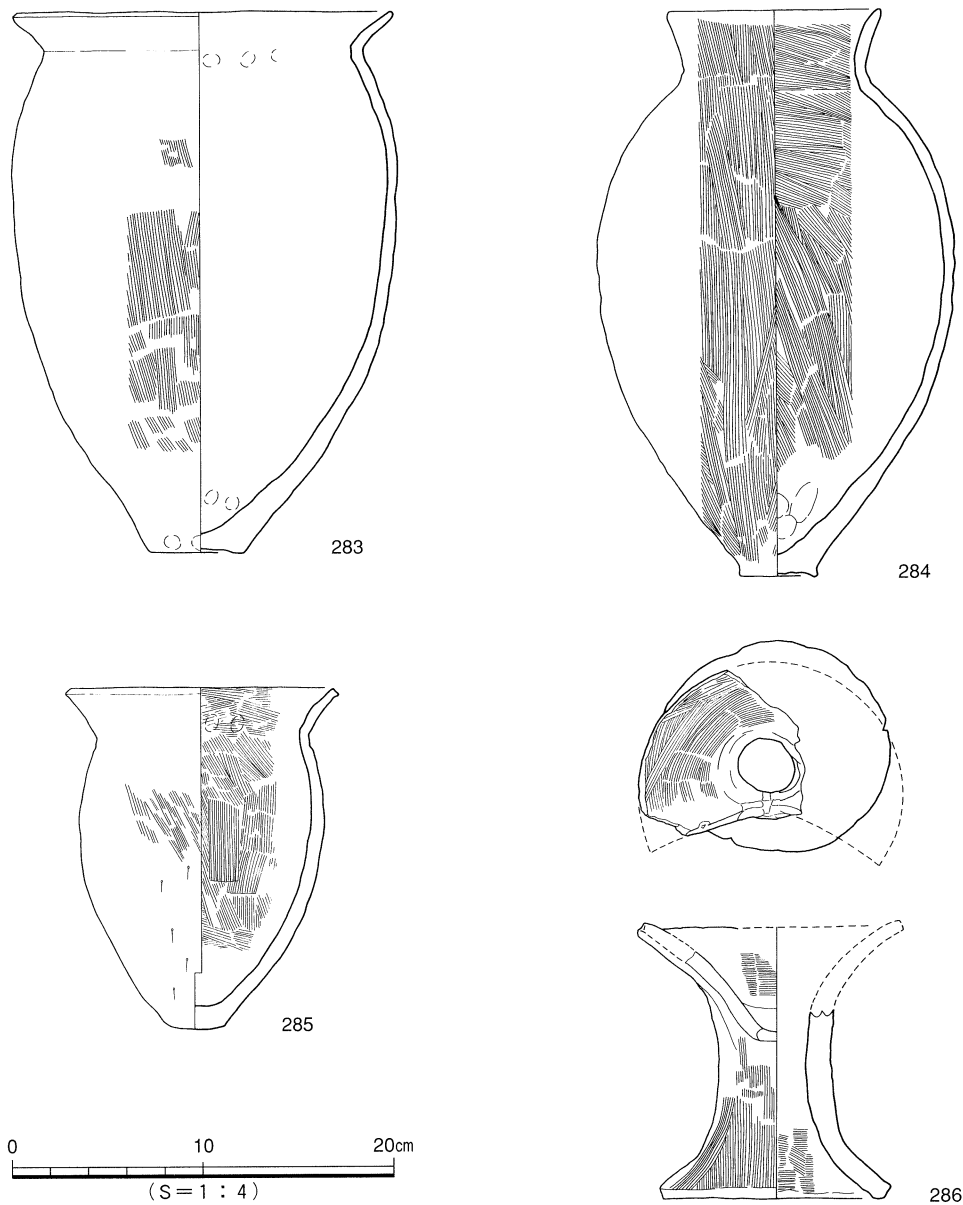
4号土器群 (図版8)

調査地の東部、SD2のなかのX4Y6にある。検出範囲は、長軸1.6m、短軸1.3mで、完形品の甕形土器3点と一部を欠く支脚形土器1点が出土している。

出土遺物 (第43図283~286、図版12)

283~285は甕形土器である。283は頸部の締まりが弱く、長胴で、わずかに上がる底部をもつ。284は頸部の締まりが強く、長胴で、たちあがりをもつ上底部になる。286は支脚形土器で、翼状の受部をもつ。

時期：出土遺物から、弥生時代後期後葉~終末期とする。



第43図 4号土器群出土遺物実測図

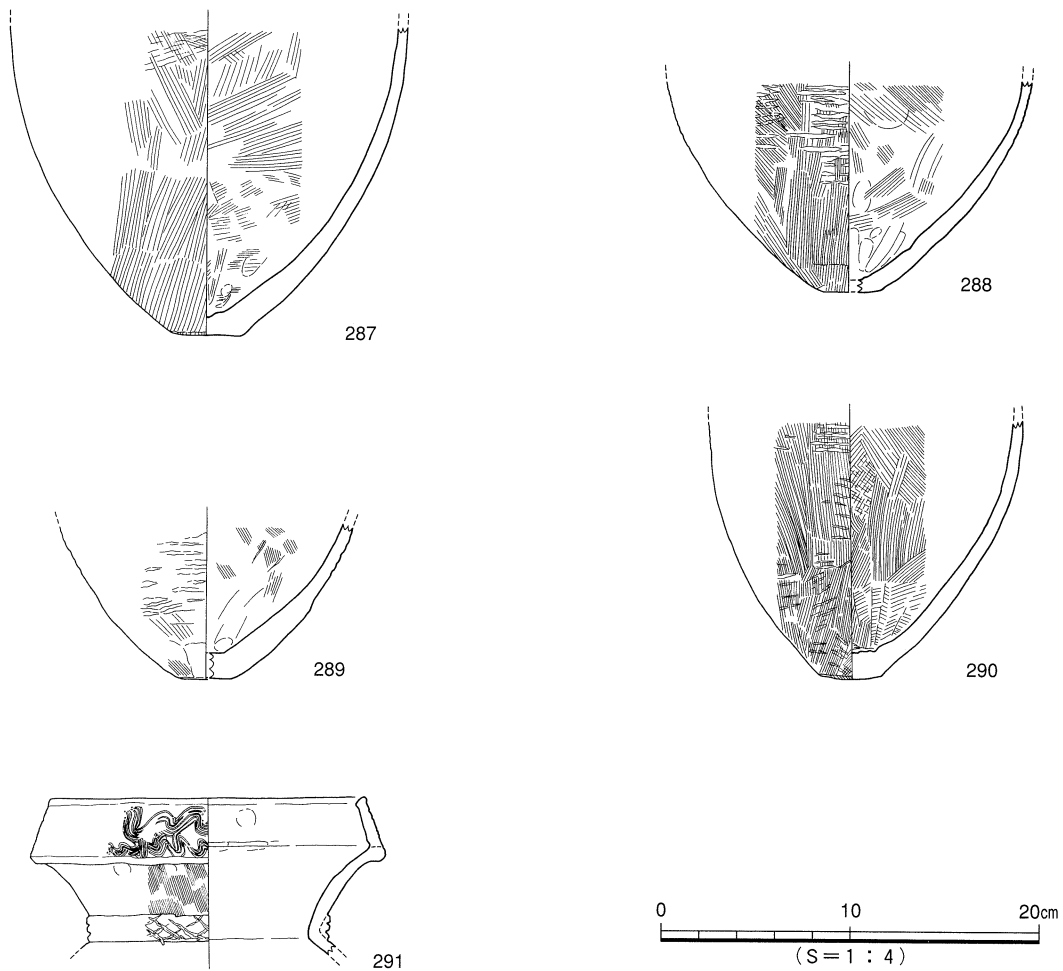
5号土器群

調査地の東部、X 2 Y 6にある。検出範囲は、長軸1.4m、短軸1.0mで、甕形土器4点以上が並び、その一帯に土器が分布している。出土状況から本来は完形品であった可能性をもつ。

出土遺物（第44図287～291）

287～290は甕形土器で、長胴に平底の底部をもつ。タタキ痕がみられる。291は複合口縁壺である。

時期：出土遺物から、弥生時代終末期とする。



第44図 5号土器群出土遺物実測図

(6) 落ち込み (S X) (第15図)

段状の落ち込みは、5ヶ所で検出した。性格と時期がはっきりとしない。

S X 1

調査地の中央やや北、X 2 Y 4 にあり、S D 4 との関係は特定でない。また、北東部ではS X 2 に接する。直線部分と北東部の屈曲部分からなる。検出範囲は、東西4.0mである。出土遺物はない。

S X 2

調査地の中央やや北、X 2 Y 4 にあり、S X 1 と接する。直線部分と南東部の屈曲部分からなる。検出範囲は、東西7.0mである。出土遺物はない。

S X 3

調査地の北東部、X 2 Y 6 にある。直線的に検出された。検出範囲は、東西 4 m、深さ10~18cmである。出土遺物はない。

S X 4

調査地の中央部、X 3 Y 4 にある。蛇行状に検出された。検出範囲は、東西4.4m、深さ 5 ~ 9 cm である。出土遺物はない。

S X 5

調査地の中央部、X 3 Y 5 にある。蛇行状に検出された。検出範囲は、直線部分で3.5mになる。出土遺物はない。ただし、この遺構の落ちぎわに近い位置から第57図501 (図版13) の甕形土器が出土しているが、遺構との関係が判断できないため、ここでは取り扱わなかった。

(7) 出土層位不明品

1) グリッド取り上げ品

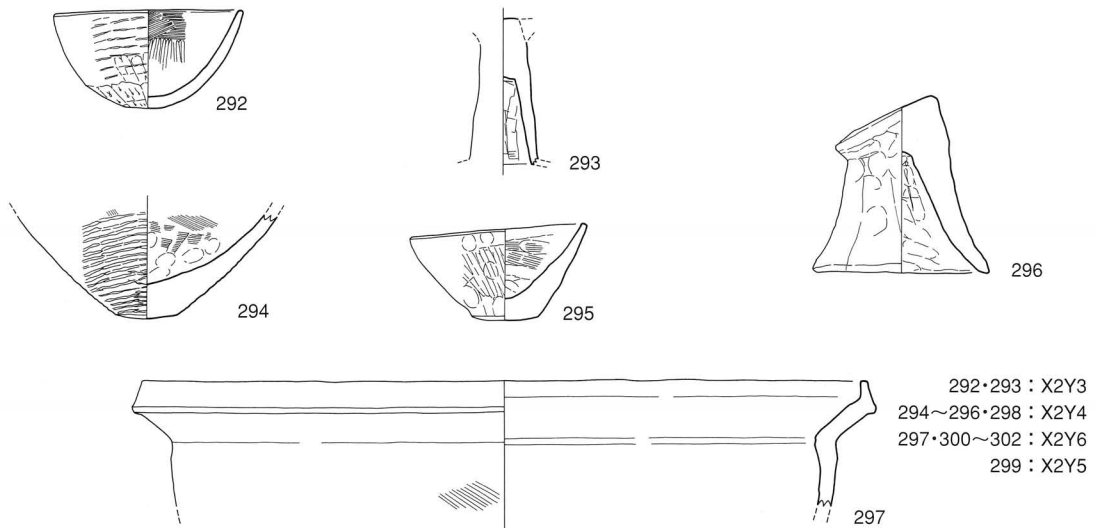
ここでは、出土層位の確認はないが、平面での位置関係が分かるグリッド取り上げ品を掲載する。

X 1 Y 3 出土品 (第46図303、図版11) : 須恵器が1点ある。303は紡錘車になるもので、2分の1が遺存する。重さは60g。

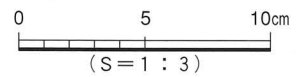
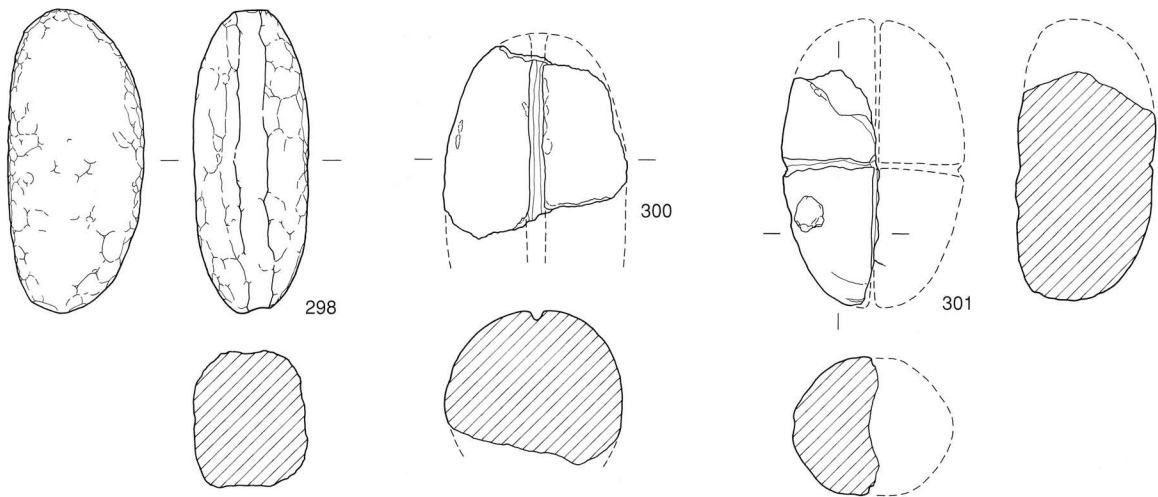
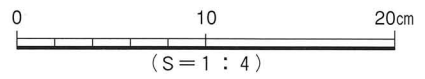
X 2 Y 3 出土品 (第45図292・293) : 住居址が6棟検出されているグリッドで、2点の土器を図化した。292はタタキ痕をもつ鉢形土器、293は柱部が細い高坏形土器になる。

X 2 Y 4 出土品 (第45図294~296・298、第46図304・305) : 住居址、溝、性格不明遺構が検出されているグリッドで、弥生土器3点、石器1点、須恵器2点を図化した。294はタタキ痕をもつ甕形土器、295は直口口縁をもつ鉢形土器、296は台形状の支脚形土器。298は浅い溝を2面にもつ石錘で418gある。304・305は須恵器で、304は高台坏、305は短頸壺になる。

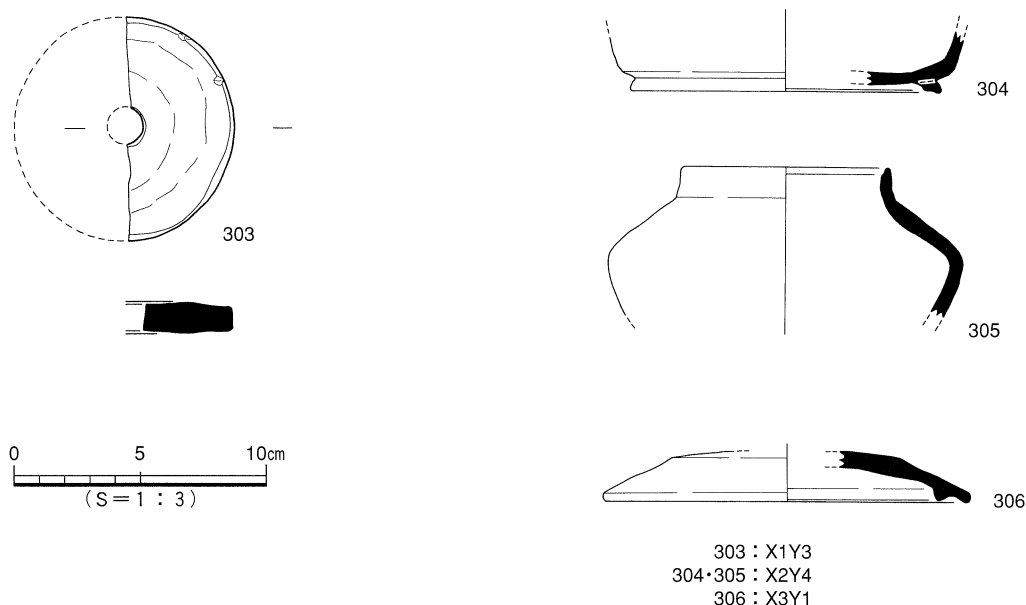
遺構と遺物



292・293 : X2Y3
 294~296・298 : X2Y4
 297・300~302 : X2Y6
 299 : X2Y5



第45図 X2Y3・4・5・6 出土遺物実測図



第46図 X1Y3・X2Y4・X3Y1 出土遺物実測図

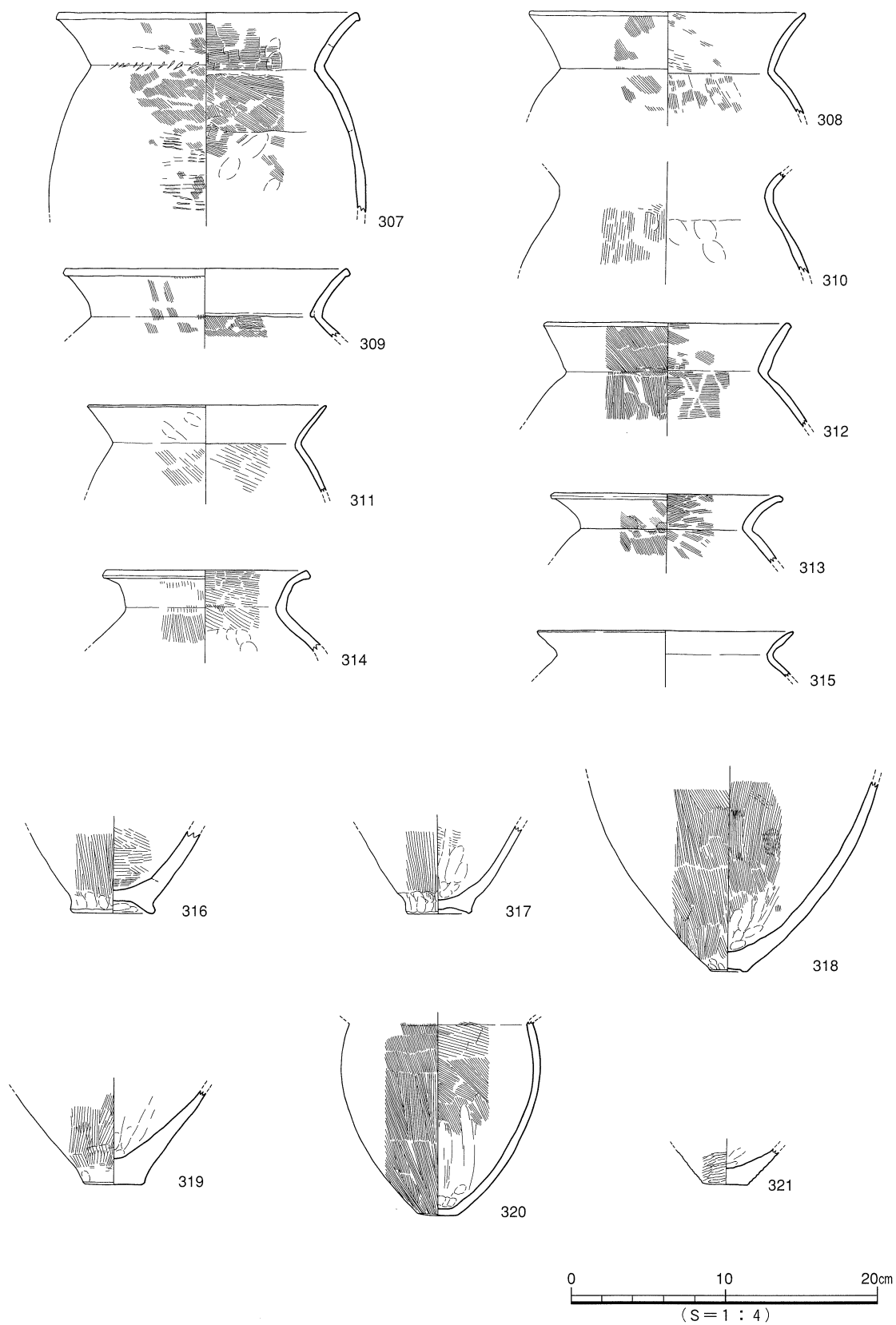
X 2 Y 5 出土品（第45図299）：住居址が1棟検出されているグリッドで、1点の石器を図化した。299は砥石である。

X 2 Y 6 出土品（第45図297・300～302、図版9）：性格不明遺構が検出されているグリッドで、弥生土器1点、土製品1点、石器2点を図化した。297は大型の鉢形土器で、口縁端部は拡張している。300・301は漁網錘である。300は石錘で、3分の1程の遺存で、細い溝があり、現状で314gを量る。301は土錘で、3分の1弱の遺存で、細い溝が十字にあり、現状で196.5gを量る。302は砥石で、砥面を四方にもつ。

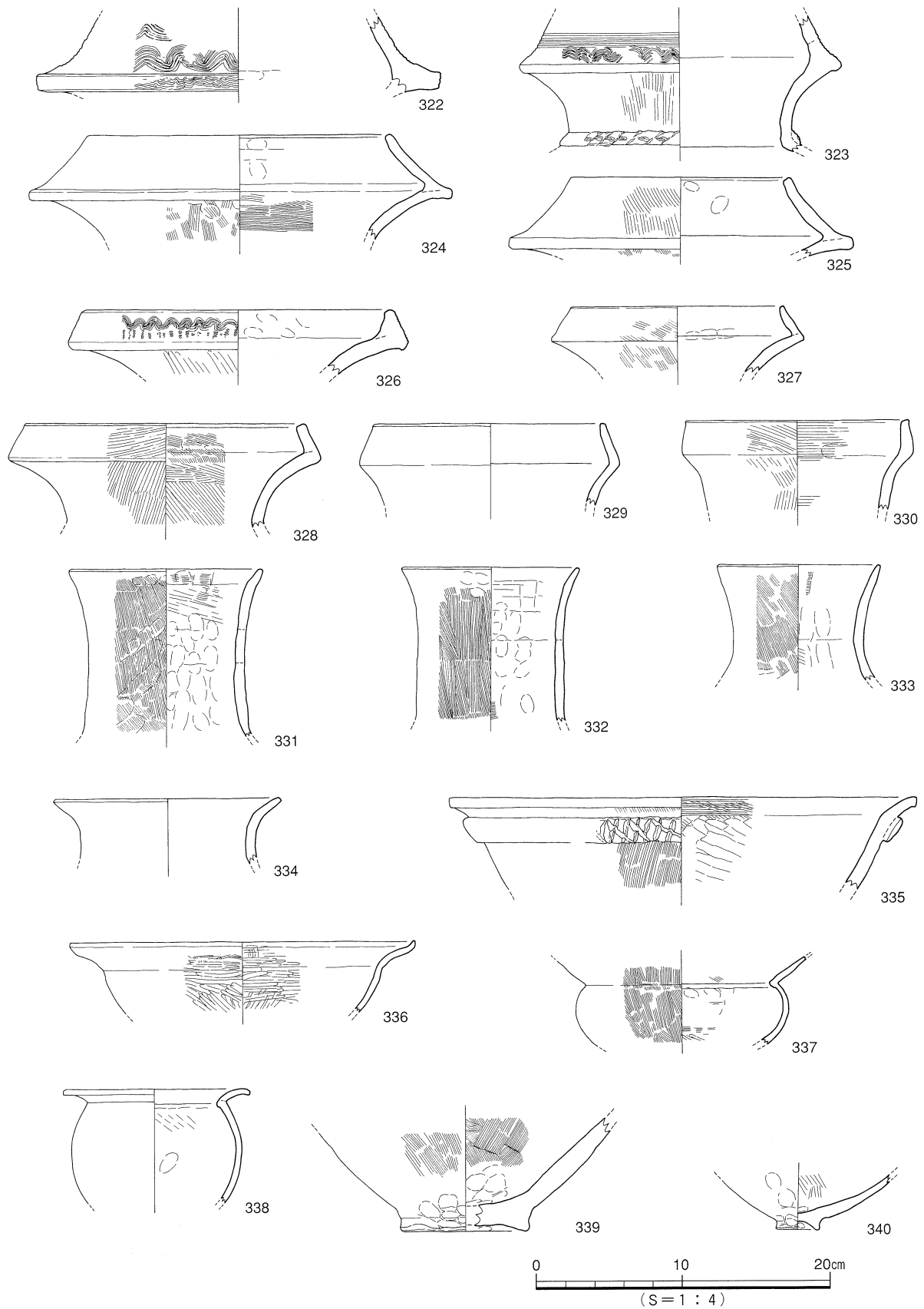
X 3 Y 1 出土品（第46図306）：検出遺構がないグリッドで、1点の須恵器を図化した。306は坏蓋で、口縁部にはかえりをもつ。

X 3 Y 2 出土品（第47～49図307～358、図版12）：溝の一部を検出しているグリッドで、多くの土器が出土している。307～356は弥生土器で、甕形土器15点、壺形土器13点、鉢形土器9点、高坏形土器3点、器台形土器3点、支脚形土器4点、ミニチュア品3点を図化した。307～321は甕形土器で、307と321にはタタキ痕がみられる。322～334は壺形土器で、322～330は複合口縁壺になる。335～343は鉢形土器で、343は台付鉢の脚部になる。344～346は高坏形土器で、344・345は円孔をもつ。347～349は器台形土器で、349は脚端部には半截竹管文をもつ。350～353は支脚形土器で、353は受部と柱部との接合面が看取できる。354～356はミニチュア品で、鉢形土器に形態が似る。357・358は須恵器で、357は長頸壺、358は坏蓋になる。

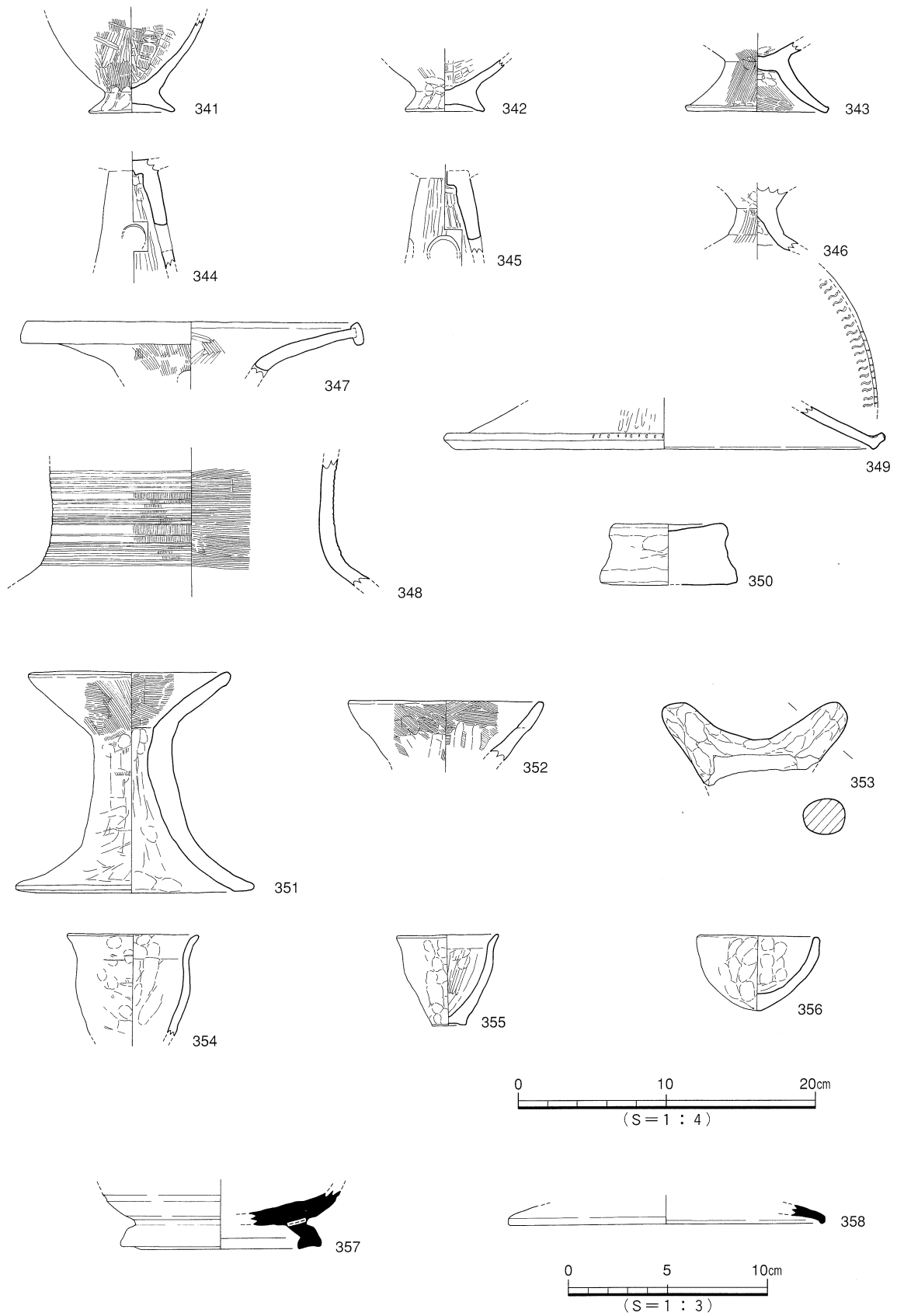
遺構と遺物



第47図 X3Y2出土遺物実測図(1)



第48図 X3Y2出土遺物実測図(2)



第49図 X3Y2出土遺物実測図(3)

X 3 Y 3 出土品（第50～55図359～492、図版12・13）：溝の一部を検出しているグリッドで、多くの土器が出土している。また、甕形土器のなかに庄内式甕の搬入品 1 点が含まれていたことから、在地土器との共伴を知るために多くの土器を図化した。

359～480は弥生土器で、甕形土器29点、壺形土器50点、鉢形土器25点、高坏形土器 8 点、器台形土器 2 点、支脚形土器 4 点、その他 3 点を図化した。359～487は甕形土器で、363・375・376にはタタキ痕がみられる。374は、庄内式甕の搬入品で、接合する土器片が 2 点あり、X 3 Y 3 出土品と X 4 Y 2 出土品とがある。胎土の観察結果は、第 3 章 4 に掲載した。388～437は壺形土器で、388～403は複合口縁壺になる。411は二重口縁壺で、山陰地方の形状に似る。412～419は頸～胴部片で、418はヘラ描きの線刻がある。420～437は胴～底部片で、大型品にはたち上がりをもつものがある。438～462は鉢形土器で、462は台付鉢になる。463～470は高坏形土器で、463は坏部、464～470は脚部になる。471・472は器台形土器で、472は畿内系の小型器台に形態が似る。473～476は支脚形土器である。477は底部に焼成後の穿孔をもつ土器である。478は土製の紡錘車で、重さは42.1 g である。479は器種・器形不明の土製品で、波状文・半截竹管文・斜線文・沈線文をもつ。

480は弥生時代前期の壺の口縁部片、481は須恵器の長頸壺、482・483は古墳時代～古代の甕形土器、484は古代の高台付坏。485は近世の坏（底部に焼成後の穿孔）、486は輪高台の付く磁器碗、487～489は近世の羽釜、490は近世の鍋である。

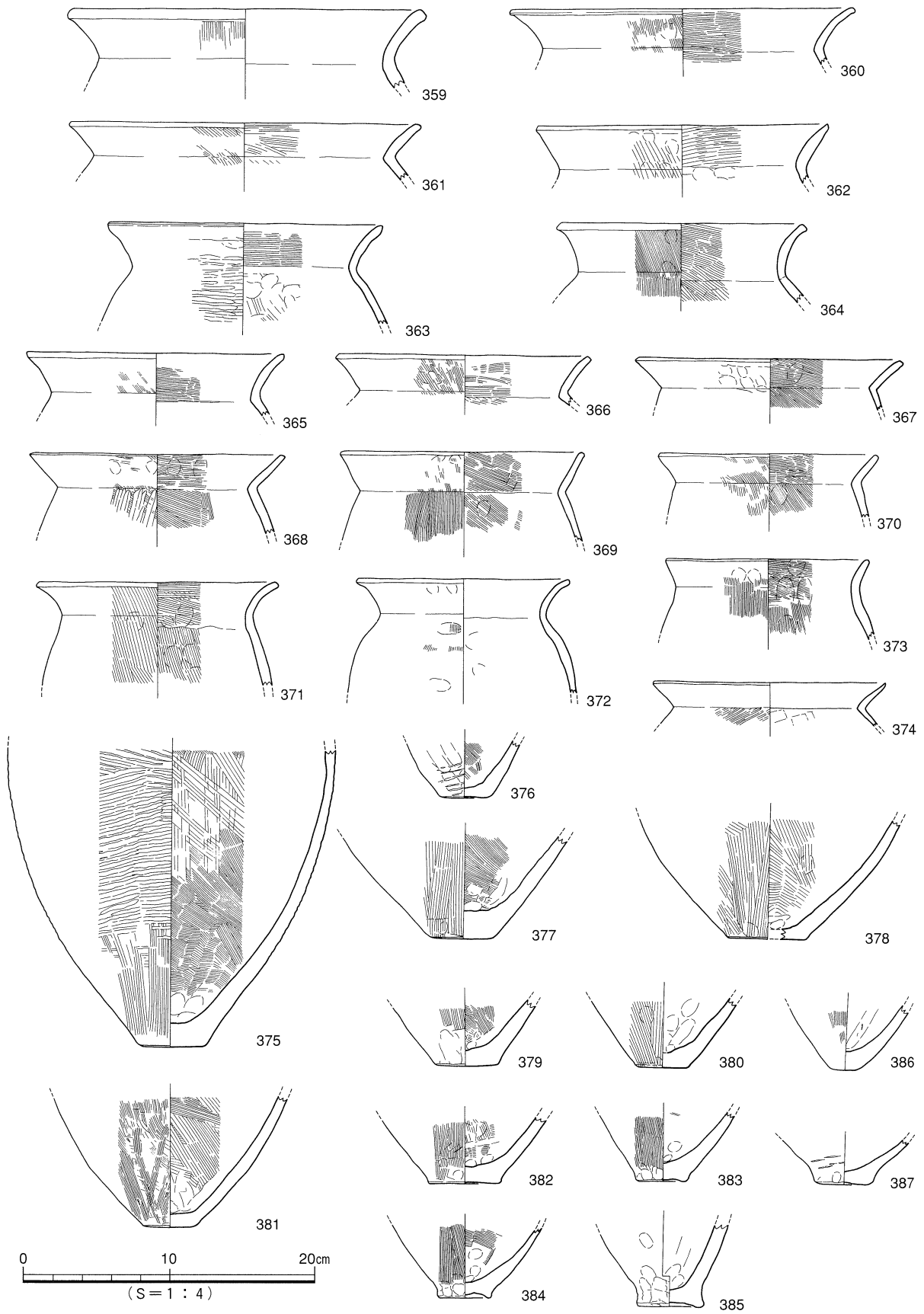
491・492は石器である。491は緑色片岩の石器素材、492は磨石で、48 g。

X 3 Y 4 出土品（第56図493～500）：住居址、土坑、土器棺等を検出しているグリッドで、土器 6 点、石器 2 点を図化した。493～497は弥生土器で、493は高坏形土器、494は器台形土器、495～497は支脚形土器になる。498・499は石器で、498は凹石、499は棒状の石器になる。500は須恵器で、高台付坏になる。

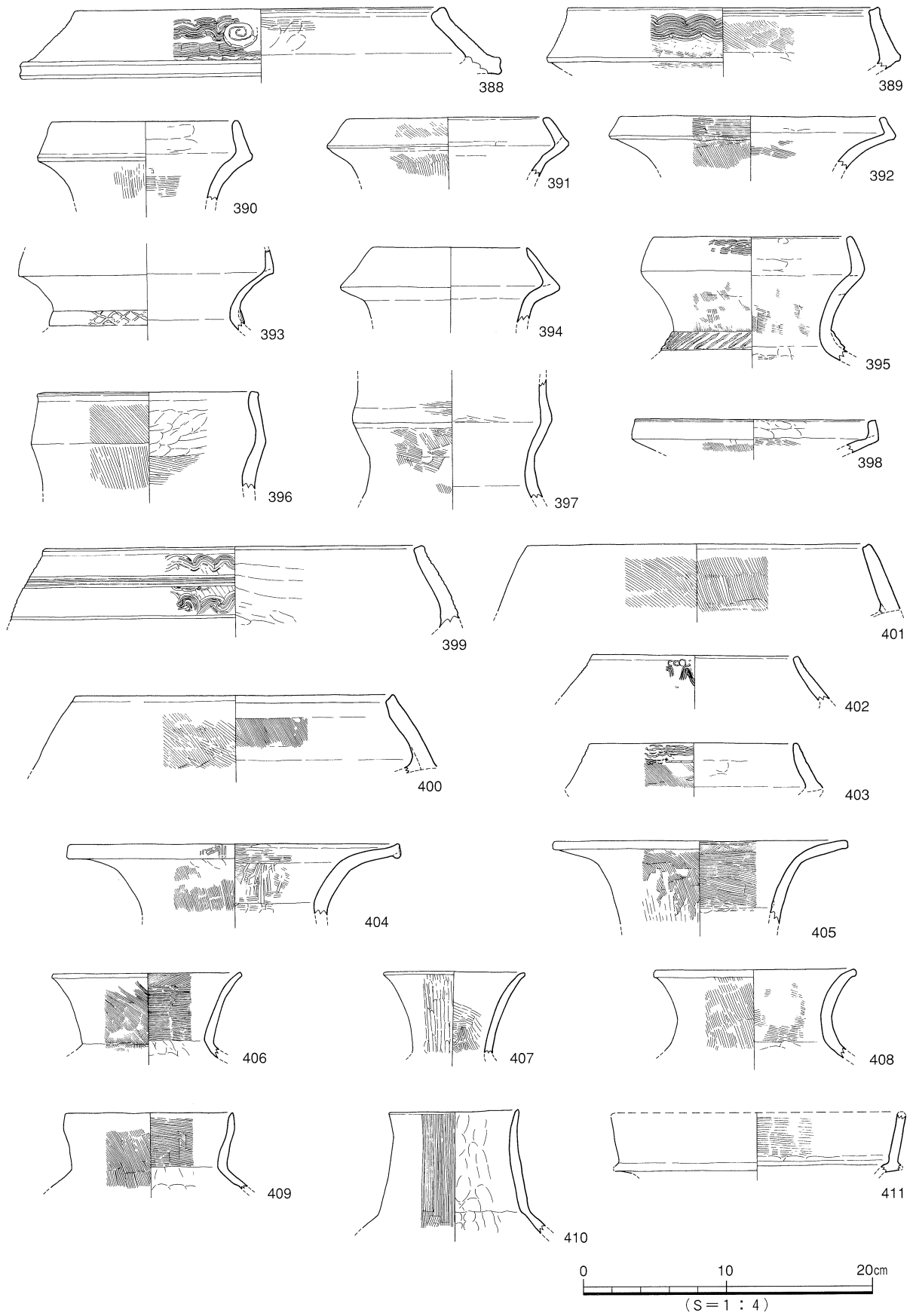
X 3 Y 5 出土品（第57図501・502・504～506）：住居址、溝、土坑等を検出しているグリッドで、土器 2 点、石器 3 点を図化した。501は甕形土器、502は壺形土器になる。504～506は石器である。504は磨石で、805 g。505は石器素材で、1009 g。506は用途不明石器で、365 g。

X 3 Y 6 出土品（第57図503）：遺構は未検出のグリッドで、土器 1 点を図化した。503は鉢形土器の口縁部片で、直口口縁になる。

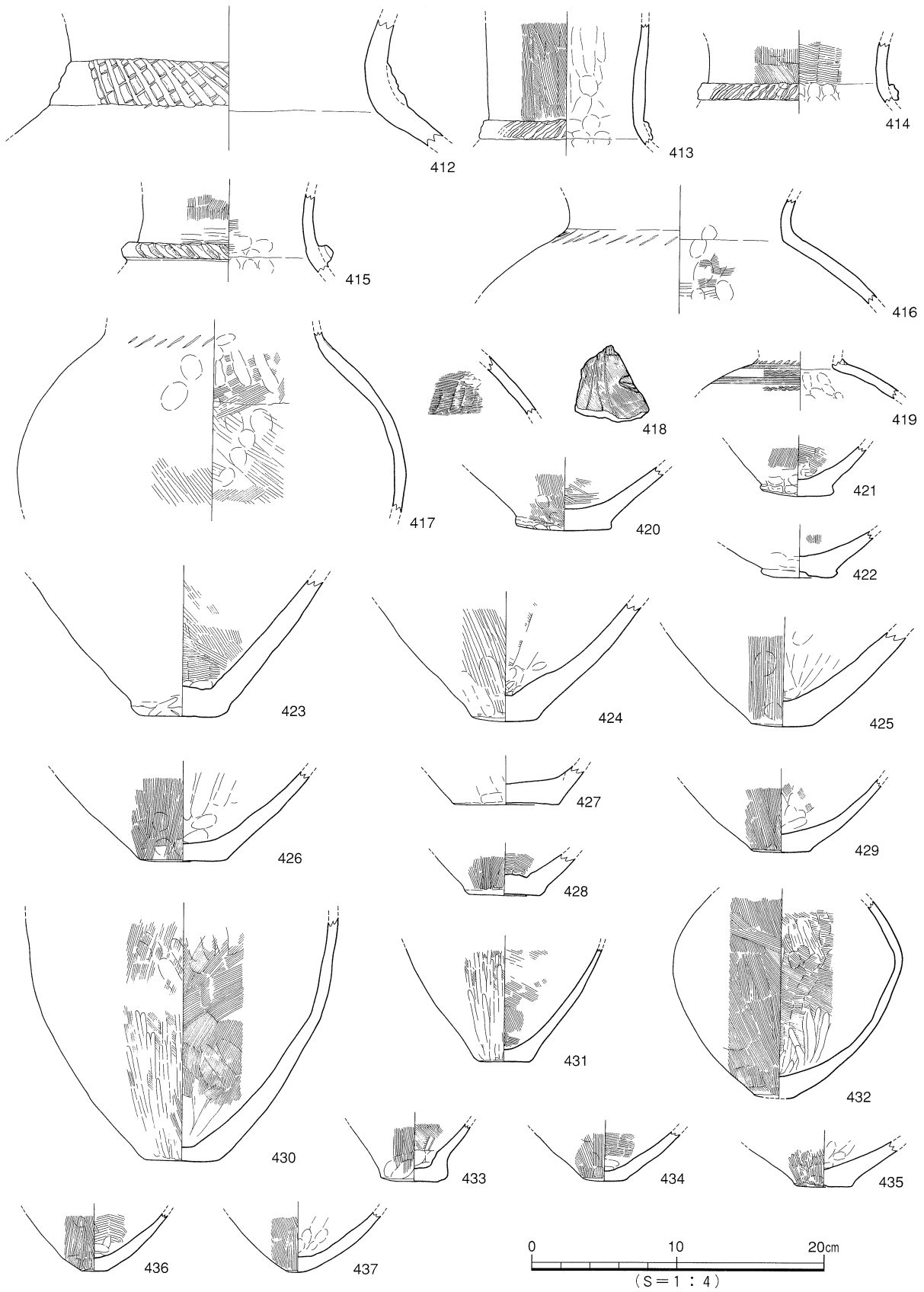
遺構と遺物



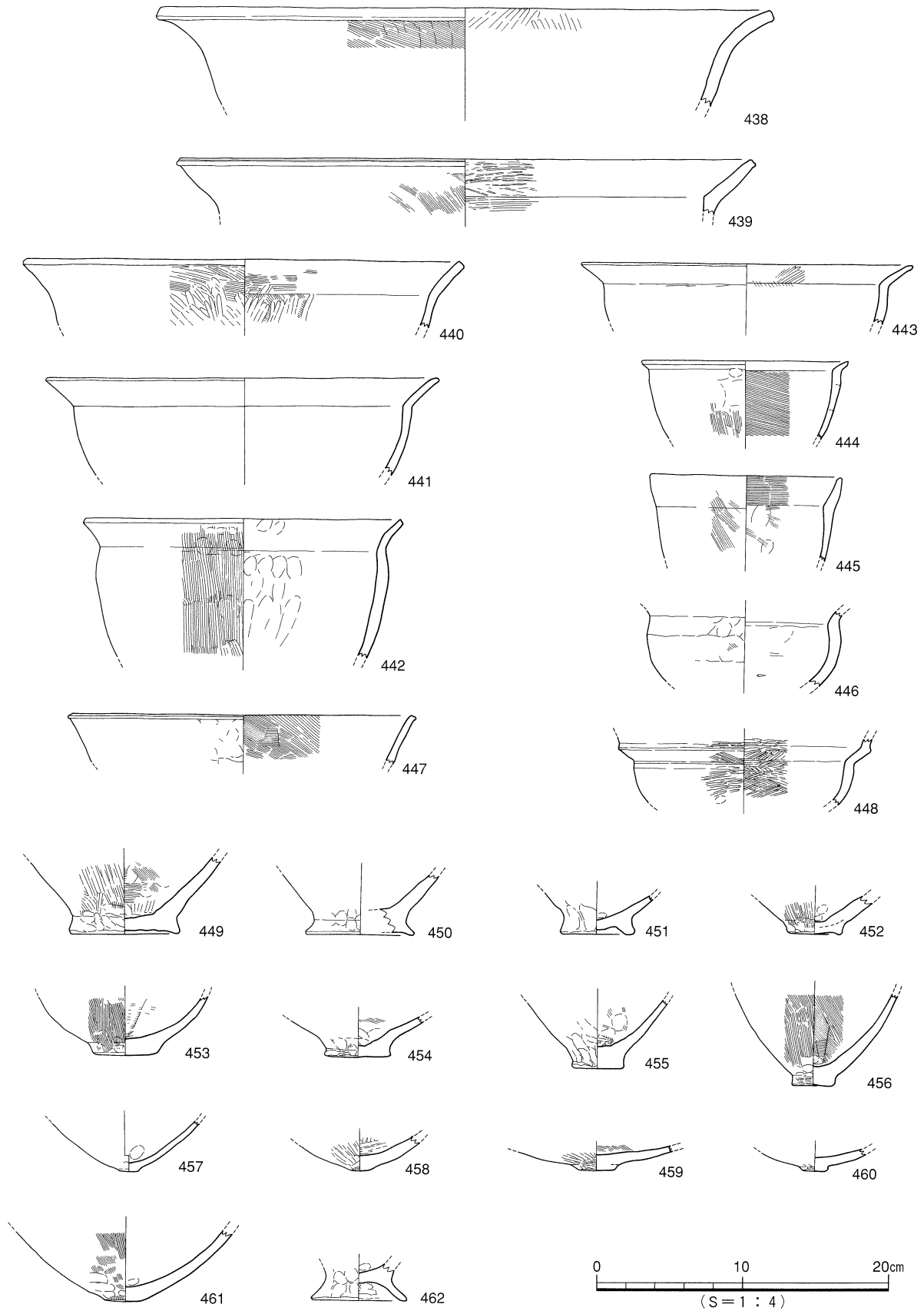
第50図 X3Y3出土遺物実測図(1)



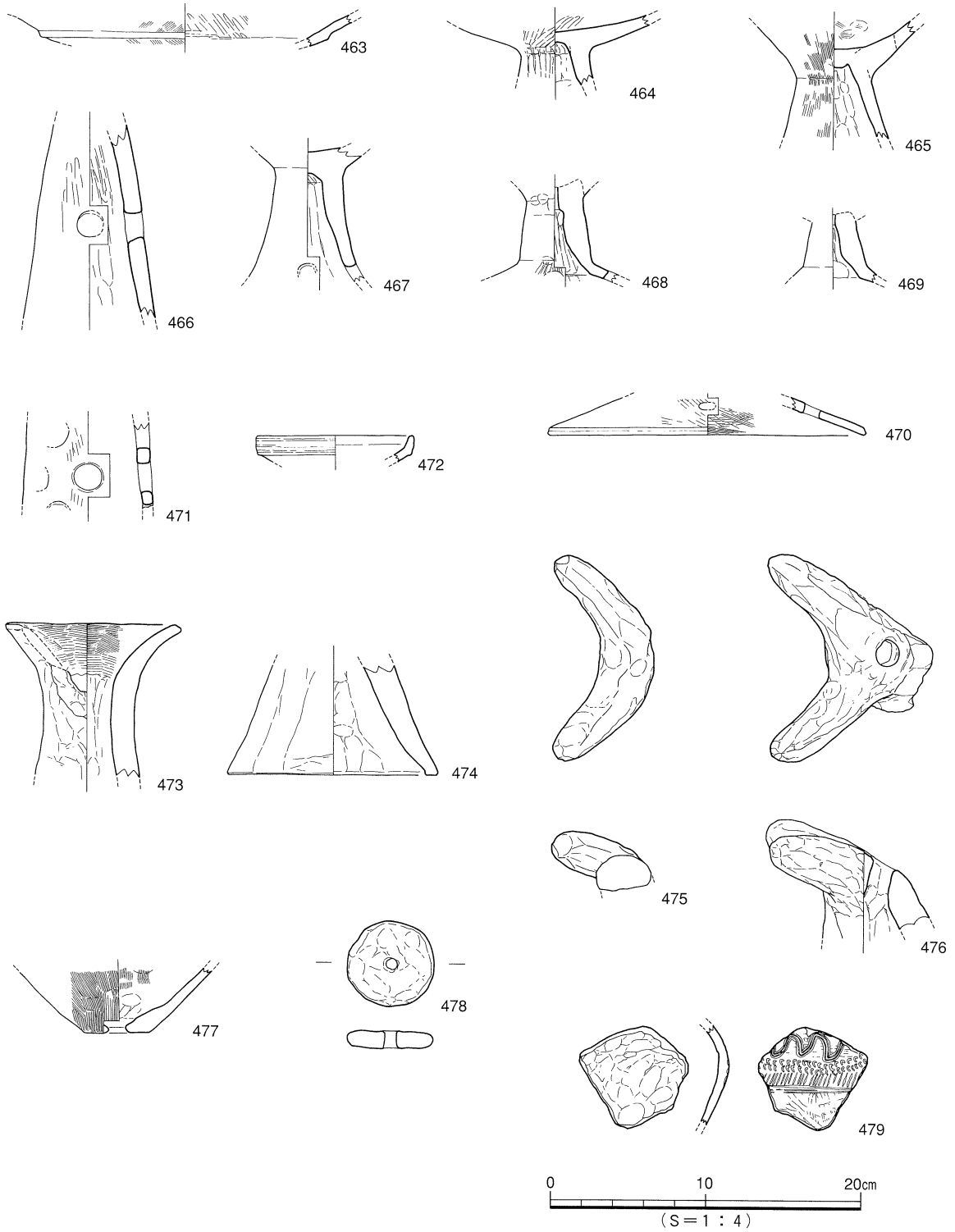
第51図 X3Y3出土遺物実測図(2)



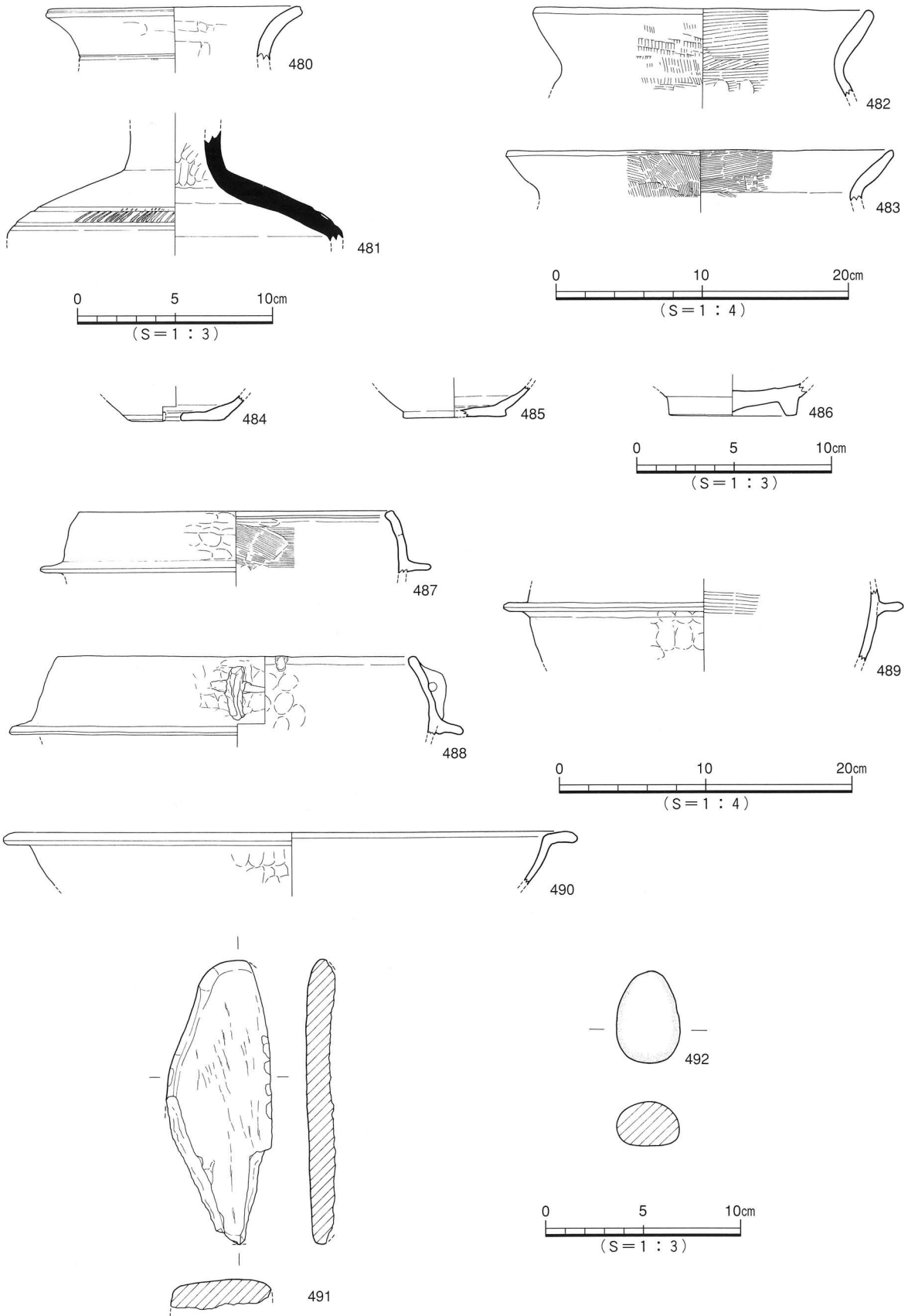
第52図 X3Y3出土遺物実測図(3)



第53図 X3Y3出土遺物実測図(4)

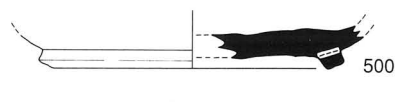
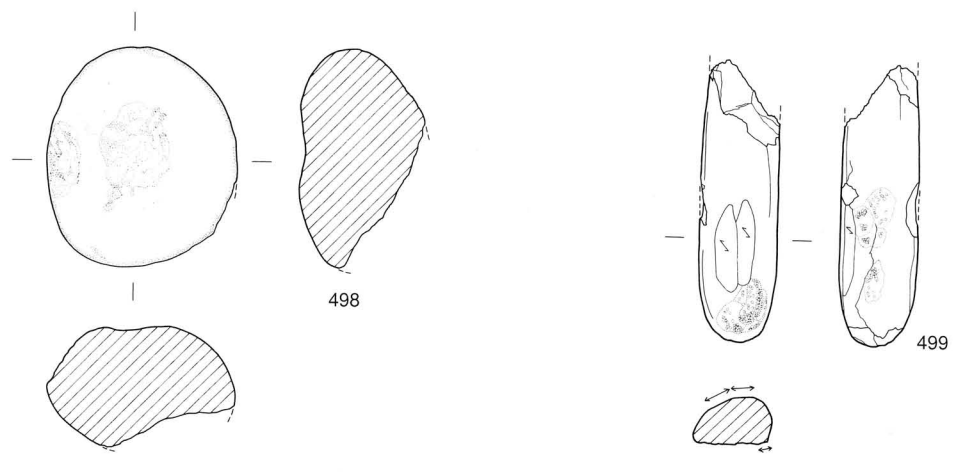
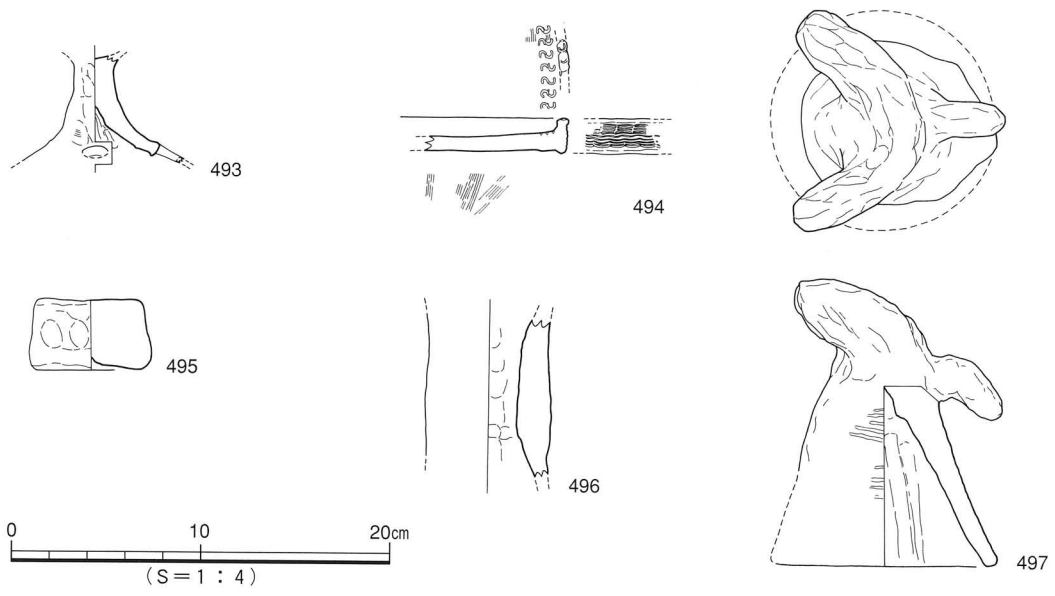


第54図 X3Y3出土遺物実測図(5)

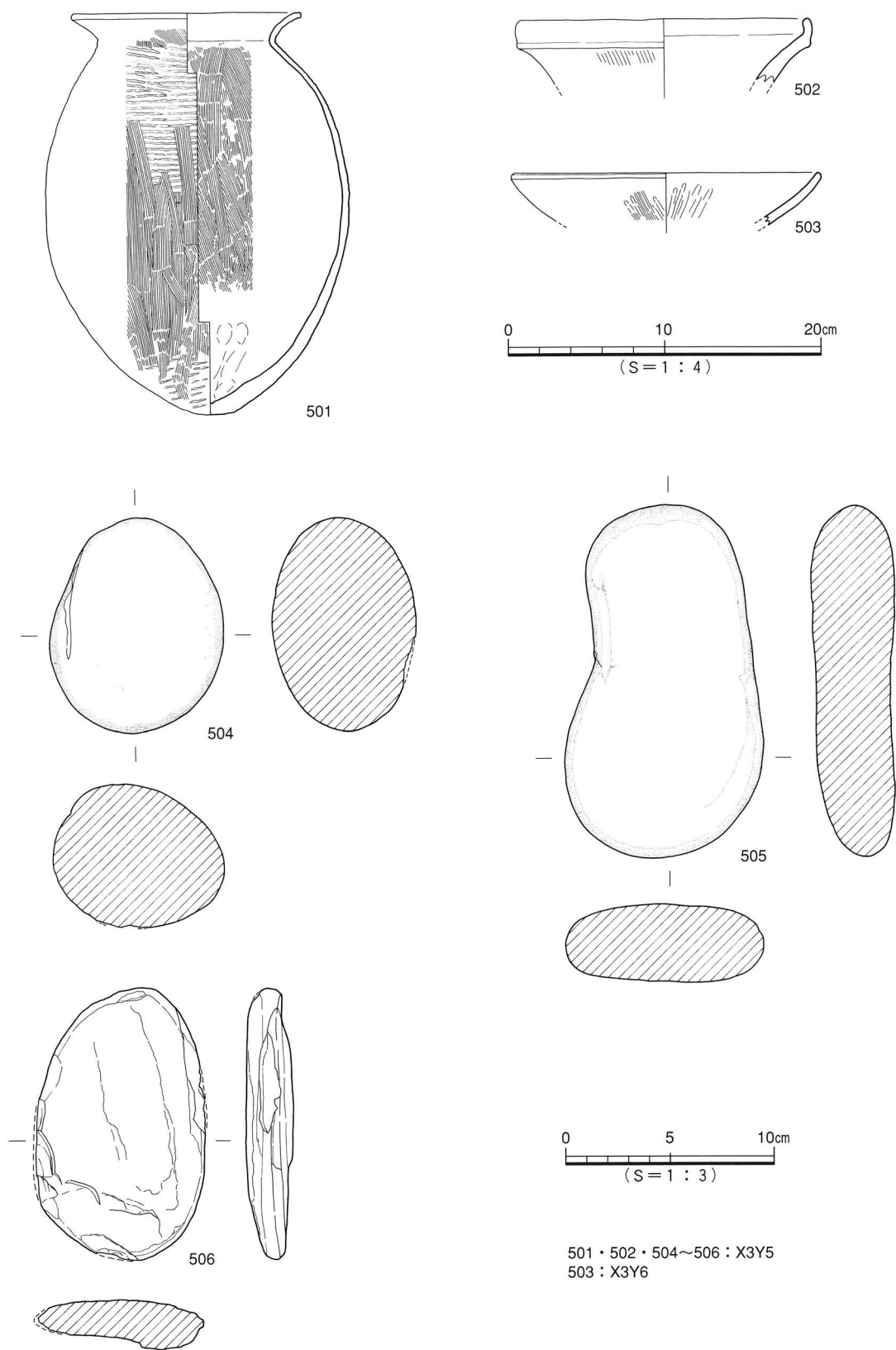


第55図 X3Y3出土遺物実測図(6)

遺構と遺物



第56図 X3Y4出土遺物実測図



第57図 X3Y5・X3Y6出土遺物実測図

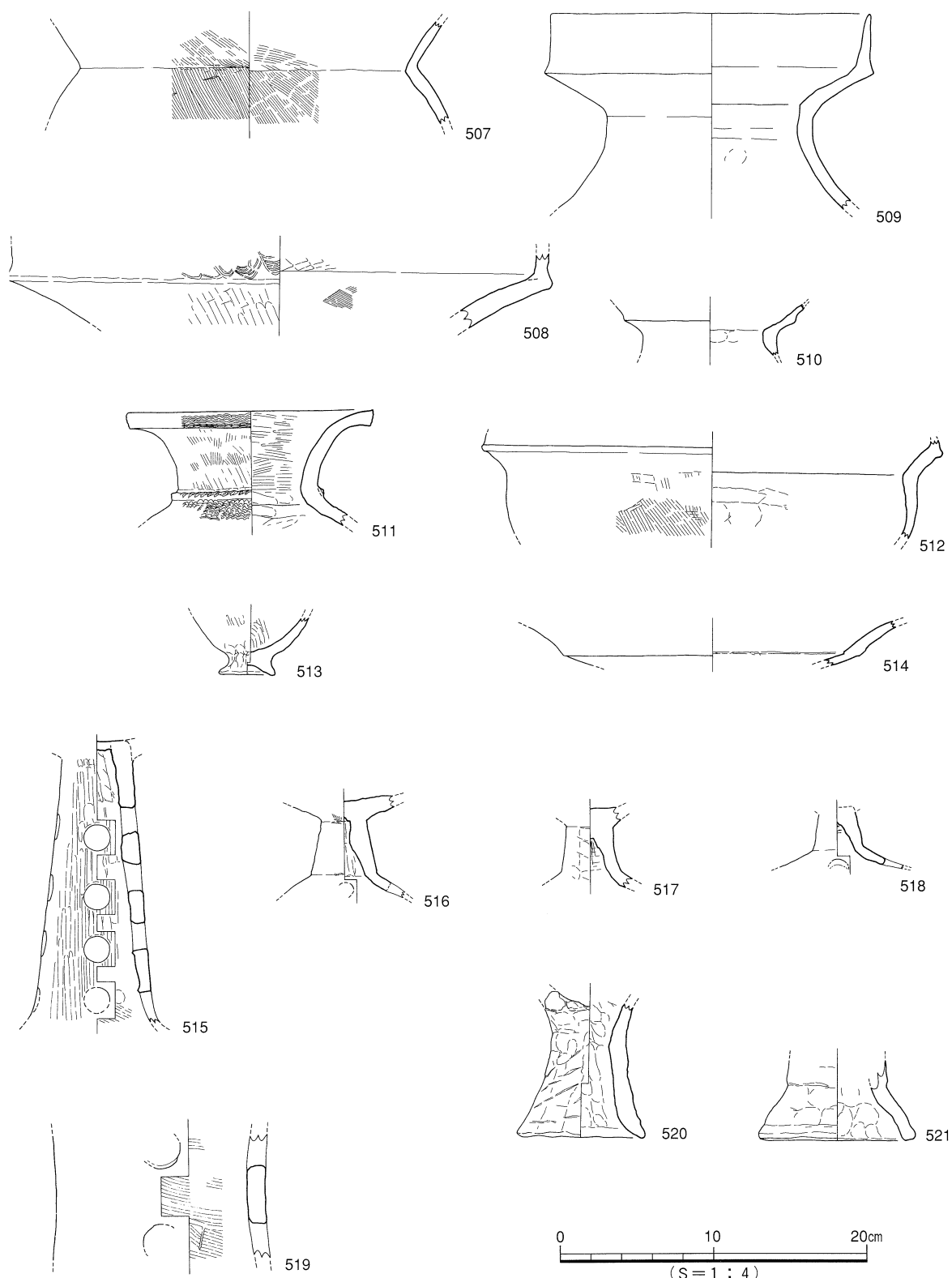
X 4 Y 2 出土品（第58・59図507～531、図版9・13）：溝2条を検出しているグリッドで、土器16点、石器9点を図化した。507～521は弥生土器である。507は甕形土器、508～511は壺形土器で509・510は山陰地方の形をもち、511は胴部上半に波状文をもち在地の施文手法でない。512・513は鉢形土器で、512は口縁部が拡張される。514～518は高坏形土器で、514は坏部、515～518は脚部になる。519は器台形土器、520・521は支脚形土器である。531は須恵器で、高坏の脚部になる。

522～530は石器である。522は石錘で、細い溝がめぐる。278.7g。523は石庖丁で、両側部には抉りをもつ。緑色片岩、33.3g。524は砥石で、砥面を4面もつ。47.6g。525・526は凹石で、525は415.0g、526は210.0g。527～530は用途不明の石器で、527は405.0g、528は66.4g、529は62.2g、530は70.2g。

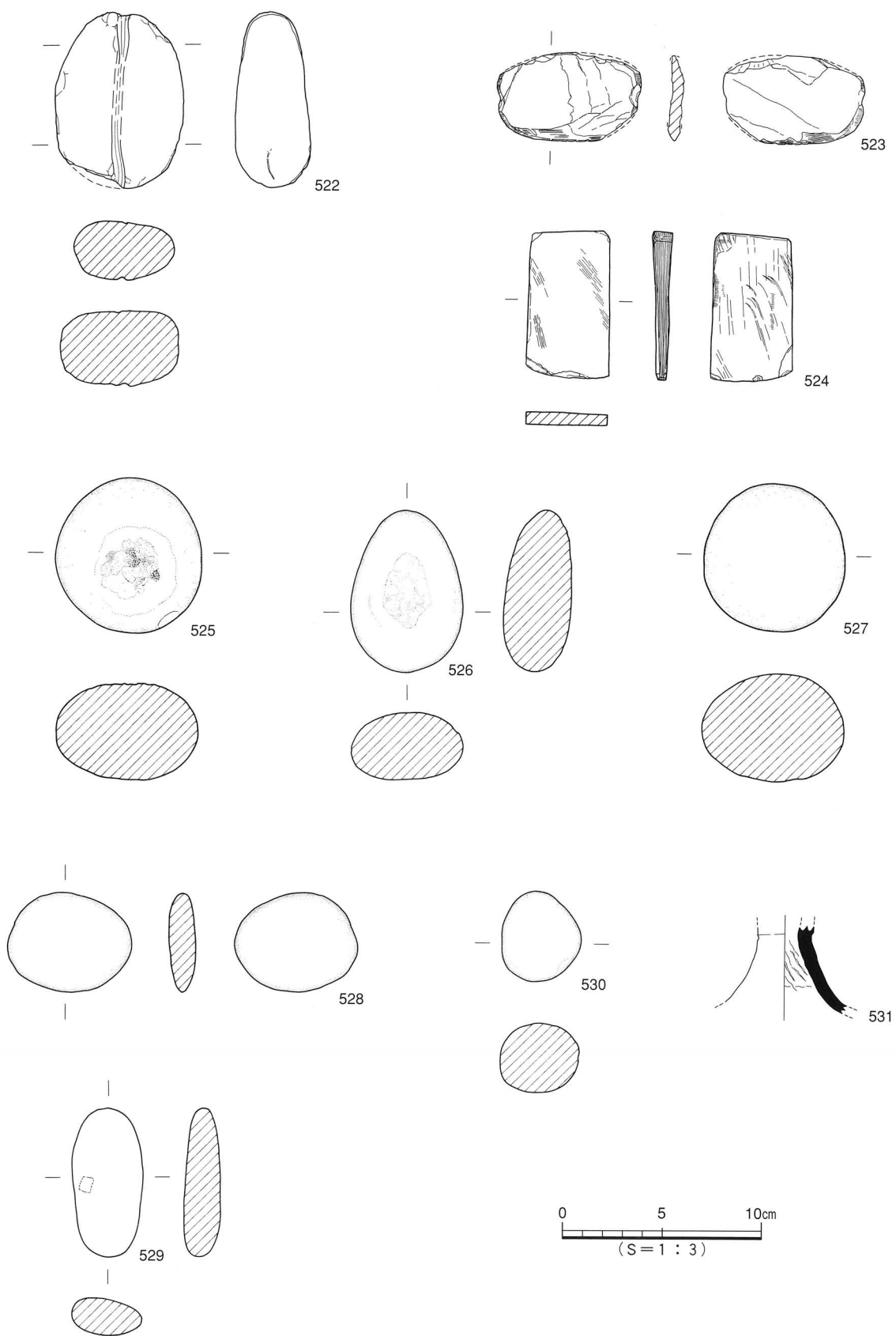
X 4 Y 3 出土品（第60～66図532～633、図版9・13）：溝2条を検出しているグリッドで、土器101点、石器2点を図化した。532～624は弥生土器である。532～551は甕形土器で、542は形態と内面調整（指頭痕）が讃岐地方に似る。543は内面に幅狭い面をもつ。544は肩部が強く張り、内面にケズリ痕をもつ。545は口縁部が上方に拡張される。546は口縁部が上方に拡張され、外面にはタタキ痕が全面にみられる。547は口縁部が緩やかに外反し、内面にケズリ痕をもつ。542～547は外来的要素を持っている。550・551はタタキ痕がみられる。552～574は壺形土器で、552～560は複合口縁壺になる。561～563は口縁部、564～566は頸部、567～574は底・胴部で、569・570はタタキ痕がみられる。575～599は鉢形土器で、575～581は大型品になる。582は斜格子目の刻目をもち、上端部は擬口縁の可能性をもつ。その場合は、大型の壺形土器になる。584～590は中・小型品、591～598は底・胴部で、598はタタキ痕がみられる。599は台付鉢の脚部になる。600～610は高坏形土器で、600・601は坏部、602～610は脚部になる。611・612は器台形土器、613～622は支脚形土器である。623・624は底部に焼成前の穿孔をもつ。

625・626は石器である。625はS D 2に接して出土した石錘で、細い溝がめぐる。262.2g。626は凹石で、2分の1の遺存になる。542.0g。

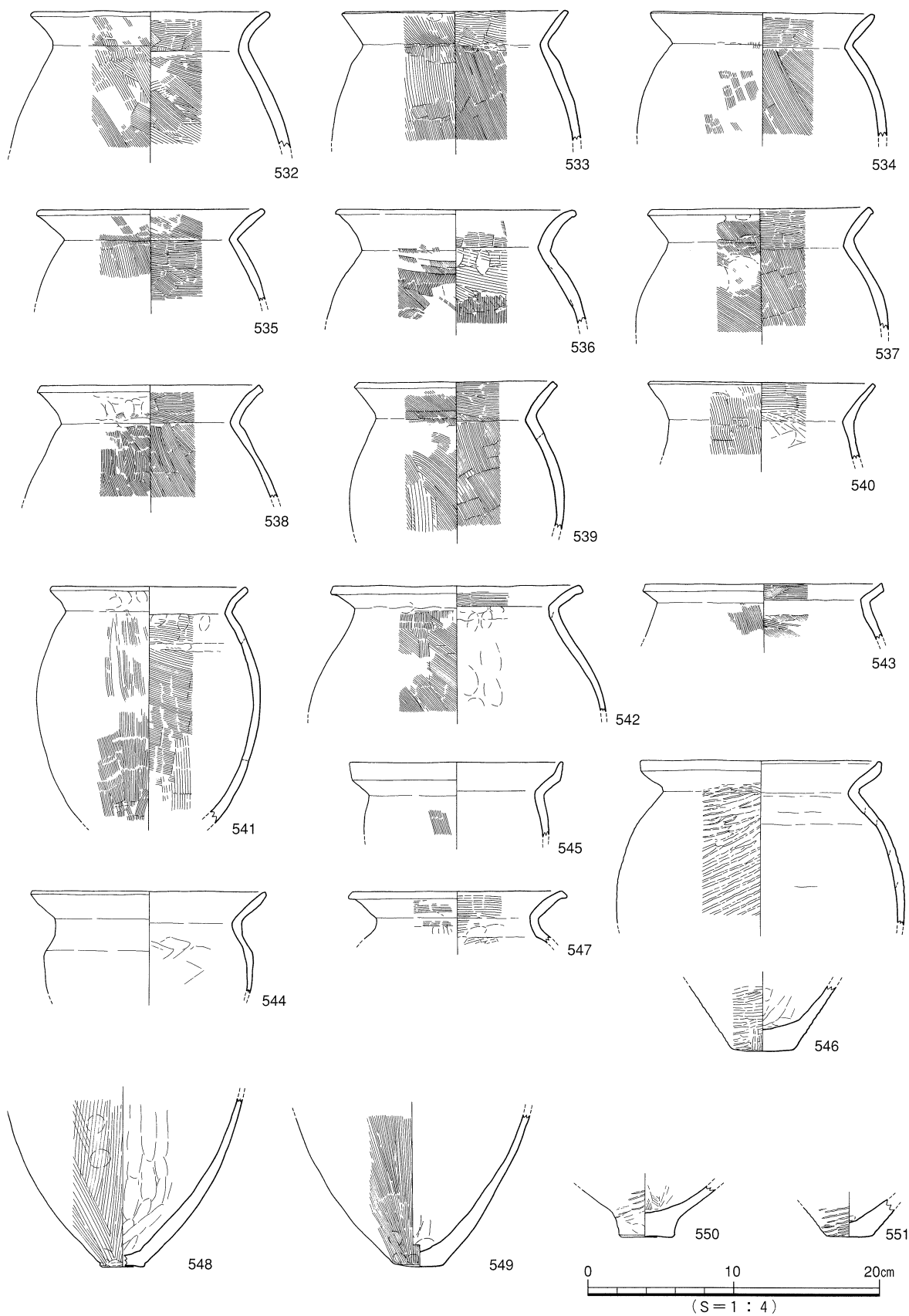
627は須恵器で、長頸壺になる。628～633は近世の土器で、628は鍋、629～633は羽釜になる。



第58図 X4Y2出土遺物実測図(1)

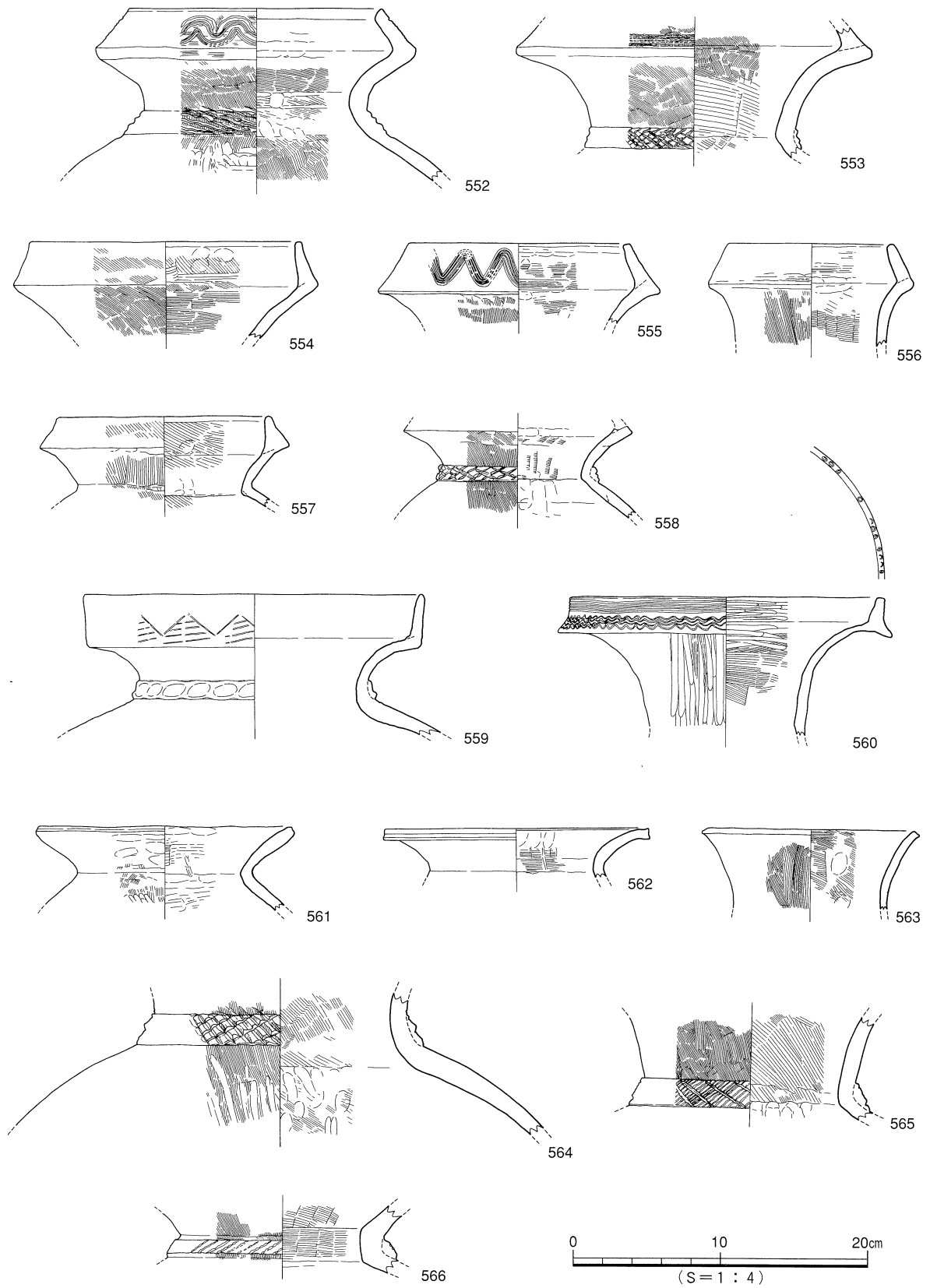


第59図 X4Y2出土遺物実測図(2)

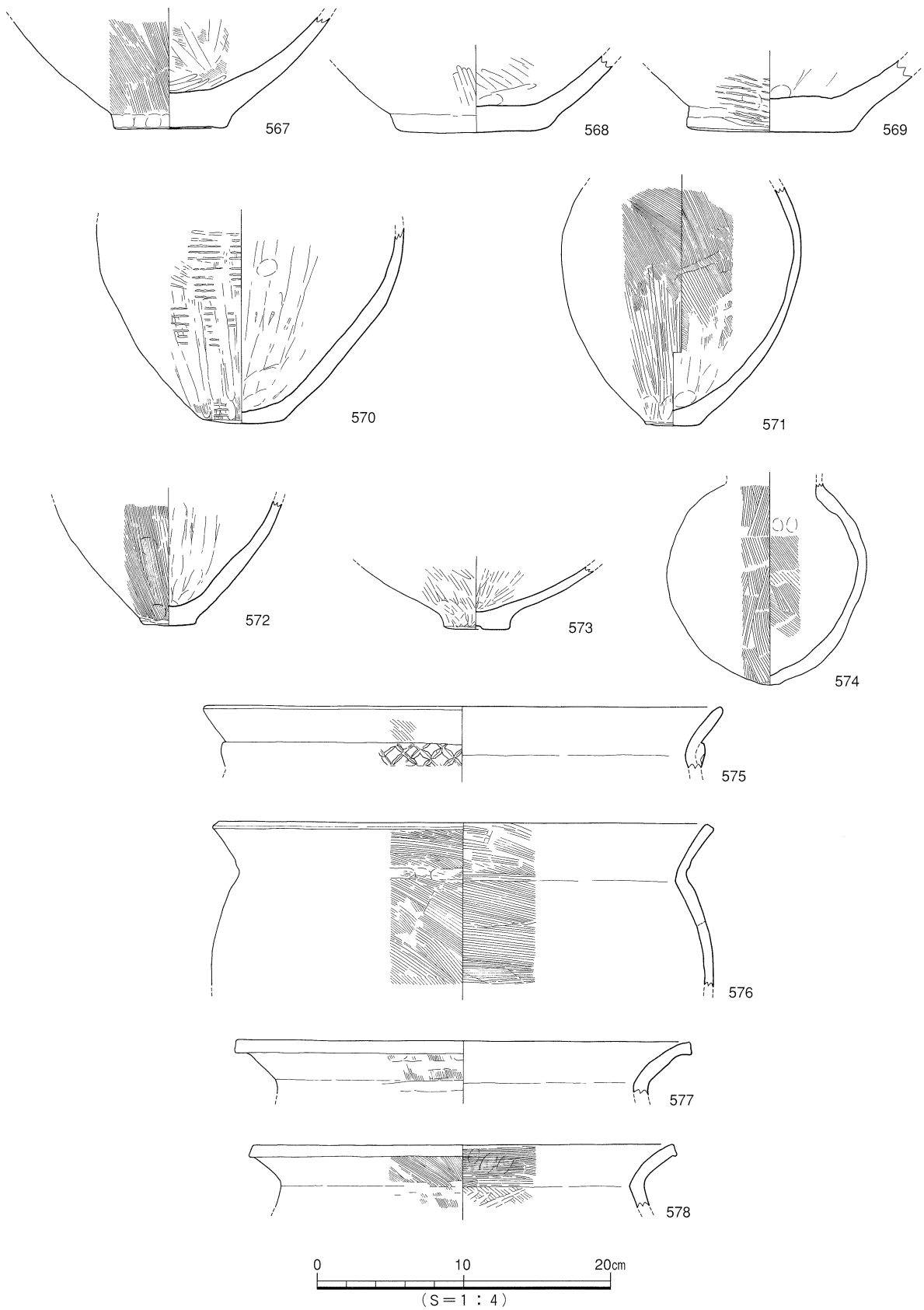


第60図 X4Y3出土遺物実測図(1)

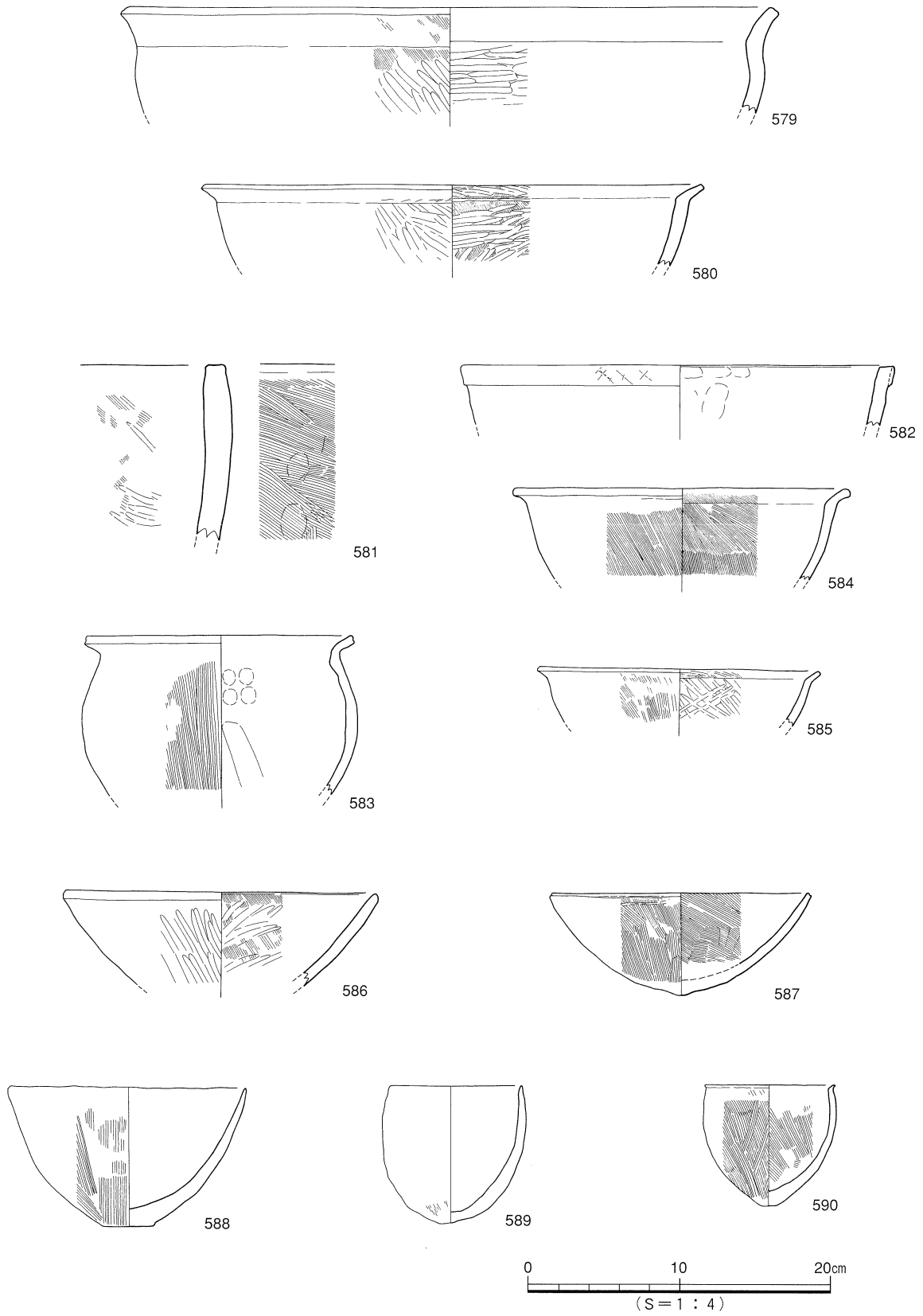
遺構と遺物



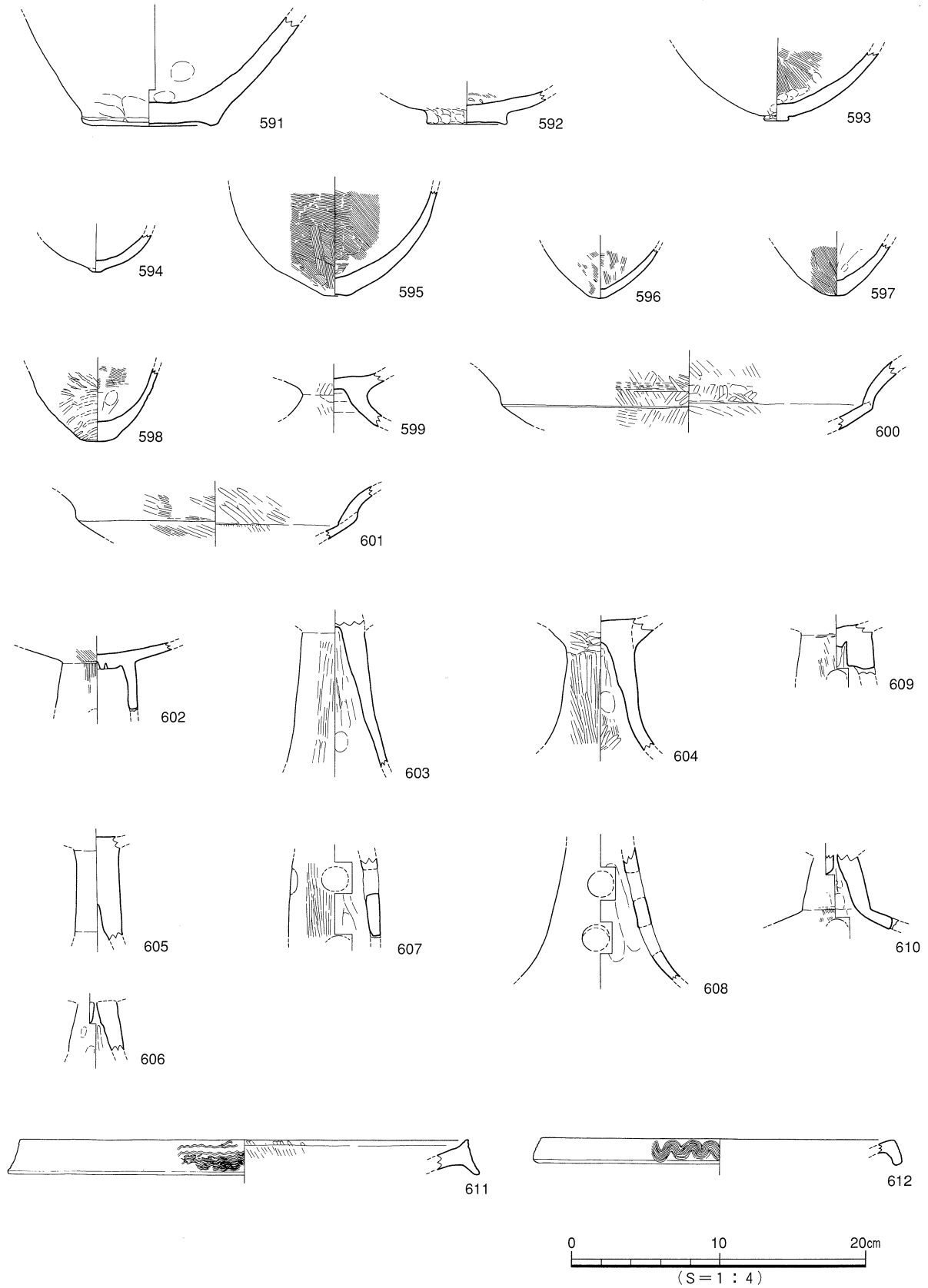
第61図 X4Y3出土遺物実測図(2)



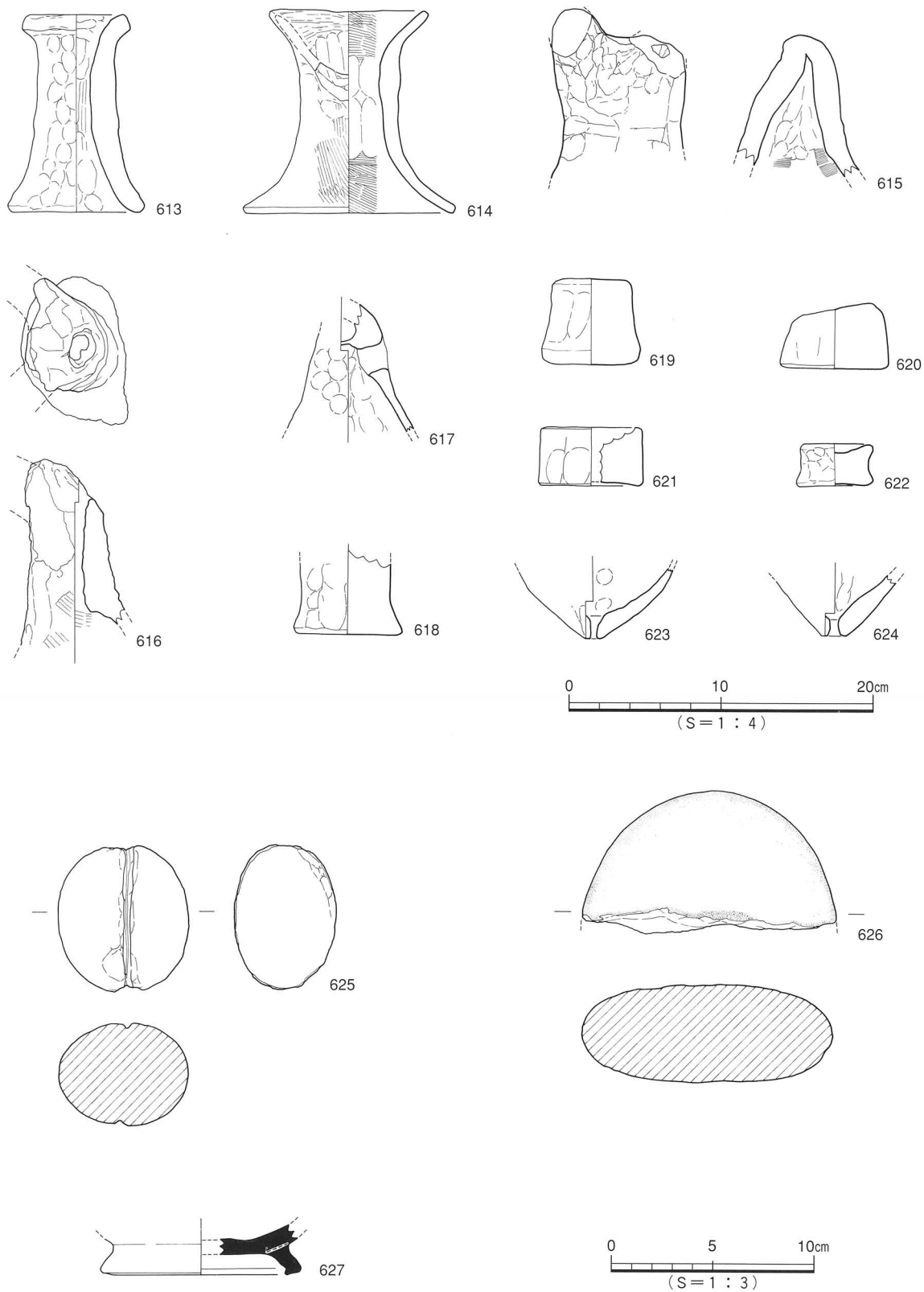
第62図 X4Y3出土遺物実測図(3)



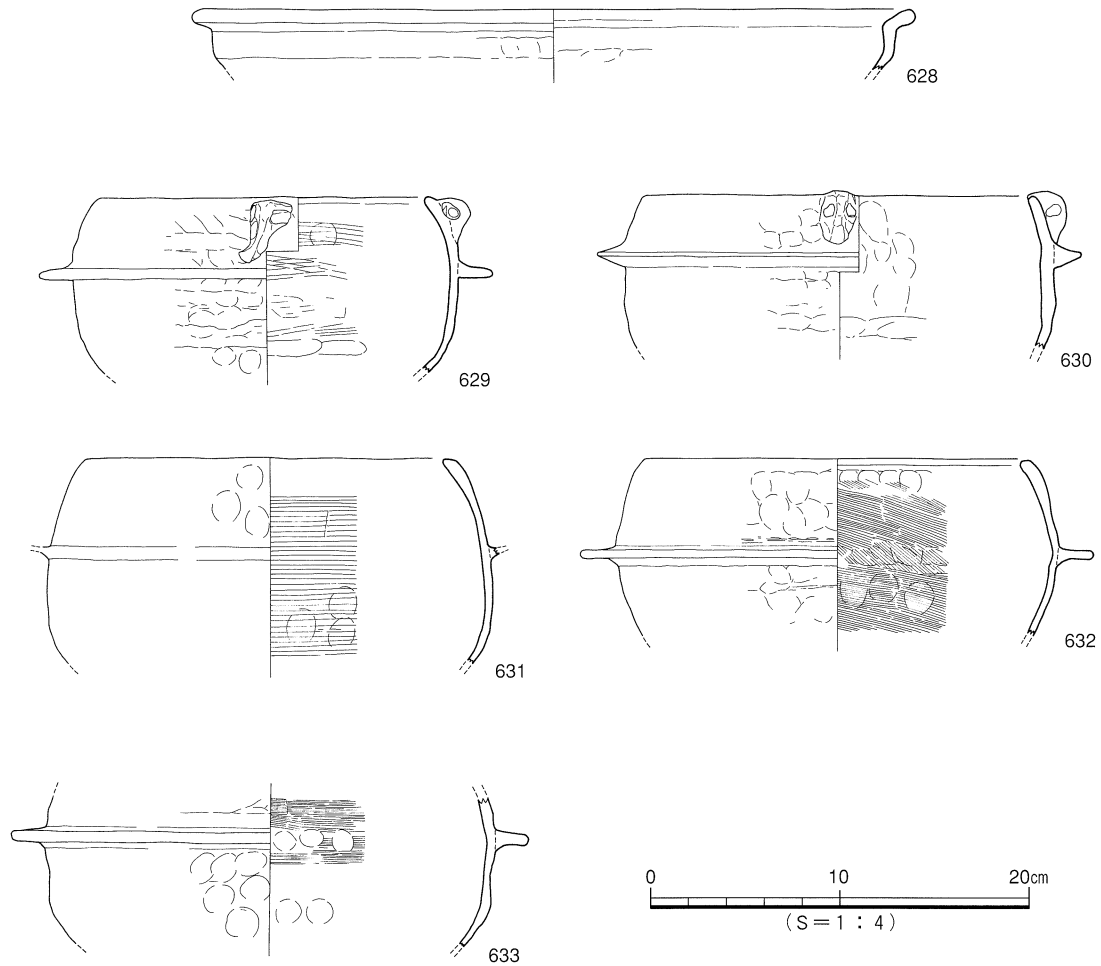
第63図 X4Y3出土遺物実測図(4)



第64図 X4Y3出土遺物実測図(5)

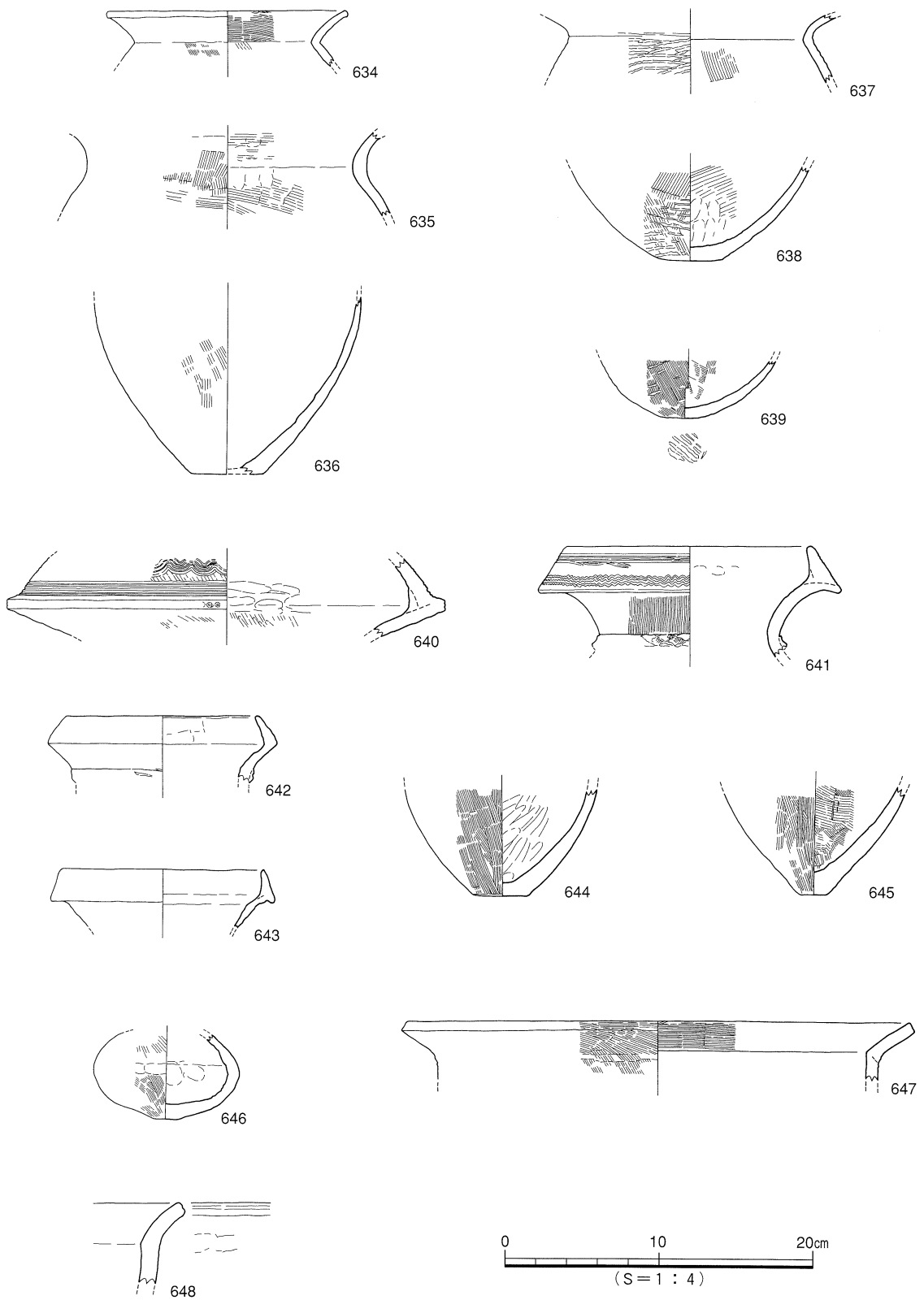


第65図 X4Y3出土遺物実測図(6)

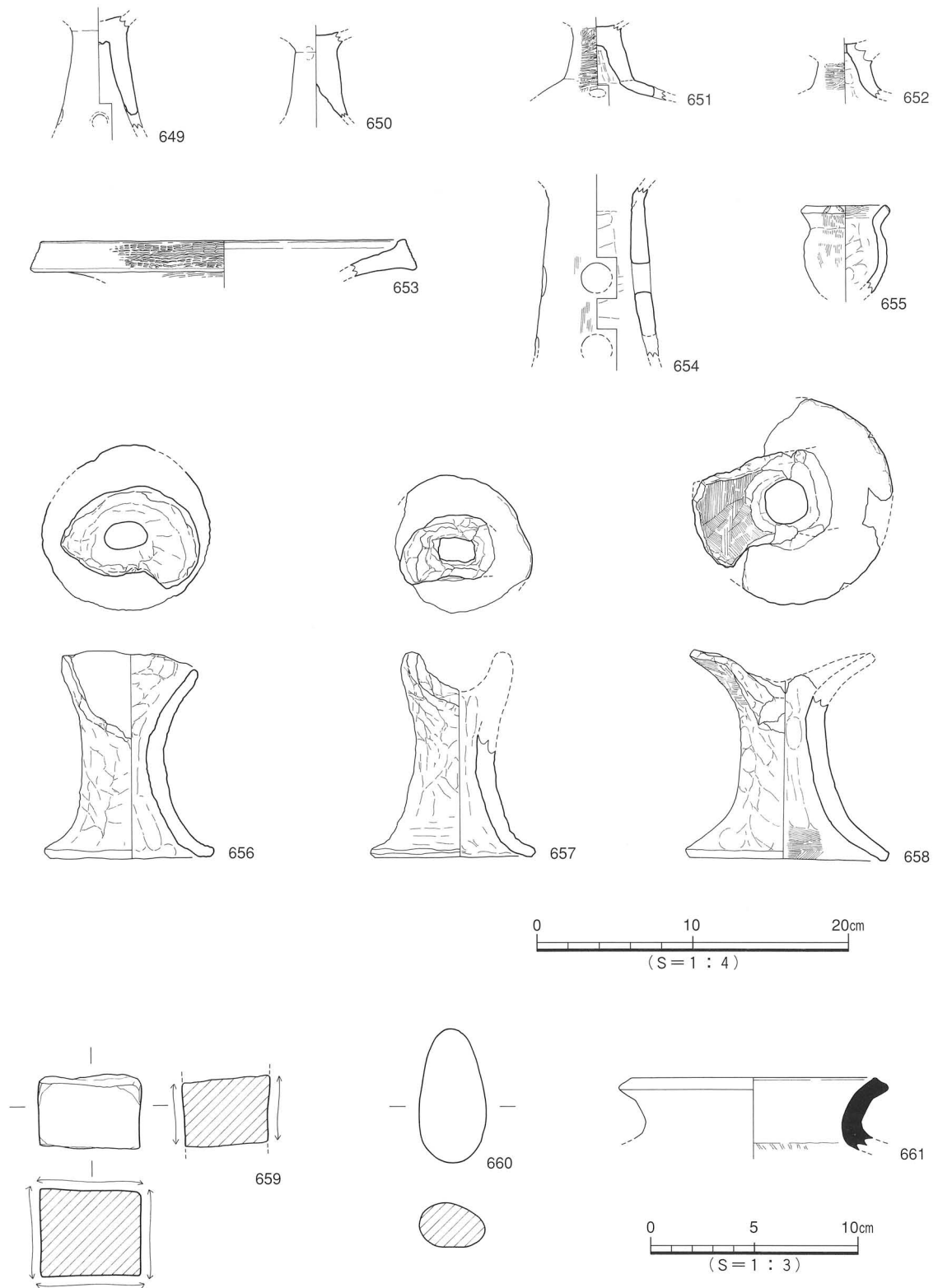


第66図 X4Y3出土遺物実測図(7)

X 4 Y 4 出土品 (第67・68図634～661) : 溝1条を検出しているグリッドで、土器26点、石器2点を図化した。634～658は弥生土器である。634～639は甕形土器で、637～639はタタキ痕がみられる。640～646は壺形土器で、640～643は複合口縁壺になる。647・648は鉢形土器で、647は大型品になる。649～652は高坏形土器、653・654は器台形土器、655はミニチュア品、656～658は支脚形土器である。659・660は石器である。659は砥石で、砥面を4面もつ。660は用途不明品で、62.7g。661は須恵器で、壺の口縁部。

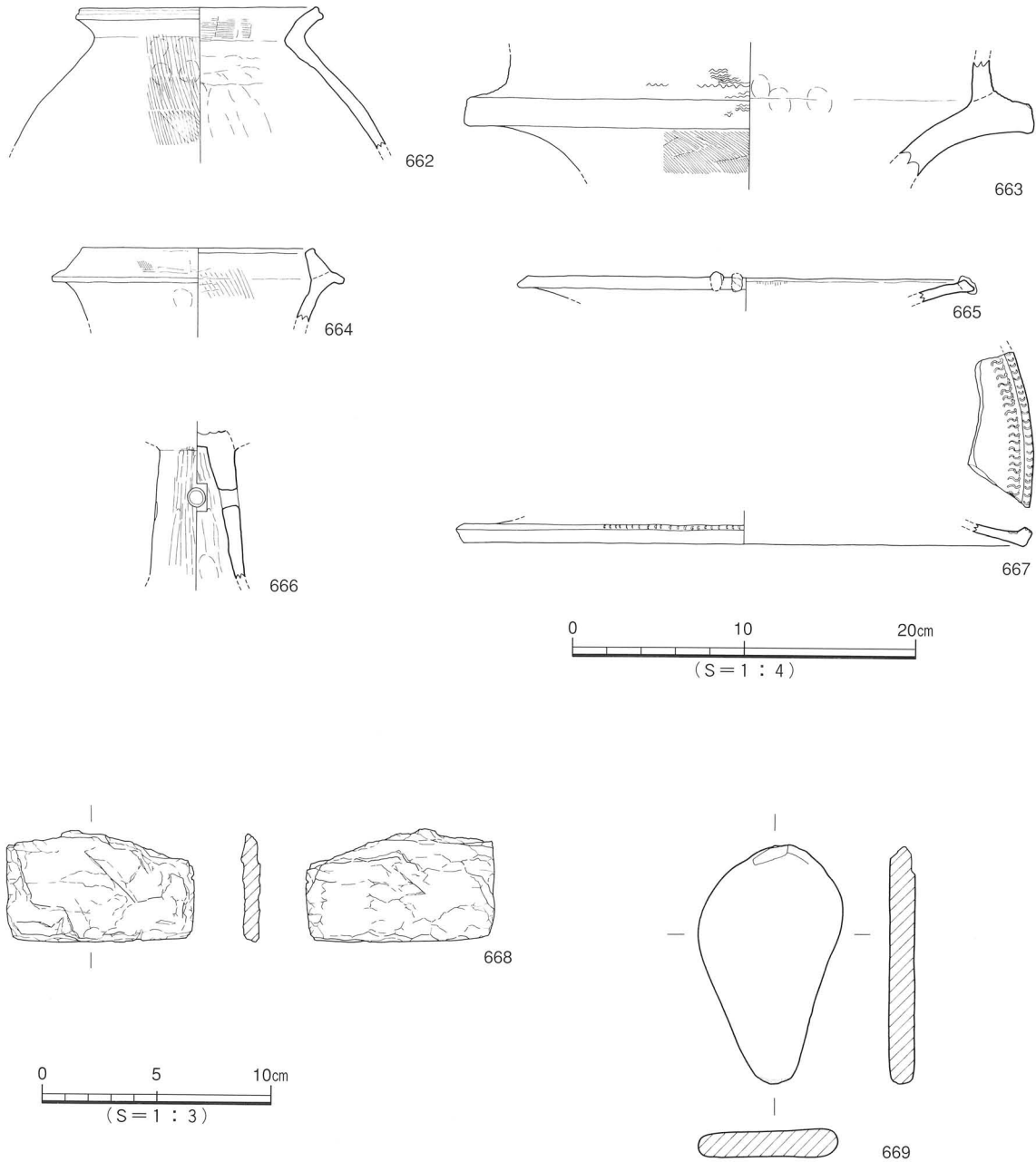


第67図 X4Y4出土遺物実測図(1)



第68図 X4Y4出土遺物実測図(2)

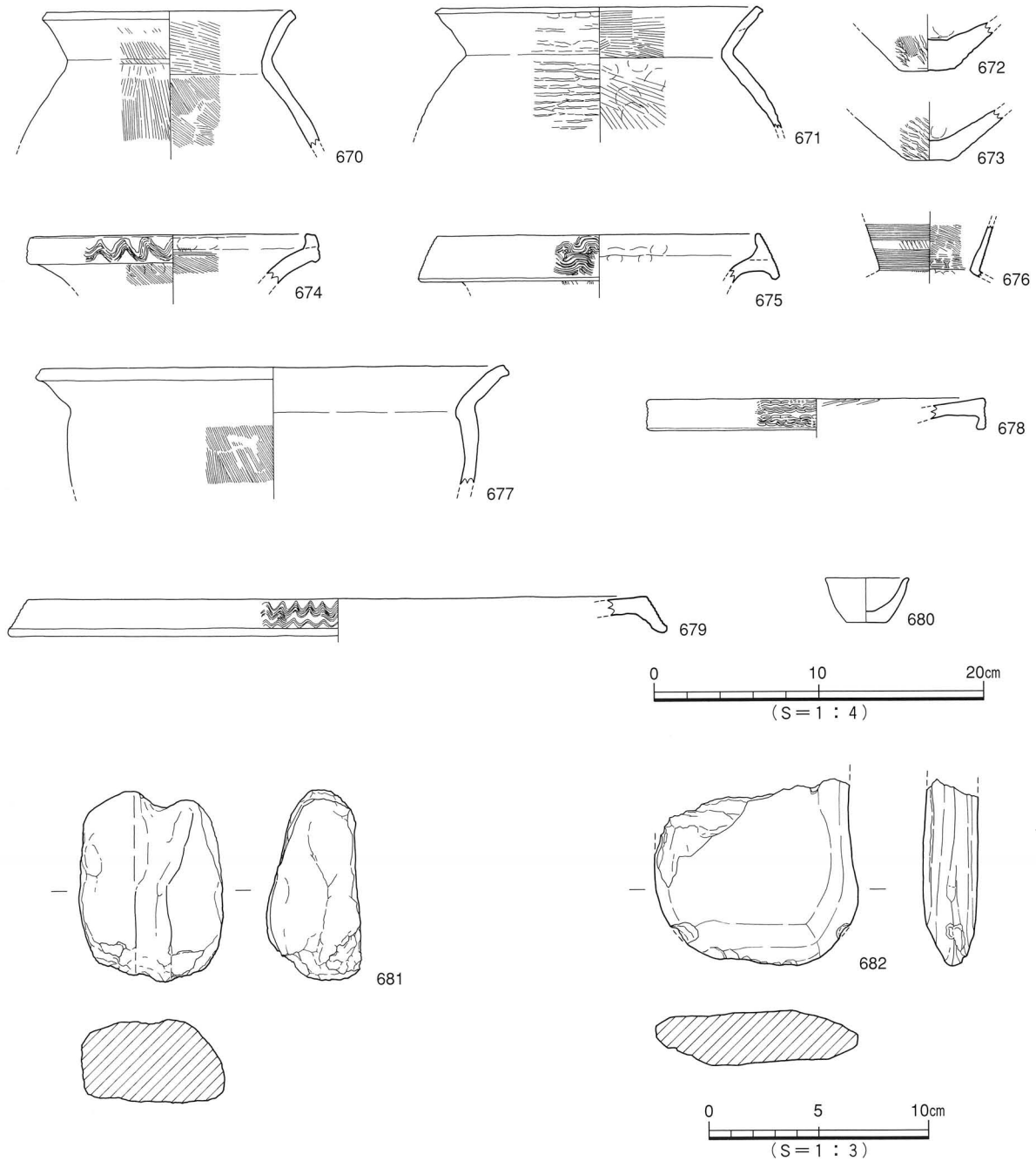
X 4 Y 5 出土品（第69図662～669）：溝 1 条を検出しているグリッドで、土器 6 点、石器 2 点を図化した。662は甕形土器、663・664は複合口縁壺、665・666は高坏形土器、667は器台形土器になる。668・669は石器である。668は石庖丁の未製品で、緑色片岩、55.0 g。669は用途不明品で、103.3 g。



第69図 X4Y5出土遺物実測図

X 4 Y 6 出土品（第70図670～682、図版 9）：溝 1 条を検出しているグリッドで、土器11点、石器 2 点を図化した。670～673は甕形土器で、671～673はタタキ痕がみられる。674～676は壺形土器で、674・675は複合口縁壺、676は細長頸壺になる。677は鉢形土器、678・679は器台形土器、680はミニチュア品である。

681・682は石器である。681は石錘で、一部を欠く。幅広い溝をもち、294.6 g。682は用途不明品で、緑色片岩、315.0 g。



第70図 X4Y6出土遺物実測図

X4Y4・5出土品（第71図683～685）：溝1条を検出しているグリッドで、土器2点、石器1点を図化した。683・684は須恵器で、683坏蓋、684は甕になる。

685は用途不明の石器で、30.8g。

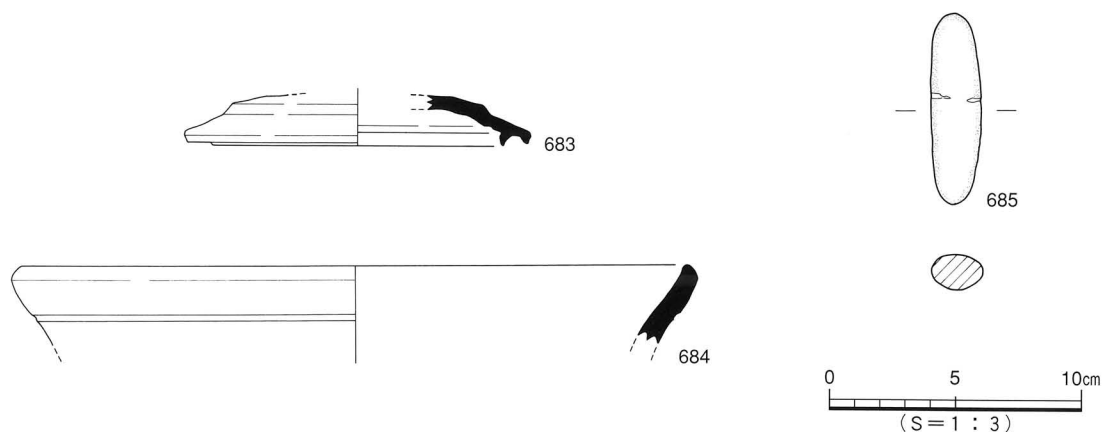
2) 出土地点不明品（第72～74図686～715）

注記が読み取れなく、出土地点不明な遺物の中から、特徴のある土器16点と石器14点を掲載する。

土器：686～689は甕形土器で、688はタタキ痕がみられ、689は口縁部形態と内面調整（ヨコ方向のケズリ）が在地のものと異なる。690～694は壺形土器、695は高坏形土器、696は畿内系の小型器台形土器、698～700は支脚形土器、697はミニチュア品である。

715は須恵器で、坏蓋になる。

石器：701・702は凹石で、701は1395g。703は台石状の破片で、570g。704は磨石で、1390g。705は敲打具で、555.0g。706～708は扁平な棒状の石器で、706は450.0g、707は緑色片岩、175.0g、708は砥石。709・710は円球状の石器で、709は226.0g、710は136.7g。711は扁平な円盤状の石器で、6.5g。712はT字状の石器で、32.2g。713は伐採斧の未製品で、安山岩、410.0g。714は緑色片岩の石器素材になる。



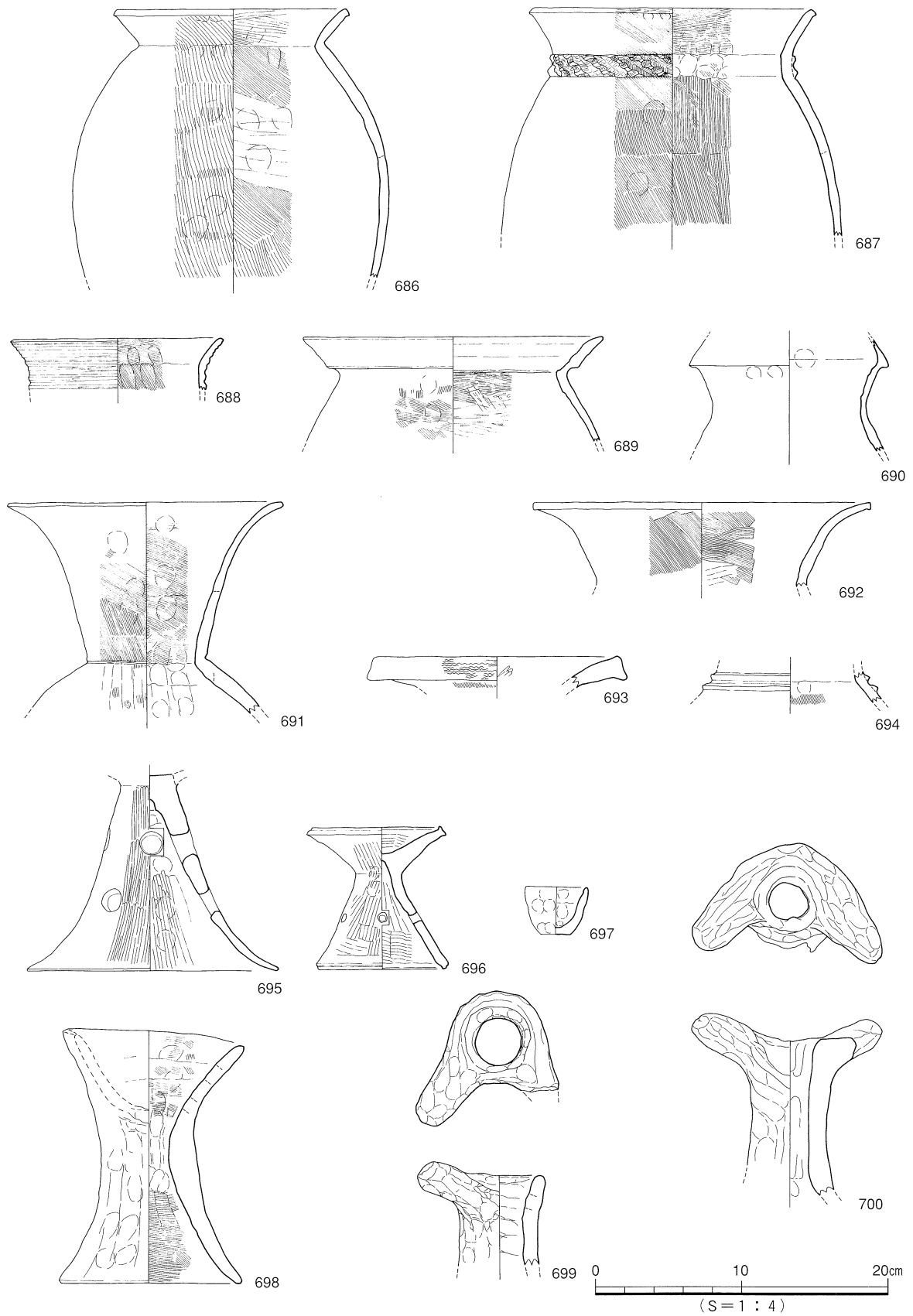
第71図 X5Y4・5出土遺物実測図

(8) 参考品（第75図716～728）

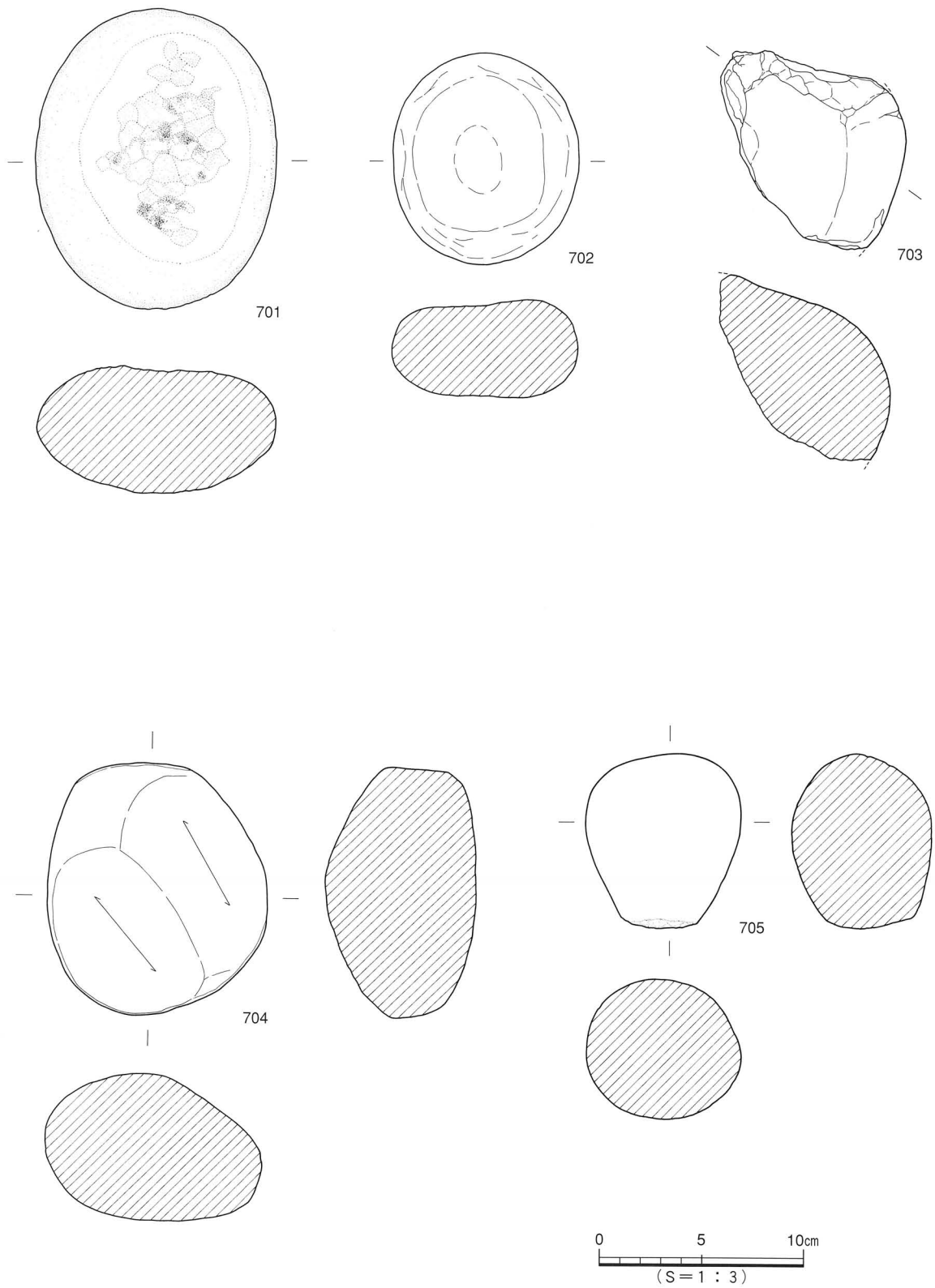
保管の不備から、出土地点不明な鳥越遺跡か、本調査地か判明していないものである。

土器：716・717は甕形土器で、多條の沈線文をもつ。718～720は複合口縁壺、721は大型の鉢形土器、722～725は高坏形土器、726は器台形土器である。

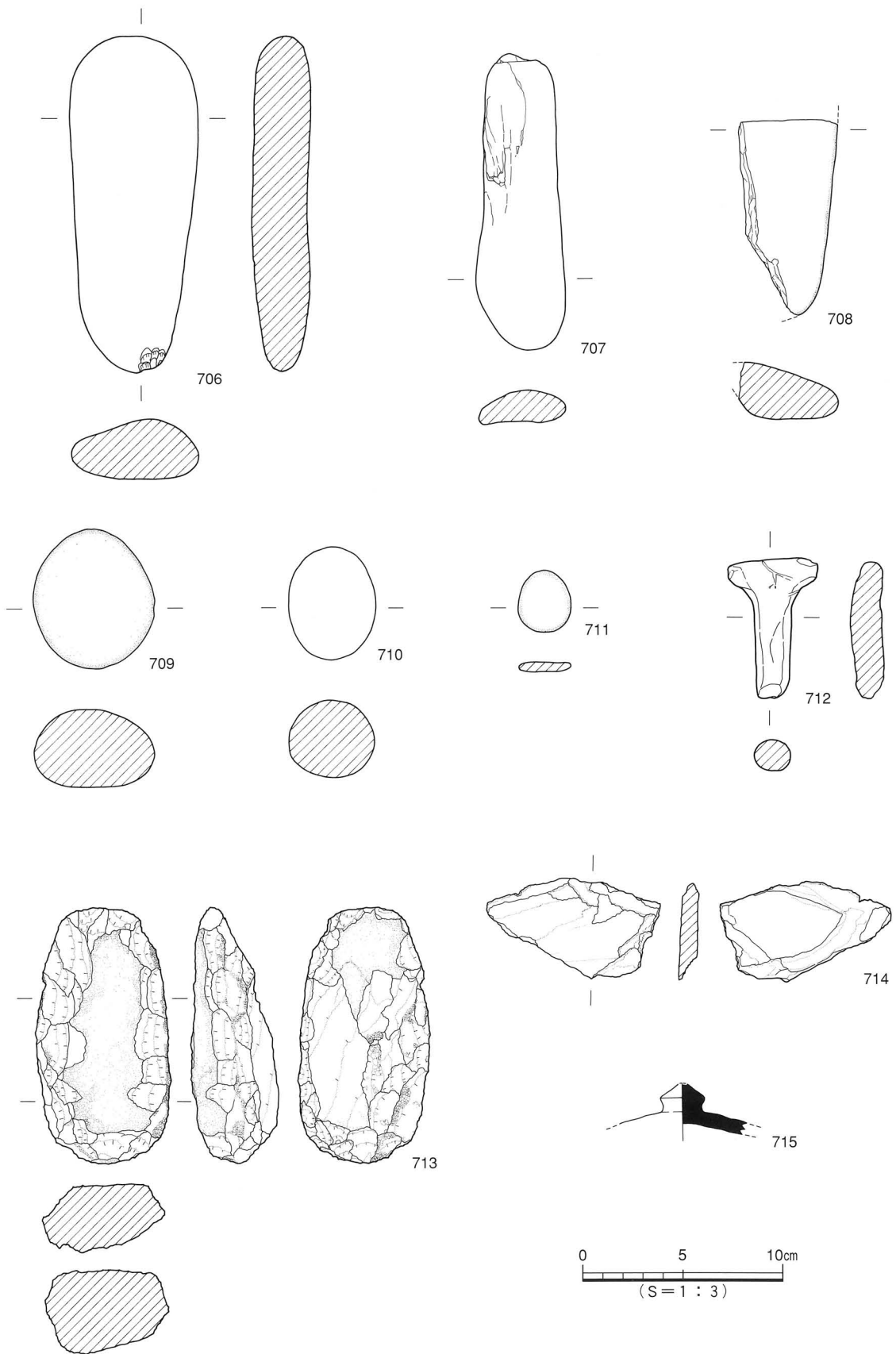
石器：727は敲打石で、花崗岩、312.0g。728は緑色片岩の石器素材になる。



第72図 地点不明遺物実測図(1)

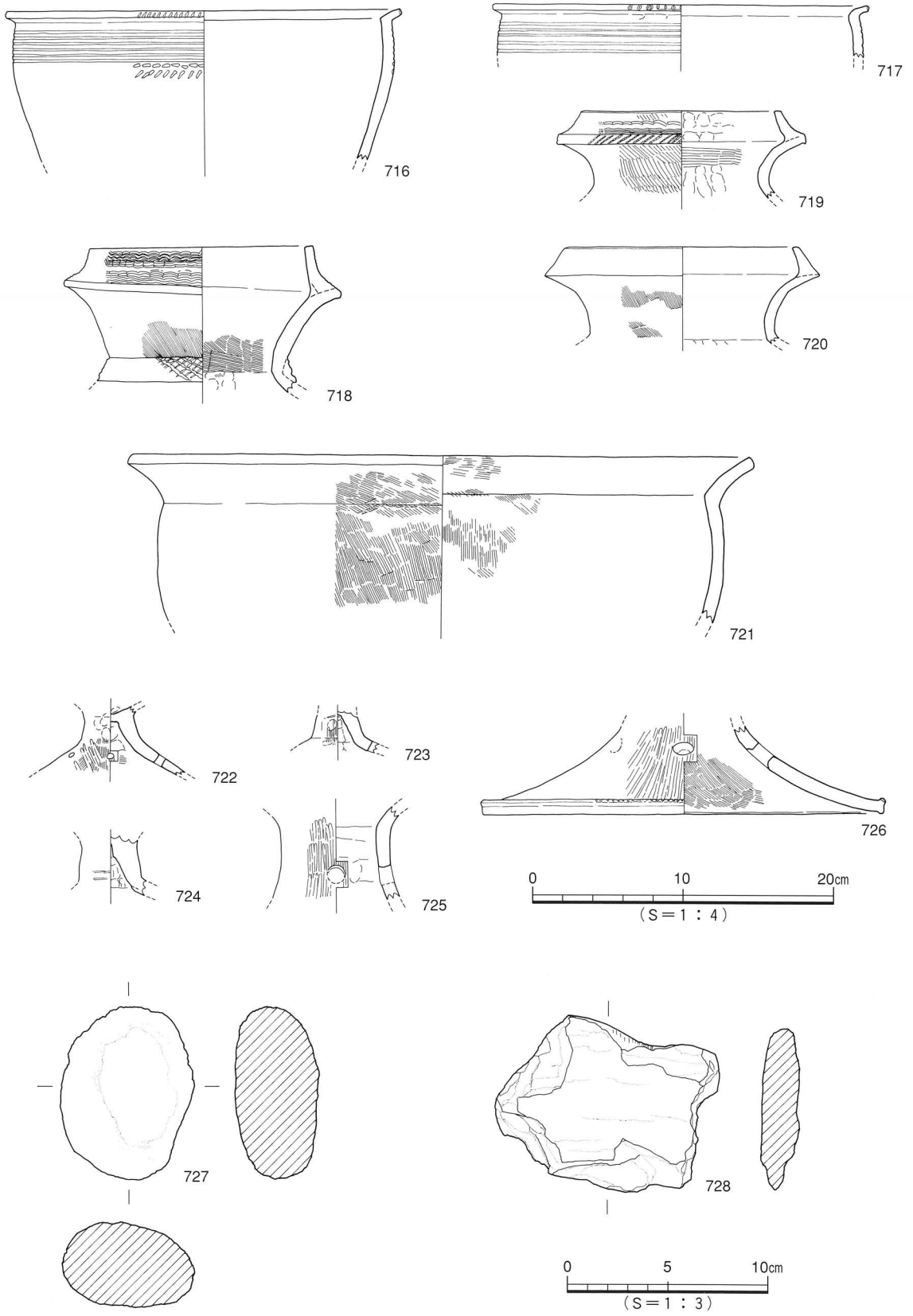


第73図 地点不明遺物実測図(2)



第74図 地点不明遺物実測図(3)

遺構と遺物



第75図 1次か2次か出土地点不明遺物実測図

4. 庄内甕の表面に見られる砂礫

(1) はじめに

津田中学校構内遺跡出土の畿内系甕形土器とされる土器片の表面に見られる砂礫を肉眼で観察した。ここでは、観察結果と砂礫の採取推定地について述べる。観察した資料は X 4 Y 2 と X 3 Y 3 との 2 資料である。これらの資料は、接合作業の結果、接合可能な同一資料になっている。

(2) X 4 Y 2 の庄内甕

色は褐色で、構成砂礫種は花崗岩、閃緑岩、長石、黒雲母、角閃石である。花崗岩は、灰白色で、粒形が角、粒径が 1 mm、量がごくごく僅かである。石英と長石とが噛み合っている。閃緑岩は、灰色で、粒形が角、粒径が 0.7 mm、量がごくごく僅かである。長石と角閃石とが噛み合っている。長石は、灰白色、粒状で、粒形が角、粒径が 0.2～1.5 mm、量が中である。黒雲母は、金色、板状で、粒径が 0.2～1.0 mm、量が僅かである。角閃石は茶褐色で、粒形が角、粒径が 0.5～1.5 mm、量が非常に多い。角閃石が非常に多く、鋭い角が残るものが多い。また、構成粒が粗いものから細かいものまであり、級化不良の砂礫である。八尾市恩智神社東方に露出する閃緑岩の媒乱砂礫に砂礫相的に酷似している。

(3) X 3 Y 3 の庄内甕 (第 50 図 374・巻頭図版 6)

色は褐色で、構成砂礫種は閃緑岩、長石、黒雲母、角閃石である。閃緑岩は、灰色で、粒形が角、粒径が 1.0 mm、量がごくごく僅かである。石英と角閃石とが噛み合っている。長石は、灰白色、粒状で、粒形が角、粒径が 0.2～1.0 mm、量が中である。黒雲母は、金色、板状で、粒径が 0.2～0.7 mm、量が中である。角閃石は黒色、茶褐色で、粒形が角、粒径が 0.2～1.0 mm、量が非常に多い。稀に、粒径が 6.0 mm に及ぶものもある。

角閃石が非常に多く、鋭い角が残るものが多い。また、構成粒が粗いものから細かいものまであり、級化不良の砂礫である。八尾市恩智神社東方に露出する閃緑岩の媒乱砂礫に砂礫相的に酷似している。

(4) 所見

砂礫構成から見れば、2 資料の甕はほぼ同質の砂礫構成を示し、八尾市中田遺跡付近を中心としてみられる河内型庄内甕の河内恩智としたタイプである。

(奥田 尚)

5. 小 結

本調査では弥生時代終末～古墳時代初頭、古墳時代後期、中近世に属する遺構と遺物を確認した。調査地は、斜面部と谷部からなり、斜面部には住居址が、谷部には溝や土器の集積が検出された。

弥生時代終末～古墳時代初頭：竪穴式住居址を6棟、溝2条、墓2基を検出した。

住居址は、傾斜面にあり、切りあいが多く、短期間での建て替えて、連続する建築とみられる。その順序は、出土遺物に差はなく、切り合い関係からSB1・3→SB7→SB2→SB6となる。住居構造は、検出時には、斜面高所部の壁体しか検出されていないため、多くは分からない。平面形態は四角形で、規模は推定で5～6mの建物になる。内部構造は、SB6では支柱穴が4本になりそうだが、それ以外の住居址の内部構造は検出できていない。

溝は、谷部に形成している。SD1とSD2は調査区の西端で、一本の溝が分岐した状況にあり、さらにSD2は調査区の中央で、幾筋にも岐れる。出土遺物も時期差はなく、溝は同時存在といえる。溝が細かく岐れている状況の意味がはっきりとしない。なお、出土遺物は土器が多数を占めるが、それらは破片であり、投棄品である。その一方では、溝の周辺に完形の土器が集中して検出される（土器群）地点もあった。これらは、いずれも据え置かれた状況が見て取れた。

墓は、土器棺2基を検出したが、土器の諸形状から時期差があるものではない。松山平野の弥生時代後期後半以降には、集落内に土器棺が数基検出される例は多い。

以上の住居址、溝、墓は、遺物から同時に存在していたとみられ、弥生時代終末～古墳時代初頭期の集落構造の一端が判明したものと見える。

遺物では、注目すべきものが出土している。X3Y3からは、生駒西麓産胎土の庄内式土器の甕形土器が1点出土した。この土器は、近畿の研究者によれば、庄内3式に比定される。X3Y3出土の地元土器は、松山平野の土器編年では梅木後期Ⅲ期の古段階に比定されるもので占められている。その共伴関係が、出土状況からして絶対的ではないが、評価できないものではない。つぎなる資料にて、検証されよう。

また、形状や調整が近畿・讃岐・備後・山陰地方に似たものが10点あまり出土している。外来系の模倣土器の類に属するものである。

さて、本調査地からは、漁網錘が13点出土し、石錘11点、土錘2点がある。石錘には、平面形態、溝の形状、重量に各種のものがある。松山平野の漁網錘出土例は第2章第7図に掲載したが、出土量・形態ともに本例は最も豊かである。

古墳時代後期：住居址3棟を検出した。溝1基と土坑3基は、この時期であるかは確定できない。住居址の立地や形状は、弥生時代終末～古墳時代初頭のそれと同様な状況を示している。住居内部の構造は、支柱穴が4本と、カマドや炉址がある。集落構造は、地形上これより西には展開せず、東側に広がりを見せることが分かる。今後の調査に期待したい。

中近世：遺物は、出土したものの、遺構の検出には至っていない。中世集落の中心は、第5章の北斎院地内遺跡にある。

津田中学校構内遺跡 1次調査地

表 2 竪穴式住居址一覧

竪穴 (SB)	時 期	平面形	規 模 (m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積 (㎡)	主柱穴 (本)	内部施設				周壁溝	備 考
						高床	土坑	炉	カマド		
1	弥生後期	四角形	1.31×1.04×0.09~0.25	1.36							SB7に切られる
2	弥生終末	四角形	4.70×1.50×0.38~0.44	6.20							SB3・7を切る SB5・6に切られる
3	弥生終末	四角形	- ×0.80×0.06~0.14								SB2・5に切られる
4	6 C後半	四角形	4.90×4.50×0.3	22.05	4		○		○	○	
5		四角形	5.20×4.90×0.15	25.48			○	○		○	SB2・3・6を切る SD4・SK3に切られる
6		四角形	2.40×2.00×0.09	4.80							SB2を切る SB5・SK3に切られる
7	弥生終末	四角形	2.60×1.70×0.19~0.25	4.42							SB2に切られる SB1を切る
8	弥生終末	四角形	4.00× - ×0.1~0.16								
9		四角形	4.70×3.80×0.15	17.86	4			○		○	

表 3 溝一覧

溝 (SD)	地 区	断面形	規 模 (m) 長さ×幅×深さ	方向	出土遺物	時 期	備 考
1	X3・4 Y2~6	逆台形	36.0×0.6×0.08~0.3	東西	弥生 石器		SD2に合流する
2	X4・5 Y2~5		31.0×0.7×0.09~0.21	東西	弥生 石器		SD1に合流する
3	X3Y5		7.0× - ×0.04~0.15	北西から南東	弥生		
4	X2Y4		3.0× - ×0.03~0.08	南北	なし		SB5を切る

表 4 土坑一覧

土坑 (SK)	地 区	平面形	規 模 (m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積 (㎡)	出土遺物	備 考
1	X1Y4	台形状	2.0×1.0×0.22	2.0	なし	SB4を切る
2	X1Y4	三角形	0.85×0.42×0.17	0.3	なし	SK1を切る
3	X2Y3	三角形	1.1×0.78×0.27	0.4	なし	SB5・6を切る
4	X3Y4	円 形	- ×0.36×0.12	0.1	なし	
5	X3Y4	円 形	- ×0.5×0.07	0.19	なし	
6	X3Y4	円 形	- ×0.6×0.15	0.28	なし	
7	X3Y4	円 形	- ×0.7×0.21	0.38	なし	
8	X3Y5	円 形	- ×0.55× -	0.23	なし	

第4章

津田中学校構内遺跡

— 2次調査地 —

第4章 津田中学校構内遺跡2次調査地

1. 調査の経過

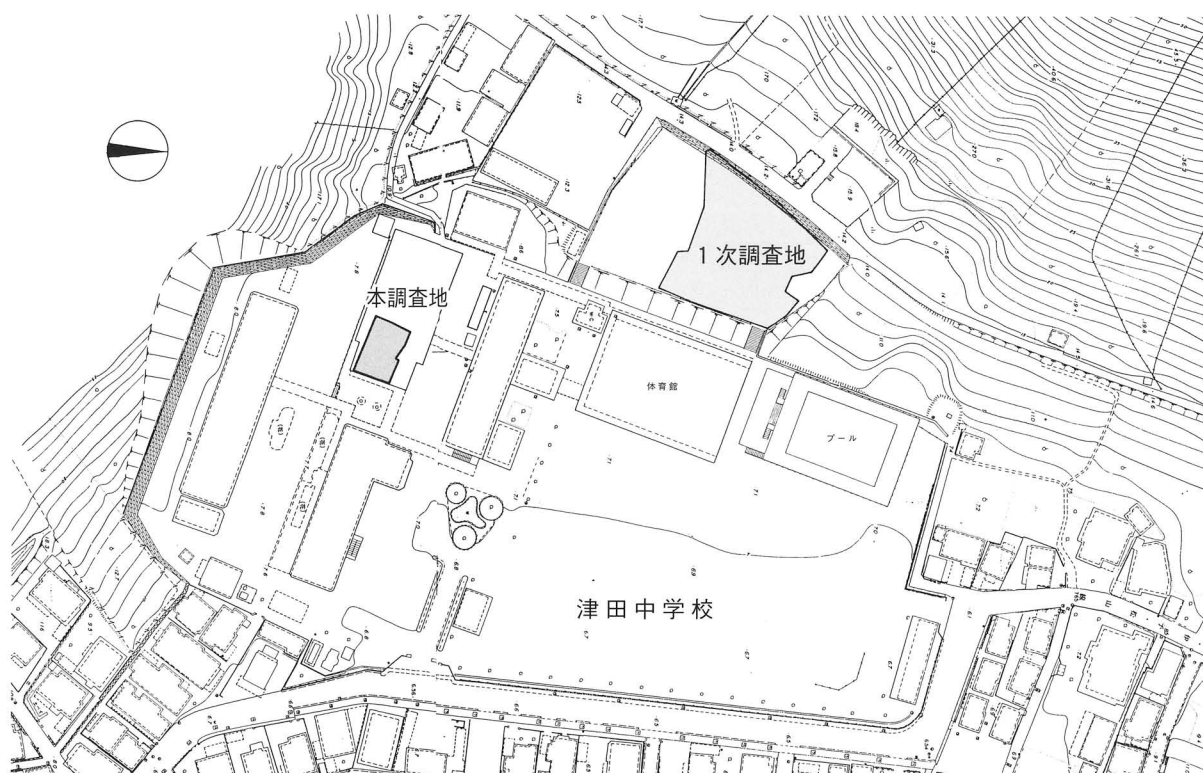
(1) 調査・報告の経緯

調査は、津田中学校構内（松山市北斎院町1106番地）の校舎増築に伴う緊急調査で、期間は昭和60年5月20日から同年7月10日までである。

さて、本遺跡の名称は、第3章津田中学校構内遺跡の「1. 調査の経過」で触れたように、遺跡名を改訂せざるをえない状況にある。報告に際して遺跡名は『津田中学校構内遺跡2次調査地』とするものである。

(2) 調査組織

調査地	松山市北斎院町1106番地（松山市立津田中学校構内）
遺跡名	津田中学校構内遺跡2次調査地
調査期間	昭和60年5月20日～同年7月10日
調査面積	555m ²
調査担当	西尾幸則



第76図 調査地位置図（S = 1 : 2,000）

2. 層位 (第77図)

調査地は、東西に延びた丘陵の傾斜地にあたる。地表面の標高は7mで、調査地は現在の宮前川から260mの位置にある。

層位は、7層の基本層序を設定した。

第Ⅰ層は造成土で、50～80cmを測る。

第Ⅱ層は青灰色土で、粘性がある。8～16cm堆積する。

第Ⅲ層は褐色土で、粘性がある。8～24cm堆積する。

第Ⅳ層は暗褐色土で、粘性がある。6～36cm堆積する。

第Ⅴ層は黒色土で、粘性がある。14～40cm堆積し、遺物を包含する。

第Ⅵ層は黒色土で、8～64cmを測る。弥生土器を多く含む。

第Ⅶ層は黄褐色土で、基盤層になる。

地形は、南西部が最も高く、北西部に向けて急激に低くなる。第Ⅴ層の高低差は、7cmになる。この結果、第Ⅴ層と第Ⅵ層は、高所部の南西部では検出されない。

遺構は第Ⅵ層と第Ⅶ層上面で検出し、遺物は第Ⅵ層の出土量が多数を占める。ただし、遺構と遺物は、検出および出土の層位が記録として残っていないものもある。

各層の時期は、古墳時代の須恵器が第Ⅵ層で出土していることから、第Ⅵ層は6世紀以降の堆積層になる。第Ⅴ層以上の堆積時期は、判断する資料がない。

3. 遺構と遺物

検出遺構は古墳時代後期（6世紀）以降の畦畔2条、土坑4基、小穴9基、落ち込み1基である。

(1) 畦 畔

畦畔は2条を検出した。

畦畔1 (第78図)

調査地を北西から南東に向けてはしり、調査区外にいたる。第Ⅵ層の上であり、第Ⅴ層が覆う。また、畦畔1の下面ではSP1・2を検出している。規模は東西検出長18.6m、幅0.6～1.2m、高さ20cmを測る。断面形態は台形状で、上下2層の砂層からなる。

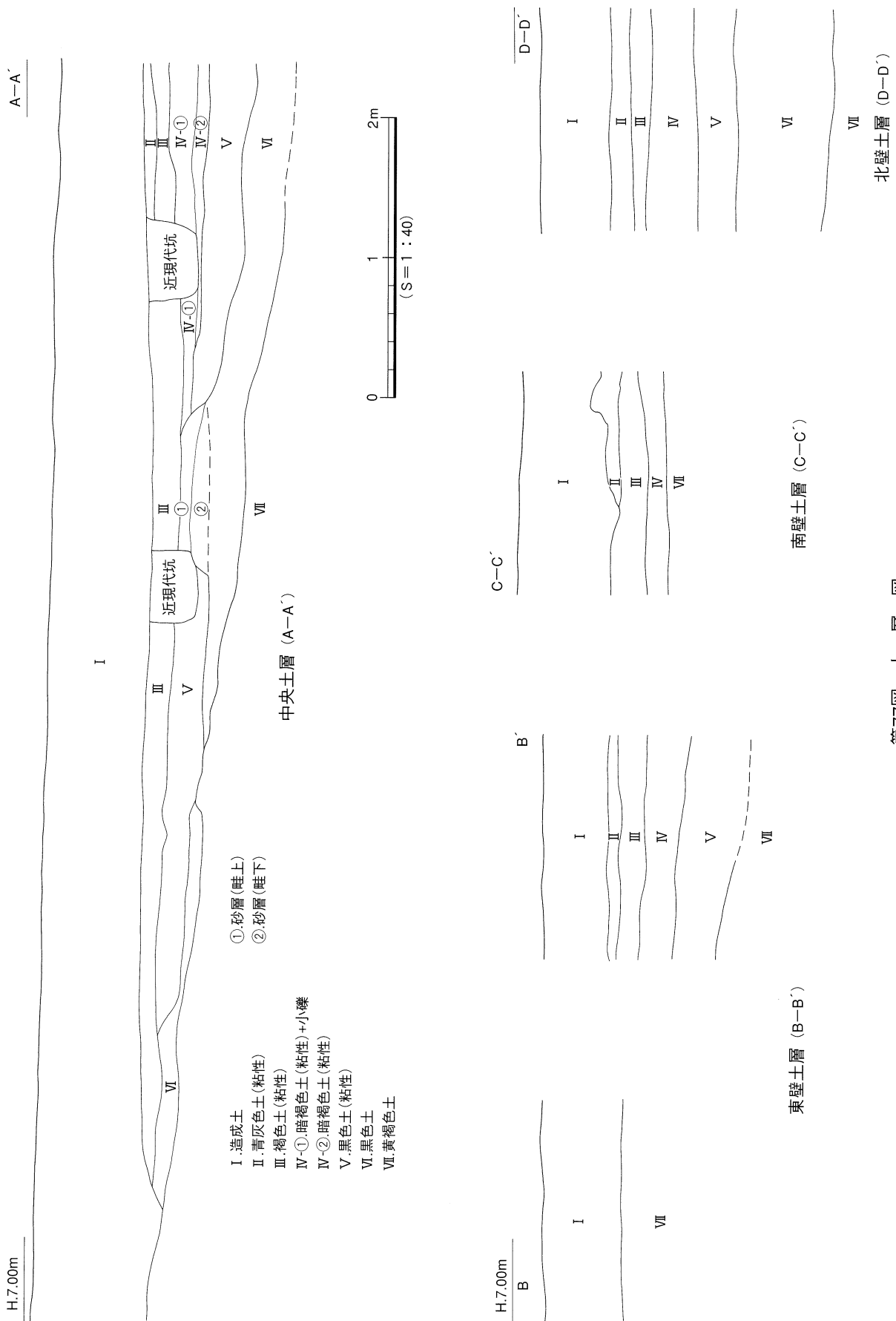
畦畔からの出土遺物はないが、畦畔の下にある第Ⅵ層からは遺物が出土している。

時期：畦畔の下にある第Ⅵ層では、古墳時代の須恵器が出土しているので、古墳時代後期以降になる。

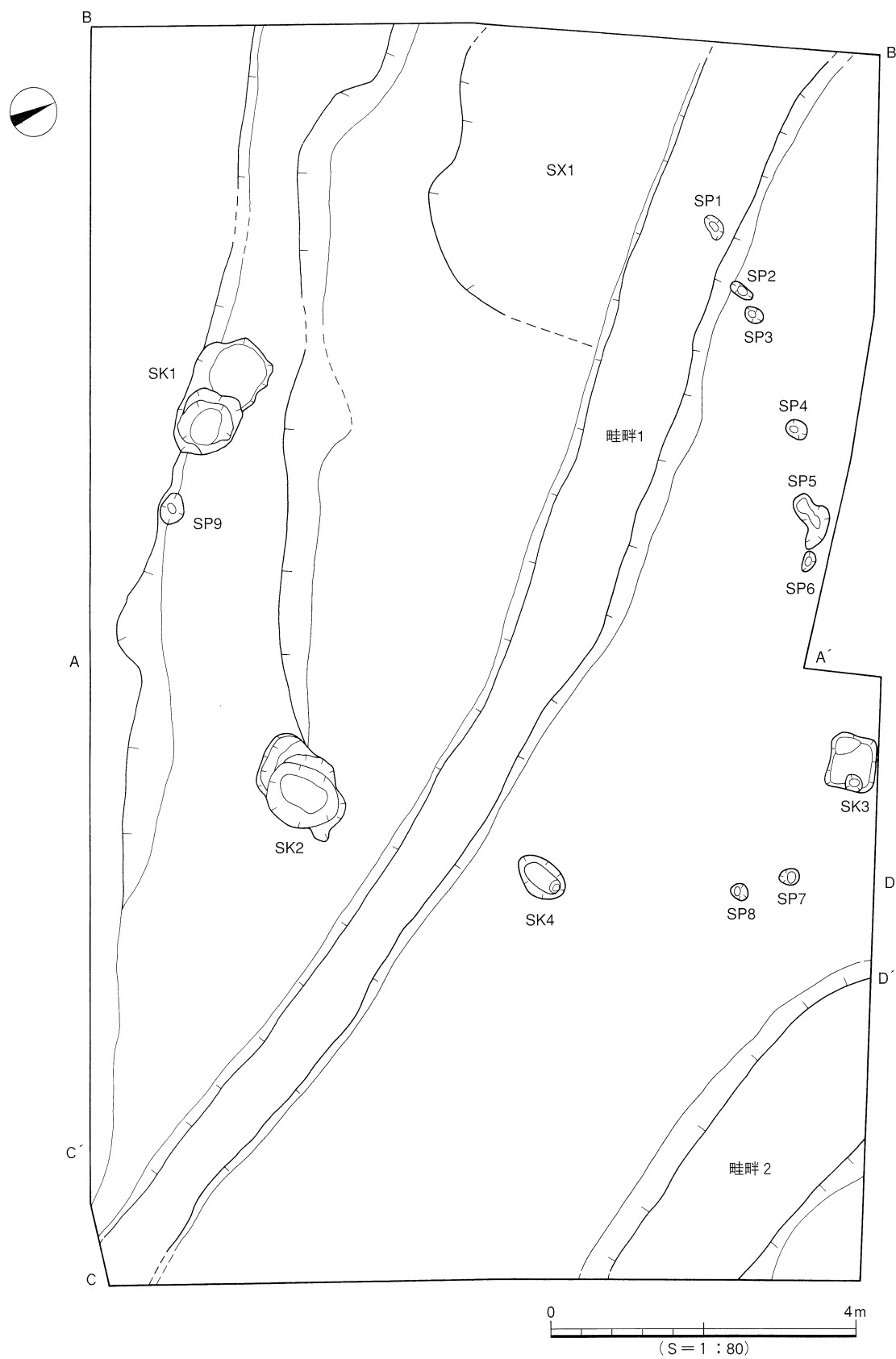
畦畔2 (第78図)

調査地の北東部にあり、調査区外にいたる。基本層序との関係は定かでない。規模は東西検出長4.4m、幅1.5mを測る（高さ記録なし）。断面形態は台形状である。出土遺物はない。

時期：検出状況から古墳時代後期以降とする。



第77図 土層図



第78図 遺構配置図

(2) 土 坑

土坑は、4基を検出した。

S K 1 (第79図)

調査地の南西部にあり、第Ⅶ層上面で検出した。ただし、第Ⅵ層との関係は定かでない。平面形態は不整形で、土坑2基が重複している可能性をもつ。仮に、2基あるものとして記述すると、東側は直径80～87cm、深さ25cm、西側は直径80～91cm、深さ8cmを測る。床面積は1.0m²である。遺物の出土はない。

時期：時期を特定する資料がない。

S K 2 (第79図)

調査地中央の南にあり、第Ⅶ層上面で検出した。ただし、第Ⅵ層との関係は定かでない。平面形態は円形状を呈し、規模は直径97～108cm、深さ8cmを測る。床面積は0.82m²である。遺物の出土はない。

時期：時期を特定する資料がない。

S K 3 (第78図)

調査地の北端中央にある（検出面は第Ⅵ層）。平面形態は長方形をなし、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸76cm、短軸64cm、床面積は0.38m²である（深さ記録なし）。遺物の出土はない。

時期：時期を特定する資料がない。

S K 4 (第78図)

調査地中央の西にある（検出面は第Ⅶ層）。平面形態は楕円形を呈し、規模は長軸72cm、短軸50cm、床面積は0.28m²である（深さ記録なし）。遺物の出土はない。

時期：時期を特定する資料がない。

(3) 小穴 (S P) (第78図)

用途不明の小さい穴が9基ある。

S P 1～6は、調査地の北西部に一列に並ぶように検出され、直径は26～60cmである。なお、S P 1・2は畦畔1の下で検出している。S P 7・8は、調査地の北東部にあり、2基の距離は80cmで、直径は22～28cmである。S P 9は、S K 1の北東1.0mにあり、直径は32～40cmである。

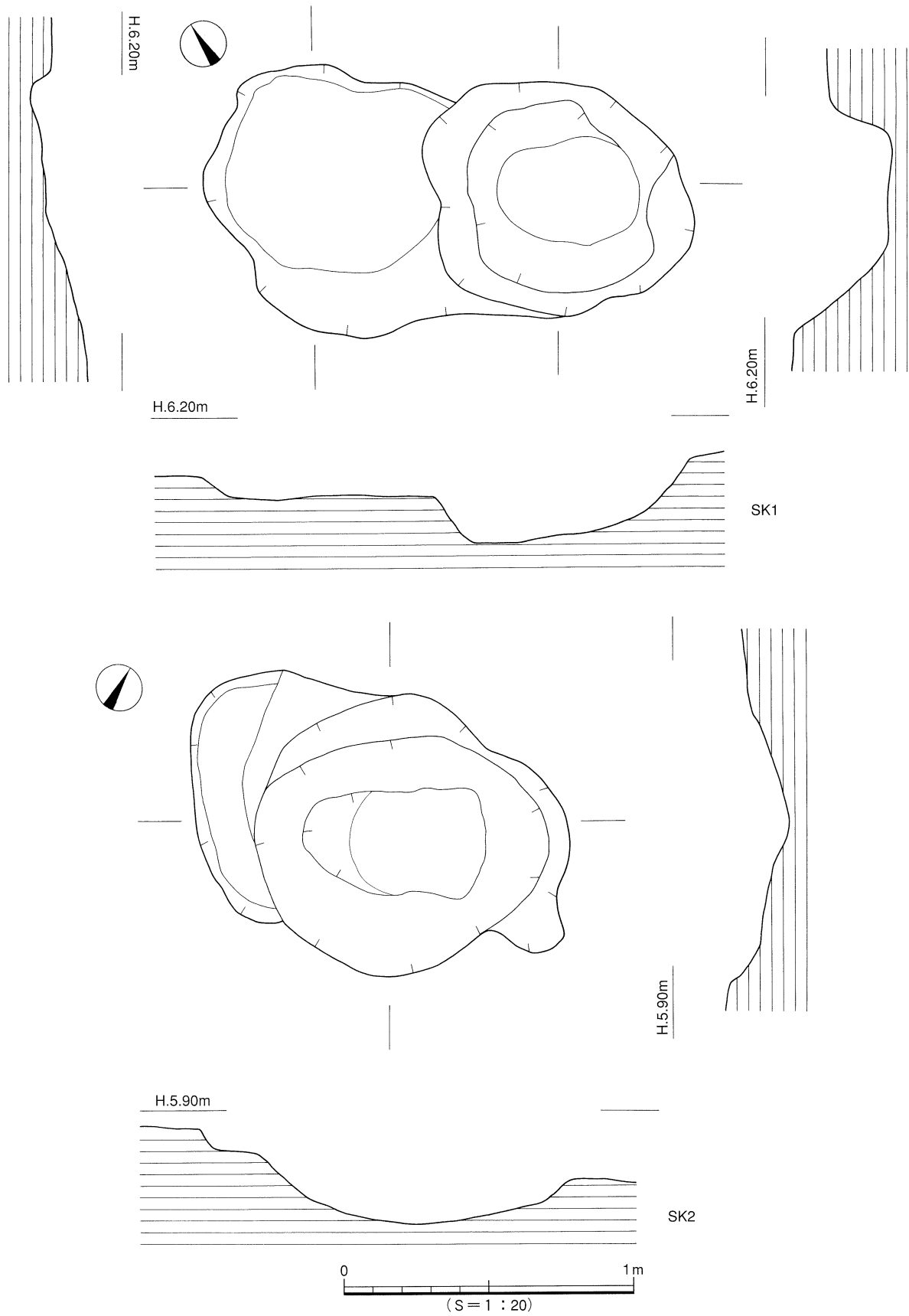
時期：S P 1・2の検出が畦畔1の下であるが、畦畔1の時期が特定されていない。したがって、S P 1～9の時期は特定するにいたらない。

(4) 落ち込み (S X) (第78図)

調査地の北西部で、畦畔1の下部にある。第Ⅶ層上面が緩やかに傾斜するもので、自然地形の落ち込みかもしれない。検出範囲は東西4.0m、南北3.8mである（深さ記録なし）。この落ち込みの埋土は第Ⅵ層で、弥生土器片が出土しているが、実測可能なものはない。

時期：第Ⅵ層が古墳時代の須恵器を包含しているので、古墳時代後期以降になる。

津田中学校構内遺跡 2次調査地



第79図 SK1・2測量図

(5) 第VI層出土遺物 (第80~84図、図版16)

第VI層からは、土器、石器、木器が出土している。このうち土器が最も多く、数点の須恵器を除くと弥生土器で占められている。

土器：須恵器には実測すべきものがない。1~63は弥生土器である。

1~25は甕形土器である。1・2は大型品で、1は胴上半部にタタキ痕がみられ、2には頸部に斜格子目の刻目突帯をもつ。3~5は頸部が締まるもので、5には胴上半部にタタキ痕がみられる。6~14は頸部内面に稜をもつもので、14には胴上半部にタタキ痕がみられる。15・16は口縁部が緩やかに外反するもので、15の肩部内面にはケズリ痕がみられる。17は二重口縁部になり、山陰系の土器である。18は内湾してたちあがる口縁部をもつ。器壁が薄く、刷毛目が細かい。壺形土器かもしれない。19~25は胴部下半から底部までの破片である。平底で、胴部下半にわずかに膨らみをもつ。底部の器壁が厚い。

26~41は壺形土器である。26~30は複合口縁壺で、26・27の口縁部には櫛描き波状文を施している。31~35は口縁部が大きく開くもので、31の口縁端面には「ノ」字状、35の口縁端面には斜格子目の刻目を施す。36・37は長い頸部に、わずかに開く口縁部をもつ。38~41は胴部下半から底部までの破片である。曖昧なたちあがりをもつ平底で、40・41の底部は器壁が著しく厚い。

42~55は鉢形土器である。42~47は口縁部を折り曲げるもので、48~50は直口口縁になる。51~53は胴部下半から底部までの破片である。54・55は脚台付鉢になる。

56~58は高坏形土器である。脚部片で、57・58には円孔が施されている。

59~62は支脚形土器である。59・60は受部が大きく「U」字状に切られ、62は受部が角状の突起からなる。

63はコシキ形土器で、底部には焼成前の孔をもつ。

木器：2点が出土した。このうち1点は棒状製品 (図版15) であるが、所在が不明なため図化していない。64はコマ形の木製品である。

石器：レキが少量出土しているが、実測できる石器は1点であった。

65は砥石で、両側面に磨面がみられる。

(6) 出土層位不明品 (第85図)

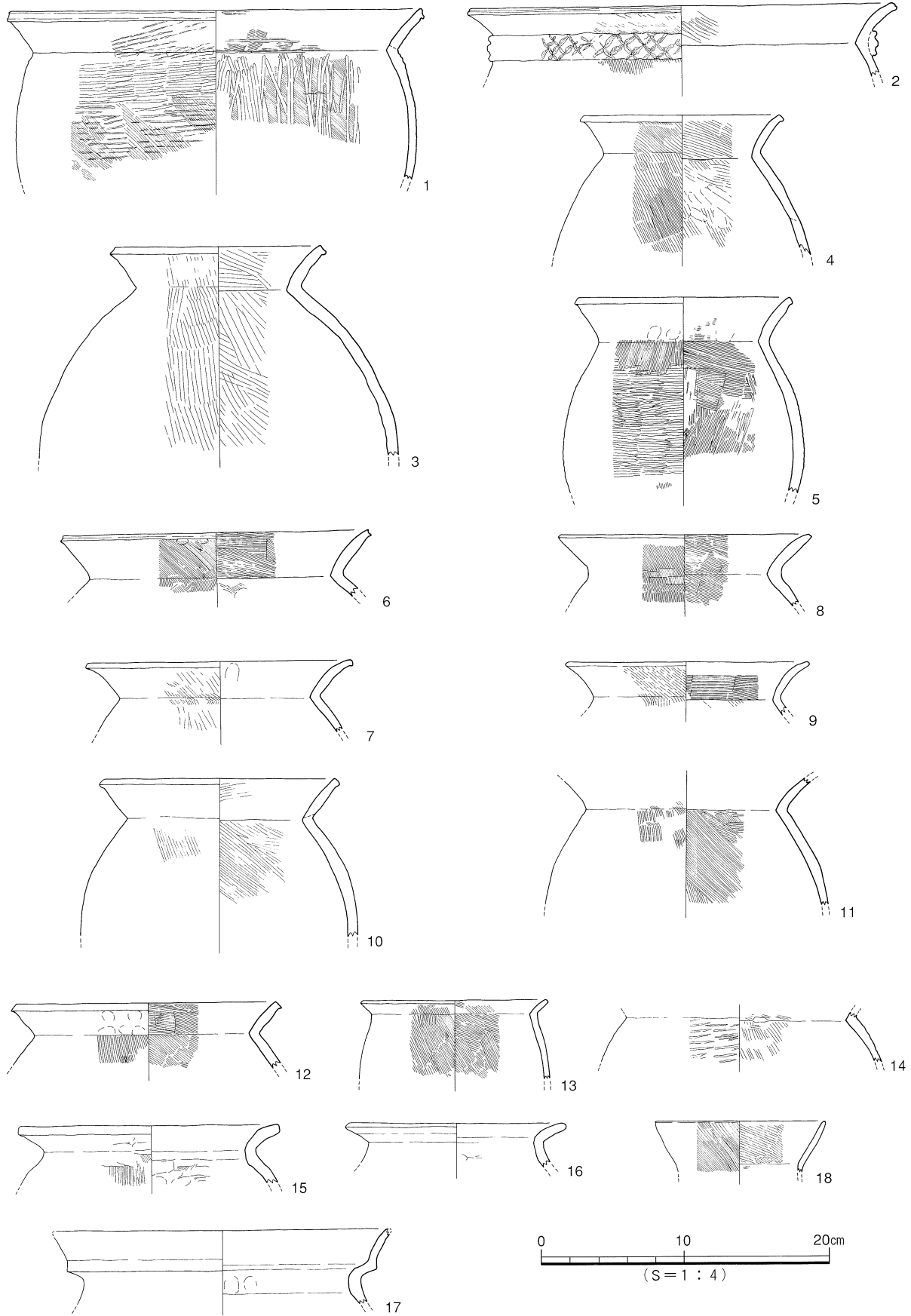
1) グリッド取り上げ品

出土層位は不明であるが、出土地点がグリッドとして分かるものである。

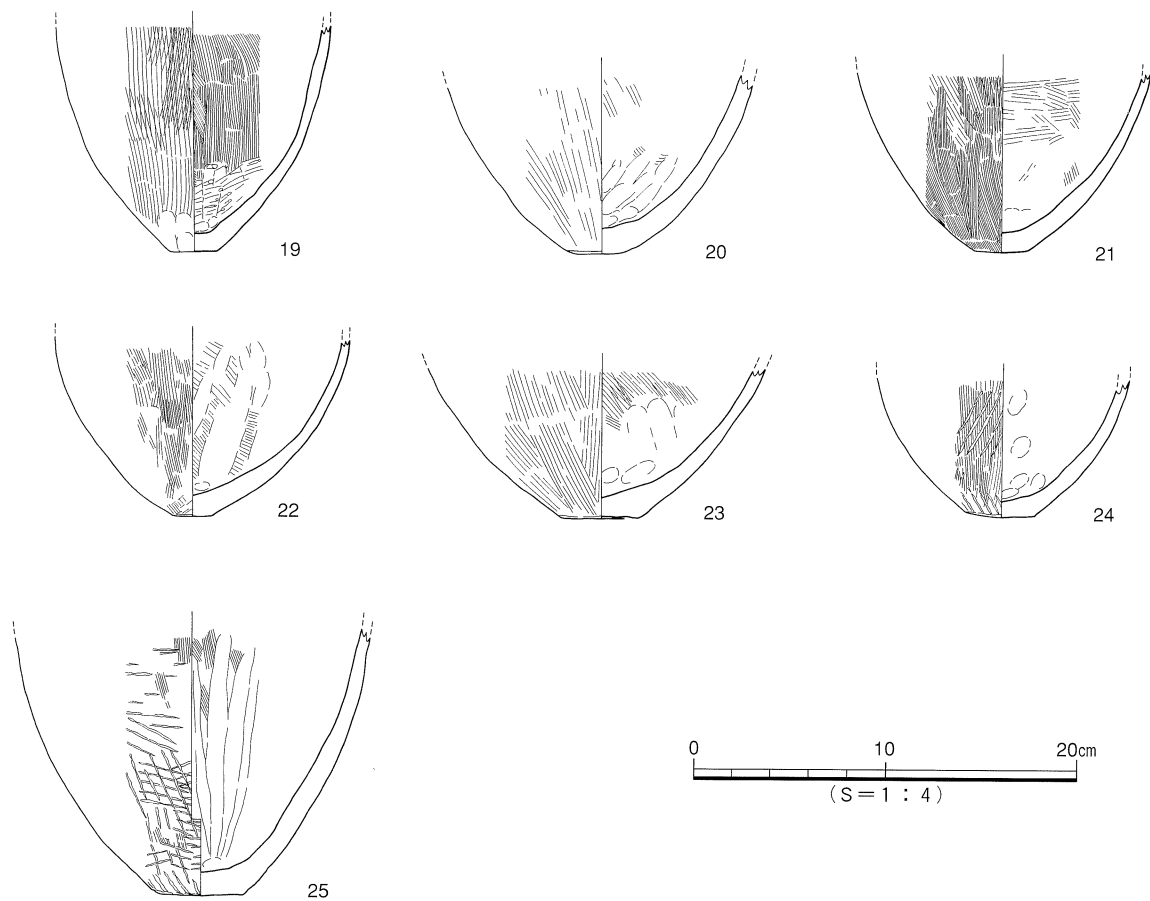
66~78はNW区の出土品である。66は弥生土器の器台形土器の口縁部片で、口縁端面に斜格子目文充填の三角文、上面に斜格子目文を施している。67~70は須恵器の瓶で、67は高台が付き、68~70は平底である。71~75は土師器の坏で、底部は薄い円盤高台がつく。76は小型の土鍾で、重さは1.86gである。77・78は石器で、77は砥石、78は用途不明品である。

79~81はNE区の出土品である。79・80は弥生土器の壺形土器で、複合口縁の口縁部片である。81は須恵器の瓶で、高台が付く。

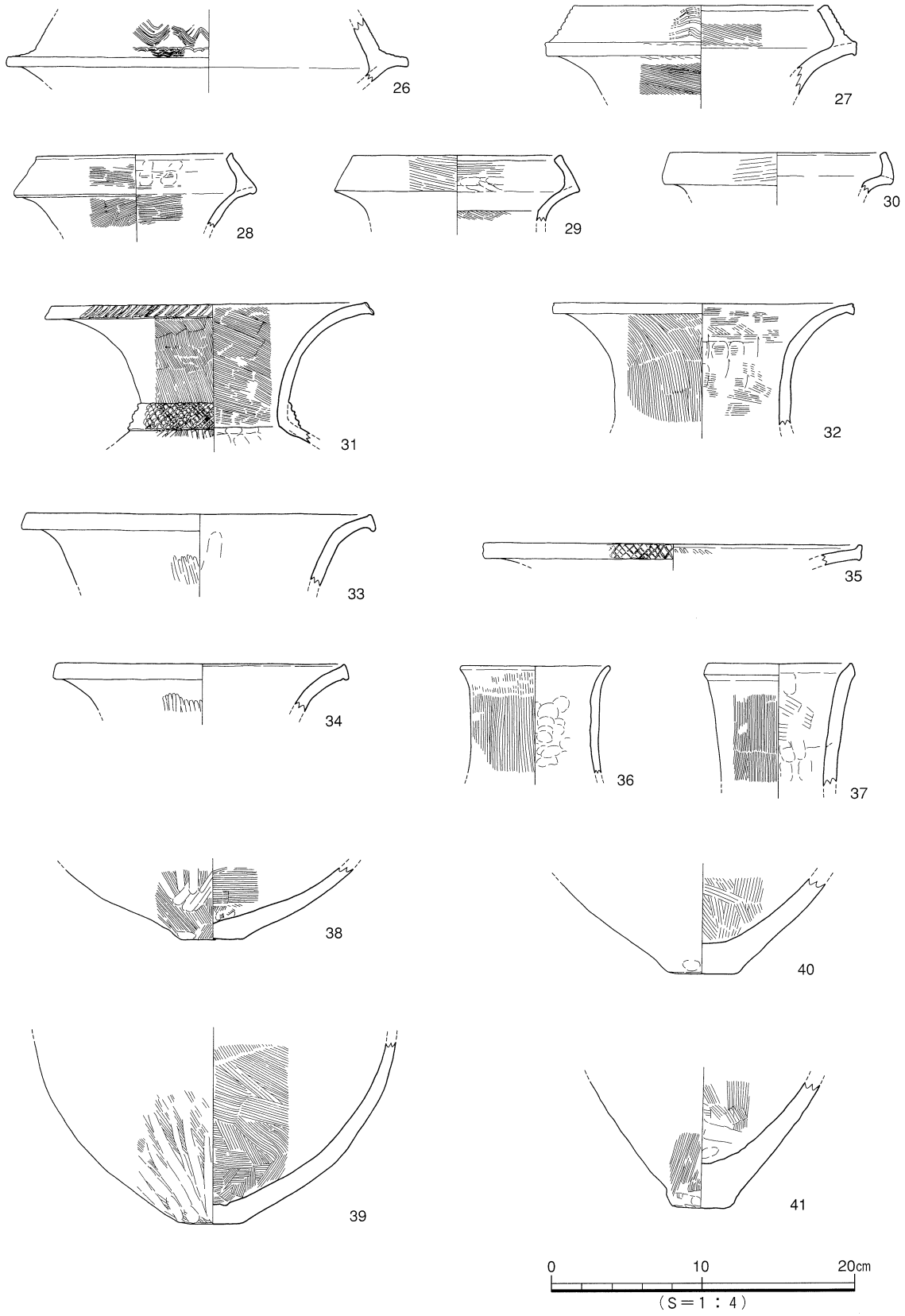
82・83はSW区の出土品である。82は土師器のコシキで、把手部分である。83は須恵器の瓶の小型品で、高台が付く。



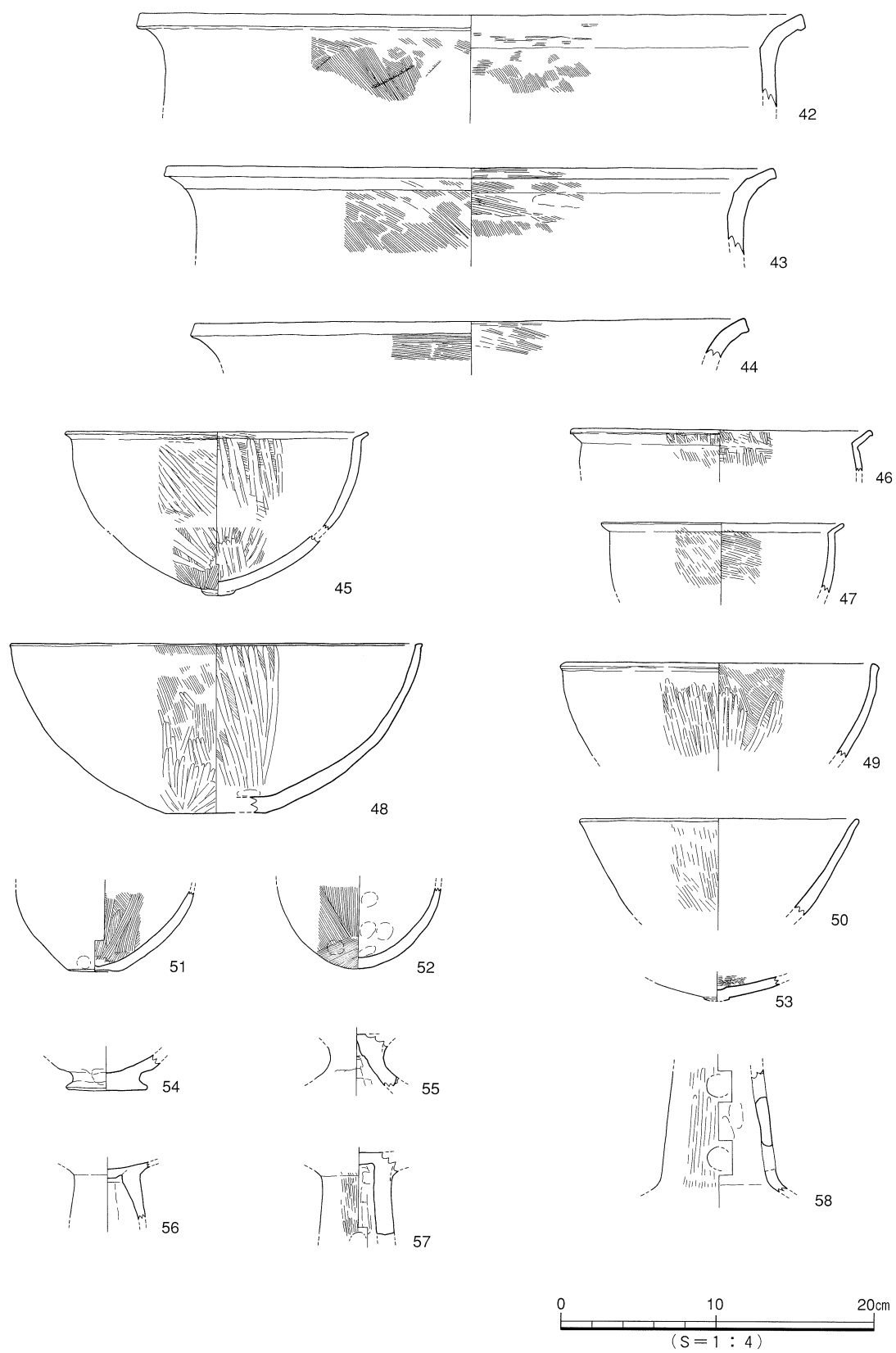
第80図 第VI層出土遺物実測図(1)



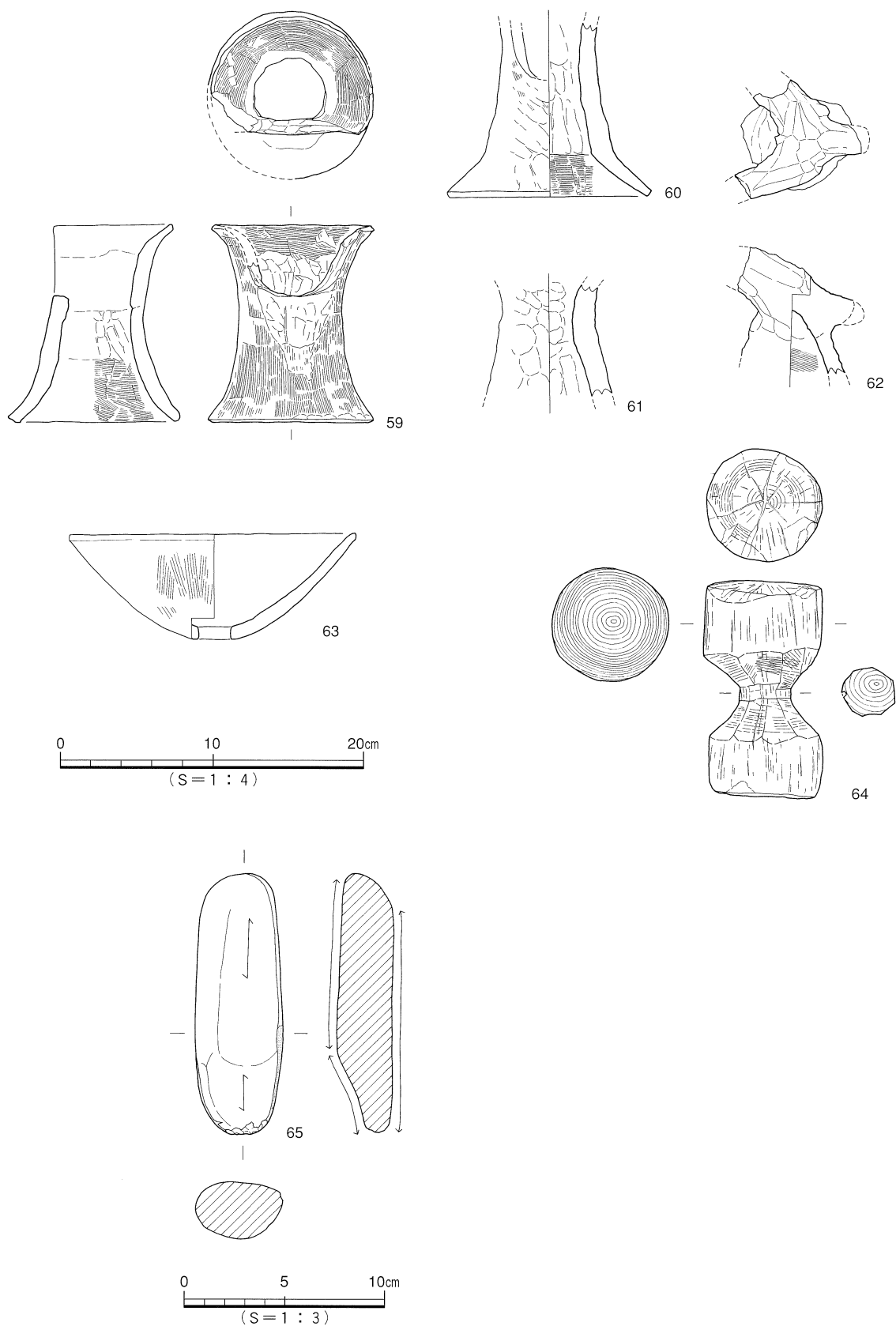
第81図 第VI層出土遺物実測図(2)



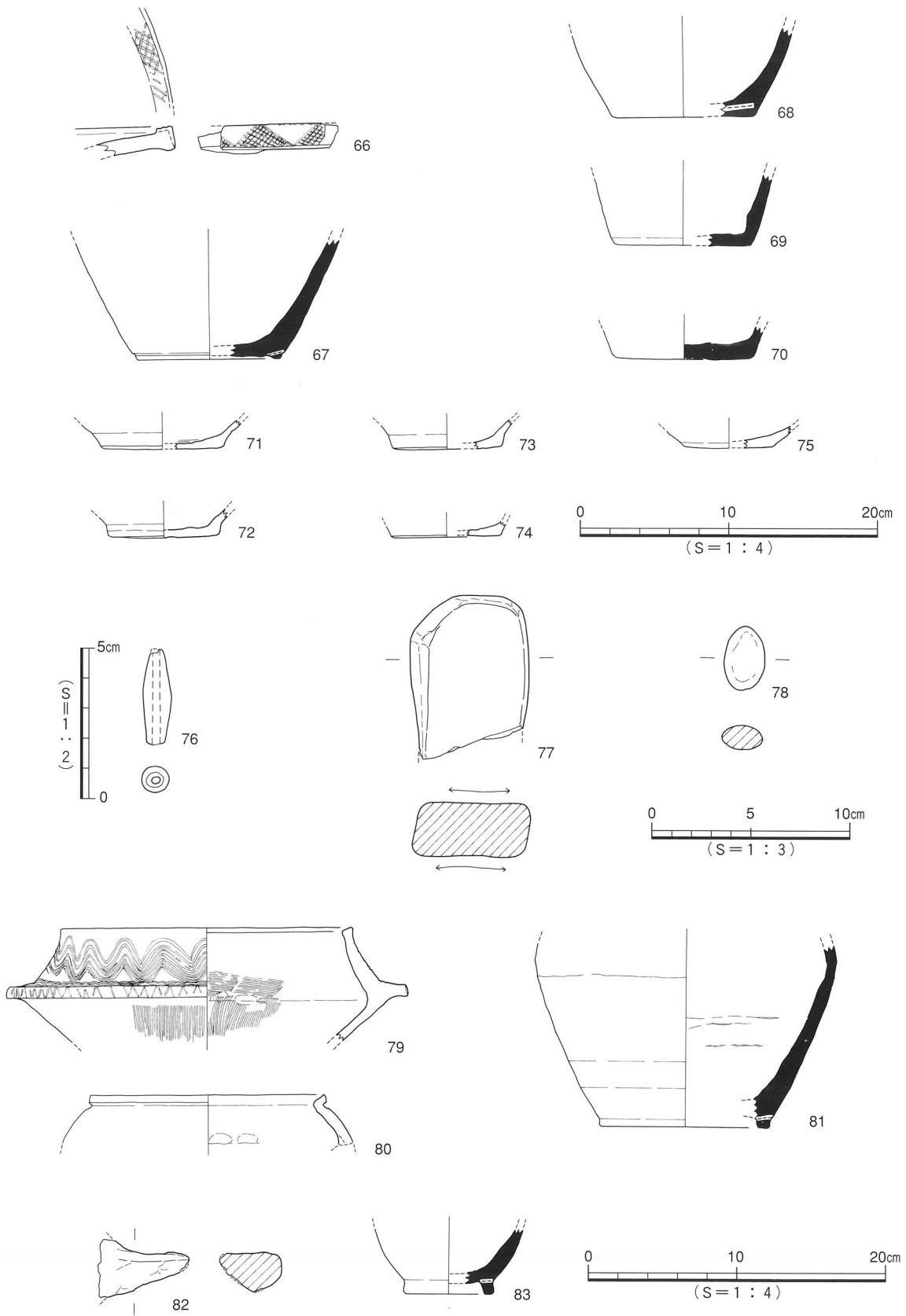
第82図 第VI層出土遺物実測図(3)



第83図 第VI層出土遺物実測図(4)



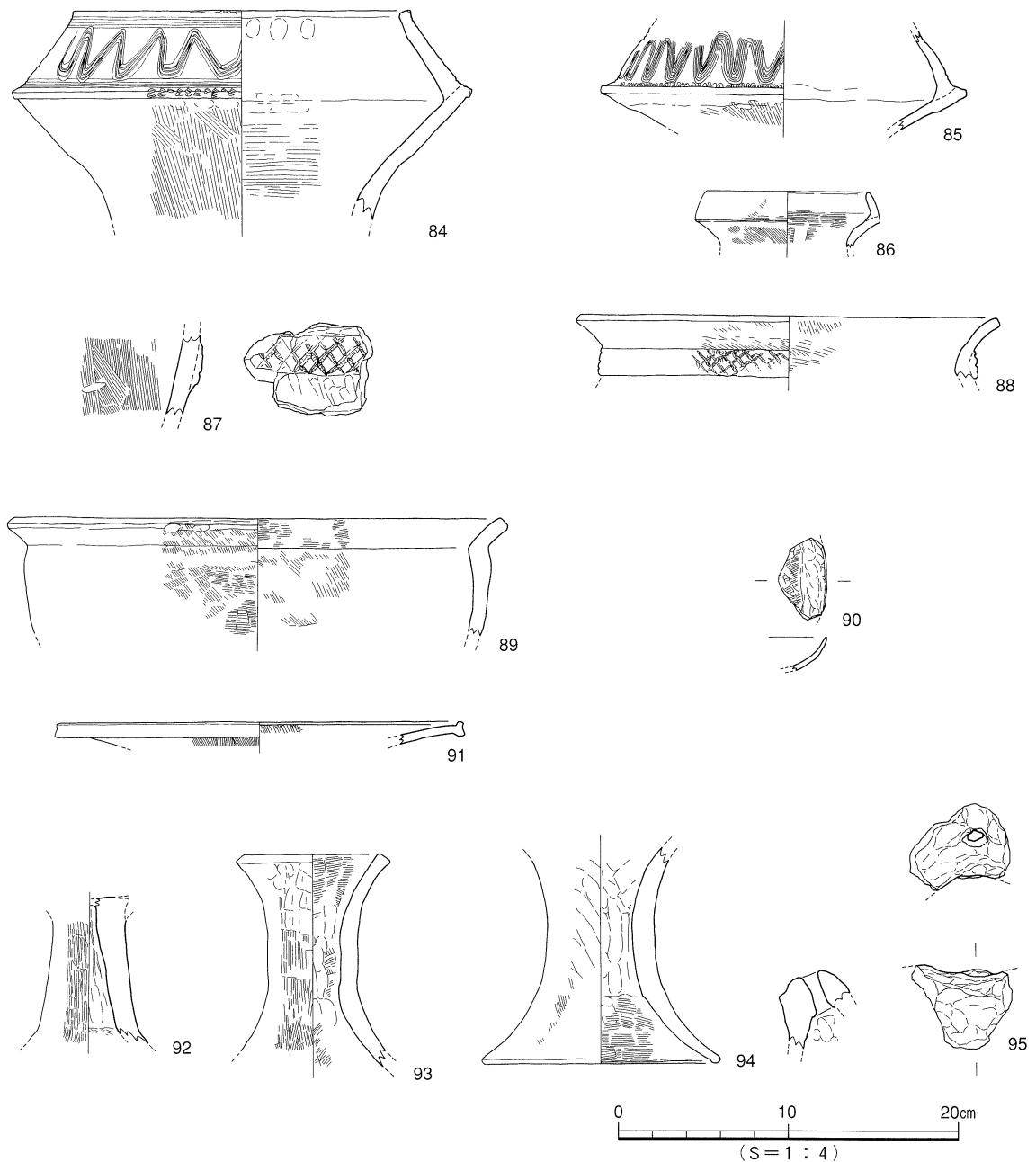
第84図 第VI層出土遺物実測図(5)



第85図 グリッド出土遺物実測図

2) 出土地点不明品 (第86図)

84~95は注記がないもので、いずれも弥生土器である。84~87は複合口縁壺で、84・85は口縁部に櫛描波状文を施している。87は大型品の胴部片で、斜格子目の刻目突帯をもつ。88・89は鉢形土器の口縁部片で、88には頸部に斜格子目の刻目突帯がつく。90は匙形の土製品である。91・92は高坏形土器で、91は口縁部片、92は脚部片になる。93~95は支脚形土器で、95は受部が角状の突起からなる。



第86図 地点不明遺物実測図

4. 小 結

調査では、傾斜地に営まれた水田関連遺構と弥生土器を主体にした遺物を検出するにいたった。以下、遺構と遺物に分けてまとめを行なう。

(1) 遺 構

主たる遺構は畦畔1・2で、2条は併行してあり、同時期の可能性がある。時期は、古墳時代後期（6世紀）以降になるが、下限が特定できない。松山平野での畦畔検出例は今だに少なく（平成11年）、時期が特定できなかったことは惜しまれる。

畦畔以外では、SP1～6は柵列の様相がうかがえるが、断定できない。土坑は時期、性格共に判断できる資料が得られていない。

(2) 遺 物

第VI層出土遺物の多くは、弥生時代終末期の土器である。同層には須恵器が包含されており、これらの土器が破片資料であることからして、調査地西側の高所部から流入した遺物と考えられる。また、北西90mには1次調査地があるが、その地点の出土土器と時期差を求めることができない。したがって、本資料は1次調査地の集落に帰属するものと思われる。

弥生土器のなかで注目されるのは、第VI層出土の第80図17である。17は山陰系の甕形土器で、近隣の宮前川遺跡でも出土している（大滝雅嗣 1986、作田一耕 1998）。胎土は在地のものでもよく、宮前川遺跡出土品と変わりがない。

須恵器と古代の土師器は、本書掲載の1次調査地や鳥越遺跡でも出土している。調査地一帯に、同時代の集落が展開していたことを追従する資料になった。

遺物ではこのほかに、コマ形の木製品が特筆される。松山平野では、福音寺遺跡竹の下地区（森光晴 1983）で5世紀代の資料が、来住廃寺15次調査（西尾幸則 1993）で6世紀後葉～7世紀前葉の資料が出土しているが、類例は少ない。

以上、調査成果を概観したが、津田中学校構内には、広く遺跡が展開していることを確認するにいたった。調査地周囲には、水田が展開しており、注意を要する遺跡地帯である。

【文 献】

- 大滝雅嗣 1986 『宮前川遺跡』（助愛媛県埋蔵文化財調査センター）
 作田一耕 1998 『斎院・古照』（助愛媛県埋蔵文化財調査センター）
 森 光晴 1983 『国道11号バイパス埋蔵文化財調査報告書』
 西尾幸則 1993 『来住廃寺遺跡』松山市教育委員会・助松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

表5 土坑一覧

土坑 (SK)	地 区	平面形	断面形	規 模 (m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積 (m ²)	出土遺物	時 期	備 考
1	南西	不整形		0.87×0.8×0.25	0.59	なし	不明	2基が重複か
2	中央南	円 形		1.08×0.97×0.19	0.82	なし	不明	
3	北端中央	長方形	逆台形状	0.76×0.64×-	0.38	なし	不明	
4	中央西	楕円形		0.72×0.5×-	0.28	なし	不明	

第5章

きた さ や じ ない
北齋院地内遺跡

— 4次調査地 —

第5章 北斎院地内遺跡4次調査地

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経緯（第87図）

1998（平成10）年2月、一色市郎氏より、松山市北斎院町221-1地における宅地開発にあたり、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。申請地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地『No29 北斎院遺物包含地』内にあり、当地域には中世集落が展開している。申請地の東隣には北斎院地内遺跡2次調査地、東17mには北斎院地内遺跡1次調査地があり、中世の掘立柱建物址・溝・土坑・墓・井戸を検出している（武正良浩 1994）。また、南4mには北斎院地内遺跡3次調査地があり、中世の掘立柱建物址・溝・土坑・畝状遺構を検出している（篠崎真宏・寺嶋信三 1994）。

このことから、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲や性格を確認する必要があるため、1998（平成10）年2月24日に文化教育課は試掘調査を実施した。

試掘調査では、溝2条、柱穴5基と遺物包含層を検出し、遺物包含層からは土師器の杯や釜片が出土した。

試掘調査の結果を受け、文化教育課と申請者の両者は遺跡の取り扱いについて協議を重ね、宅地造成によって消失する遺跡に対し、記録保存のための発掘調査を実施することになった。発掘調査は、中世の集落構造解明を主目的とし、文化教育課の指導のもと、（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが主体となり、1998（平成10）年10月1日より本格調査を実施した。

(2) 調査の経緯

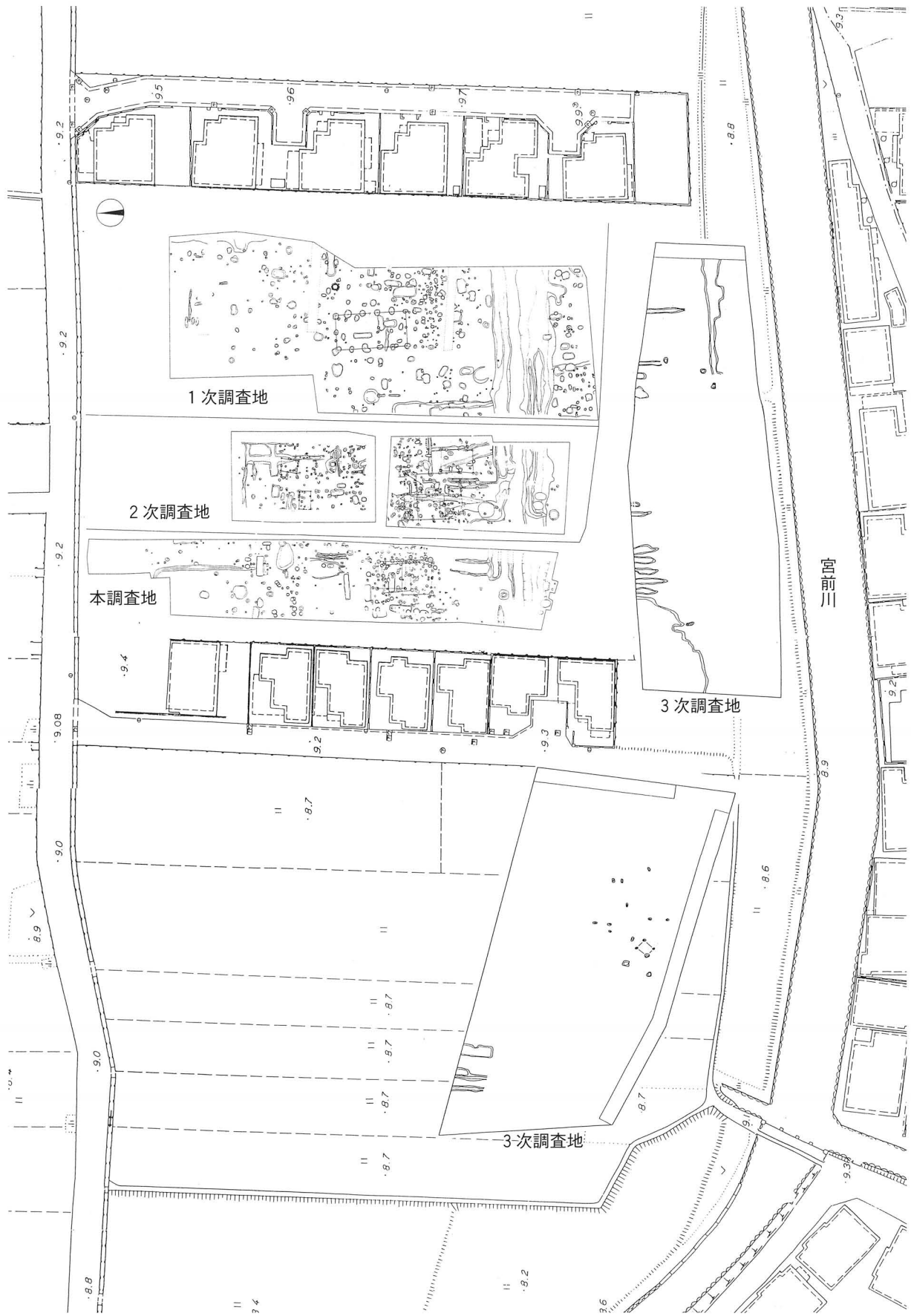
調査は、1998（平成10）年10月1日から1999（平成11）年1月29日までは野外調査、2月1日から3月31日までは室内調査を実施した。以下、調査工程を略記する。

1998（平成10）年10月1日、調査区域を設定する。排土置場の都合上、調査区を3区分して行なった。はじめに、A～D-1～8以南を調査した。重機で第VI層上面までを掘削し、10月5日に終了する。10月6日、遺構の検出を開始し、10月21日に遺構の検出を終了する。10月22日、遺構の検出写真を撮る。10月23日、遺構の掘り下げを開始し、11月30日に掘り下げを終了する。12月1日、遺構の測量を開始し、12月8日に測量を終了する。12月9日、高所作業車を用いて遺構の完掘状況写真を撮る。12月14～16日、A～D-1～8以南を埋め戻す。

12月17日、A～D-9～14区間の調査を開始する。重機で第VI層上面までを掘削し、12月18日に終了する。12月21日、遺構の検出を開始し、12月22日に終了する。12月24日、遺構の検出写真を撮る。12月25日、遺構の掘り下げを開始し、1月13日に終了する。1月14日、遺構の完掘状況写真を撮り、遺構の測量をする。1月18～21日、A～D-9～14区間を埋め戻す。

1月22日、A～B-15～18区間の調査を開始する。重機で第VI層上面までを掘削する。1月25日、遺構の検出をし、検出写真を撮る。1月26日、遺構の掘り下げと遺構の測量をする。くわえて、遺構の完掘状況写真を撮る。1月27日、A～B-15～18区間を埋め戻す。1月28日、道具の片付けを開始し、1月29日に道具を撤去して、野外調査を終了する。

北斎院地内遺跡 4 次調査地



第87図 北斎院地内遺跡分布図 (S = 1 : 800)

調査の経過

2月1日～3月31日、松山市埋蔵文化財センターにて測量図や出土物の整理を行なう。

(3) 調査組織

遺跡名	北斎院地内遺跡4次調査地
調査場所	松山市北斎院町221-1
調査期間	屋外調査：1998（平成10）年10月1日～1999（平成11）年1月29日 屋内調査：1999（平成11）年2月1日～同年3月31日
調査面積	976m ²
調査主体	（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
調査協力	一色市郎・株式会社松一不動産
調査担当	梅木謙一・水本 完児

2. 層位（第88図）

調査地は、松山平野の西部、標高8.78mに立地する。

基本層位は第Ⅰ層表土（旧耕作土）、第Ⅱ層茶褐色土（水田床土）、第Ⅲ層淡黄灰色土、第Ⅳ層灰茶色土、第Ⅴ層暗褐色土（砂混じり）、第Ⅵ層灰色土（粗い砂混じり）、第Ⅶ層褐色砂（粗い砂混じり）、第Ⅷ層灰色砂（細かい砂混じり）、第Ⅸ層灰色粘土、第Ⅹ層青灰色粘土である。

第Ⅰ層は表土（旧耕作土）で、厚さ3～20cmを測る。調査区のほぼ全域で検出した。

第Ⅱ層は茶褐色土（水田床土）で、厚さ2～10cmを測る。調査区のほぼ全域で検出した。

第Ⅲ層は淡黄灰色土で、厚さ6～18cmを測る。調査区のほぼ全域で検出した。

第Ⅳ層は灰茶色土で、混入土壌の差によって2つに分層される。第Ⅳ-1層は灰茶色土で、厚さ2～23cmを測る。調査区のほぼ全域で検出した。第Ⅳ-2層は灰茶色土に暗褐色土と砂とが混じるもので、厚さ3～20cmを測る。調査区南東部で検出した。

第Ⅴ層は暗褐色土に砂が混じるもので、厚さ2～30cmを測る。調査区のほぼ全域で検出した。土師器・須恵器・陶磁器・鉄製品（釘と鉄さい）・石器を含む遺物包含層である。

第Ⅵ層は灰色土に粗い砂が混じるもので、混入土壌の差によって4つに分層される。第Ⅵ-1層は灰色土に粗い砂が混じるもので、厚さ3～19cmを測る。調査区南東部で検出した。第Ⅵ-2層は灰色土に粗い砂と茶色土とが混じるもので、厚さ2～13cmを測る。調査区南西部を除き、ほぼ全域で検出した。第Ⅵ-3層は第Ⅵ-2層より色調が暗いもので、厚さ5～37cmを測る。調査区南を除き、ほぼ全域で検出した。第Ⅵ-4層は第Ⅵ-3層より色調が暗いもので、厚さ3～12cmを測る。調査区北東部で検出した。

なお、調査では第Ⅵ層上面を遺構検出面とした。遺物は第Ⅵ-1層から出土し、土師器・鉄製品（釘と鉄さい）・銅貨・石器がある。

第Ⅶ層は褐色砂に粗い砂が混じるもので、厚さ2～15cmを測る。調査区北東部～南東部で検出した。

第Ⅷ層は灰色砂で、細かい砂と茶色土とが混じる。混入土壌の差によって2つに分層される。第Ⅷ-1層は灰色砂に細かい砂と茶色土とが混じるもので、厚さ3～15cmを測る。調査区南東部で検出した。第Ⅷ-2層は第Ⅷ-1層より色調が暗いもので、厚さ3～25cmを測る。調査区南西部を除きほぼ全域で検出した。

第Ⅸ層は灰色粘土で、混入土壌の差によって2つに分層される。第Ⅸ-1層は灰色粘土に茶色土が

混じるもので、厚さ2～23cmを測る。調査区南西部を除き、ほぼ全域で検出した。第IX—2層は灰色粘土で、厚さ4～17cmを測る。調査区北西部を除き、全域で検出した。

第X層は青灰色粘土である。調査区の南端全域で検出した。

なお、調査では、調査区を4m四方のグリッドに分けた。呼称は、東から西へ向けてA・B・C・D、南から北へ向けて1・2・3・・・18とし、区名はこれらを組み合わせて呼称することにした。

3. 遺構と遺物 (第89・90図)

調査では、第VI層上面で中世の遺構と遺物を確認した。遺構は、掘立柱建物址3棟、溝(SD)7条、井戸(SE)2基、墓2基、土坑(SK)13基、柱穴(SP)378基、性格不明遺構(SX)1基を検出している。

(1) 掘立柱建物址

掘立柱建物址は3棟を検出した。

1号掘立柱建物址 (第91図)

1号掘立柱建物址は、調査区中央南、B6～C7区に位置し、掘立2・3と重複する。建物の西側ではSK3に、東側では柱穴(埋土A、p.150を参照。)に切られている。建物は2×2間で、東西4m、南北4mを測る。平均柱間は東西2mで、床面積は16m²である。柱穴の平面形態は円形または楕円形を呈し、径27～50cm、深さ33～64cmを測る。柱穴埋土は灰褐色土に砂が混じるものである。柱痕は径10～15cm、深さ33～64cmを測る。遺物は、柱穴P1・2から土師器が出土した。

出土遺物 (第91図)

1はP1出土品、2はP2出土品で、中世15世紀の土師器である。1は皿、2は杯になる。

時期：出土遺物から、15世紀後半に比定する。

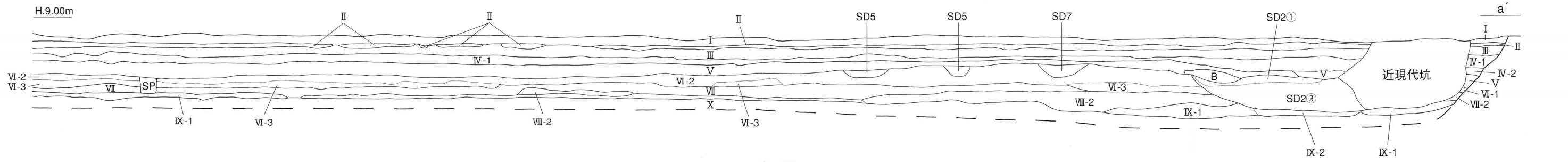
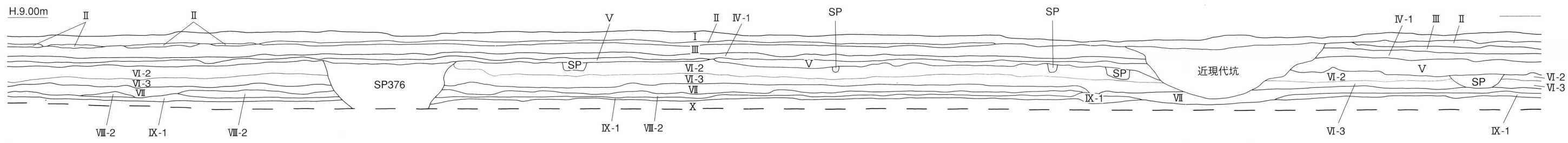
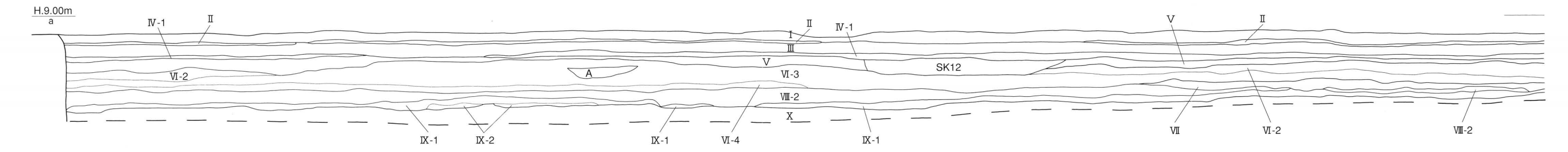
2号掘立柱建物址 (第92図)

2号掘立柱建物址は、調査区中央南、B6～C7区に位置し、掘立1・3と重複する。建物の中央北側と北東隅は柱穴(埋土A)に切られている。建物は1×2間で、南北4.25m、東西4mを測る。平均柱間は東西2mで、床面積は17m²である。柱穴の平面形態は円形または楕円形を呈し、径34～46cm、深さ28～37cmを測る。柱穴埋土は灰褐色土に砂が混じるものである。遺物は柱穴から出土し、土師器(P1)、備前焼の播鉢(P2)、亀山焼の甕(P2)がある。

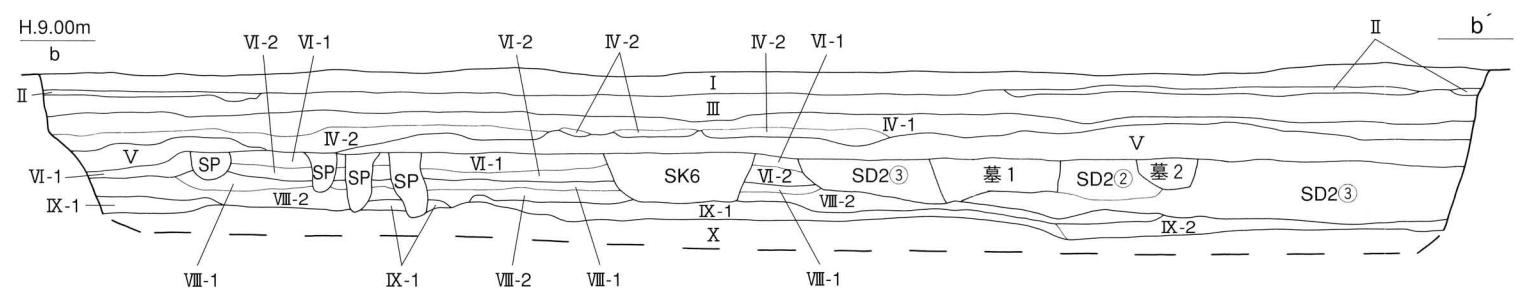
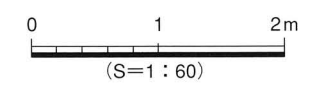
出土遺物 (第92図)

3～5は中世15世紀の土器である。3は土師質で、器種は不明。4は備前焼播鉢の底部で、内面に1条の櫛目がみられる。5は亀山焼の甕で、口縁部は外反する。

時期：出土遺物から、15世紀後半に比定する。



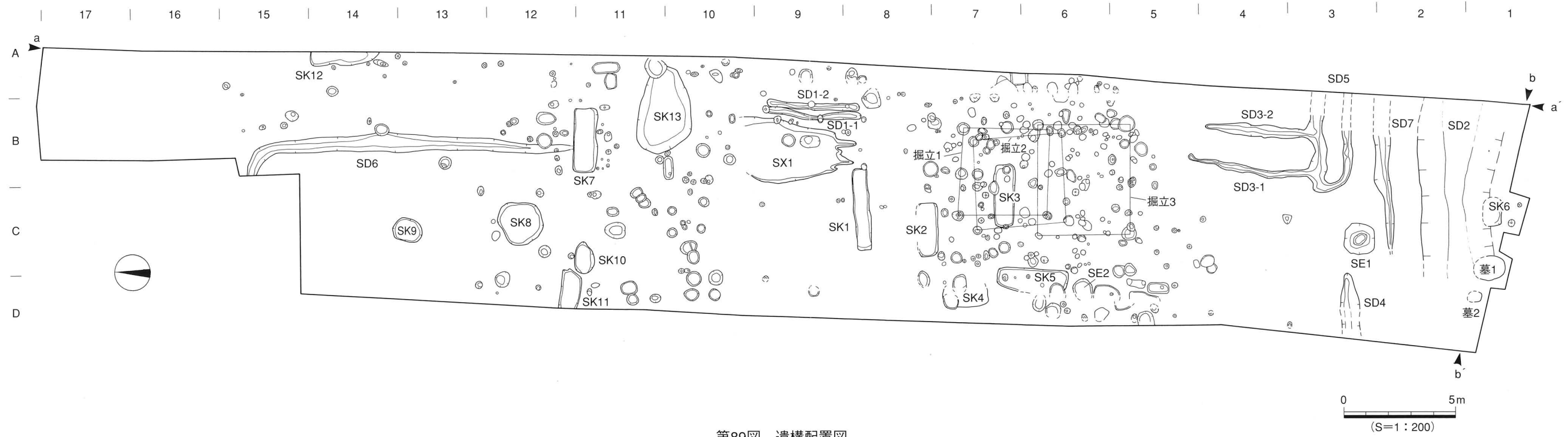
東壁



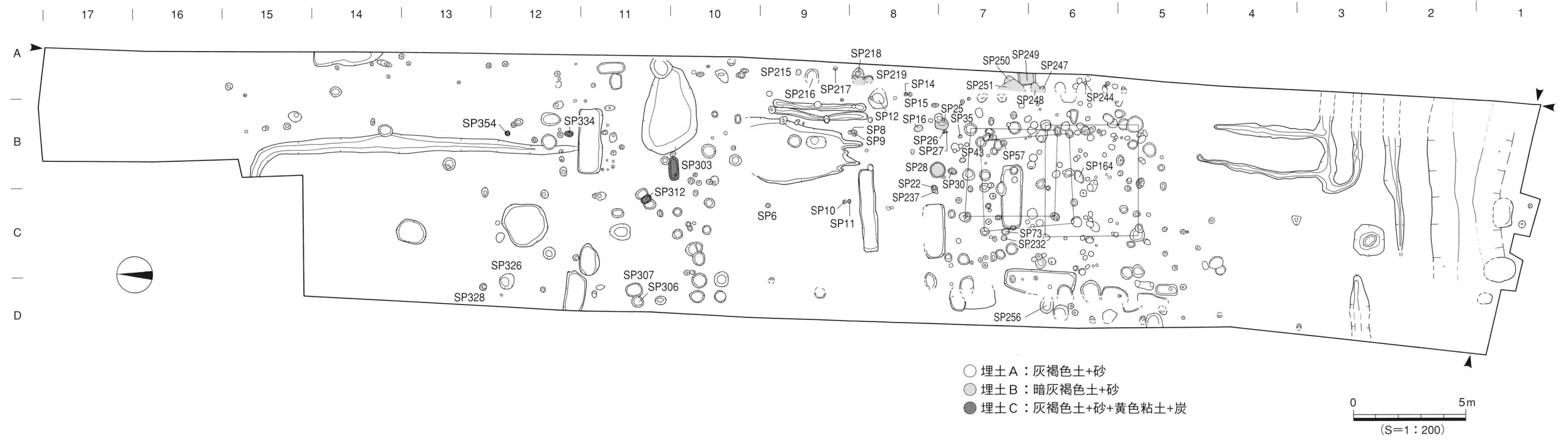
南壁

- | | | | |
|----------|-------------|------|-------------|
| 第I層 | 表土 (旧耕作土) | SD2① | 暗褐色土+砂+炭 |
| 第II層 | 茶褐色土 (水田床土) | ② | 暗褐色土+黒褐色土+砂 |
| 第III層 | 淡黄灰色土 | ③ | 暗褐色土+砂 |
| 第IV-1層 | 灰茶色土 | A | 灰色粘土 |
| -2層 | 灰茶色土+暗褐色土+砂 | B | 炭化物 |
| 第V層 | 暗褐色土+砂 | | |
| 第VI-1層 | 灰色土+粗砂 | | |
| -2層 | 灰色土+粗砂+茶色土 | | |
| -3層 | VI-2層より暗い | | |
| -4層 | VI-3層より暗い | | |
| 第VII層 | 褐色砂+粗砂 | | |
| 第VIII-1層 | 灰色砂+細砂+茶色土 | | |
| -2層 | VIII-1層より暗い | | |
| 第IX-1層 | 灰色粘土+茶色土 | | |
| -2層 | 灰色粘土 | | |
| 第X層 | 青灰色粘土 | | |

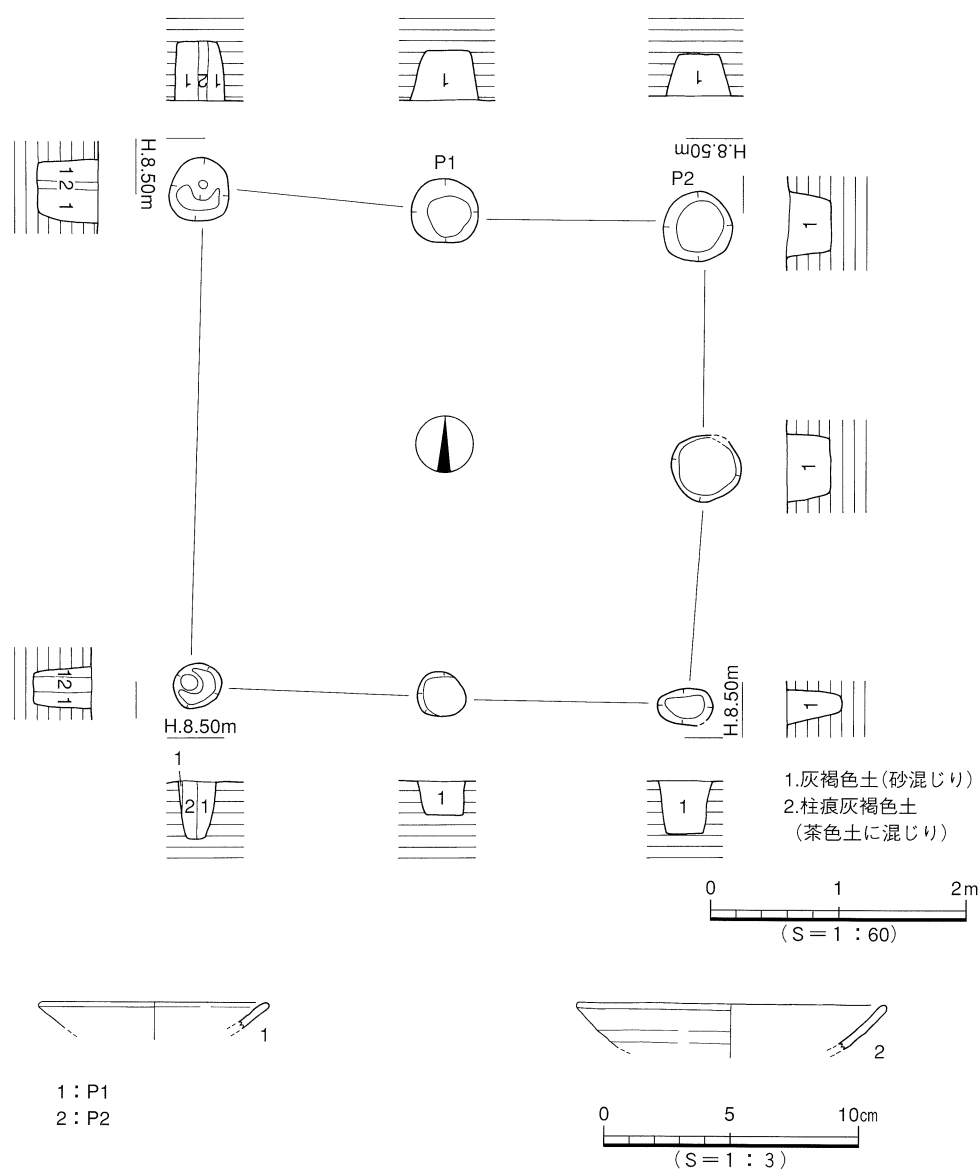
第88図 東壁・南壁土層図



第89図 遺構配置図



第90図 埋土別柱穴配置図



第91図 掘立1 測量図・出土遺物実測図

3号掘立柱建物址 (第93図)

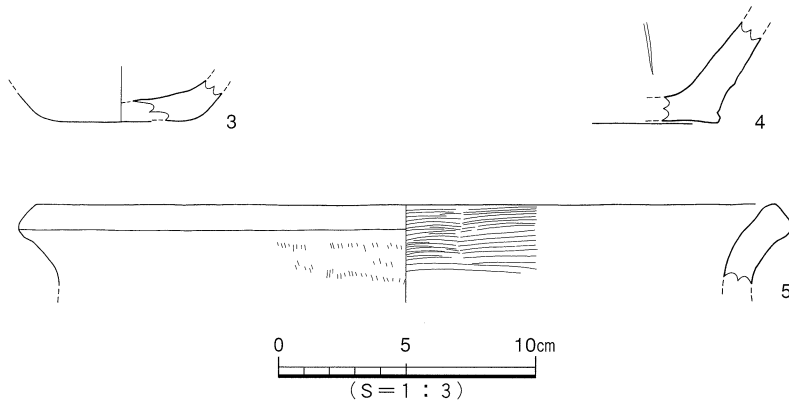
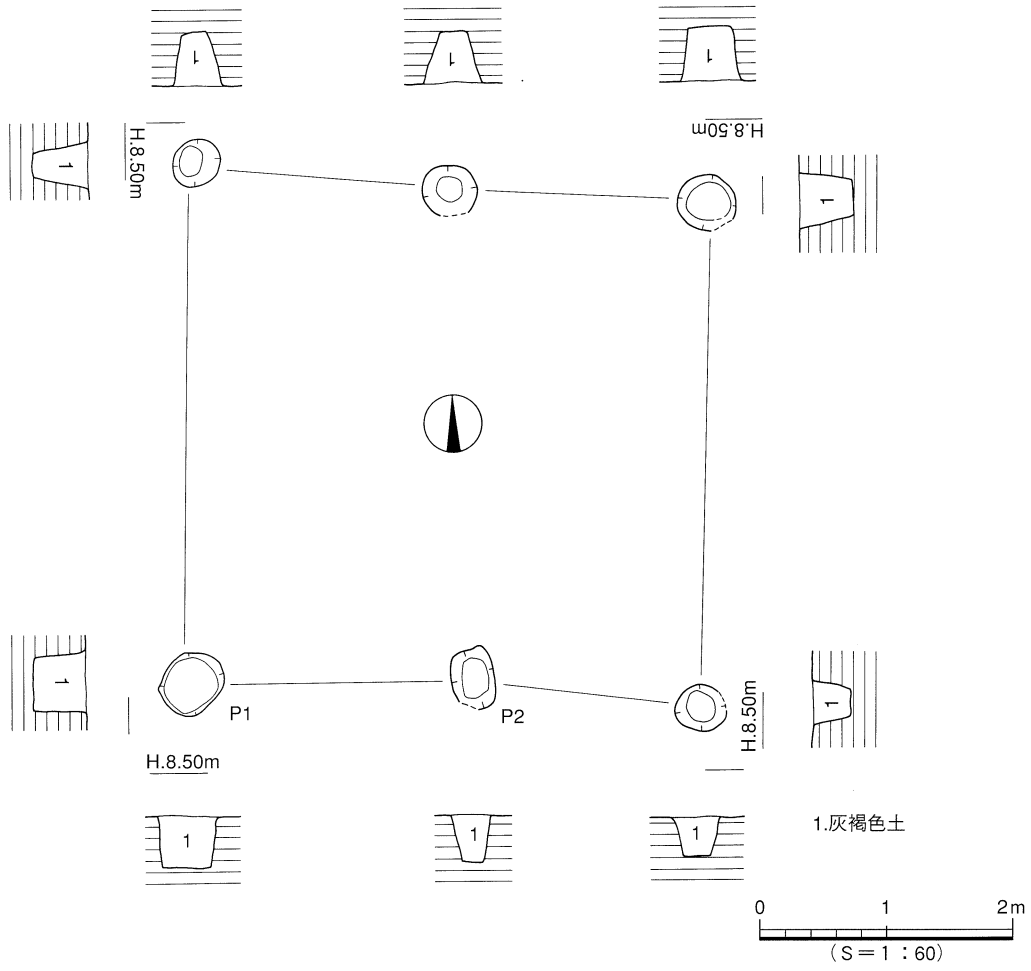
3号掘立柱建物址は、調査区中央南、B 6～C 7区に位置し、掘立1・2と重複する。建物の北東隅・南東隅は柱穴(埋土A)に切られ、南西隅は柱穴(埋土A)を切る。建物は2×1間で、東西4.9m、南北4mを測る。平均柱間は東西2.45mで、床面積は19.6m²である。柱穴の平面形態は円形～楕円形を呈し、径30～68cm、深さ14～35cmを測る。柱穴埋土は灰褐色土に砂が混じるものである。柱痕は径15cm、深さ14～35cmを測る。遺物は、柱穴P 1からは播鉢8と土師器皿6が、柱穴P 2の柱痕からは土師器杯底部7が出土した。

出土遺物 (第93図)

6・7は中世15世紀の土師器で、6は皿になる。7は杯の底部で、平底である。8は土師質の播鉢で、口縁部はやや外反する。内面に4条の櫛目がみられる。

時期：出土遺物から、15世紀後半に比定する。

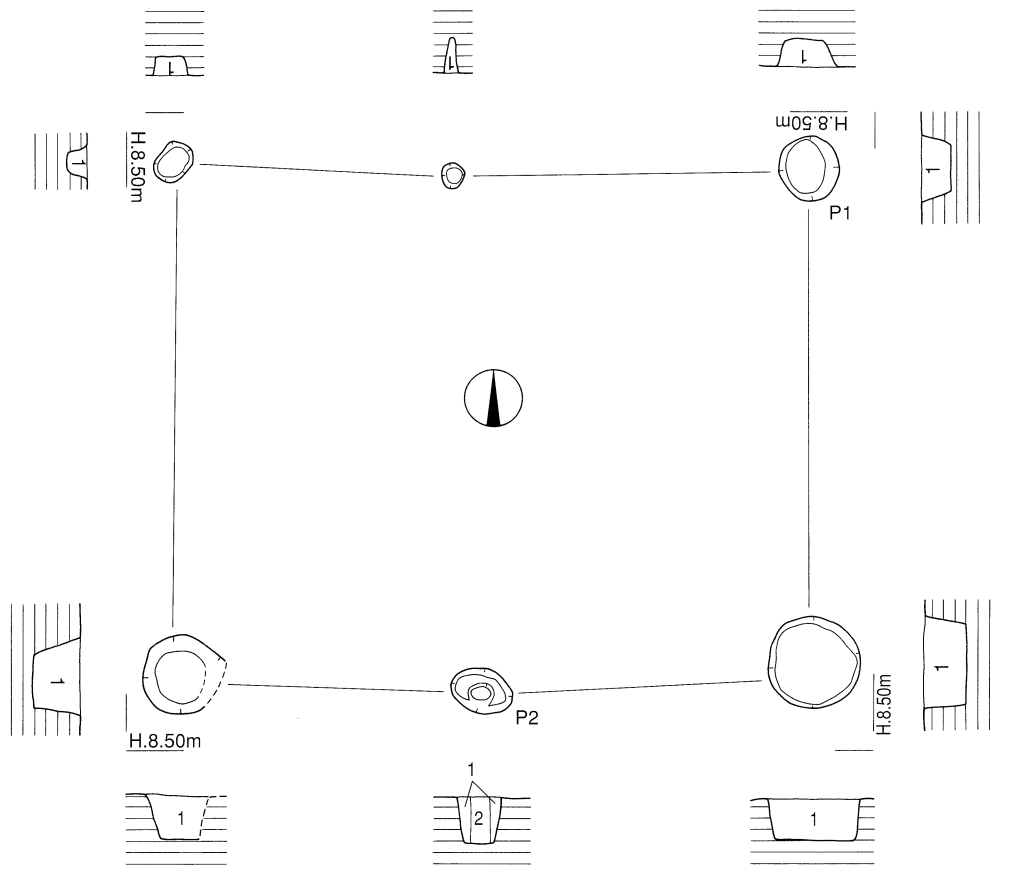
北齋院地内遺跡 4 次調査地



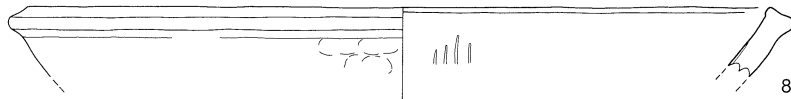
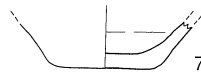
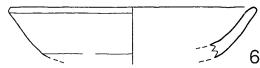
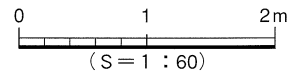
3 : P1
4・5 : P2

第92図 掘立 2 測量図・出土遺物実測図

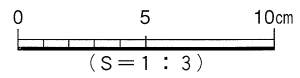
遺構と遺物



- 1. 灰褐色土(砂混じり)
- 2. 柱痕灰褐色土(茶色土に砂混じり)



- 6・8 : P1
- 7 : P2



第93図 掘立3 測量図・出土遺物実測図

(2) 溝 (SD)

溝はSD1～7の7条を検出した。

SD1

SD1は、溝が2つに枝分かれするもので、西側をSD1-1、東側をSD1-2とした。

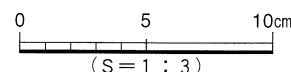
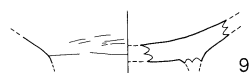
SD1-1は、調査区中央東側、B8～B9区で検出した。北側と中央部は柱穴(埋土A)に切られている。規模は全長3.9m、幅0.1～0.3m、深さ12cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰褐色土に砂が混じるものである。出土遺物には土師器の椀がある。

SD1-2は、調査区中央東側、B8～B9区で検出した。中央と南側は柱穴(埋土A)に切られている。規模は全長3.9m、幅0.2m、深さ3～8cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰褐色土に砂が混じるものである。遺物は土師器の椀と土師器片(15世紀後半)とが出土した。

出土遺物(第94図)

9はSD1-1出土品で、中世12世紀の土師器の椀である。高台部は欠損している。

時期：SD1-1からは12世紀の遺物が1点あるが、15世紀後半の遺物が多数出土(図化しうるものはない)しているため、15世紀後半に比定する。



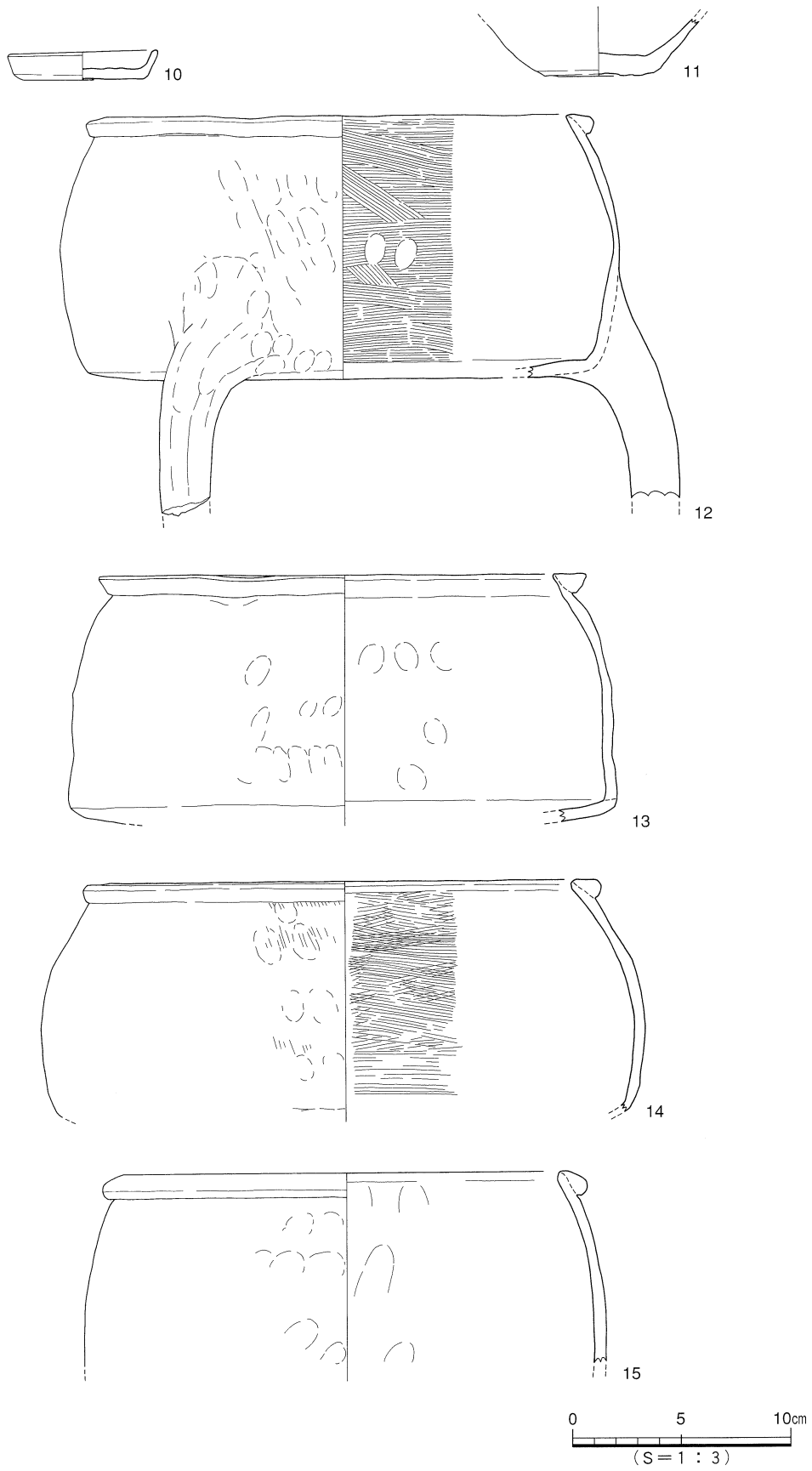
第94図 SD1-1出土遺物実測図

SD2

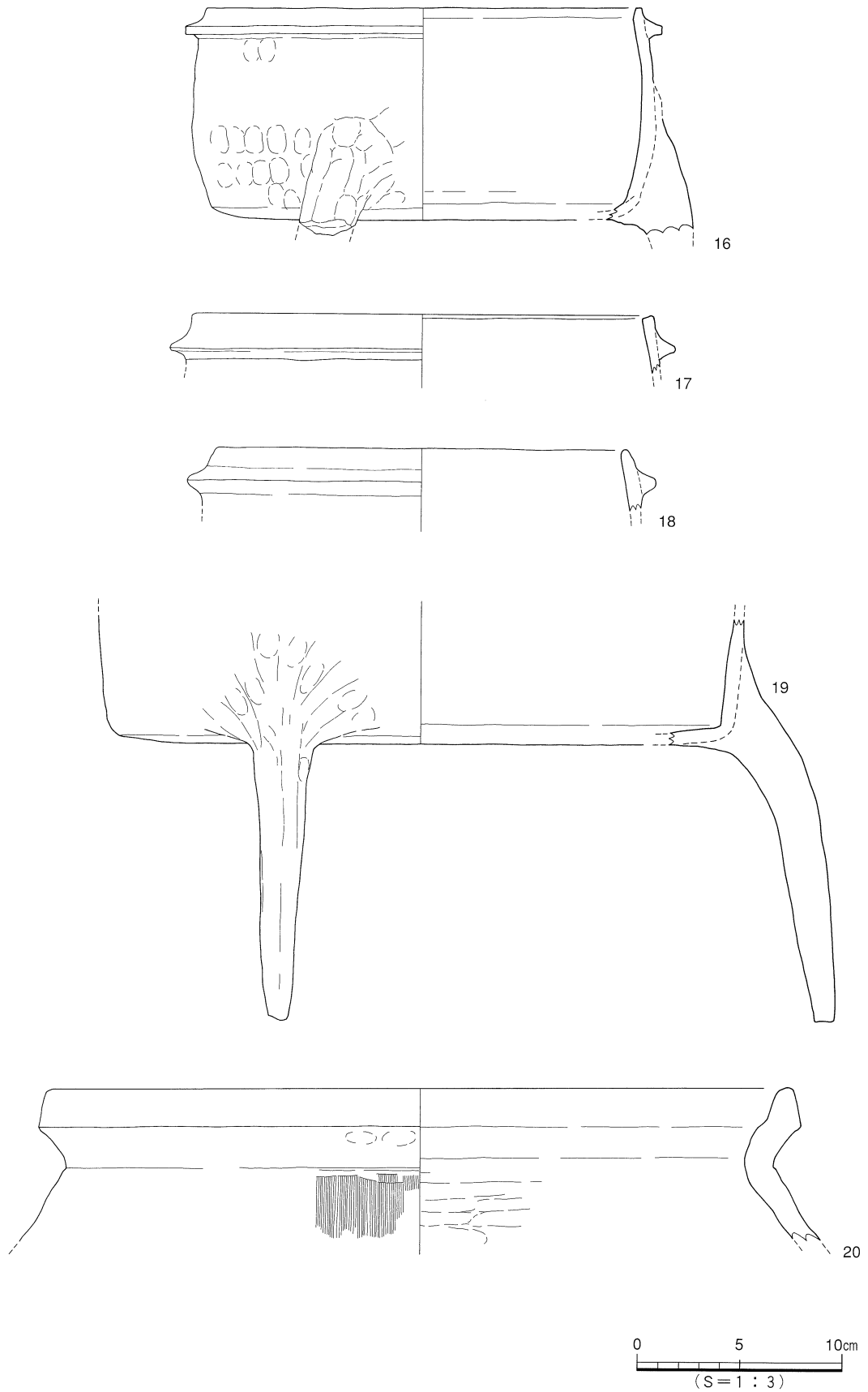
SD2は、調査区南端、A1～D2区で検出した。東側はトレンチと攪乱に、南側はトレンチに切られている。東壁と南壁での土層観察では、遺構は調査区外に続いている。また、南側はSK6、墓1、墓2に切られている。規模は全長7.7m、幅3.2m、深さ55cmを測る。断面形態は舟底状を呈し、埋土は二層に分層される。上層は暗褐色土に粗い砂と炭とが混じるもの、下層は暗褐色土に粗い砂が混じるものである。遺物はSD2のほぼ全域で出土した。特に、SD2の中央部では土器が密集しており、遺物の取り上げは、上層・下層関係なく一括で取り上げた。出土遺物には、土師器、須恵器、埴輪、瓦質の釜、亀山焼の甕、備前焼の播鉢・壺、鉄製品のくさび・鉄さい、焼土、石器、拳大の礫が出土している。

出土遺物(第95～98図、図版23)

10～25は中世の土器である。10は土師器皿、11は杯で、平底の底部には、回転糸切り痕がみられる。12～17・19は土師質の土釜である。12・16・19は三足土釜で、13～15・17には、三足がつくかは不明である。12と16には口縁部に断面方形状の突帯がつき、13～15には、口縁部に断面三角形状の突帯がつき、17には口縁下部に断面三角形状の突帯がつく。18は瓦質の土釜で、口縁下部に断面方形状の突

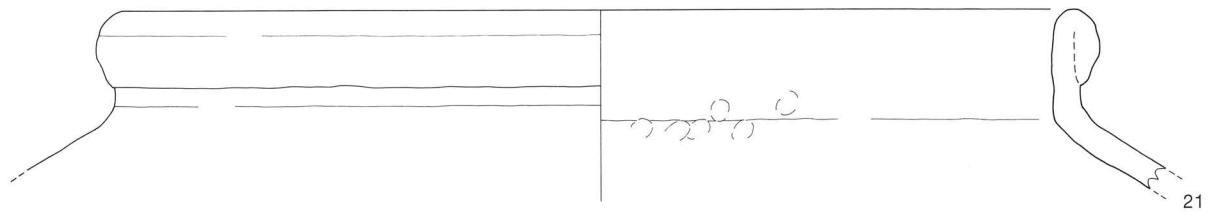


第95図 SD2出土遺物実測図(1)

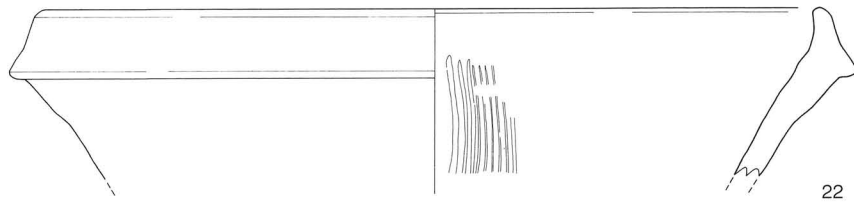


第96図 SD2出土遺物実測図(2)

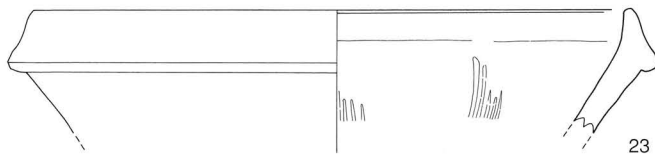
遺構と遺物



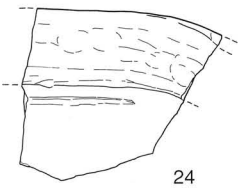
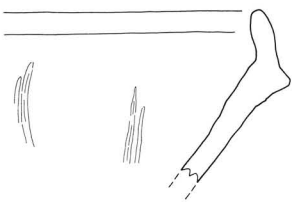
0 10 20cm
(S=1:4)



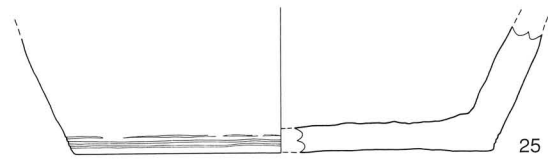
22



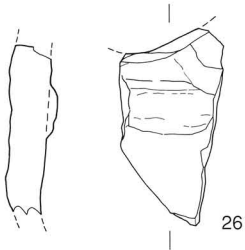
23



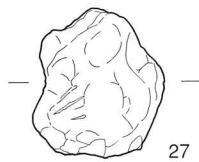
24



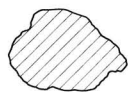
25



26

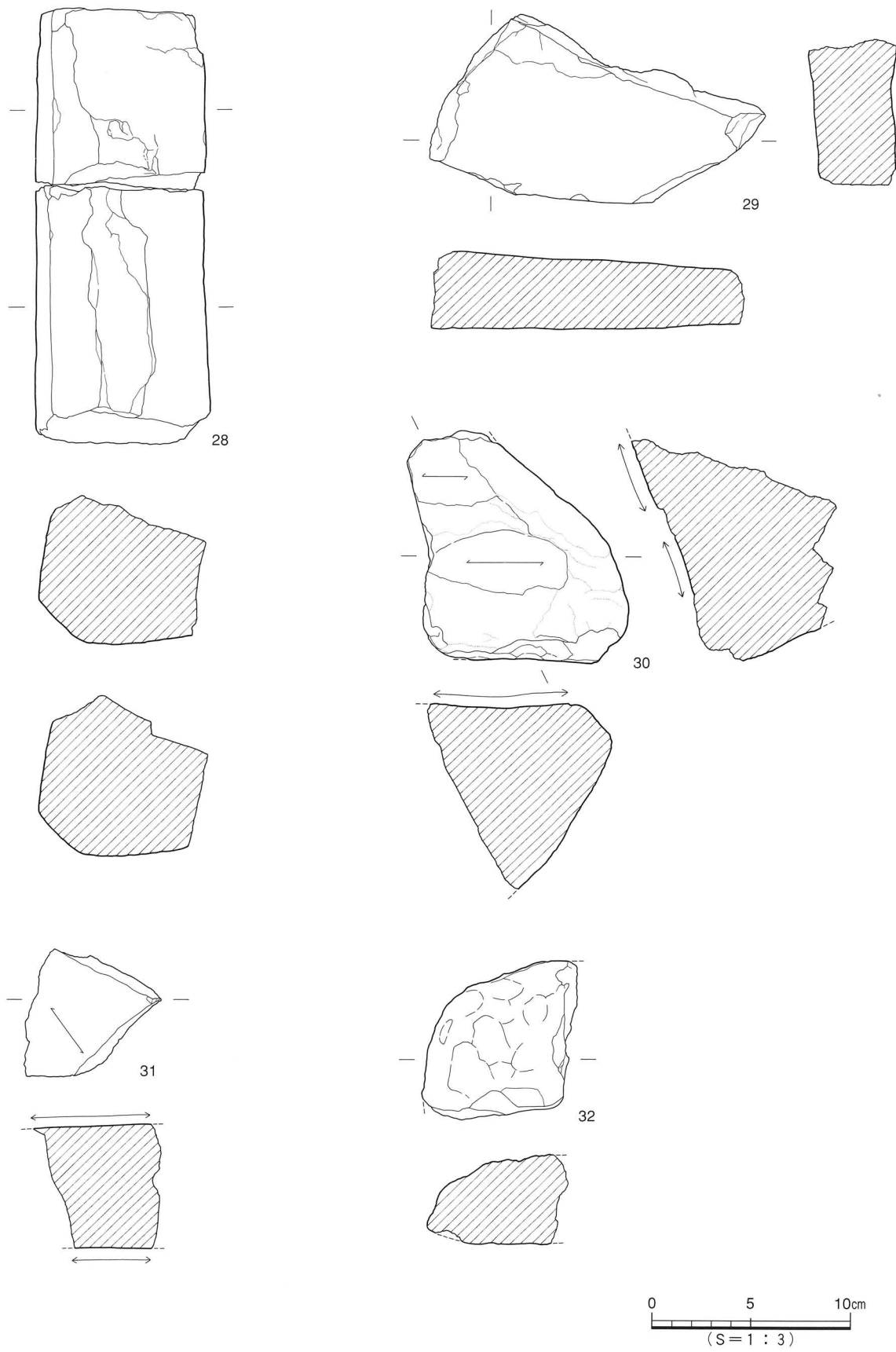


27



0 5 10cm
(S=1:3)

第97図 SD2出土遺物実測図(3)



第98図 SD2出土遺物実測図(4)

帯がつく。20・21は甕である。20は瓦質の甕で、口縁端部は上方に立ち、やや内傾する。21は備前焼の甕で、口縁部は折り曲げて肥厚する。22～24は備前焼の播鉢である。22・23は口縁端部が内湾し、22には内面に9条の櫛目、23には5条の櫛目がみられる。24は片口部であり、内面には2条の櫛目がみられる。25は備前焼壺の底部で、平底になり、外面には3条の工具痕がみられる。

26は古墳時代の埴輪の胴部小片で、方形のタガがつき、円孔がみられる。

27は粘土塊である。土の固まりが焼成により、軽石状になっている。

28～32は石製品である。28・30は用途不明品、29は台石、31は砥石である。32は軽石で、1/4が残る。

時期：出土遺物から、15世紀後半に比定する。

SD3

SD3は、溝が2つに枝分かれするもので、西側をSD3—1、東側をSD3—2とした。

SD3—1は、調査区南東部、B3～B5区で検出した。南側はSD5と合流している。規模は全長5.3m、幅0.25m、深さ5～10cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰褐色土に砂が混じるものである。遺物は出土していない。

SD3—2は、調査区南東部、B3～B5区で検出した。南側はSD5と合流している。規模は全長4.6m、幅0.4m、深さ5～10cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰褐色土に砂が混じるものである。遺物は出土していない。

時期：遺物は出土していないが、埋土がSD5と同じであるため、15世紀後半に比定する。

SD4

SD4は、調査区南西部、D3区で検出した。西側は、浅くなって消滅している。規模は全長1.8m、幅0.7m、深さ10cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰褐色土に砂が混じるものである。遺物は、土師器片、拳大の礫が数点出土している。

時期：遺物による時期決定は難しいが、埋土が掘立1・2、SD5・6と同じであるため、15世紀後半に比定する。

SD5

SD5は、調査区南東部、B3～C3区で検出した。北側はSD3—1、SD3—2と合流する。東側はトレンチに切られているが、東壁の土層観察では調査区外に続いている。規模は全長4.5m、幅1.9m、深さ10～15cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰褐色土に砂が混じるものである。遺物は、土師器、土釜が出土した。

出土遺物（第99図）

33は土師器皿の小片で、口縁端部は丸い。15世紀。34は土師器の杯で、口縁端部は丸く外反する。15世紀後半～16世紀初頭。35は土師質の土釜で、口縁端部には断面三角形の突帯がつく。15世紀。

時期：出土遺物から、15世紀後半～16世紀初頭に比定する。

SD6

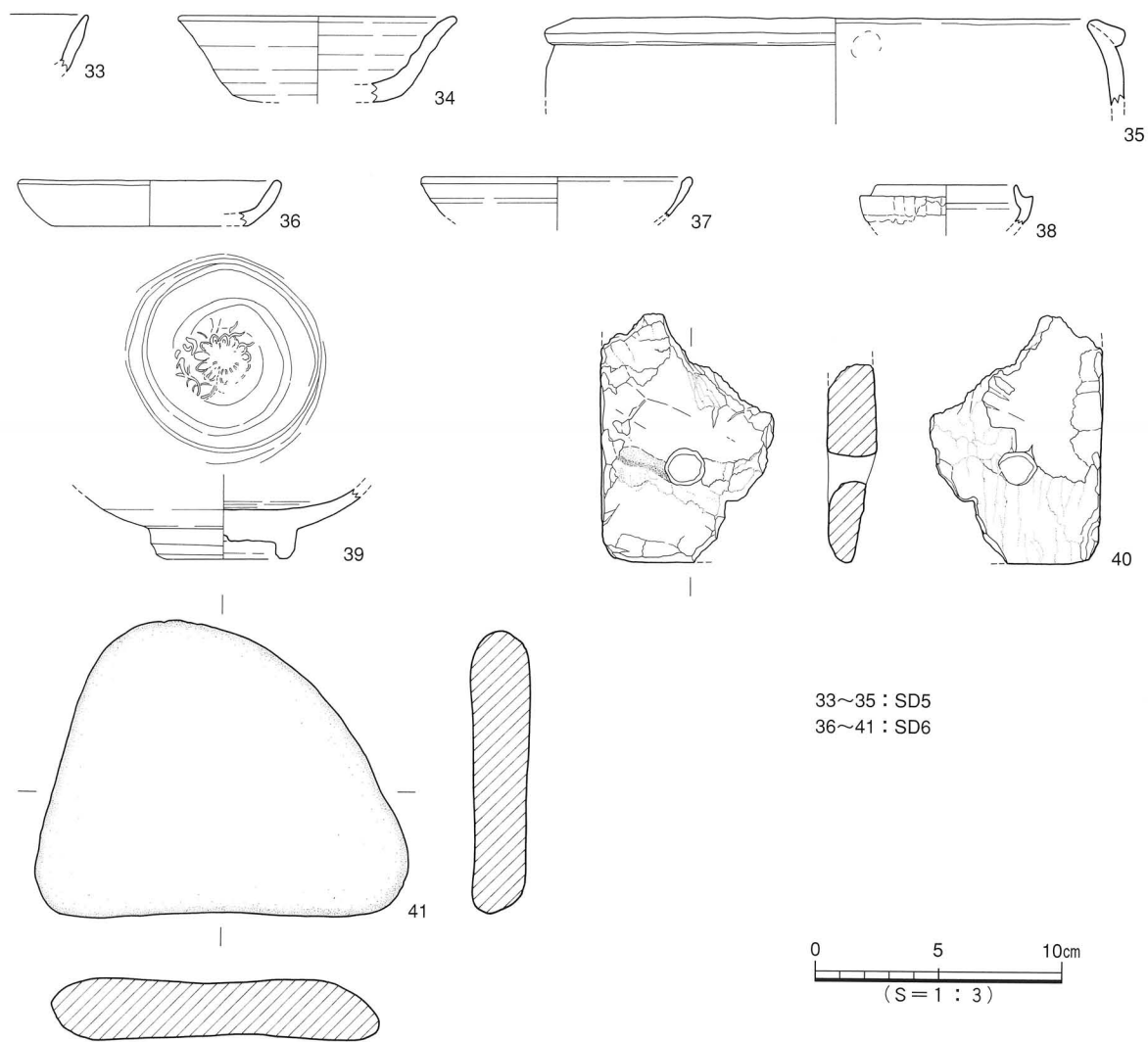
SD6は、調査区北部、B12～B15区で検出した。北側は「L」字形に西に延び、土層観察では調査区外に続いている。また、中央部東側と南側は柱穴（埋土A）に切られている。規模は全長14.5m、幅0.3～0.9m、深さ5～13cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰褐色土に砂が混じるものである。遺物は、土師器、須恵器、青磁碗、鉄製品の釘、石器が出土した。

出土遺物（第99図、図版23）

36～39は中世15世紀後半の土器である。36は土師器の皿で、口縁端部は丸い。37は土師器の杯で、口縁端部は肥厚し丸い。38は合子の身になる。39は青磁碗で、底部はケズリ出し高台が付き、内面には施釉と花文がみられる。

40・41は石製品である。40は石鍋を転用した石錘で、材質は滑石である。41は台石になる。

時期：出土遺物から、15世紀後半に比定する。



第99図 SD5・6出土遺物実測図

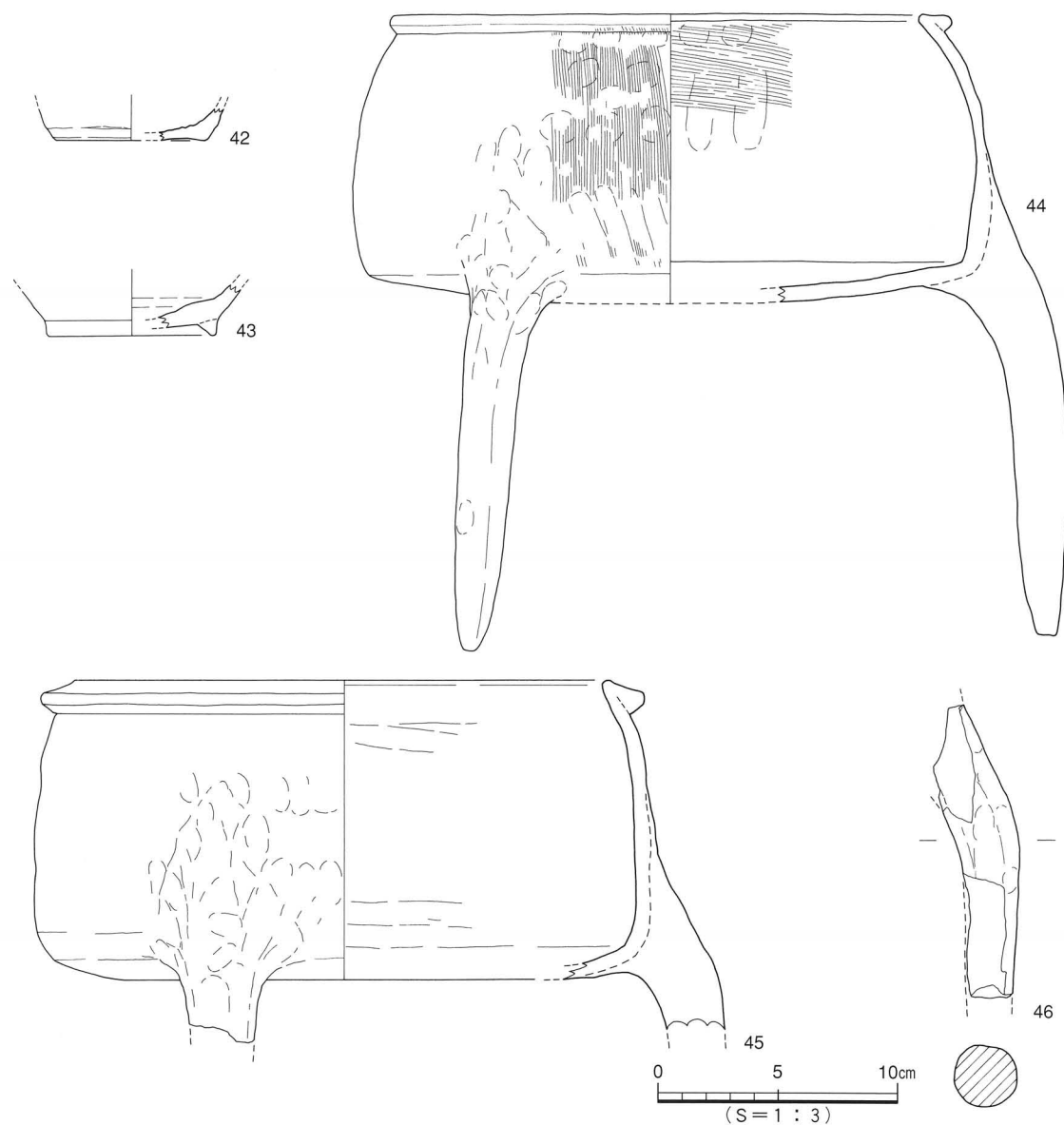
SD7

SD7は、調査区南東部、A2～B3区で検出した。東側はトレンチに切られているが、東壁の土層観察では調査区外に続いている。規模は全長7m、幅0.2～0.8m、深さ10cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は暗褐色土に砂が混じるものである。遺物は、土師器、土釜が出土した。

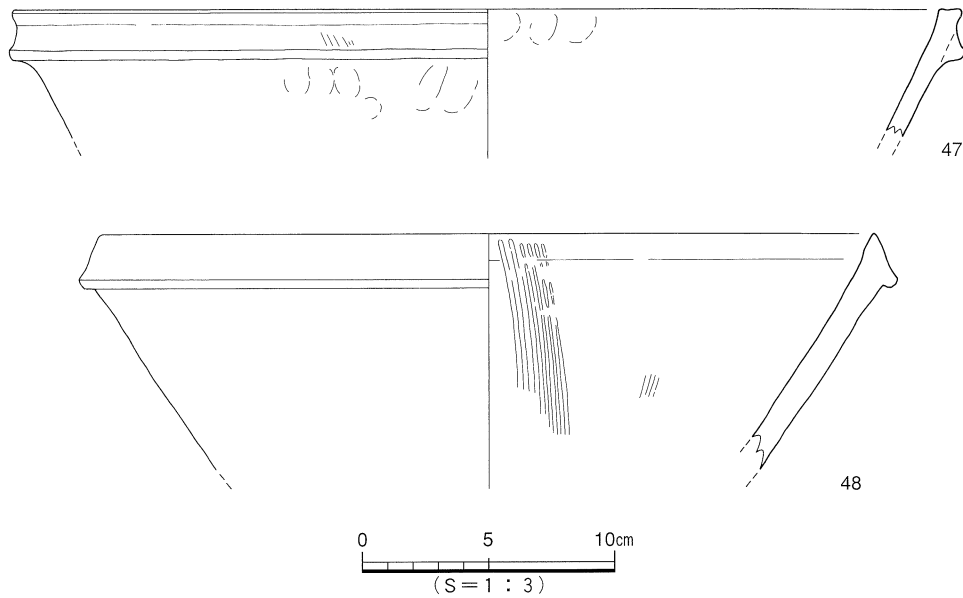
出土遺物（第100・101図、図版23）

42～48は中世15世紀後半の土器である。42は土師器の皿で、底部には回転糸切り痕がみられる。43は土師器の椀で、高台がつく。44～46は土師質の土釜である。44・45は三足土釜で、口縁端部には断面三角形の突帯がつく。44は底面がやや丸みを帯び、45は底面が水平になる。46は脚部片。47は土師質の鉢の口縁部である。口縁端部は面をなし、口縁部よりやや下には断面三角形の突帯がつく。48は備前焼の播鉢で、内面には6条の櫛目がみられる。

時期：出土遺物から、15世紀後半に比定する。



第100図 SD7出土遺物実測図(1)



第101図 SD7出土遺物実測図(2)

(3) 井戸 (SE)

井戸はSE1・2の2基を検出した。

SE1 (第102図、図版21)

SE1は、調査区南、C3区で検出した。平面形態は円形を呈し、断面形態は円筒形となる。規模は直径1.4m、深さ0.8mを測る。埋土は三層からなり、上層は灰褐色土に砂が混じるもの、中層は灰褐色粘土に砂が混じるもの、下層は中層土壤に青灰色粘土が混じるものである。中層からは、人頭大の石が多数出土した。石の出土状況からは石組の糸井戸であったと推測される。遺物は土師器、備前焼の甕、石器が出土した。

出土遺物 (第103図)

49～52は中世の土器である。49・50は土師器の杯で、口縁部は外反し、端部は丸い。49は15世紀後半。51・52は15世紀の甕である。51は備前焼の甕の底部で、底部外面には織物が付着する。52は土師質の甕の口縁部で、口縁部は外反する。

53・54は石製品の砥石である。

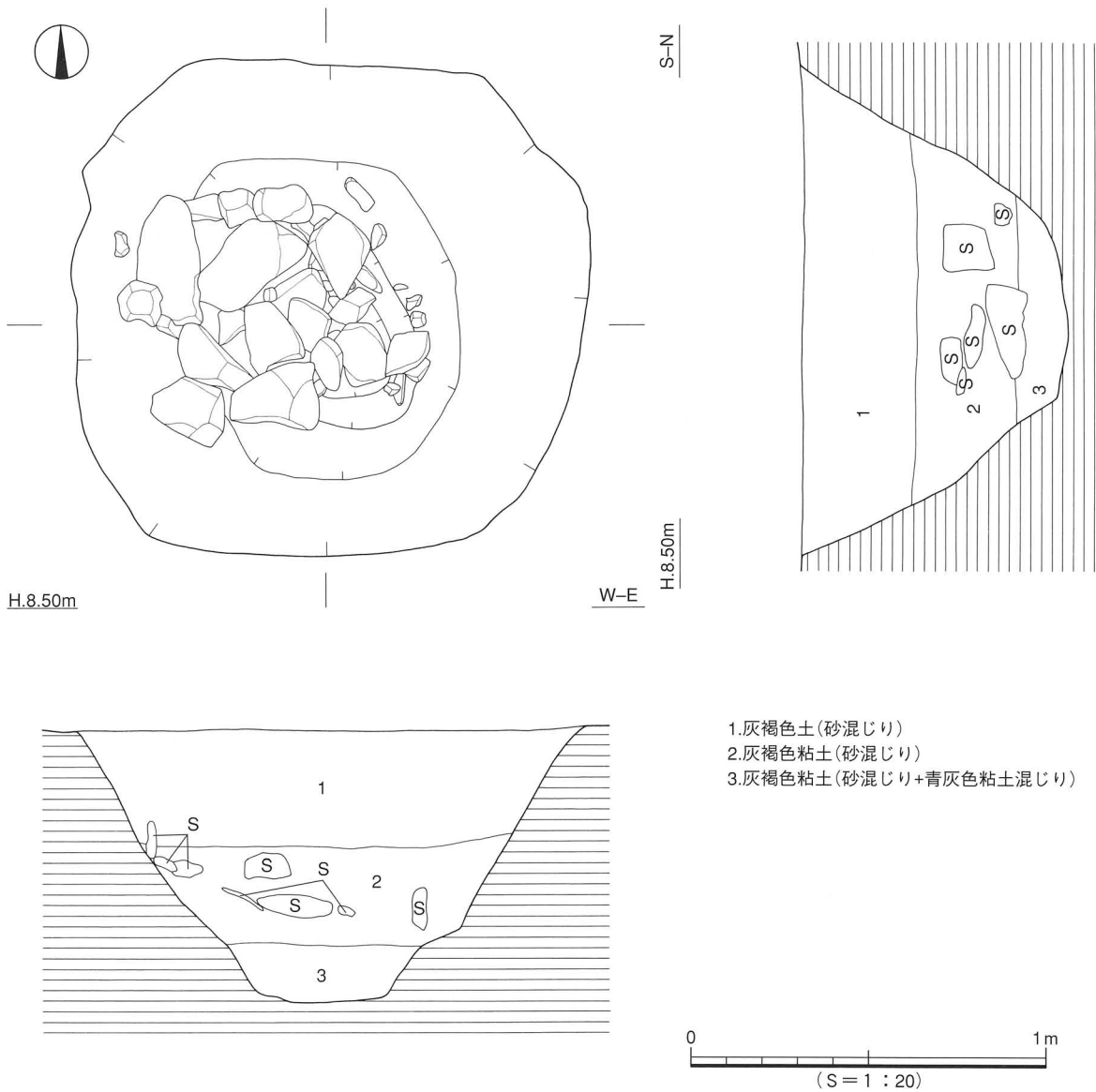
時期：出土遺物から、15世紀後半に比定する。

SE2 (第104図、図版21)

SE2は、調査区南西部、D6区で検出した。西側はトレンチに切られている。平面形態は円形を呈し、断面形態は円筒形となる。規模は東西検出長0.8m、南北1m、深さ40cmを測る。埋土は灰褐色土に砂が混じるものである。井戸は石組で、拳大の礫が多くある。遺物は、埋土下部から備前焼の甕と石器とが出土した。

出土遺物 (第104図)

55は備前焼の甕で、底部は平底になる。15世紀。56は石製品で、砥石である。一部が欠損している。
時期：出土遺物から、15世紀後半に比定する。



第102図 SE1測量図

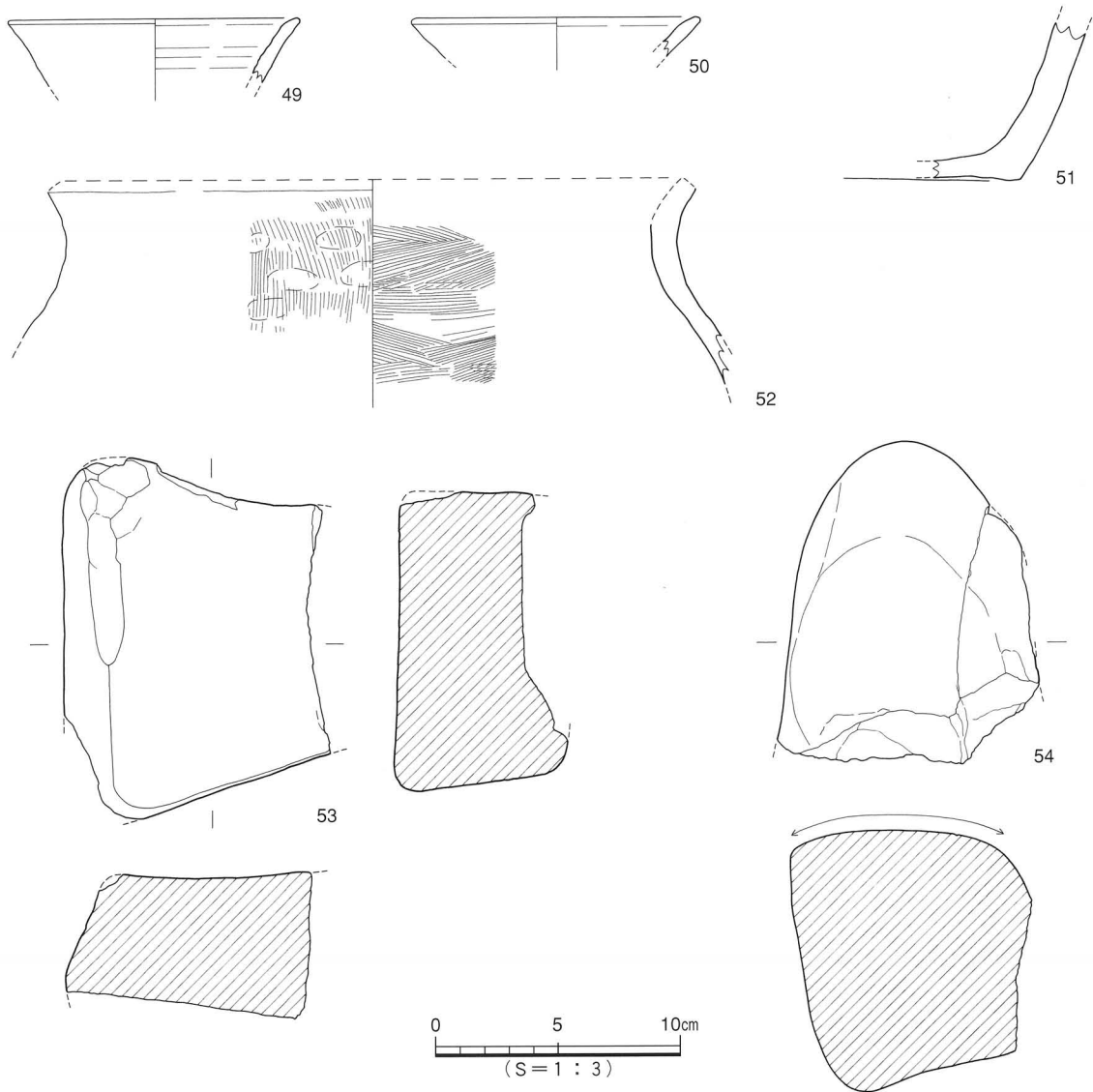
(4) 墓 (第105図、図版19・20)

墓は2基を検出した。

墓1 (木棺墓)

墓1は、調査区南、C1～D1区で検出した。SD2を切り、北側はトレンチに切られる。本遺構は南壁の土層観察時に、墓の掘り方と人骨の一部を断面で検出したものである。墓1は、木棺墓になる。墓坑の平面形態は楕円形を呈し、規模は南北検出長1.94m、東西2.34m、深さ25～35cmを測る。埋土は黒褐色土に粗い砂が混じるものである。

墓坑のほぼ中央には、木棺が据え置かれている。木棺の平面形態は長方形を呈し、規模は南北検出長1.36m、東西0.9m、深さ25cmを測る。木棺内には成人と思われる人骨が西向き北枕で屈葬され、頭部東側には土師器の杯1点が副葬されている。埋土は、外側が黒褐色土に粗い砂が混じるもので、内側は、外側より淡い黒褐色土に粗い砂が混じるものである。



第103図 SE1出土遺物実測図

出土遺物（第105図、図版23）

57は土師器の杯の完形品である。口縁部は外反し、端部は丸い。底部はヘラ切り痕で、ナデ消しがみられる。16世紀初頭。

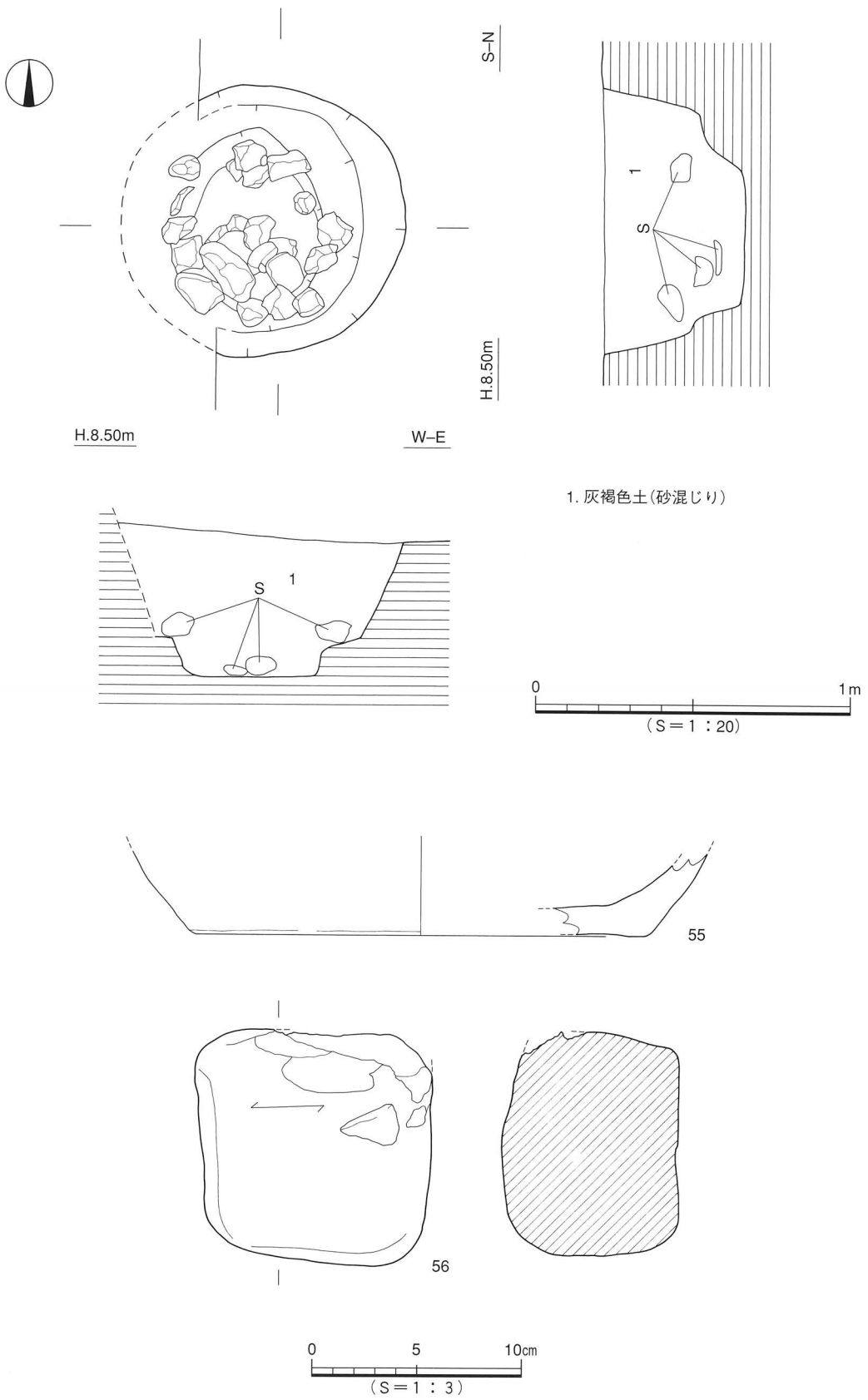
時期：副葬された土師器の杯から、16世紀初頭に比定する。

墓 2（土坑墓）（第105図、図版19・20）

墓 2 は、調査区南、D 1 区に位置し、SD 2 を切り、北側はトレンチに切られる。墓 1 と同じく、南壁の土層観察時に、墓の掘り方と人骨の一部を断面で検出したものである。墓 2 は土坑墓になる。墓坑の平面形態は楕円形を呈し、規模は南北検出長0.5m、東西 1 m、深さ25cmを測る。埋土は黒褐色土に粗い砂が混じるものである。遺物は出土しなかった。

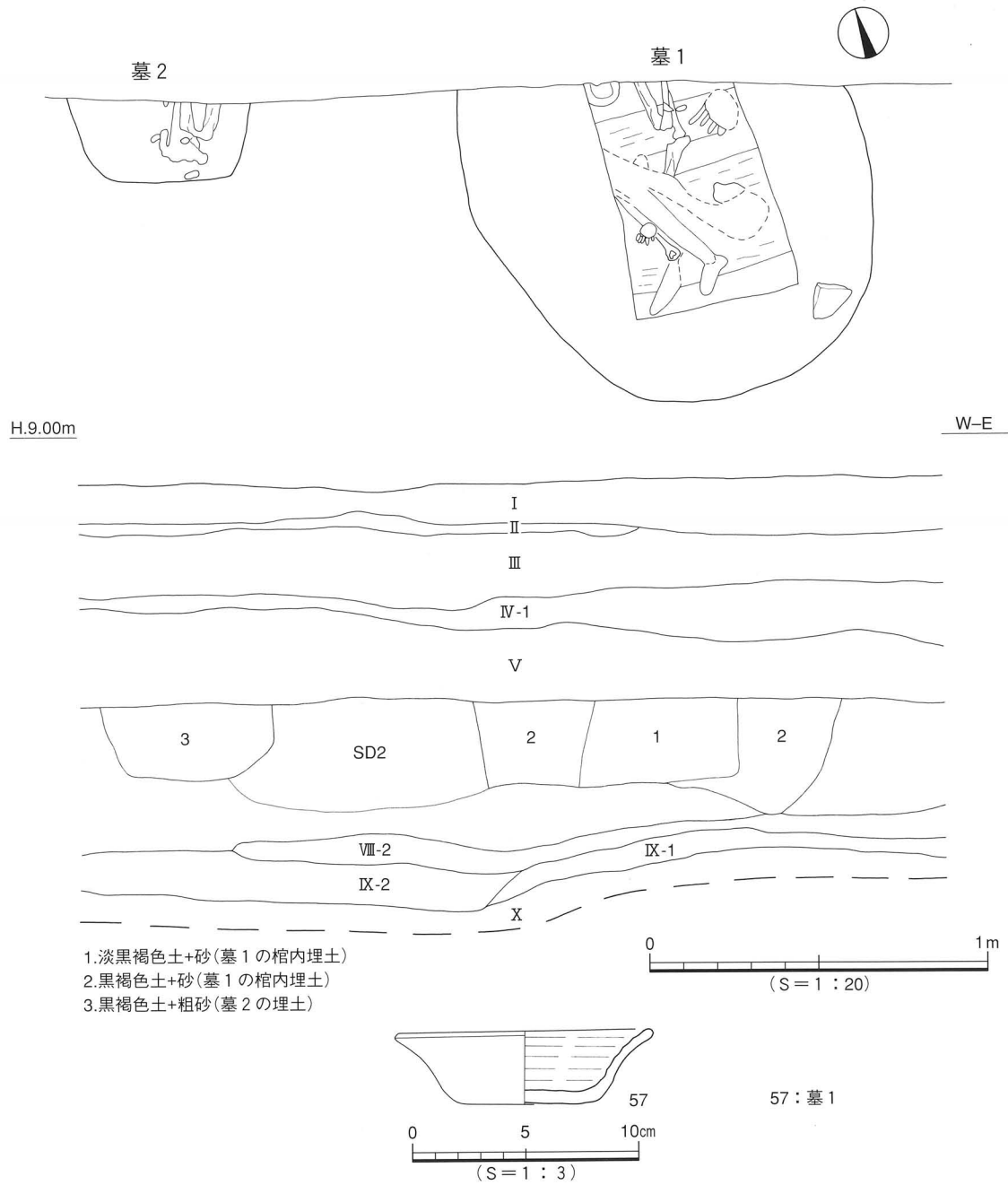
時期：墓 1 と同じ検出面、同じ埋土であることから、16世紀初頭とする。

遺構と遺物



1. 灰褐色土(砂混じり)

第104図 SE2測量図・出土遺物実測図



第105図 墓1・2測量図・出土遺物実測図

(5) 土坑 (SK)

土坑はSK 1～13の13基を検出した。

SK 1

SK 1は、調査区中央、B8～C8区に位置し、南東隅は柱穴(埋土A)に切られている。長軸方位は東西になる。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は東西3.7m、南北0.7m、深さ17cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は灰褐色土に砂が混じるものである。遺物は、土師器、土釜、青磁椀、鉄製の釘、礫が出土した。

出土遺物（第106図58～62）

58～60は土師器の杯で、15世紀後半に比定される。58は口縁部がやや内傾し、59・60は平底で、底部には回転糸切り痕がみられる。61は土師質の三足土釜で、底面は水平になる。15世紀。62は東播系コネ鉢で、口縁部は外反する。13世紀。

時期：13世紀の遺物は1点で、15世紀後半の遺物が多数を占めているため、遺構の埋没時期は15世紀後半に比定する。

S K 2

S K 2は、調査区中央南、C 7～C 8区に位置し、北側はトレンチに切られている。長軸方位は東西になる。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は南北長0.9m、東西2.5m、深さ29cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は灰褐色土に砂が混じるものである。遺物は、土師器片と瓦器碗片とが出土した。

時期：遺物は、小片のため時期決定は難しいが、埋土が掘立1・2他と同じであるため、15世紀後半に比定する。

S K 3

S K 3は、調査区中央南、B 7～C 7区に位置する。北・西・東は柱穴（埋土A）に切られている。長軸方位は東西になる。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は東西2.8m、南北0.9m、深さ29cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は灰褐色土に砂が混じるものである。遺物は、土師器小片（15世紀後半）と土釜片とが出土した。

出土遺物（第106図63～65）

63～65は中世13世紀の土師器で、63は皿の口縁部になる。64は杯の口縁部で、口縁端部は水平である。65は鉢の口縁部で、口縁部は粘土の貼り付けによる。

時期：13世紀の遺物は3点で、埋土や多数の土器小片（図化なし）から、15世紀後半に比定する。

S K 4

S K 4は、調査区中央南西部、D 7区に位置する。東側はトレンチに、北側は柱穴（埋土A）に切られている。長軸方位は南北になる。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は東西検出長0.8m、南北2.1m、深さ29cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は灰褐色土に砂が混じるものである。遺物は、土師器と備前焼の壺片とが出土した。

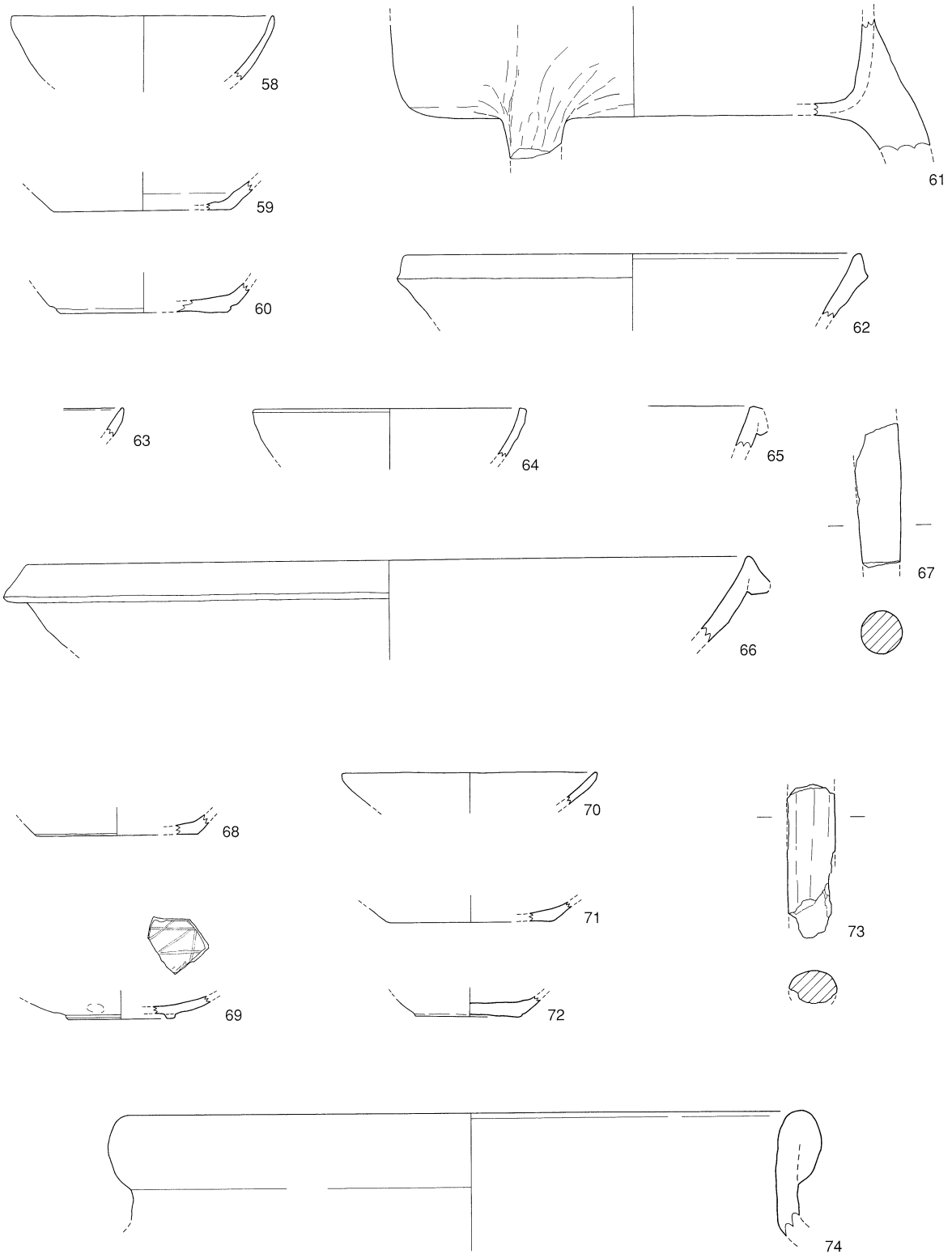
出土遺物（第106図66・67）

66・67は中世15世紀後半の土器である。66は土師器の鉢で、外反する口縁に垂下する断面三角形の突帯がつく。67は土師質の土釜の脚部になる。

時期：出土遺物から、15世紀後半に比定する。

S K 5

S K 5は、調査区中央南西部、C 6～D 7区に位置し、西側はトレンチと柱穴（埋土A）に切られている。長軸方位は南北になる。平面形態は長楕円形を呈し、規模は東西検出長1.2m、南北3.2m、



58~62 : SK1
 63~65 : SK3
 66・67 : SK4
 68・69 : SK5
 70~74 : SK7

0 5 10cm
 (S = 1 : 3)

第106図 SK1・3・4・5・7出土遺物実測図

短軸1.2m、深さ15cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は灰褐色土に砂が混じるものである。遺物は、土師器小片（15世紀後半）、瓦器椀、備前焼の壺片が出土した。

出土遺物（第106図68・69）

68は土師器の杯の小片で、底部は回転糸切り痕がみられる。15世紀。69は和泉型瓦器椀で、低い高台がつく。内面に格子状の暗文がみられる。13世紀前半。

時期：13世紀の遺物が1点あるが、埋土や多くの土器（小片）から、15世紀後半に比定する。

S K 6

S K 6は、調査区南、C 1区に位置し、S D 2を切り、北側はトレンチに切られている。平面形態は楕円形を呈し、規模は南北長0.3m、東西1.1m、深さ40cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は暗褐色土に砂が混じるものである。遺物は出土していない。

時期：埋土がS D 2やS D 7と同じであることから、15世紀後半に比定する。

S K 7（図版22）

S K 7は、調査区北東部、B 11～12区に位置する。長軸方位は東西になる。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は東西2.85m、南北1.05m、深さ10～35cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は灰褐色土に砂が混じるものである。遺物は、土師器、土釜、備前焼の甕、亀山焼の甕、鉄製品の釘が出土した。

出土遺物（第106図70～74）

70～72は15世紀の土師器の杯である。70は口縁部が尖り気味になる。71・72は底部に回転糸切り痕がみられ、71の底部は水平である。73は瓦質の土釜の脚部である。15世紀。74は備前焼の甕の口縁部で、口縁部は折り曲げている。15世紀後半。

時期：出土遺物から15世紀後半に比定する。

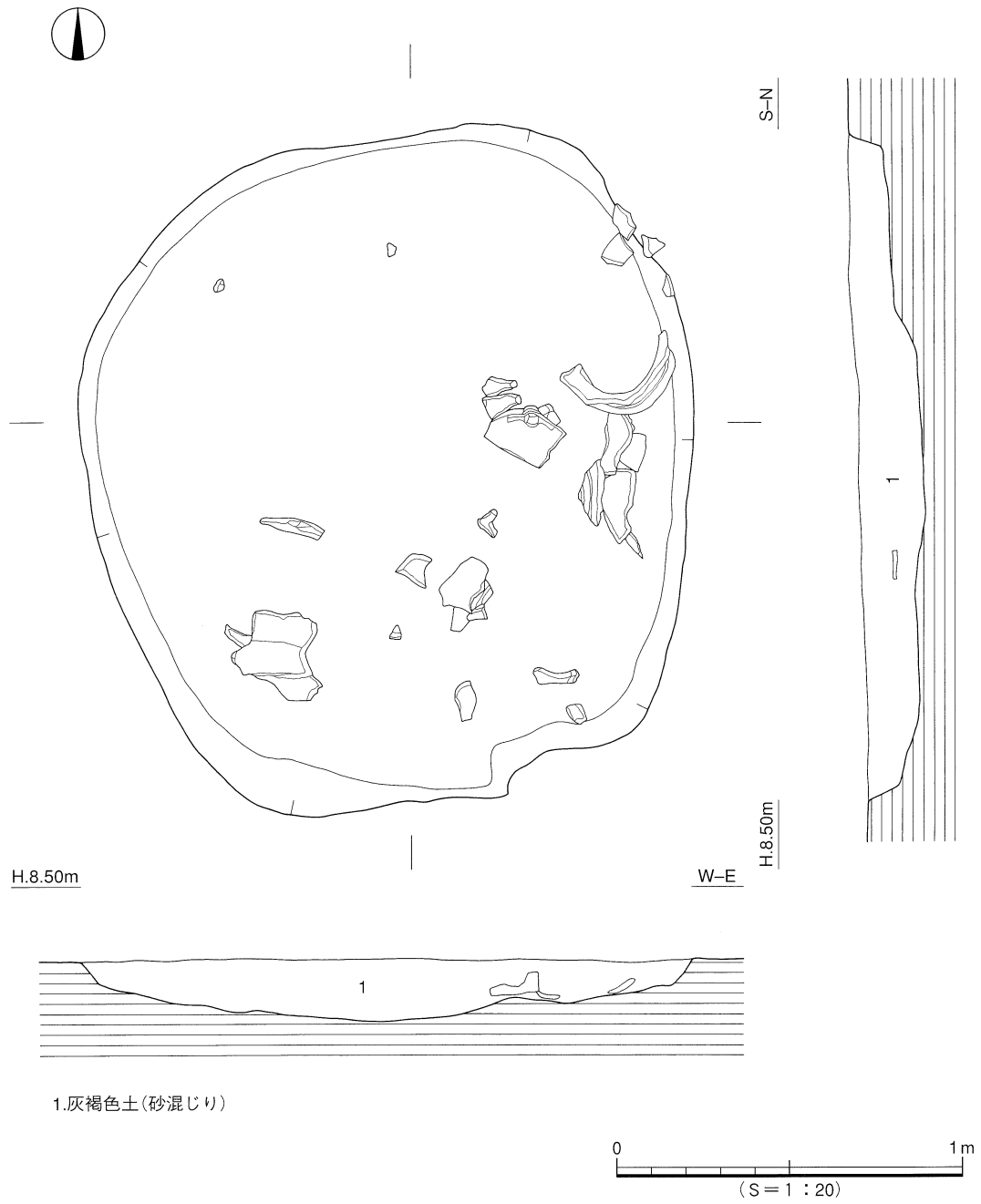
S K 8（第107図、図版22）

S K 8は、調査区北西部、C 12区に位置する。平面形態は円形を呈し、規模は南北1.95m、東西1.75m、深さ9～18cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は灰褐色土に砂が混じるものである。遺物は、土師器、瓦質の風炉、天目椀、備前焼の播鉢、石器が出土した。

出土遺物（第108図、図版24）

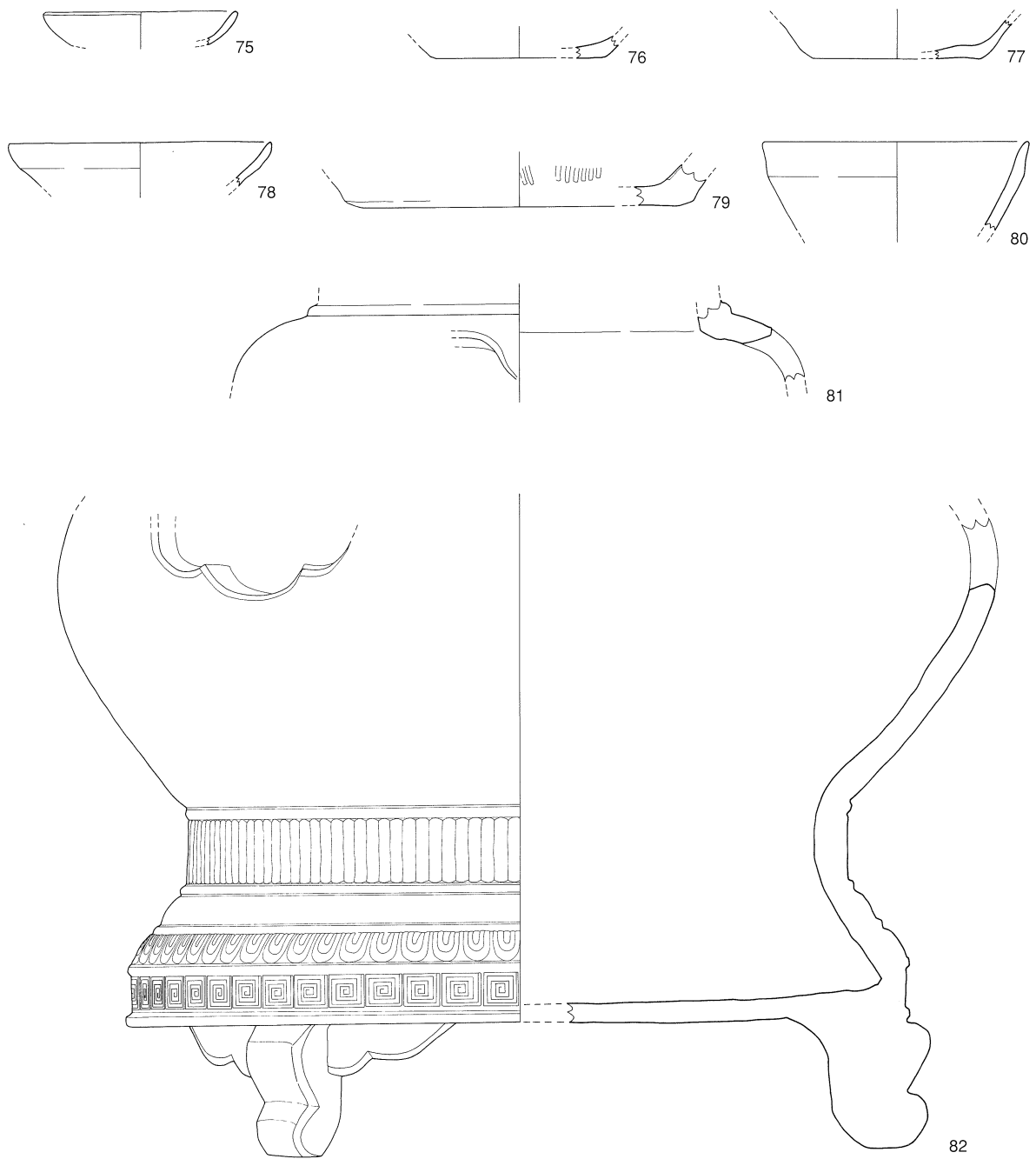
75～82は中世15世紀後半の土器である。75は土師器の皿で、口縁端部は丸い。76～78は土師器の杯で、76・77は底部に回転糸切り痕がみられる。78は口縁部が尖り気味になる。79は備前焼の播鉢の底部で、内面には6条の櫛目がみられる。80は古瀬戸の天目碗の口縁部で、内外面には施釉がみられる。81・82は瓦質の風炉で、81は肩部に火窓がみられる。82は三足がつく。蓮弁文と雷文がみられ、三ヶ所に火窓がある。

時期：出土遺物から、15世紀後半に比定する。



第107図 SK8測量図

遺構と遺物



第108図 SK8出土遺物実測図

SK9

SK9は、調査区北西部、C13～C14区に位置する。平面形態は円形を呈し、規模は東西1.05m、南北1.25m、深さ5～11cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は灰褐色土に砂が混じるものである。遺物は、土師器と須恵器とが出土した。

出土遺物（第109図83）

83は中世の土師器皿で、口縁部は内傾し、端部は丸い。15世紀後半。

時期：出土遺物から、15世紀後半に比定する。

SK10

SK10は、調査区北西部、C11～D12区に位置する。平面形態は楕円形で、規模は東西1.4m、南北0.85m、深さ12cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は灰褐色土に砂が混じるものである。遺物は、土師器、土釜、亀山焼甕片とが出土した。

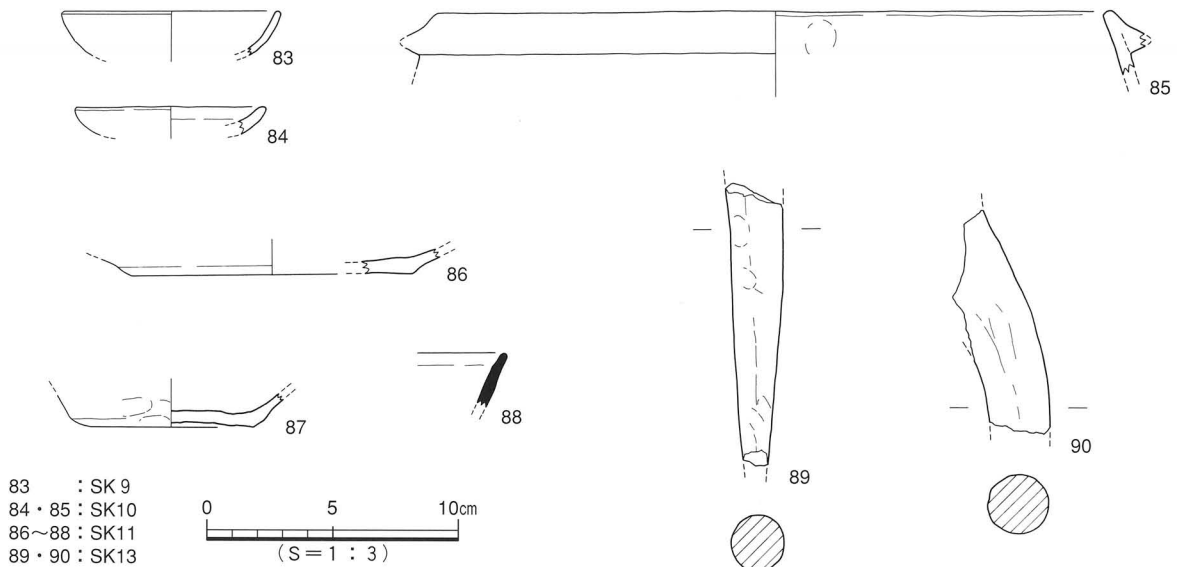
出土遺物（第109図84・85）

84・85は中世15世紀後半の土器である。84は土師器の皿、85は土師質の土釜で、口縁部には断面三角形の突帯がつく。

時期：出土遺物から、15世紀後半に比定する。

SK11

SK11は、調査区北西部、C11～D12区に位置する。西側はトレンチに切られているが、西壁の土層観察では調査区外に続いている。長軸方位は東西になる。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は東西検出長1.75m、南北0.85m、深さ5～18cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は灰褐色土に砂が混じるものである。遺物は、土師器と瓦質の釜片とが出土した。



第109図 SK9・10・11・13出土遺物実測図

出土遺物（第109図86～88）

86～88は中世15世紀後半の土器である。86は東播系須恵器の椀で、平底の底部はナデがみられる。87は土師器の杯の底部で、上げ底になる。底部には回転糸切り痕がみられる。88は須恵質杯の口縁部で、端部は丸い。

時期：出土遺物から、15世紀後半に比定する。

S K 12

S K 12は、調査区北東部、A 14区に位置する。東側はトレンチに切られているが、東壁の土層観察では調査区外に続いている。長軸方位は南北になる。平面形態は楕円形を呈し、規模は東西検出長0.6m、南北3m、深さ25cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は灰褐色土に砂が混じるものである。遺物は出土していない。

時期：埋土が掘立1・2他と同じであることから、15世紀後半に比定する。

S K 13

S K 13は、調査区中央北東側、A 10～B 11区に位置する。西側はS P 343に、北東側はS P 376に切られている。平面形態は楕円形を呈し、規模は東西3.9m、南北2.45m、深さ2～14cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は灰褐色土に砂が混じるものである。遺物は、土師器と土釜とが出土した。

出土遺物（第109図89・90）

89・90は、中世15世紀後半の土師質土釜で、脚部になる。

時期：出土遺物から、15世紀後半に比定する。

(6) 性格不明遺構（S X）

性格不明遺構はS X 1の1基を検出した。

S X 1

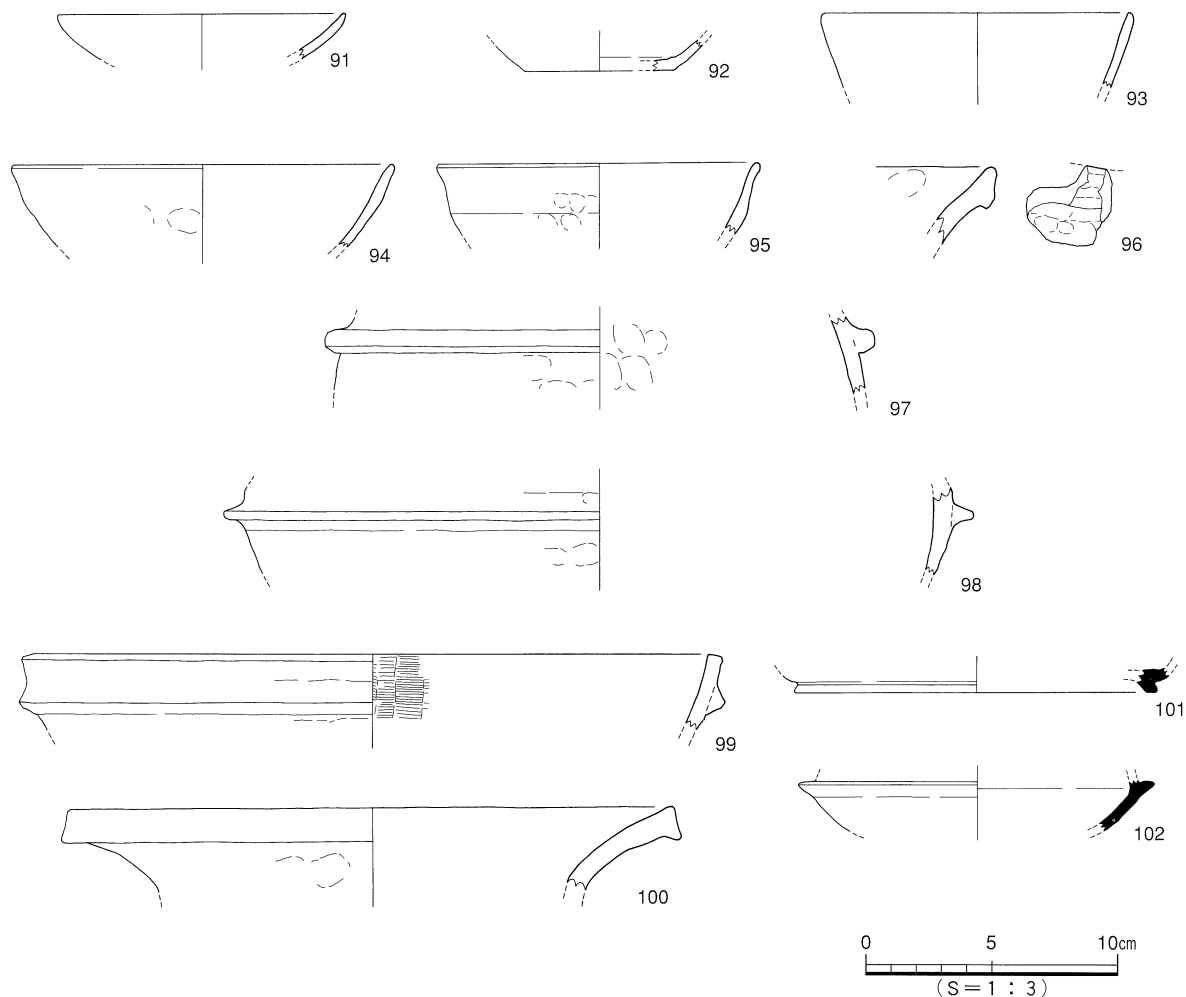
調査区中央東側、B 8～B 10区に位置する。東側と南側は柱穴（埋土A）に切られている。平面形態は不整形で、規模は南北5m、東西2.9m、深さ2～39cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は灰褐色土に砂が混じるものである。遺物は弥生土器、須恵器、土師器、土釜、瓦器椀が出土した。

出土遺物（第110図）

91～99は中世の土器である。91・92は土師器の皿で、15世紀になる。91は口縁部が外反し、端部は丸い。92は平底の底部で、回転糸切り痕がみられる。93は土師器の杯の口縁部で、口縁部は外傾し、端部は丸い。15世紀。94・95は和泉型瓦器椀の口縁部で、口縁端部は丸い。13世紀。96は東播系コネ鉢の片口部で、口縁端部は外傾気味である。14世紀。97・98は15世紀の土釜である。97は土師質の口縁部で、口縁外面には断面四角形状の突帯をもつ。98は瓦質の口縁部で、口縁外面には断面三角形状の突帯をもつ。99は土師質鉢の口縁部で、口縁外面には断面三角形状の突帯をもつ。15世紀。

100は弥生時代の壺形土器の口縁部である。口縁部は外反し、端部は肥厚している。101・102は古墳時代～古代の須恵器である。101は坏の底部で、高台をもつ。102は坏身片で、立ち上がりは欠損し、受部はほぼ水平に延びる。6世紀。

時期：弥生時代～古代、中世13～15世紀代の遺物が出土しているが、15世紀の遺物が多数出土していることと、埋土から15世紀後半に比定する。



第110図 SX1 出土遺物実測図

(7) 柱 穴 (SP)

本調査において確認された柱穴は378基である。埋土は、埋土A：灰褐色土に砂が混じるもの、埋土B：暗灰褐色土に砂が混じるもの、埋土C：灰褐色土に砂と黄色粘土と炭が混じるものの3つに分かれる。

埋土Aは339基で、調査区全域で検出した。平面形態は円～楕円形を呈し、規模は径15～70cm、深さ15～70cmを測る。遺物は、土師器、椀、コネ鉢、土釜、石製品が出土した。掘立柱建物址の柱穴は、埋土Aになる。

埋土Bは36基で、調査区中央部から中央南側、北西部から北東部にかけて検出した。平面形態は円～楕円形を呈し、規模は径15～50cm、深さ15～50cmを測る。遺物は、須恵器、土師器、杯が出土した。

埋土Cは3基である。調査区中央北側で検出した。平面形態は円～楕円形を呈し、規模は径30～50cm、深さ15～30cmを測る。遺物は土師器、コネ鉢が出土した。

出土遺物（第111図、図版24）

103～107・109～111・113～116は、埋土A（灰褐色土に砂が混じるもの）、108は埋土B（暗灰褐色土に砂が混じるもの）、112は埋土C（灰褐色土に砂と黄色粘土と炭が混じるもの）の柱穴から出土した遺物である。

103はS P 354、104はS P 306出土品で、15世紀の皿である。口縁部は外反し、端部は丸く、底部は平底になる。104は底部に回転糸切り痕がみられる。

105～108は土師器の杯で、105はS P 216、106はS P 306、108はS P 232出土品で、底部に回転糸切り痕がみられる。105は完形品で、底部から内湾しながら立ち上がり、端部は丸い。15世紀。106は口縁部がやや内傾し、端部は丸い。15世紀。108は厚い平底で、107はS P 57出土品で、15世紀。109はS P 326出土品で、同安窯青磁碗の口縁部である。外面に櫛目がみられる。13世紀。110・111はS P 12出土の青磁碗で、削り出し高台をもつ。15世紀。110は完形品で、外面に細線の蓮弁文をもつ。111は外面に雷文帯をもち、内面見込みに花文スタンプが施される。112はS P 303出土品で、112は東播系コネ鉢の口縁部である。14世紀前半。113はS P 354出土の土鍋で、口縁部は内面に稜をもって外反する。15世紀。114はS P 307出土品で、土釜の脚部である。15世紀。

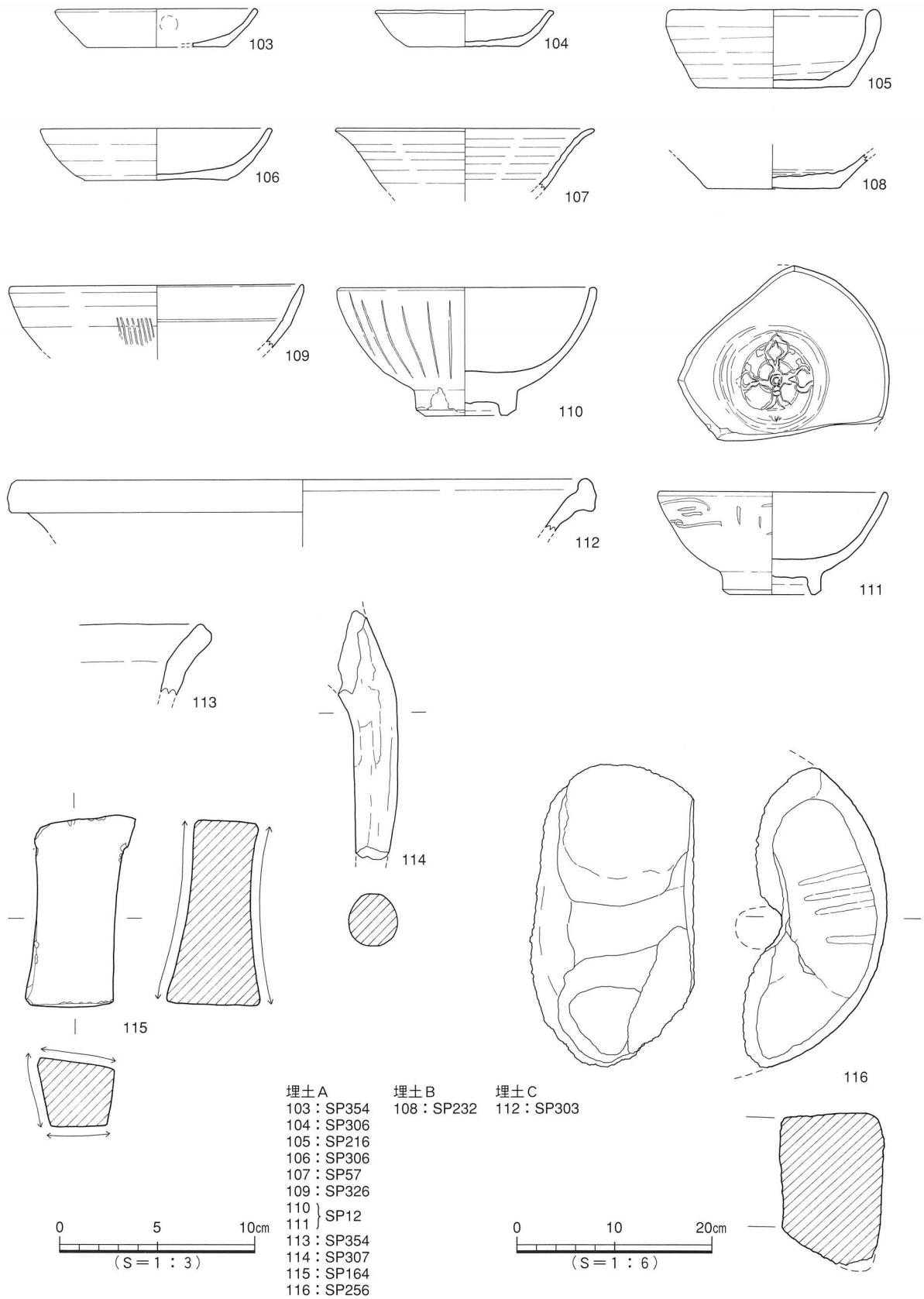
115・116は石製品である。115はS P 164出土の砥石で、ほぼ完存している。116はS P 256出土の石臼（挽臼）である。材質は花崗岩で、風化が著しい。残存は約1/3である。

(8) 第V層・第VI層出土遺物

ここでは、包含層や出土地点が特定できないものを取り上げる。

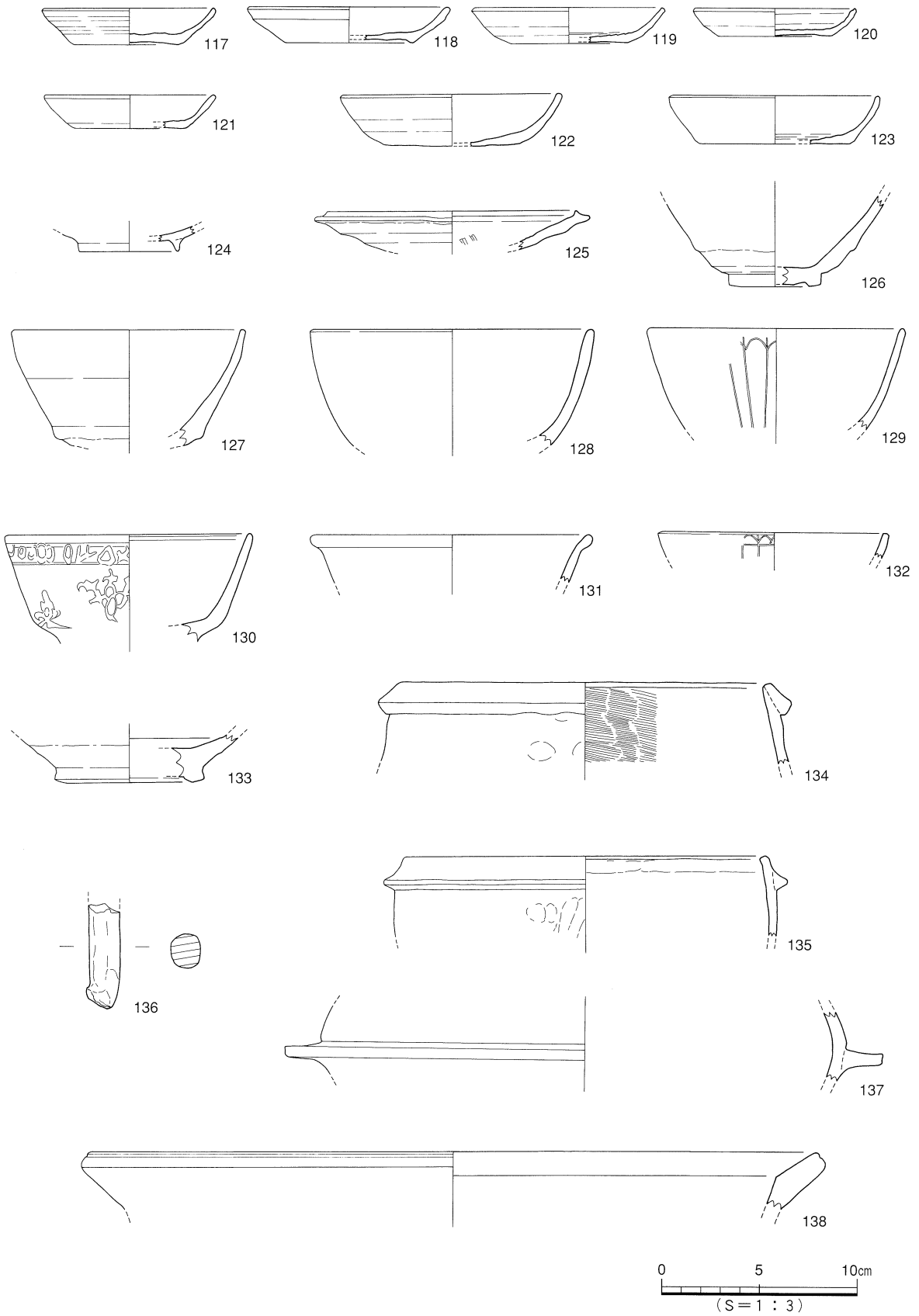
出土遺物（第112～114図）

1) 第V層（117～148）：117～145は中世の土器である。117～121は15世紀の土師器皿で、底部には回転糸切り痕がみられる。117～120の口縁部は内傾し、端部は丸く、底部はやや上げ底になる。117は完形品。121の口縁部は外傾し、口縁端部は丸く、平底になる。灯明皿として使用されたものである。122・123は土師器の杯である。底部から内湾しながら立ち上がり、端部は丸い。底部には回転糸切り痕がみられる。122は15世紀前半、123は15世紀。124は土師器の碗で、高台がつく。12世紀。125は古瀬戸のおろし皿で、15世紀後半。126～133は碗である。126・127は中国産の天目碗で、126は削り出し高台をもつ。15世紀。127は体部中位にあいまいな稜をもつもので、15～16世紀になる。128～132は青磁碗の口縁部である。129・132は外面に細線の蓮弁文をもつ。15世紀。130は外面にアラバスク文様と波濤文帯が施される。16世紀前半。131は口縁部が外傾し、端部は丸い。15世紀。133は白磁碗の底部で、削り出し高台である。13世紀。134～136は15世紀の土釜である。134・135は土師質の口縁部で、口縁外面に断面三角形状の隆帯をもつ。136は瓦質の土釜の脚部になる。137は茶釜の胴部片で、鰐がつく。15世紀。138は土師質の土鍋で、口縁部は外傾する。15世紀。139は土師質の鉢である。口縁外面には断面方形形状の隆帯をもつ。15世紀。140は瓦質の鍋で、口縁部は外傾する。15世紀。141は東播系のコネ鉢で、口縁部はやや内湾する。14世紀。142・143は15世紀の備前焼の壺である。142は肥厚した口縁部が上方方向に延び、143は上げ底になる。144・145は15世紀の備前焼の甕である。144は肥厚した口縁部が垂直に延び、145は上げ底になる。



第111図 SP出土遺物実測図

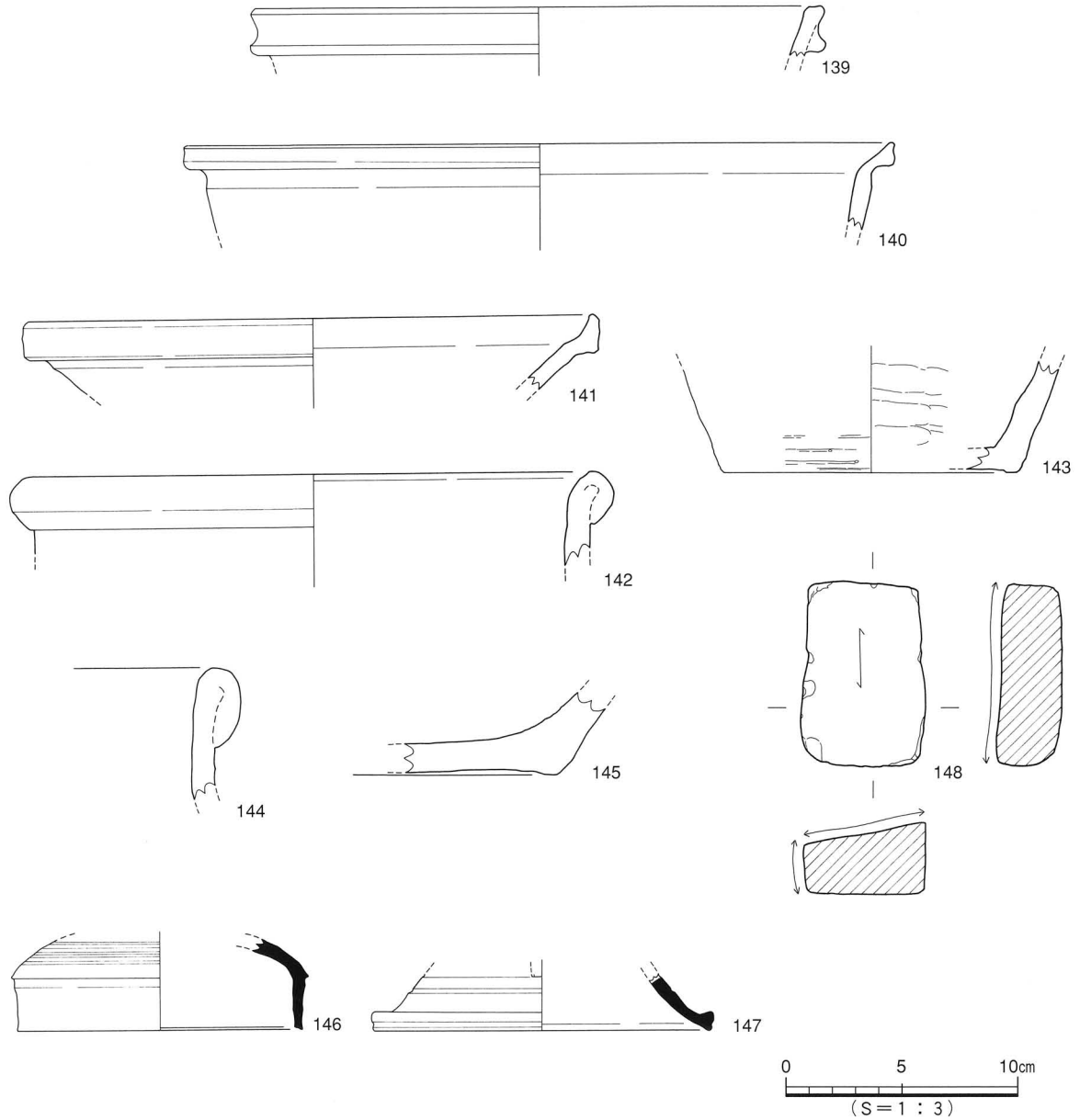
遺構と遺物



第112図 第V層出土遺物実測図(1)

146・147は古墳時代の須恵器である。146は坏蓋で、口縁端部は内傾し、断面三角形の稜をもつ。6世紀前半。147は高坏で、脚部には2条の沈線と透かしがみられる。脚端部は上下に肥厚し、脚端面には1条の沈線が巡る。6世紀後半。

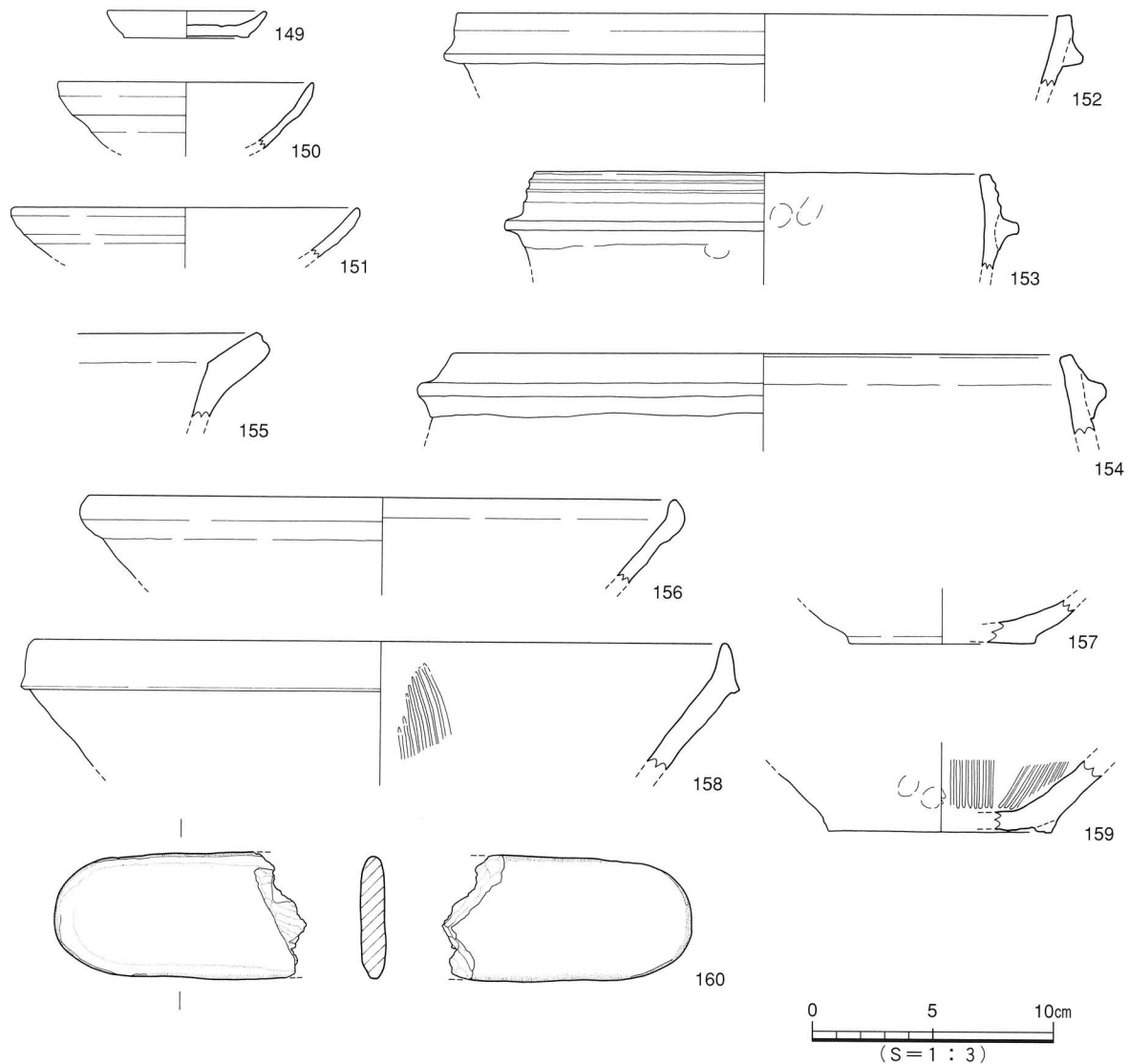
148は石製品で、砥石である。残存はほぼ完存品である。



第113図 第V層出土遺物実測図(2)

2) 第VI層 (149~160) : 149~159は中世の土器である。149は土師器の皿で、底部には回転糸切り痕がみられる。150・151は土師器の杯で、口縁部は内傾する。152~154は土釜である。152は土師質の口縁部で、口縁外面に断面三角形状の突帯をもつ。13~15世紀。153・154は瓦質である。153は口縁外面に断面方形形状の突帯、154は口縁外面に断面三角形状の突帯をもつ。13~15世紀。155は土鍋で、口縁部は外傾する。15世紀。156・157は東播系のコネ鉢である。156は口縁部が内傾し (13世紀)、157は底部に回転糸切り痕がみられる (13~14世紀)。158・159は備前焼の擂鉢で、内面には8条の櫛目がある。158は口縁部、159は底部で、高台がつく。

160は石製品で、石庖丁になる。材質は緑色片岩で、残存2/3である。



第114図 第VI層出土遺物実測図

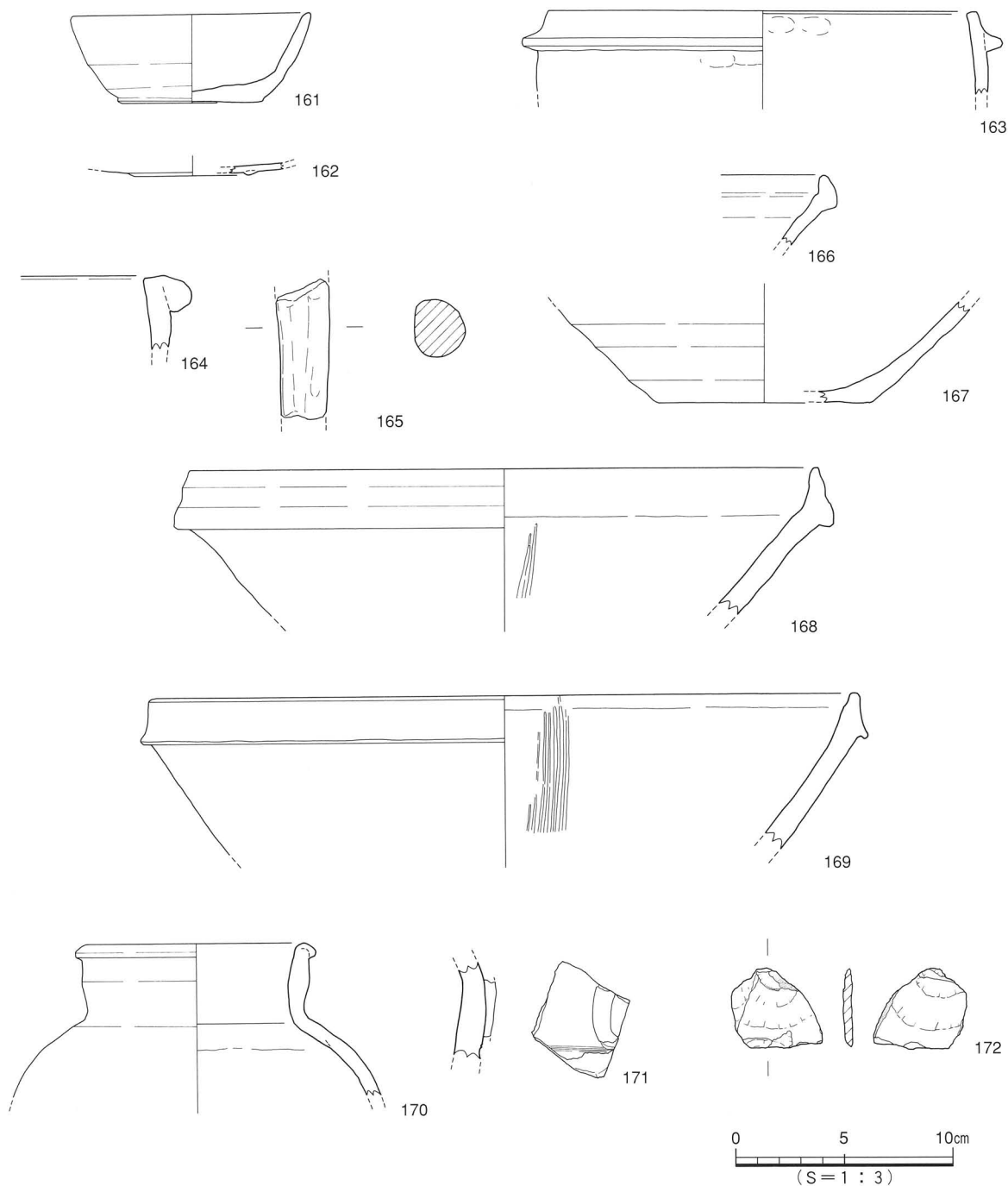
(9) 出土地点不明遺物

出土地点が明確でない遺物を取り上げておく (第115図)。

161~171は中世の土器である。161は土師器杯の完形品である。底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部は丸い。底部には回転糸切り痕がみられる。15世紀。162は和泉型瓦器碗の底部で、13世紀。

163～165は15世紀の土釜である。163・164は土師質の土釜で、163は口縁部に断面四角形状の突帯をもち、164は口縁外面に断面三角形状の突帯をもつ。165は瓦質の土釜で、脚部片である。166・167は東播系のコネ鉢である。166は口縁部が内傾し（14世紀）、167は平底の底部で、回転糸切り痕がみられる（13～14世紀）。168・169は備前焼の播鉢（15世紀）で、168は内面に2条以上の櫛目があり、169は内面に7条の櫛目がある。170は備前焼の壺で、口縁部はやや外傾し、端部は肥厚する。15世紀。171は備前焼の水屋甕の胴部片で、紐状の張り付けがみられる。15世紀。

172は石製品で、サヌカイトの剥片である。一部欠損している。



第115図 出土地点不明遺物実測図

4. 小 結

今回の調査では、中世の遺構と、弥生時代～中世までの遺物を確認することができた。

遺構には掘立柱建物址3棟、溝7条、井戸2基、墓2基、土坑13基、柱穴378基、性格不明遺構1基があり、遺物には弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、瓦質土器、石器、鉄製品がある。以下、今回の成果を3つにまとめて記述する。

第一には、中世遺構の変遷が明確になったことである。SD2は2次調査地でも検出された溝で、すでに墓との関係も判断されていたが、今回は両者の時間的関係を裏付けるものになった。SD2は墓1・2に切られ15世紀後半、墓1・2は16世紀初頭であることを追証した。また、SD2は1・2次調査地と合わせ考えるならば、集落区画の溝の可能性があり、居住区域はSD2の北側になることが明確になってきた。

第二には、井戸があげられる。SE1とSE2は深さに違いがみられた。SE1は80cm、SE2の類似遺構には「湯築城跡」の円形石積遺構SF01（中野・沖野・柴田 1998）があげられる。規模は内径0.6m、深さ30cmを測り、SE2とほぼ同じである。

なお、円形石積遺構は、自然湧水を生ずる層まで達していないので、井戸とみなすことはできない。SE2は、自然湧水を生ずる層まで達している可能性が高いので井戸とした。

第三には、SK8の瓦質の風炉があげられる。県内では、小破片しか出土しておらず、完形品に近い状態で出土したのは初例になる。本資料は、集落の階層を現すとともに、畿内との関係が近いことを示唆するものである。

以上、北斎院地内遺跡一帯は15世紀後半に集落（居住区）が東西に広がるが、16世紀初頭になると居住地から墓域に転化していたことが明らかになってきた。周辺地の継続的な調査が望まれる。

【文 献】

中野良一・沖野新一・柴田圭子 1998 『湯築城跡』（助愛媛県埋蔵文化財調査センター

篠崎真宏・寺嶋信三 1994 『北斎院地内遺跡（三次調査）』（助愛媛県埋蔵文化財調査センター

武正良浩 1994 「北斎院地内遺跡1次調査地・北斎院地内遺跡2次調査地」『斎院の遺跡』松山市教育委員会・（助松山市埋蔵文化財センター

表6 掘立柱建物址一覧

掘立	規模 (間)	方 向	桁 行		梁 行		方 位	床面積 (㎡)	時 期	備 考
			実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)				
1	2×2		4.0	1.23・1.3	4.0	1.25・1.2		16.0	15C後半	
2	1×2	南北	4.25	4.0	4.0	1.2・1.05	南北	17.0	15C後半	
3	2×1	東西	4.90	2.3・2.2	4.0	3.9	東西	19.6	15C後半	

表7 溝一覧

(1)

溝 (SD)	地 区	断面形	規 模 (m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	方 向	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1-1	B8～B9	皿状	3.9×0.1～0.3×0.12	南北	灰褐色土 (+砂)	土師器	15C後半	SP2・5に切られる
1-2	B8～B9	皿状	3.9×0.2×0.03～0.08	南北	灰褐色土 (+砂)	土師器、埴輪、瓦質土器、 亀山焼、備前焼地	15C後半	SP4・7に切られる

北斎院地内遺跡4次調査地

溝一覽

(2)

溝 (SD)	地区	断面形	規模 (m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	方向	埋土	出土遺物	時期	備考
2	A1~D2	舟底状	7.7×3.2×0.55	東西	上層:暗褐色土 下層:暗褐色土 (+砂)		15C後半	墓1・2・SK6に切られる
3-1	B3~B5	皿状	5.3×0.25×0.05~0.1	南北	灰褐色土 (+砂)		15C後半	南側SD6と合流
3-2	B3~B5	皿状	4.6×0.4×0.05~0.1	南北	灰褐色土 (+砂)		15C後半	南側SD5と合流
4	D3	皿状	1.8×0.7×0.1	東西	灰褐色土 (+砂)	土師器・礫	15C後半	
5	B3~C3	皿状	4.5×1.9×0.1~0.15	東西	灰褐色土 (+砂)	土師器・土釜	15C後半	SD3-1・2と合流
6	B12~B15	皿状	14.5×0.3~0.9×0.05~0.13	南北	灰褐色土 (+砂)	土師器、須恵器 青磁、鉄、石器	15C後半	SP316・337・351に切られる
7	A2~B3	皿状	7×0.2~0.8×0.1	東西	暗褐色土 (+砂)	土師器・土釜	15C後半	

表8 井戸一覽

井戸 (SE)	地区	平面形	断面形	規模 (m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積 (㎡)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	C3	円	円筒	1.4×0.8	1.5	上層:灰褐色土(+砂) 下層:灰褐色土(+砂)	土師器、備前焼、 石器	15C後半	
2	D6	円	円筒	1.0×0.8×0.4	0.8	灰褐色土 (+砂)	備前焼、石器	15C後半	トレンチに切られる

表9 土坑一覽

土坑 (SK)	地区	平面形	断面形	規模 (m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積 (㎡)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	B8~C8	隅丸長方形	逆台形状	3.7×0.7×0.17	2.6	灰褐色土 (+砂)	土師器、土釜 青磁、鉄、礫	15C後半	SP21に切られる
2	C7~C8	隅丸長方形	逆台形状	0.9×2.5×0.29	2.3	灰褐色土 (+砂)	土師器 瓦器、石器	15C後半	トレンチに切られる
3	B7~C7	隅丸長方形	逆台形状	2.8×0.9×0.29	2.5	灰褐色土 (+砂)	土師器 土釜	15C後半	SP169・226・228・229 に切られる
4	D7	隅丸長方形	逆台形状	0.8×2.1×0.29	1.7	灰褐色土 (+砂)	土師器 備前焼	15C後半	SP240・トレンチに切られる
5	C6~D7	長楕円形	逆台形状	1.2×3.2×0.15	3.8	灰褐色土 (+砂)	土師器、瓦器 備前焼	15C後半	SP118・トレンチに切られる
6	C1	楕円形	逆台形状	0.3×1.1×0.40	0.3	暗褐色土 (+砂)		15C後半	SD2を切る
7	B11~B12	隅丸長方形	逆台形状	2.85×1.05×0.10~0.35	3.0	灰褐色土 (+砂)	土師器、土釜 備前焼、鉄	15C後半	
8	C12	円形	逆台形状	1.95×1.75×0.09~0.18	3.4	灰褐色土 (+砂)	土師器、備前焼 瓦質土器、石器	15C後半	
9	C13~C14	円形	逆台形状	1.05×1.25×0.05~0.11	1.3	灰褐色土 (+砂)	土師器 須恵器	15C後半	
10	C11~D12	楕円形	逆台形状	1.4×0.85×0.12	1.2	灰褐色土 (+砂)	土師器、土釜 亀山焼	15C後半	
11	C11~D12	隅丸長方形	逆台形状	1.75×0.85×0.05~0.18	1.5	灰褐色土 (+砂)	土師器 瓦質土器	15C後半	トレンチに切られる
12	A14	楕円形	逆台形状	0.6×3.0×0.25	1.8	灰褐色土 (+砂)		15C後半	トレンチに切られる
13	A10~B11	楕円形	逆台形状	3.9×2.45×0.02~0.14	9.6	灰褐色土 (+砂)	土師器 土釜	15C後半	SP343・376に切られる

表10 墓一覽

墓	地区	平面形	断面形	規模 (m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積 (㎡)	埋土	出土遺物	時期	備考
1 (掘り方)	C1~D1	楕円形	逆台形	1.94×2.34×0.25~0.35	4.5	黒褐色土 (+粗砂)		16C初頭	SD2を切る
1 (木棺墓)	C1~D1	長方形		1.38×0.9×0.25	1.2	黒褐色土 (+粗砂)	土師器	16C初頭	
2	D1	楕円形	U字状	0.5×1.0×0.25	0.5	黒褐色土 (+粗砂)		16C初頭	SD2を切る

表11 性格不明遺構一覽

性格不明遺構 (SX)	地区	平面形	断面形	規模 (m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積 (㎡)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	B8~B10	不整形	逆台形状	5.0×2.9×0.02~0.39	1.5	灰褐色土 (+砂)	弥生土器、須恵器、 土師器、瓦器、腕	15C後半	SP3・224・225・230 に切られる

第6章 調査の成果と課題

松山平野北西部、松山市斎院地区内にある鳥越遺跡、津田中学校構内遺跡、北斎院地内遺跡の調査報告をしてきた。調査の結果、主に弥生時代の遺構・遺物を検出し、古墳時代の遺構、古代～中近世の遺物をも確認するにいたった。以下、時代ごとに資料の検討をくわえる。

1. 弥生時代

(1) 前期 鳥越遺跡では、前期末の土坑5基と、切り合い関係からこれ以前の土坑3基を検出している。隣接する斎院烏山遺跡では2回の調査を行ない、前期末の環壕集落を確認している。鳥越遺跡は、斎院烏山遺跡の東北部に接していることから、同一集落とみなしてよいだろう。

これまでの調査成果を含めて、前期末の集落構造を整理すると、斎院烏山遺跡1次調査SD1は2次調査1号環壕に続き、2次調査2号環壕はその外を廻り、二重環壕をもつ集落とみられる。そして、内側の溝に囲まれた場所と、内・外の溝に挟まれた場所とには、土坑（貯蔵穴）が存在していることになる（註1）。ただし、これまでの調査では竪穴式住居址の検出はない。

さて、この集落の出現時期は、前期後葉に求められる。斎院烏山遺跡2次調査の8号土坑は、同2次調査1号環壕にきられ、出土土器は1号環壕のそれよりも形態が古い土器である。2次調査8号土坑は、前期後葉に比定されることから、集落の出現はこの時期になる。ただし、溝が掘削されていたかは検証できない。

松山平野では、前期末に環壕集落と推定される遺跡が三例ある。岩崎遺跡では集落の内外に2条の溝、久米高畑遺跡では溝3条、來住廃寺では溝2条が検出されている。これらの集落は共通点が多くあり、前期末～中期初頭に掘削・埋没し、多数の土坑を伴っている。調査範囲の制約はあるが、いずれの遺跡でも住居址は検出できていない。ここに、松山平野の前期（末葉）集落の傾向性を見ることができよう。

(2) 終末～古墳時代初頭 遺構：鳥越遺跡と津田中学校構内遺跡では、ともにこの時期の遺構と遺物が確認されている。鳥越遺跡では、方形の竪穴住居址を3棟検出した。このなかには、切り合い関係のある2棟の住居址もあるが、出土土器からは短期間で推移したものと判断できる。その時期は、土器編年でみると梅木編年後期Ⅲ-1～Ⅲ-2の間、宮前川遺跡調査での作田氏の時期区分ではⅠ～Ⅲ期直前の間に帰属するものである。

次に集落変遷を考える。本来なら、斎院地区一帯の集落変遷を詳細に考えなければならないが、過去の資料の検討にいたらなかったので、ここでは指針を示しておくにとどめる。今回報告の集落資料は、作田のⅠ～Ⅲ期直前に宮前川の西側丘陵上に立地し、住居址は丘陵傾斜面に築かれ、谷部で出土した多量の遺物は廃棄されたものとみることができる。

一方、既往の調査資料では、集落は宮前川の東側低地帯に展開し、その時期は作田のⅢ～Ⅳ期に限られていることが分かっている。

これらのことから集落の推移をみると、まず作田Ⅰ～Ⅲ期直前には宮前川の西側丘陵上で集落は展開し、つづいて作田Ⅲ～Ⅳ期には宮前川の東側低地帯に集落が移行していくことを想定できる。

くわえて、集落の存続時期は短期間であることも注目しておきたい。集落の出現は終末期であるが、その直前の後期後葉の集落資料は皆無である。集落の終焉はいわゆる布留Ⅰ式で、そののち集落が登

場するのは5世紀後半～6世紀を待たなければならない。

さて、出土遺物から集落を分析すると、作田Ⅰ～Ⅱ期では外来系土器の出土量は数点で、1%に満たない値を示すが、作田Ⅲ～Ⅳ期には外来系土器は多量に出土し、遺構によっては甕形土器の2～3割りを外来系土器が占める場合もある(註2)。作田Ⅲ期を境に集落の内容にも差が認められてきている。

遺物：今回報告の資料の中には、県外からの搬入品が含まれている。鳥越遺跡SB1からは、香川県高松平野で作られた甕形土器が1点出土し、津田中学校構内遺跡1次調査包含層(X3Y3)からは、大阪府生駒西麓で作られた甕形土器が1点出土している(第3章4節 奥田)。これら二点に共伴する土器は、出土状況を考慮しても梅木編年後期Ⅲ-1～Ⅲ-2の間に納まる。

弥生時代終末～古墳時代初頭の松山平野での搬入品例は、近畿・吉備・讃岐からのものがあり、山陰地方からのものは胎土分析を必要としている。前者の出土量は10点あまりで、宮前川遺跡に集中している。

なお、報告書を作成するにあたり、讃岐からの搬入品の類例調査をした。愛媛県内では、松山市・今治市等で出土例があり、出土量は10点に満たない。搬入品の是非は、搬入元の研究者によって胎土・形態等を判断することが望ましく、現在はその作業を行なっている途中である。そのなかには、これまで全く知られていなかった資料や、目に触れる機会が少なかった資料もある。そこで、資料紹介を兼ねて、本書に付章1・2を設け、これらの資料を広く公開することに努めた。

一方、模倣品(いわゆる外来系土器・折衷土器)には、近畿地方のものが多く、出土量は宮前川遺跡に集中し、平野の各地で数点が出土する状況にある。このほかには、讃岐系のものが少量あり、山陰系のものは形状や成形手法が山陰地方と異なるものもあり、その多くは模倣品と考えるべきであろう。

2. 古墳時代

津田中学校構内遺跡1次調査では、竪穴式住居址を3棟検出した。住居址は傾斜地に立地していることで、遺存が悪い。構造は、平面形態は方形、主柱4本、竈をもつことになる。出土遺物が少なく、時期は特定できないが、平野内の例から5世紀後半～6世紀に比定できる。

宮前川遺跡一帯では、布留Ⅰ式以降、最も古い遺構になる。

3. 古代～中近世

北斎院地内遺跡4次調査地からは中世の集落遺構が多数検出されている。遺構には区画溝・建物・井戸・墓があり、集落の詳細が明らかになってきた。出土遺物には出土例の少ない風炉があり、注目される資料になった。

以上、三遺跡4次調査の報告をした。時間と紙面数の関係で、資料を十分に提示できなかった部分がある。宮前川遺跡一帯における終末～古墳時代初頭の集落動態と、讃岐系土器については、後日の機会で論じることとする。

註1) 作田一耕氏は、斎院鳥山遺跡1次調査SD1と2次調査2号環壕とは、合流し、2次調査1号環壕に続くものとみている。

2) 梅木謙一 1999 「伊予における土器交流拠点」『庄内式土器研究XX』庄内式土器研究会

附章 1 片山・太郎丸遺跡出土資料

1. はじめに

片山遺跡と太郎丸遺跡は、松山平野南部の伊予市下三谷に位置し、扇状地の標高5～7mに立地する。調査は平成4年に伊予市教育委員会（調査担当 森光晴）によって実施され、県営圃場整備事業に伴う事前調査になる。当調査については、伊予市教育委員会が平成5年に『下三谷片山・太郎丸埋蔵文化財調査報告書』を刊行し、資料が公開されている。

調査対象面積は17haにおよぶが、確認調査をして本格調査になった地域は14地点8712m²（本文より算出）である。調査地点には、字名が3つあり、A・B地区は北替地遺跡、C～G地区は太郎丸遺跡、H・I地区は片山遺跡の名称がつけられている。調査の結果、縄文時代から中近世までの遺構や遺物を確認している。ここでは、報告書に掲載されなかった弥生時代終末～古墳時代初頭の注目される遺物を提示することにした（報告分を含む）。

2. 資料

片山遺跡（I地区）2号住居址出土品（第116・117図、図版25）

2号住居址は、平面形態が円形で、規模は直径5.6m、深さ35cmになる。支柱穴は6本（報告では）、住居中央やや南には土坑（0.7m×0.4m）、周かいする高床部をもつ。出土遺物は土器があり、復元すると完形にちかい状態のものが10点あまりある。これらの出土品は、遺構や遺物の遺存状況から短時間に廃棄されたものとみてよい。

器種には、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、底部有孔土器がある。出土量は、甕形土器が半数以上を占めている。

甕形土器は1～9で、法量に器高が30cmを越えるもの（1～3）と、器高が20～30cmのものと（4～9）がある。器形は、両者に胴部の張りが弱く長胴傾向を示すもの（1・2・4～8）と、胴部が球形を呈するもの（2・9）とがみられる。外面調整では、長胴傾向のものはタタキ痕があり、胴部が球形のものはタタキ痕がみられない。内面調整では、ケズリ痕が見られるものが多い。

壺形土器には、広口壺があり、湾曲してたちあがる頸部に外反する口縁部をもつ10と、外傾し外反する口頸部をもつ11・12とがある。

鉢形土器は直口の口縁部をもつもので、外面にはタタキ痕がみられる。

高坏形土器は、大きく外反する坏口縁部に、直立する短い柱部に、「ハ」の字に開く裾部をもつ。

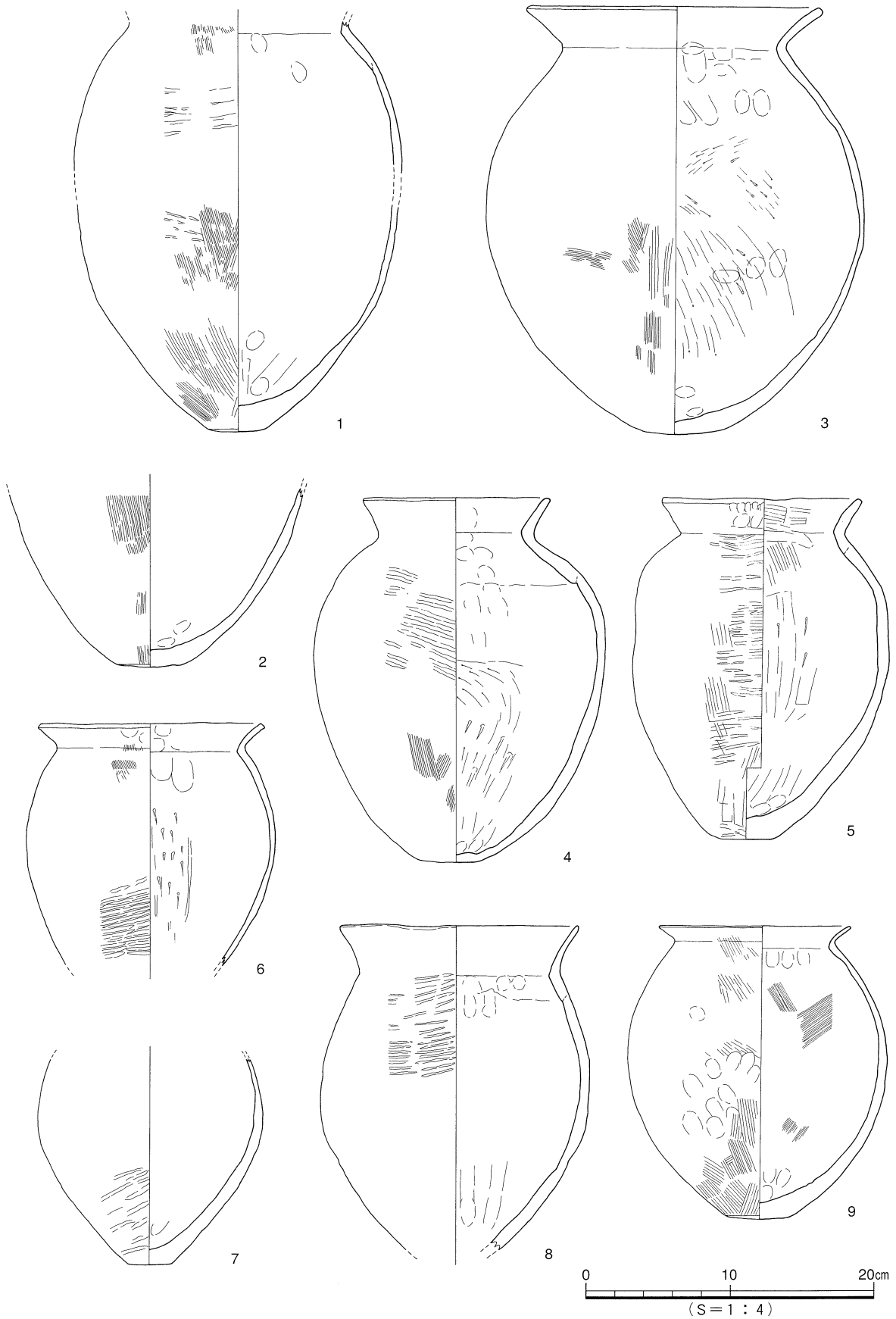
底部有孔土器は、形態は甕形土器に類似し、底部に焼成前の穿孔をもつ。

片山遺跡（H地区）1号溝出土品（第118図、図版25）

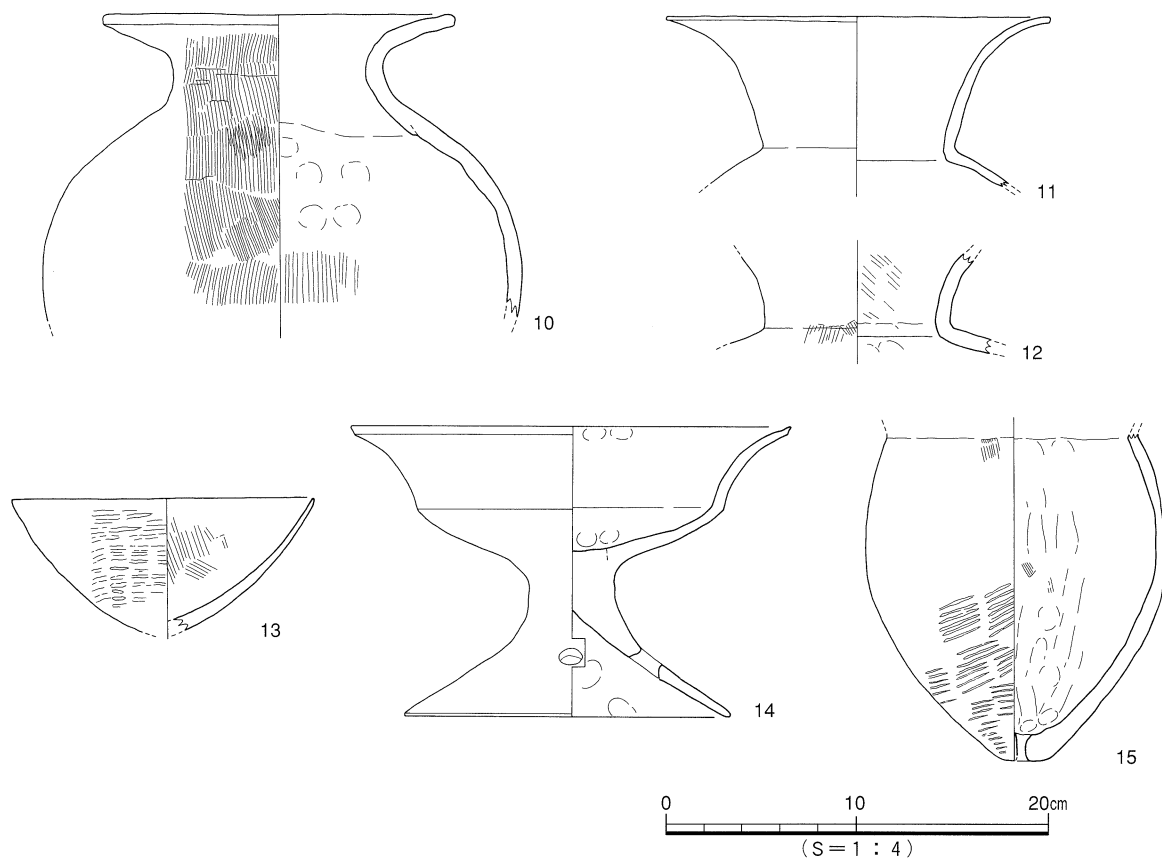
1号溝は、直線的な溝で、幅2.4m、検出長21mを測る。断面形態は「V」字状にちかい形状を呈し、基底部分は幅狭く一段深くなる。出土遺物は、土器片や石を304点測量して取り上げ、完形に近い土器を含む。遺物の出土状況からは、短時間の埋没とみることができる。

器種には、甕形土器、壺形土器、鉢形土器がある。

甕形土器は16で、胴部が弱く張り、長胴傾向を示すものである。17は、大型品で、甕形土器もしく



第116図 片山遺跡 I 地区SB02出土遺物実測図(1)



第117図 片山遺跡 I 地区SB02出土遺物実測図(2)

は壺形土器になる。壺形土器は18～20である。18は短く湾曲する口頸部をもち、肩部が強く張る。19は細く長い頸部に、球形の胴部、突出する平底の底部をもつ。20は扁平球の胴部に、長い口縁部、突出する平底の底部をもつ。摩滅が著しい。21は甕形土器で、器形・調整・胎土等が地元のものとは異なる。高松平野からの搬入品である。

太郎丸遺跡（E地区）1号住居址出土品（第119図）

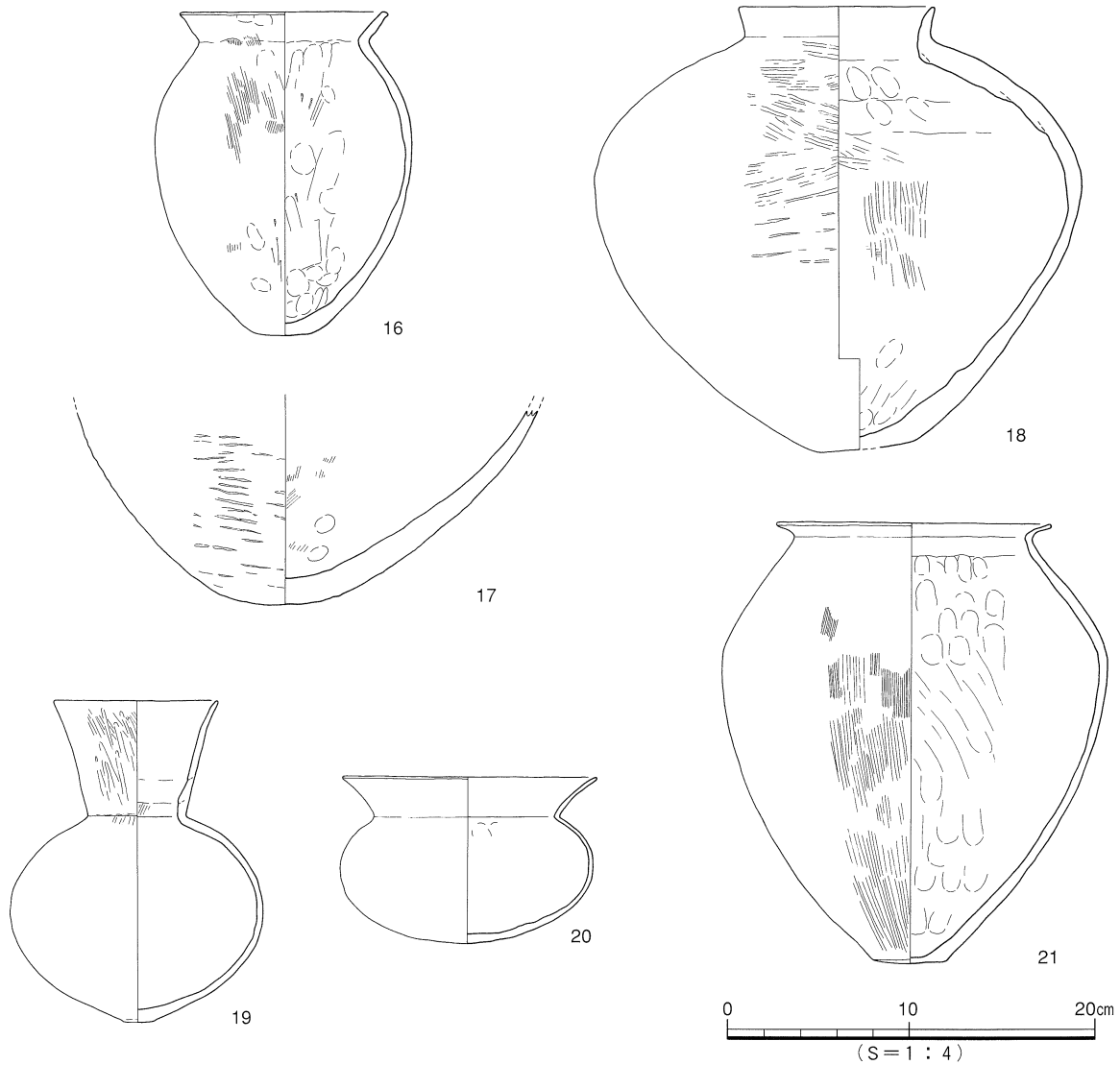
1号住居址は、平面形態が方形で、規模は8m×6m以上になる。支柱穴や屋内施設は明確でない。出土遺物は土器があり、復元すると完形にちかい状態のものが1点ある。出土地点の確実な土器は甕形土器2点である。

22・23は甕形土器で、球形に近い胴部に、凸レンズ状の底部をもつ。外面は刷毛目調整、内面は上位が指押し（ナデ）、中位以下はケズリとなる。

太郎丸遺跡（E地区）2号住居址出土品（第119図）

2号住居址は、詳細が分からない。出土遺物は、土器と石があり、実測できたものは、甕形土器1点である。

24は甕形土器で、底部は平底で厚く、胴部には外面にタタキ痕をもつ。



第118図 片山遺跡H地区1号溝出土遺物実測図

その他の出土品（第120図）

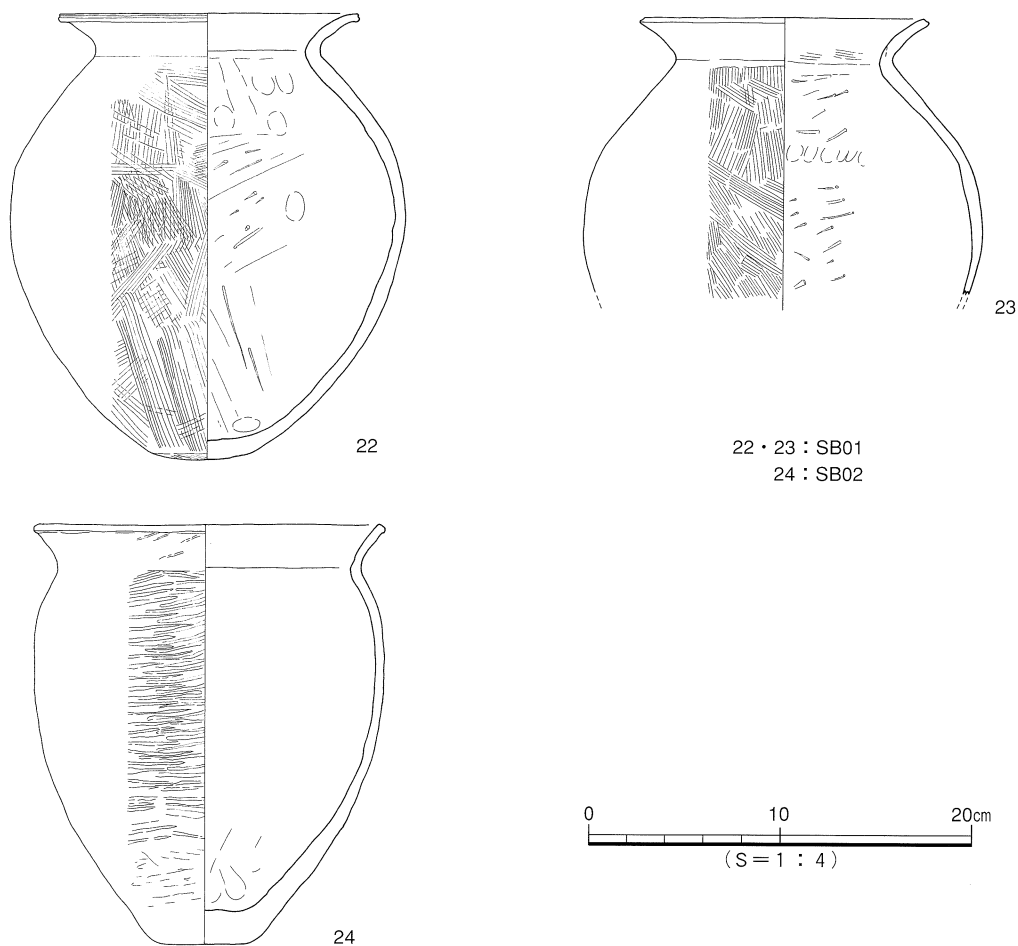
注記は読み取れないが、復元や接合ができて、特徴的な土器を提示しておく。遺存状況や土器の特徴から、上記の遺構出土品の可能性が高い。

25～30は甕形土器で、肩が張り、平底の底部をもつもので、27だけは肩の張りが弱い。31は大型品で、甕形土器もしくは壺形土器になる。32・33は壺形土器で、短く外反する口頸部をもつ。

3. 小 結

以上、片山・太郎丸遺跡から出土した弥生時代終末～古墳時代初頭に比定される資料を紹介した。資料数が少ないため詳細に分析することはできないが、傾向性を指摘しておく。

器種には甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、底部有孔土器があり、出土量は甕形土器が大多数を占める。器形は、甕形土器には、胴下半部の張りが弱いものと、胴部の全体が強く張るものがあり、前者の出土量が多い。壺形土器は、口頸部が短く湾曲するもの、口頸部が長く広がるもの、細長頸のもの、球形の胴部に外反する口縁部をもつものがある。鉢形土器、高坏形土器、底部有孔



22・23：SB01
24：SB02

第119図 太郎丸遺跡 SB01・SB02出土遺物実測図

土器は、片山遺跡（I地区）2号住居址出土品で既に述べた特徴をもつ。調整は、外面は高坏形土器を除いてタタキ後に少しかだけ刷毛目調整を加えるものになる。ただし、甕形土器のうち胴部の全体が強く張るものは刷毛目調整に限られる。内面は摩滅しているものも多いが、ケズリやナデがみられるものは多くあり、刷毛目調整のものが僅かにある。調整は外面・内面ともに偏重があり、特に、甕形土器の外面調整は器形との結びつきが強い。

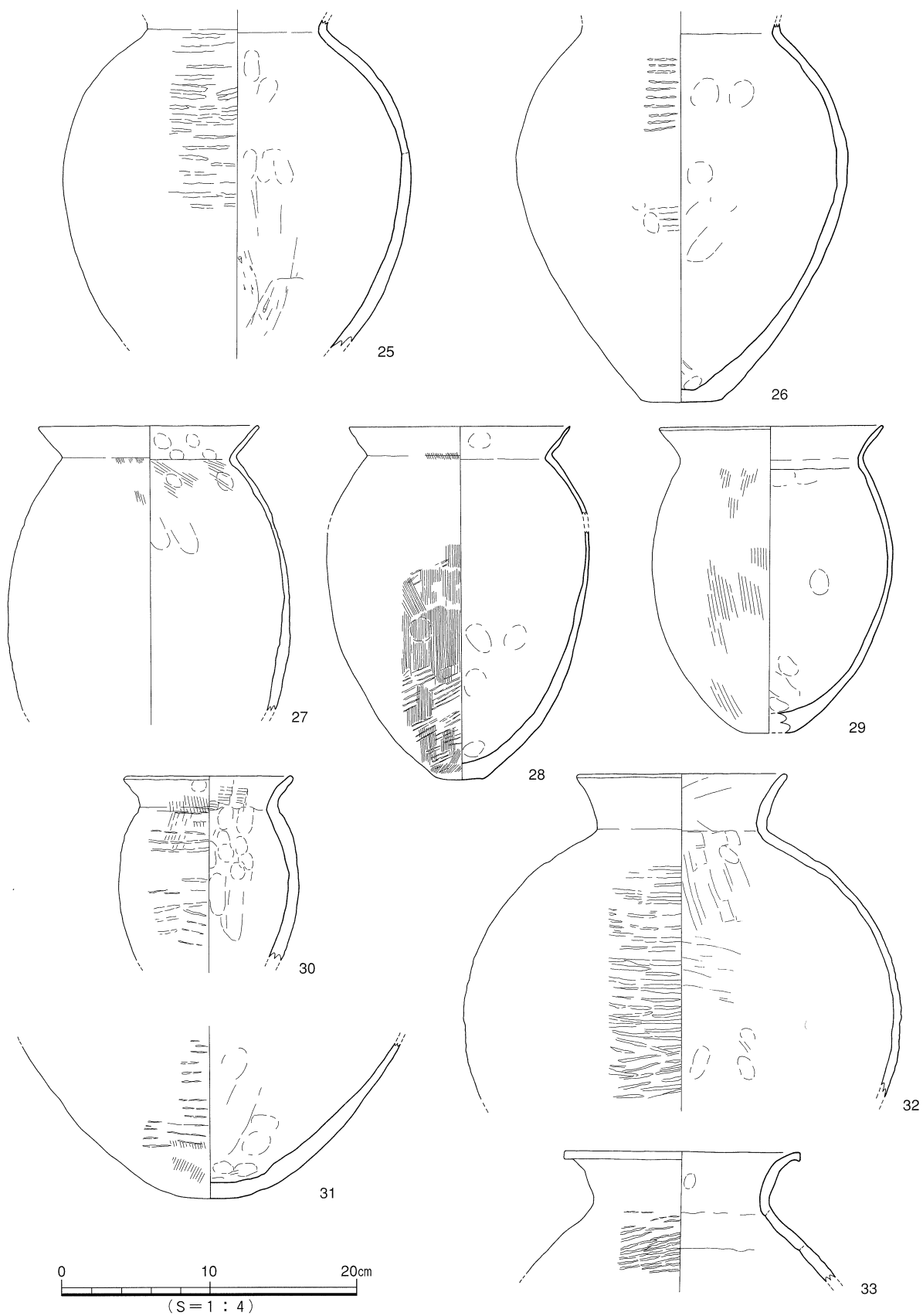
今回提示した資料は、いずれも甕形土器の特徴が同じであり、同時期資料とみてよい。

また、片山・太郎丸遺跡の出土遺物は、弥生時代では前期、古墳時代では後期の土器があるだけで、本資料に近い時期の土器はない。したがって、他の時期の遺物が混入することはなく、本資料の時期の同時性が追認される。

そして、出土品と遺構の時期をもう少し絞れば梅木編年後期Ⅲ－中段階に比定できることになる。さて、本資料のなかには、甕形土器（21）に高松平野からの搬入品が1点ある。この土器は、大久保編年終末－1期、下川津Ⅳ式に相当する（大久保 1996）。よって、梅木編年後期Ⅲ－中段階は、大久保編年終末－1期、下川津Ⅳ式に時間的に併行する部分をもっていることになる。

【文 献】

- 大久保徹也 1996 「讃岐」『弥生後期の瀬戸内海』古代学協会四国支部第10回松山大会資料
森 光晴 1993 『下三谷片山・太郎丸埋蔵文化財調査報告書』伊予市教育委員会



第120図 出土地点不明遺物実測図

附章2 政枝遺跡出土資料

1. はじめに (第121図)

政枝遺跡は、愛媛県新居浜市政枝町1丁目にあり、遺跡の内容は1990(平成2)年に真鍋修身氏が「新居浜の弥生遺物について(2)」『遺跡』第32号によって、資料を公表されている。

したがって、ここで記述する遺跡の内容は真鍋氏の論考と、新たに行なった資料所有者からの聴取り調査をもとにしている。

遺跡名：政枝(まさえだ)遺跡

所在地：愛媛県新居浜市政枝町1丁目10-40(加藤豊保氏の宅地内)

立地：沖積地、標高13m。

出土状況：1979年6月頃、加藤氏が自宅内に浄化槽を設置するために、約2m四方の範囲で掘削をしていたところ、地表下約2mの地点で、土器片が数多く出土した。このうちの壺形土器1点はほぼ完形品(口縁部を少し欠く)で、この土器を支えるかのように石が1点出土している。採取した土器は、同一地点で出土したものばかりである。

出土遺物：弥生土器片と石1点(現存しない)とがある。土器は整理の結果34個体分の土器片を数え、接合し実測すれば全体形状が判明するものは4点におよぶ。



2. 資料 (第122~124図、図版26)

土器は口縁部片や底部片はすべて実測し、掲載した。なお、12は真鍋氏の掲載図面をもとに、加筆して製図したものである。

器種と出土量は、甕形土器9点、壺形土器18点、鉢形土器6点、底部有孔土器1点である。

甕形土器(1~9) 1~4は胴上半部が遺存するもので、口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は長く、膨らみをもつ。6~8は底部片で、6・7は平底、8は丸底で、胴下半部は膨らみをもつ。1~8の外面にはタタキ痕があり、胴下半部はタタキ調整後に刷毛目調整がなされる。内面は刷毛目調整で、底部付近には指押さえがみられる。

9は底部片で、凸レンズ状の平底をもつ。外面は刷毛目調整、内面はケズリ痕がみられる。器壁が薄く、色調は茶褐色、胎土には角閃石をもつ。高松平野からの搬入品。

壺形土器(10~27) 10・11は複合口縁壺で、頸部には刻目突帯をもち、10は口縁部に波状文と一部に斜格子目文をもつ。11は複合口縁部が剥落している。12~19は頸部下端がしまる広口壺である。12は口縁部の一部を欠くが、ほぼ完形品になる。外傾外反する口頸部に、肩部が張る胴部、凸レンズ状の平底の底部をもつ。口縁端部はナデになり面をなす。胴部外面はタタキ調整後に刷毛目調整がなされる。内面は、上半部が指ナデ後に細かい刷毛目調整で、下半部はケズリ後ナデ調整が施されている。なお、胴中位部のやや下に、焼成後の穿孔が1ケある。13は底部を欠き、残りの部分は接合により図化が可能になったものである。球形の胴部に、直線的に開く口頸部をもつ。14~19は直立・外傾する頸部に、大きく開く口縁部をもつものである。20~27は胴下半部で、20~23は凸レンズ状の平底の底部、24~27は平底の底部になる。調整は、外面はタタキ調整後に刷毛目調整となり、27にはカキトリ痕がみられる。内面は刷毛目調整で、底部付近には指押さえがみられ、24にはケズリ痕がある。

鉢形土器(28~33) 28・29は口縁部が折り曲げて成形されるものである。28は大型品で、外面にはタタキ痕をもつ。29は実測によって完形の図になるもので、底部は平底になる。30・31は口縁部が直口になるものである。32・33は底部片で、外面はタタキ調整になる。

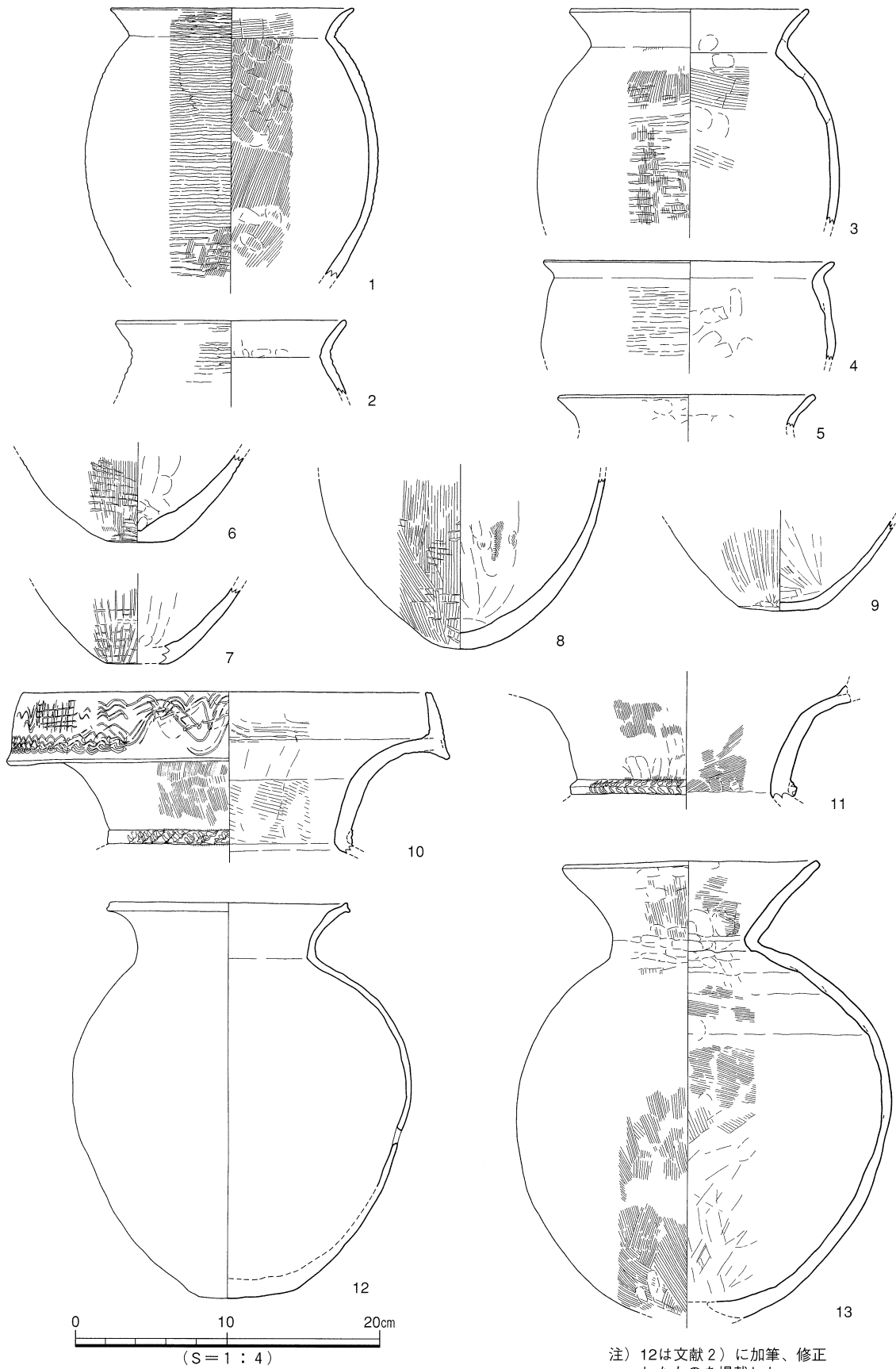
底部有孔土器(34) 34は底部に焼成前穿孔をもつもので、直径8mm大の穿孔があく。外面はタタキ調整後に刷毛目調整がなされる。

3. 小 結

政枝遺跡の出土品は、出土状況と遺物の遺存状況から、当初よりその地にあり、短期間に埋没した遺物といえる。また、狭い範囲で集中出土し、全くの完形品がなく、大型の破片資料が多いことから、廃棄品とその場所であることが推察される。

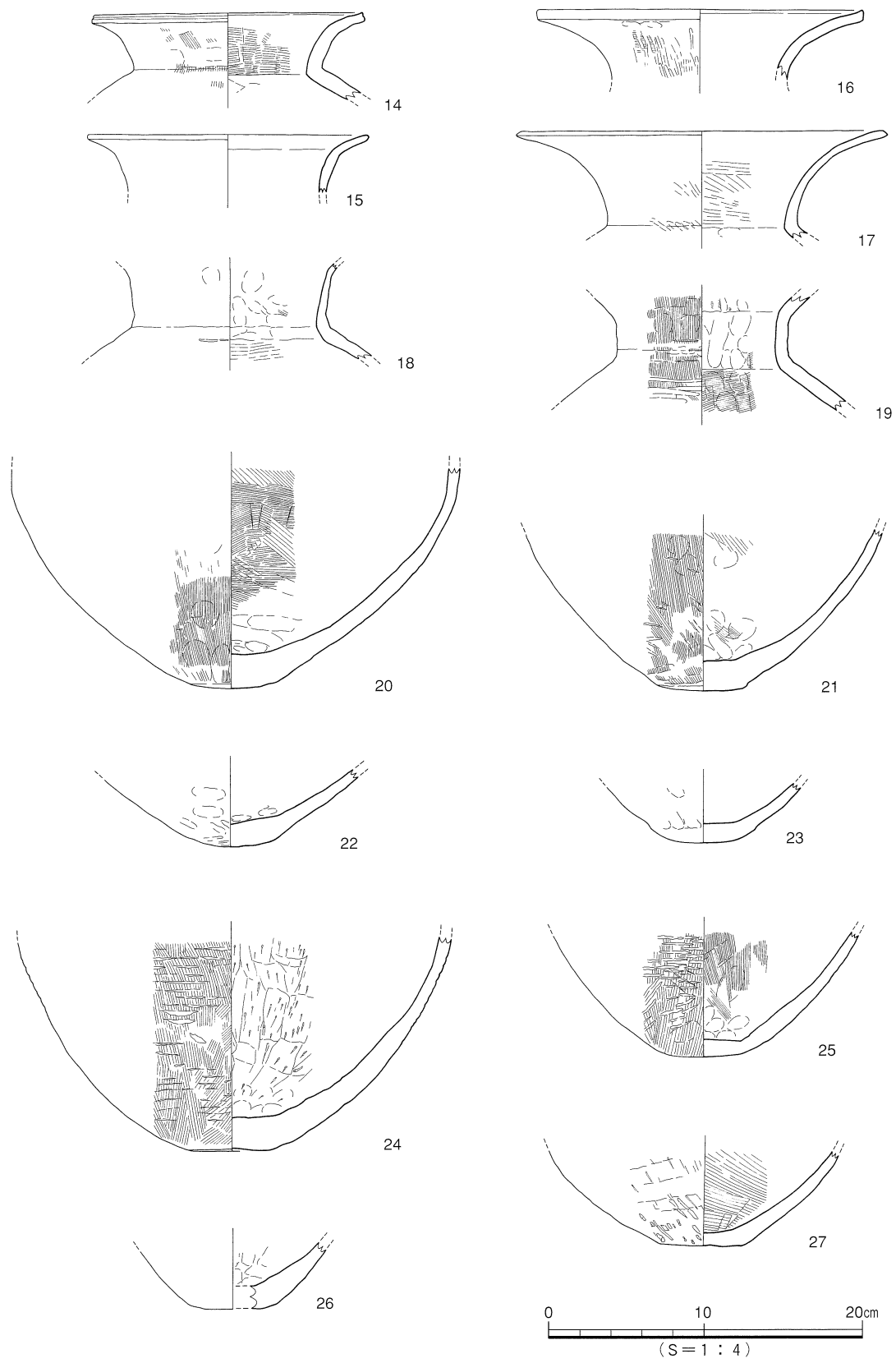
このなかであって、壺形土器12は、胴部に焼成後の穿孔があり、出土時に石で支えていた様子が観察されている。この壺形土器に限っては、祭祀的な行為があったと認められる。ただし、その他の土器には祭祀的な内容がみられないことから、土器群が祭祀的な行為の所産であるかは、現時点では判断しかねる。

出土土器の時期は、形状や調整から弥生時代終末期でも新しい様相を示し、東予(愛媛県東部)地方の土器編年では柴田編年のVI-2様式に比定される。

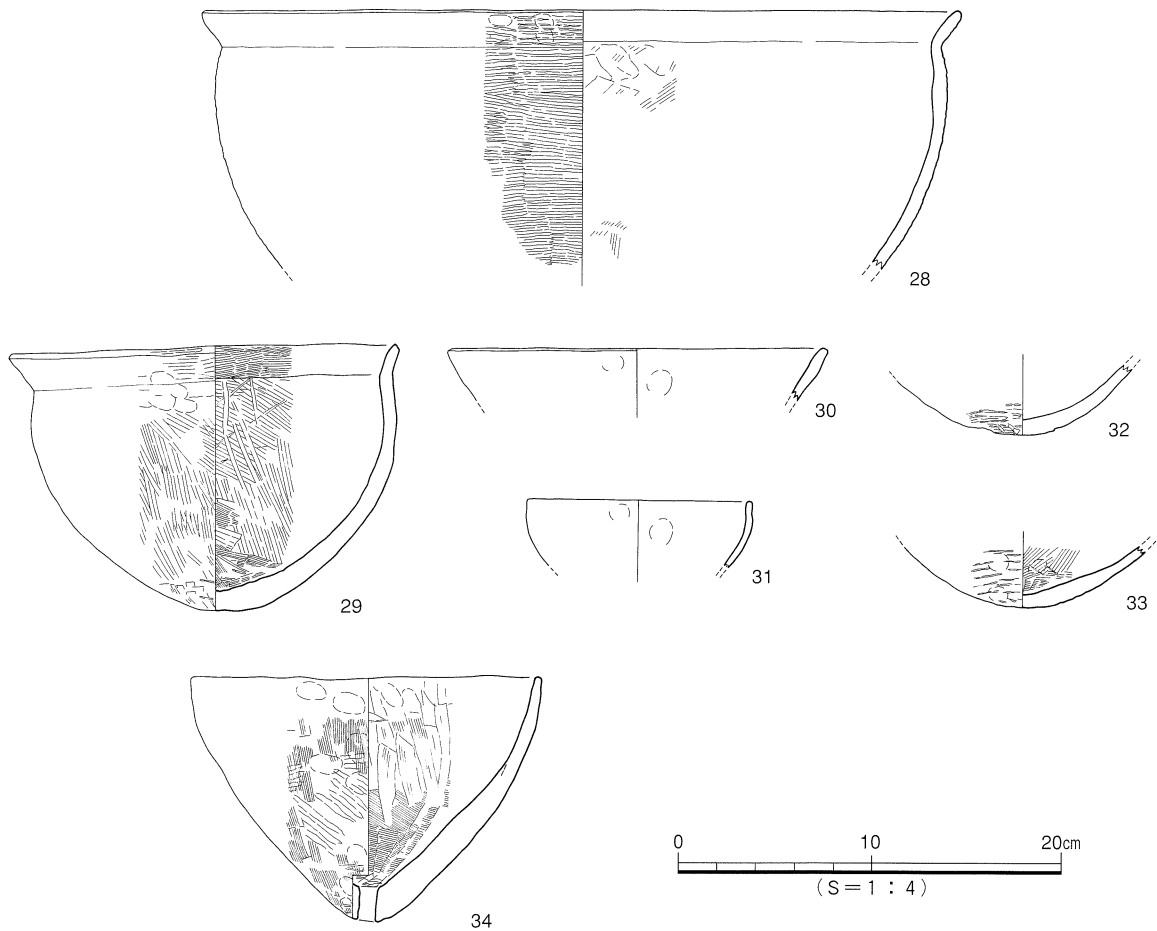


注) 12は文献2)に加筆、修正したものを掲載した。

第122図 政枝遺跡出土遺物実測図(1)



第123図 政枝遺跡出土遺物実測図(2)



第124図 政枝遺跡出土遺物実測図(3)

さて、本資料は既に真鍋氏によって、近隣にある金栄小学校校庭遺跡出土品との比較検討がなされている。金栄小学校校庭遺跡出土品は、出土状況と出土品に課題をもつが、敢えて両資料を比べるならば、小型の鉢形土器の底部に違いが認められる。政枝遺跡の小型鉢形土器底部は平底を残すのに対し、金栄小学校校庭遺跡出土品のそれは、胴下半部が膨らみ丸底化している。したがって、政枝遺跡資料は、金栄小学校校庭遺跡出土品より古い形態をもつことになる。

ところで、本資料には、高松平野固有の土器が1点出土している。9の甕形土器であるが、この土器は香川県の研究者によると、下川津B類土器に属し、下川津Ⅲ新式に時期比定されるとのことである(註1)。

政枝遺跡資料は、愛媛県東部には数少ない弥生時代終末期の同時性の高い土器資料であり、讃岐地方との時間的関係を知ることができる重要な資料といえる。

なお、本資料に関して真鍋修身氏には多くのご配慮とご協力を賜った。所有者の加藤豊保氏には資料の実見と採取時の情報を提供していただいた。最後になったが、お礼を申し上げます。

【文 献】

- 柴田昌尼 2000 「伊予東部地域」『弥生土器の様式と編年 四国編』 木耳社
真鍋修身 1990 「新居浜の弥生遺物について（2）」『遺跡』第32号 遺跡発行会
大久保徹也 1996 「讃岐」『弥生後期の瀬戸内海』古代学協会四国支部第10回松山大会資料

【註】

- 1) このうち、大久保徹也氏からは、9は壺形土器の可能性があると指摘していただいた。

写真図版



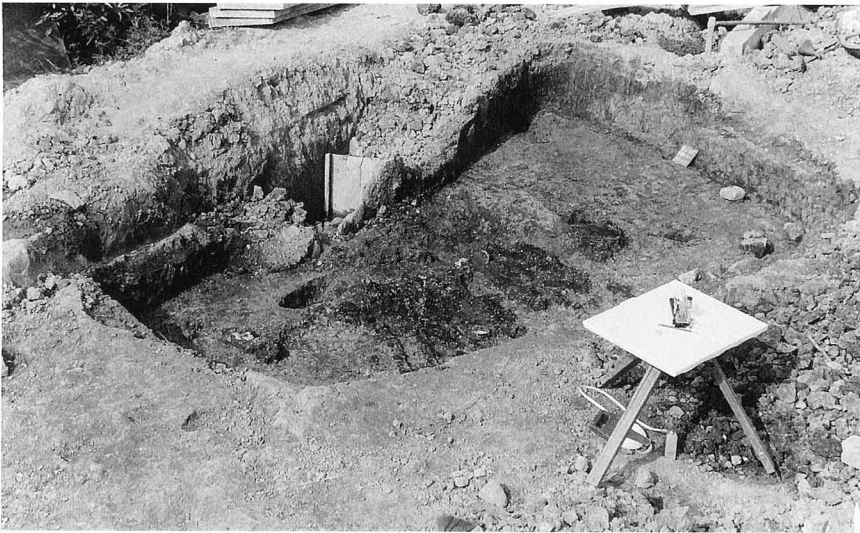
1. 遺構検出状況（北西より）



2. 北半部完掘状況
（南東より）



3. SB1・SB3完掘状況
（南より）



1. SB1完掘状況(1) (南より)



2. SB1完掘状況(2) (東より)



3. SB2完掘状況 (東より)



1. SB3遺物出土状況(1)
(南より)



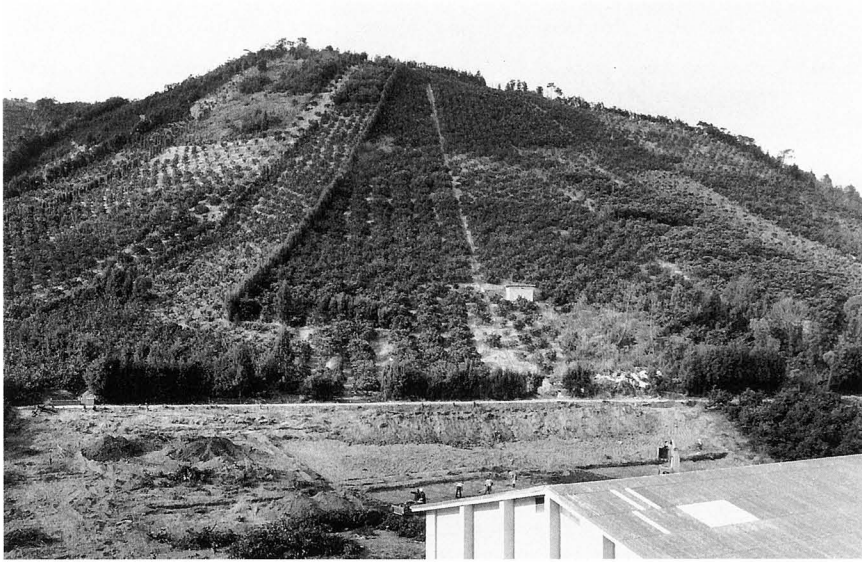
2. SB3遺物出土状況(2)
(南西より)



3. SK完掘状況 (東より)



1. SB1 出土遺物 (9) SB3出土遺物 (82~93)



1. 調査地遠景（東より）



2. 調査地近景（南より）



3. 遺構検出作業風景（南西より）



1. SB4完掘状況（北北東より）



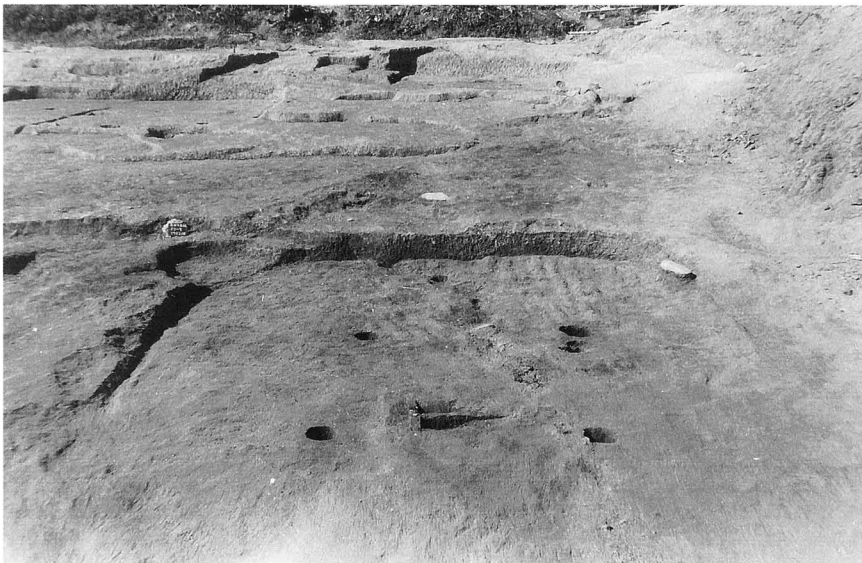
2. SB5・6完掘状況
（北東より）



3. SB5完掘状況（南より）



1. SB2・6完掘状況
(北北東より)



2. SB9完掘状況 (南東より)



3. SD1・2完掘状況 (西より)



1. 3号土器群遺物出土状況
(南より)



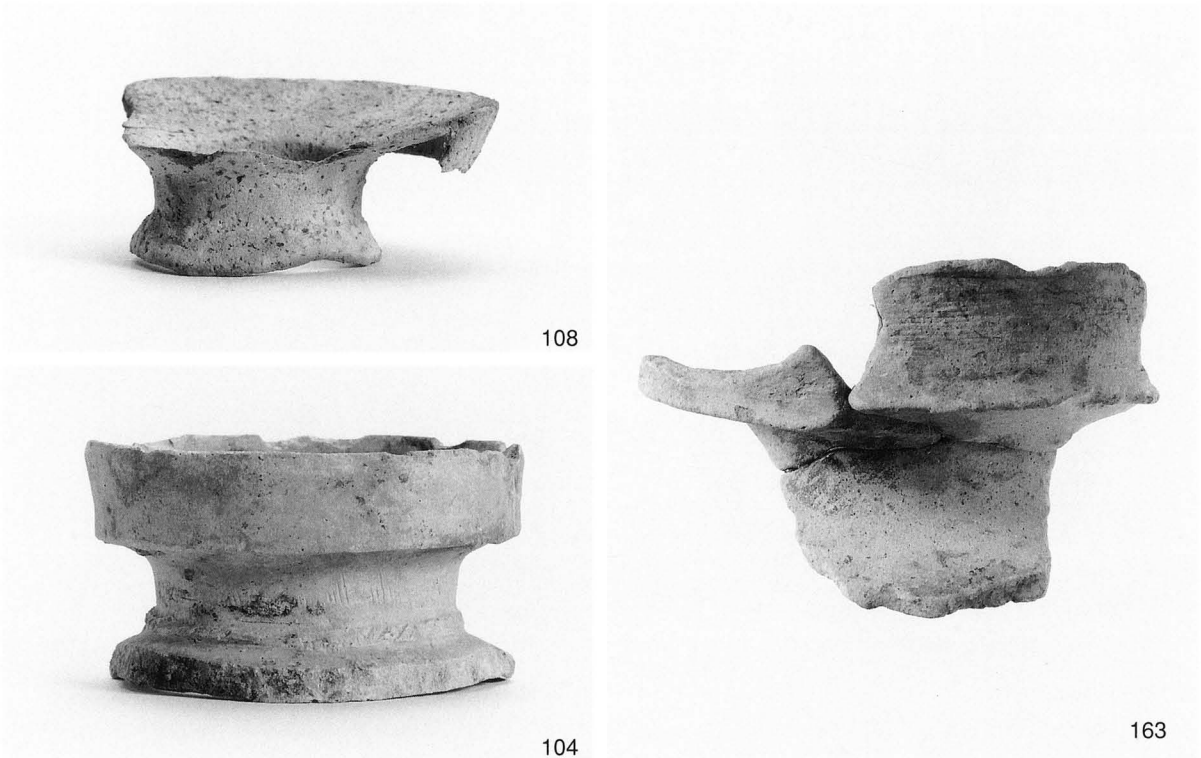
2. 4号土器群遺物出土状況
(北東より)



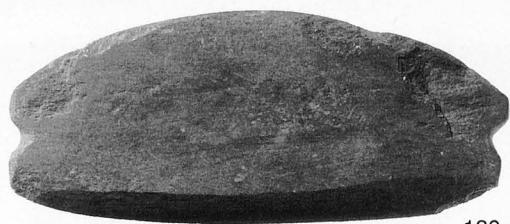
3. 調査地周辺の現況 (東より)



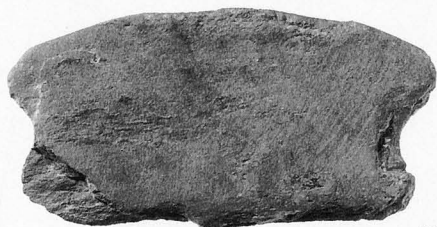
1. 土錘・石錘 (SB4 : 29、SB8 : 78、SD1 : 147、SD2 : 168~170・217、X2Y4 : 298、X2Y6 : 300・301、X4Y2 : 522、X4Y3 : 625、X4Y6 : 681)



2. SD1出土遺物 (104・108)・SD2出土遺物(1) (163)



180



181



236



271



262



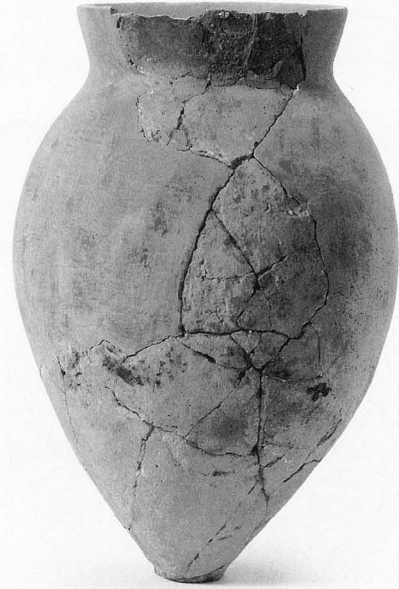
1. SD2出土遺物(2) (180・181・236)・1号土器群出土遺物 (262)・2号土器群出土遺物 (271)



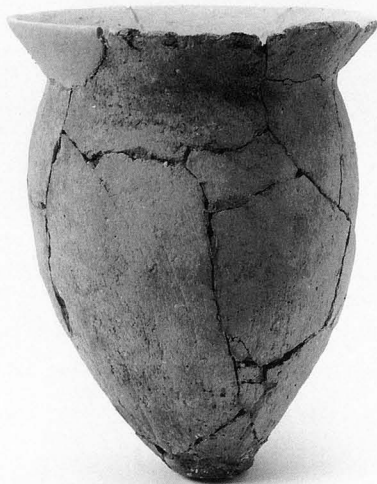
1. 3号土器群出土遺物 (279~282) ・ X1Y3出土遺物 (303)



283



284



285



353



475



374



1. 4号土器群出土遺物 (283~285)・X3Y2出土遺物 (353)・X3Y3出土遺物(1) (374・475)



418



419



501



479

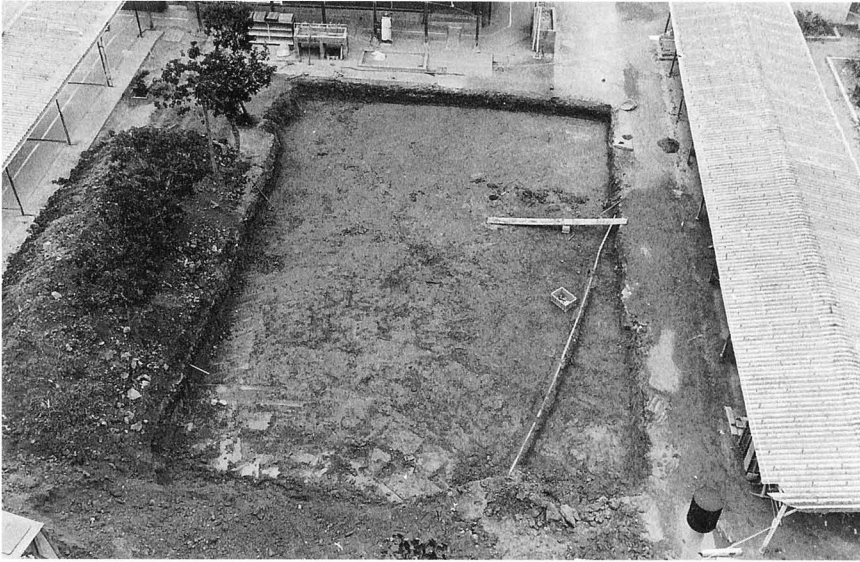


509



559

1. X3Y3出土遺物(2) (418・419・479)・X3Y5出土遺物 (501)・X4Y2出土遺物 (509)・X4Y3出土遺物 (559)



1. 調査地全景（南東より）



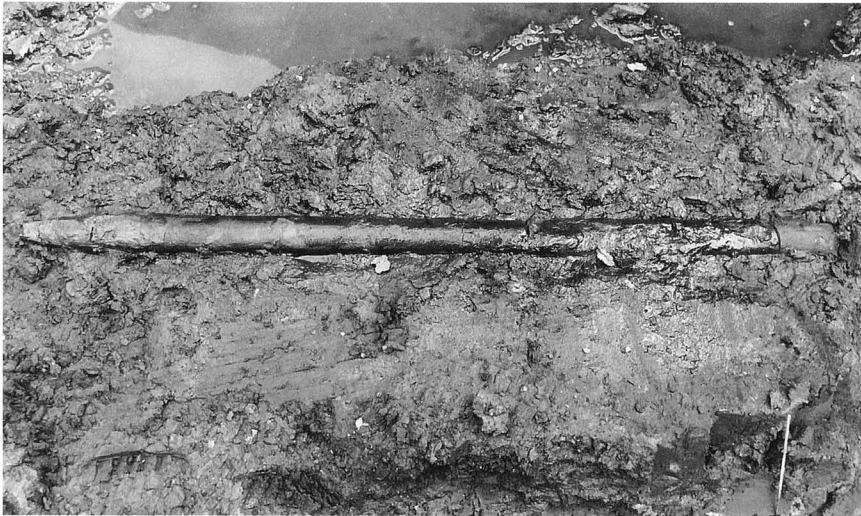
2. 作業風景（北西より）



3. 遺物出土状況(1)（東より）



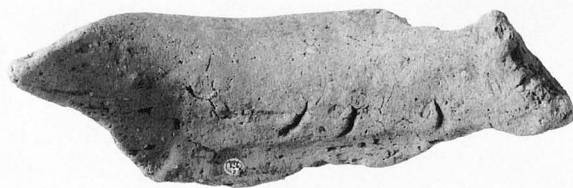
1. 遺物出土状況(2) (西より)



2. 木製品出土状況 (南東より)



3. 畦畔1下遺物出土状況
(南より)



15



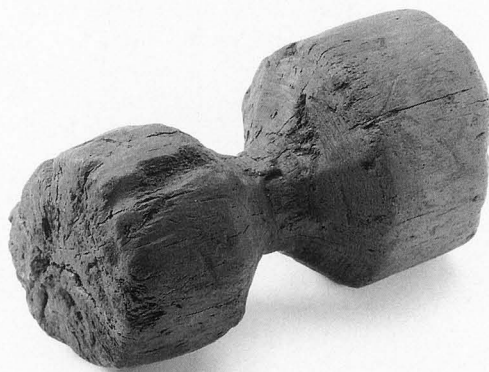
17



59



62



64

1. 第VI層出土遺物



1. 調査前全景（南より）



2. 南壁土層（北東より）



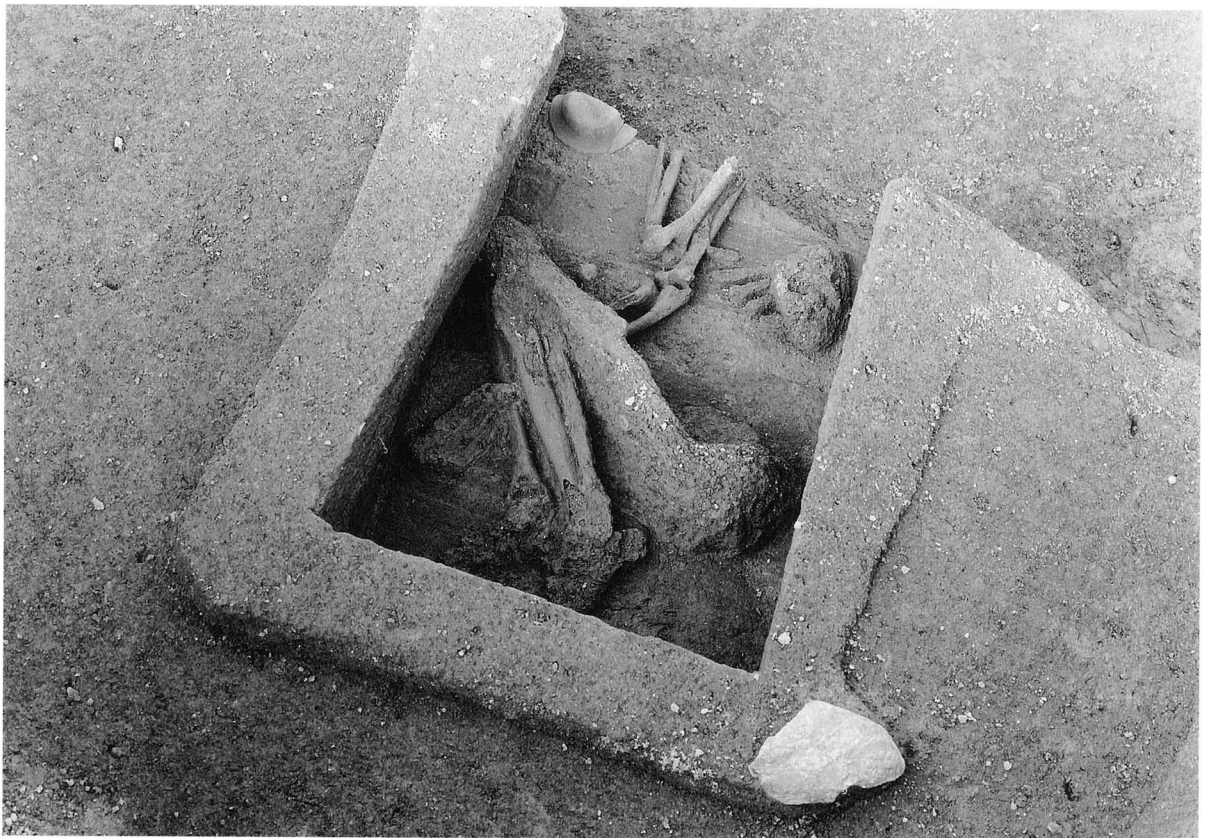
1. 完掘状況(1) (北より)



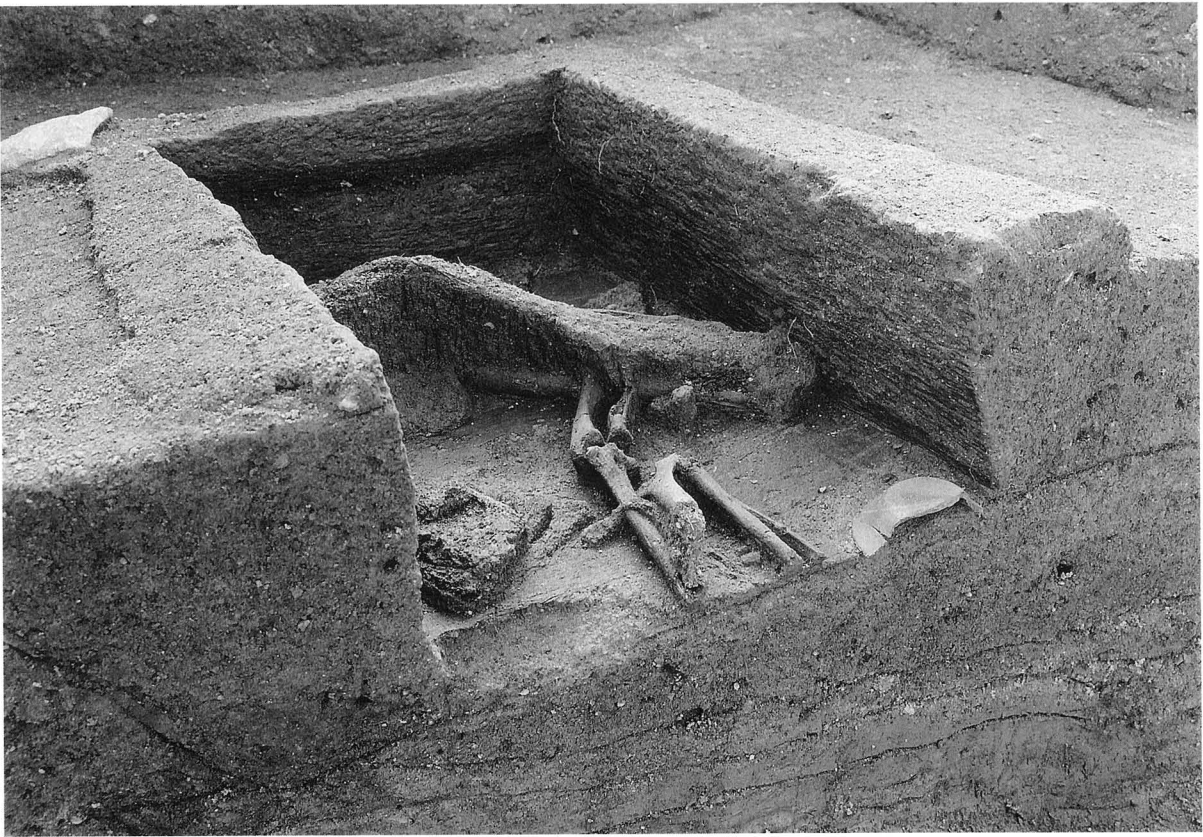
2. 完掘状況(2) (北より)



1. 墓1・2検出状況（北東より）



2. 墓1検出状況(1)（南より）



1. 墓 1 検出状況(2) (北東より)



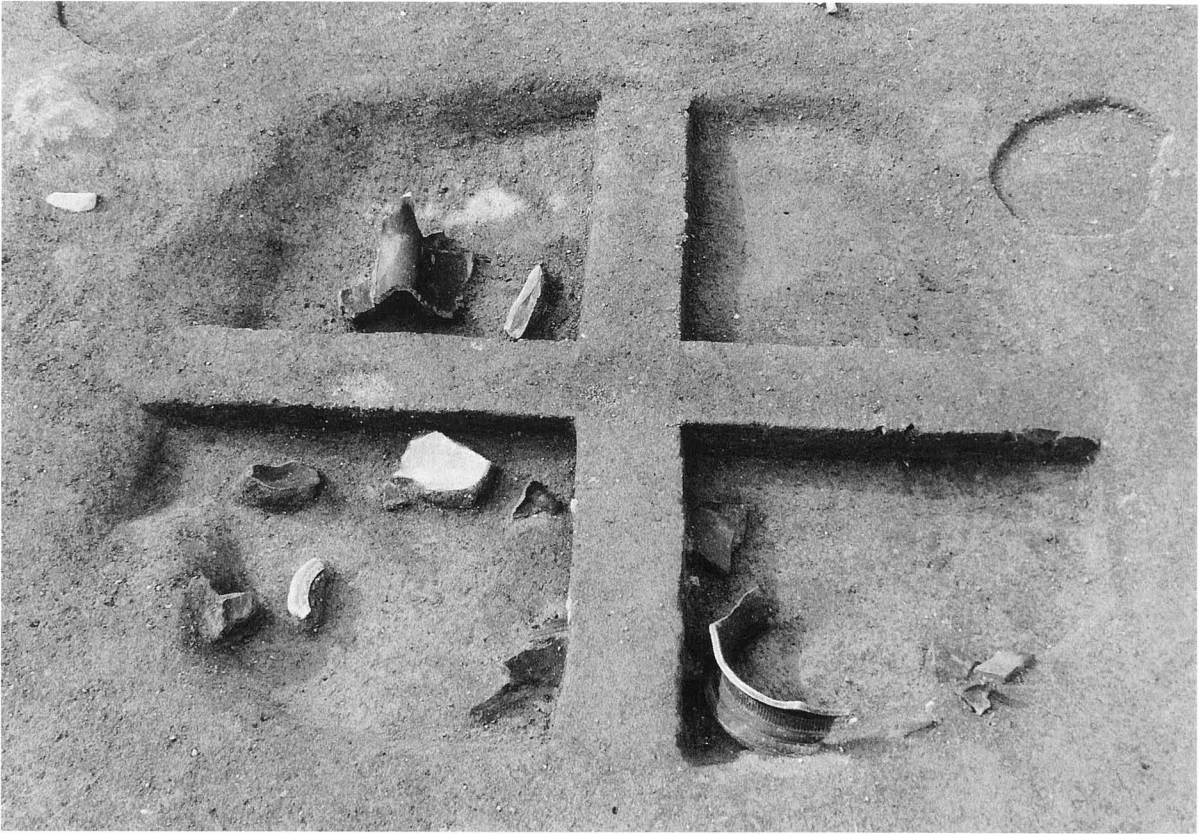
2. 墓 2 検出状況 (北より)



1. SE1遺物出土状況（南より）



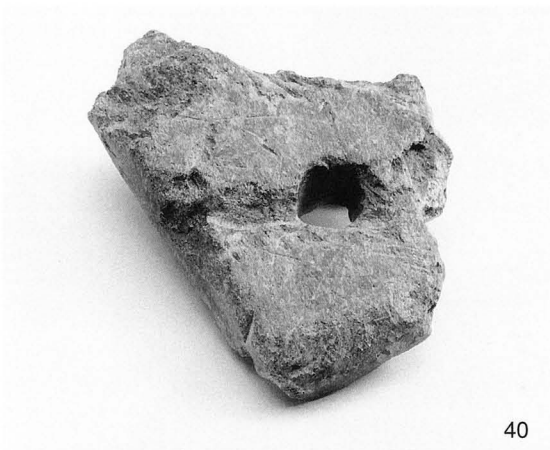
2. SE2遺物出土状況（北より）



1. SK8遺物出土状況（東より）



2. SK7完掘状況（北西より）



1. 出土遺物(1) (SD2 : 10、SD6 : 38~40、SD7 : 44、墓1 : 57)



82



105



110



111

1. 出土遺物(2) (SK8 : 82、SP216 : 105、SP12 : 110・111)